
あの青い空のように

大希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの青い空のよつに

【NZコード】

N4115M

【作者名】

大希

【あらすじ】

『とおいろのうた』と『あの青い空のよつに』は

二人が過ごした時間と二人の想いを綴っています。

いつも見上げていた空
何も言つてはくれなかつたけれど

何も教えてくれはしなかつたけれど

それでも見ていた

あの青い空を

空の下できみと過ごした時間を・・・

ただ、それだけのこと

1・僕の空（前書き）

1.

小学四年の夏に描いたポスターで、賞を取った。
行ったこともない所、写真で見た所の風景画。

僕の家にはお母さんがいなかつた。
僕はお祖母ちゃんに育ててもらつた。

担任の先生が、絵画コンクールの会場に連れて行ってくれた。
小学生の部、中学生の部、高校生の部と賞を取った絵が飾つてあ
つた。

子供、保護者、先生、市の偉い人、カメラを持った人、そういう
人達が来ていた。

僕の絵には、金色の色紙が貼つてあった。

ただ、それだけのこと。

家に帰るとお祖母ちゃんが待つっていた。

兄ちゃん達が待つっていた。

お祖母ちゃんは何故か寂しそうな顔をしていた。

兄ちゃん達には怒られた。

父ちゃんは仕事で遅かった。

誰も僕の絵を誉めてはくれなかつた。

ただ、それだけのこと。

学校へ行くと、クラスの皆が待つていた。

女の子達にすごいと言われた。

絵描きさんになれるねと言われた。

女の子から特別な待遇をされると、男の子達には睨まれた。

調子に乗るな、いい気になるなと言われた。

僕は立場を悪くした。

誰も絵のことをわかつてくれなかつた。

ただ、それだけのこと。

先生のところへ行つた。

僕は先生に言つた。

もう絵をコンクールには出さないでください。

先生は困った顔をしていた。

誰も僕のことをわかつてくれなかつた。

ただ、それだけのこと。

誰も見てくれなかつたわけではない。

一人だけ、コンクールの会場で、出会つた子。

その子は僕の絵の前にしばらく立ち止まつっていた。

「あなたもこの絵に感動したの？」

「え？」

「すごいよね、この絵。お空があつちまで続いて見えるの。」

知らない子。

僕が描いた絵を、すごいと言つた子。

絵のことを、空のことをわかつてくれた子。

僕は絵の中に、ずっと奥まで広がる空を描いた。

遠近法。

先生も、クラスの皆も、家族も、誰にも伝わらなかつた空の絵。
誰もわかつてくれなかつたわけではない。

「私ね、今度この絵の蓮田小に転入するんだ。」

「転校生なんてよそ者だから、今から怖いのだけど、この絵を描いた人に会えるんだって思つたら、なんだか楽しみになつてきた。」

「あ、ママだ。行かなきや。」

「その子は母親の元へ駆けていった。

僕はその子に、僕が描いたことを言わなかつた。

ただ、それだけのこと。

僕の母親は、僕を生んで亡くなつた。
と、聞かされている。

だから兄ちゃん達は僕が嫌いだ。

僕のせいだ、母親が死んだ。

僕が生まれてこなければ良かつた。

僕は生まれてはいけない子だった。

兄ちゃん達にいじめられると、ばあちゃんは決まって哀しそうな
顔をする。

だから僕は我慢した。

ばあちゃんの前ではなんでもないふりをしていた。

ただ、それだけのこと。

昔から人より少しだけ絵が上手く描けた。

三つの時、ばあちゃんがクレヨンを買ってくれた。

広告の裏に描く絵を上手だね、と誉めてくれた。

幼稚園で描く絵は、先生からも、友達からも、誉められた。

小学校に入ると、絵の具を使えるようになった。

遠足で行った動物園で写生をした。

夏休みの課題、絵日記、絵を描くことが好きになった。

絵を描くと、アニメのキャラクターを真似て描くと、皆が誉めて
くれた。

皆が喜んでくれるから、笑ってくれるから、夢中になつて描いて
いた。

でも、それは、お絵かきだったから許された。
ただ、それだけのこと。

その年、転校生は来なかつた。
次の年も、転校生は男だつた。
ただ、それだけのこと。

子供ながらにわかつてしたこと。
僕の家は皆の家とは違うこと。

保護者プリントの母親の欄が開いていると決まって聞かれた。

「あきらくんのママは?
もう慣れた。

「病気でいないの。」

そう答えなさい。と、父親から教わったこと。

父親は仕事が忙しく、出張も多く、家で顔を合わせる」とはほと
んどいない。

父親が居なくとも、母親が亡くても、ばあちゃんがいた。

兄ちゃん達にはいじめられたけど。

それでも生活に不自由はなかつた。

ただ、それだけのこと。

母親も絵を描く人だつた。

別宅にアトリエを持つていて、僕がお腹にいる時も絵を描いてい
た。

早産。

急な破水で僕は生まれた。
しばらくは保育器に入り、入院をしていた。
発見されるのが遅かった。

母親は、僕と引き換えに命を落とした。

だから既に、僕が絵を描くことをよく思っていない。

あの日、あの時から、僕は人前で絵を描くのを辞めた。
小学四年の夏休みの課題で描いた絵。
ただのお絵かきが、賞を取ってしまった。
この一枚から、僕は絵を描くことを認めてもらえなくなつた。
ただ、それだけのこと。

1・僕の空

2.

中学生になつた。

何も変わらないと思つていた。

制服を着て、通う校舎が変わる、クラスが変わる、そんな程度。クラス発表の掲示を見に行つた。

「おっす、晃君、一緒にクラスだつたぜー。」

後ろから肩をたたかれ、話しかけられた。

「幼稚園から八年目だな～ようしくつ。」

彼は桐谷 泉。

不思議と幼稚園から小学校六年間、ずっと同じクラスになつてい

た。

それだけ一緒にいるから、うちの事情も知つていて。いちいち最初から話さなくていい関係。

それが楽で、俺はここにいる。

一年は三階の教室だつた。

毎日この階段を上るのかと考えただけでダルい。

蓮田中学は、蓮田小学校と蓮田第二小学校が合併した全六クラス。うち、蓮田小出身者が三分の一を占めているので、クラスに数人第二小出身者が混じっているが、別に友達には困らなかつた。

男子の中にも色々ある人間関係。

クラスを仕切りたがる、目立ちたがりタイプ。

真面目、優等生、学級委員タイプ。

お調子者で、笑いを取るのが上手いタイプ。

静かに一人でいるタイプ。

裏番長的存在なタイプ。

これらのごこにも属さず、属せず、属す機会を失つた、おどおどした奴がいじめにあうタイプ。

俺もどこにも属さない感じだが、裏番長的存在、泉くんに気に入られていた。

どうでもいいが、気に入られ、目をかけてもらつてるので、俺の周りには自然に男子も女子も集まつて来る。

「泉君、次の理科、実験室に移動だつてー。」

「おー、りょーかい。」

「ねえねえ、桐谷君、第一出身の女子も泉君つて呼んでもいい?」「もちろん。じゃあ、女子の名前も教えてよ。」

「あたし、みつこー。」

「佳織。」

「私、咲良。」

俺は何も言わなくとも、何もしなくても、学校生活を送ることが出来た。

「ねえ、泉君、穂高君でおとなしい?」「あんましゃべんないよねー。」

「ああ、晃君はオレ一筋だから。」

「えーつ、えー、えー。」

「え、じゃあ泉君も?」

「・・・・・・。」

「ショックー、泉君女子にモテるの?ー。」

「うつそくん。びつくりした？」

「なーんだ。」

「きやはははー。びつくりー。」

俺は何も言わないけど、何もしないけど、泉くんのおかげで静かな生活を送ることが出来た。

何らかの部活動に属さなければいけなかつたので、俺はバレー部に入った。

放課後と土曜の午後は部活の時間で埋まつた。

しかし、テスト期間に入ると部活動は原則禁止となる。
自主練は認められているものの、俺には無縁といつていいだろう。
本気で何かに夢中になれる奴らが羨ましいとは思わないけど。

テスト期間中、俺は図書室で過ごす時間が好きだつた。

それほど広いわけでもなく、綺麗なわけでもないが、図書室は落ち着いた。

最も、利用する生徒が少ないから、静かに一人の時間を過ごすことが出来る。

テスト勉強もしたけれど、ここで過ごす大半は本を読んだり画集を開いて眺めたりしていた。

あれから、絵に夢中になることはなかつたけれど、嫌いになることもなかつた。

人前で絵を描かなくなつてから、俺は人の描いたものを眺めるようになつた。

美術の教科書に載つているようなものではなく、有名な画家の画集でもなく、図書室にある誰も借りていないような、人気のないものを見ていた。

絵や写真を眺めている時間は好きだ。

何も考えなくてすむ。
ただ、それだけのこと。

五月。

中学生になつて初めての定期試験が終つた。
結果。

成績上位三十名が掲示板に貼り出された。
小学生との違い。
出来る奴、出来ない奴の差。

「すげー、晃君九位だー。」

泉くんに声をかけられた。

「ねー、びっくりだよー。晃君つて頭いいんだねー。」

「あれ、うちのクラスもう一人いるね。」

「あ、ほんとだー。」

「竹田・・・だつて。誰?」

「おいおい、夏帆ちゃん、そりやないだろー?」「えー、だつて知らないもん。そんな人いた?」

「あのメガネくんだる。」

「ああ、いつも本読んでる人。」

「だから頭いいのかー。」

「七位だつてー。すごいねー。」

「オレも次はがんばろーっと。」

「無理無理、いきなり三十位以内なんて。」

「なにおおー、本氣を出せばオレだつて!」

「あはははー。」

一人の時間はたくさんあつたので、勉強に困ることとはなかつた。

一番目の兄ちゃんは塾へ行つていた。

あちゃんは、俺にも塾へ通うように勧めたが、断つた。
人と勉強するより、一人でやる方が俺には合つていた。
ただ、それだけのこと。

六月になつて、休む奴が出た。

一週間・・・。

出できては、また数日休む。

その繰り返し。

これはいじめといひやつだひや。

どこにでもある。

竹田 雅史。蓮田第一小の出身で、頭は良いが、どうやら発言に問題があつたようだ。

常に本を持ち歩いていて、物知りで、それを知らせがり屋タイプ。

いじめているのは・・・

ああ、クラスを仕切りたがるタイプの奴か。

まつとうなクラス絵図だろう。

この世からいじめが無くなるなんてことはない。

女子だつて、男子だつて、一年生だつて、三年生だつて、クラスだつて、部活だつて。

どこにでもあること。

仕方ないさ。

皆、見て見ぬふり。知らんふり。

それが一番良い方法だと誰もが知つてゐる。
自分に目を向けられないよう、自分の身は自分で守る。
ただ、それだけのこと。

中学は授業参観がないから楽になつた。

それまでは、母親の代わりにばあちゃんが来ていた。

母親が生きていてくれたら・・・と考えなかつたわけではない。でも、物心ついた時からいなかつたし、兄ちゃん達には嫌われていた。

母親が恋しいと思うことはなかつたし、ばあちゃんには良く育ててもらつた。

そういうものだと思つてきた。

近所に歳の近い女の子はいなかつたし、親戚にもいなかつた。

女に・・・というか人に興味をもたなかつた。

幸い、自分の部屋というものを『えられていたので、一人で過ごす時間が長かつた。

兄ちゃん達とは、顔を合わせれば嫌味を言われるだけだし、友達を家に呼ぶこともなかつた。

人とのかかわりには関心がなかつた。

初恋。

なのだろうか。

正直、そんなのがいつだつたかなんてわからない。

ただ、年頃なのか、男子の中でもそういう話が多くなつた。

面倒くさいけど、周りにさせるのも、それなりに話題に入るのも、身の安全の為。

「でさ、この前手、つないで帰つてるとこ見ちやつて。」

「まじでーつ。」

「あいつら付き合つてんだー。」

「いいなー、俺も彼女欲しー。真奈ちゃん。」

「真奈ちゃん？無理無理、お前じやー。」

「ひつでー。」

「はははー。」

「そついえば、晃君って誰好きなの？」

「あー、聞いてなかつたな。」

「オレも知らないや。教えて。」

「誰？」

「・・・咲良。」

「へー。そーだつたんだー。」

「あ、なんかわかるかも。晃君て女子とあんま喋んねーけど、咲良とは喋つてるかも。」

「なるほどー。」

咲良。

面倒くさくて適当に、思い浮かんだ名前が咲良だった。あれは、美術の時間、隣の席の咲良に話しかけられた。

「あれ？ 穂高君のパレット三色しか出でないよ。」「絵の具無いなら貸そつか？」

アホか。

と思つたけど、面倒くさいしかかわりたくなかつたので、適当に返事をした。

その後も彼女は俺の方を見ていたらしく、いついつついた。

「あ、そつか。色は出すものじゃなくて、作るものなんだねー。」

そして、絵を覗き込んで、いついつついた。

「すういじやん。上手いね。」

誉めても何もでねーよ。

だいたい、赤、青、黄色の三色が基本だろ。

咲良はそれ以来、話しかけてくるようになった。

俺が女子と喋らないのは全体周知になっていた。
でも、泉くんがいるから、俺の周りに自然と女子は集まってきた。
俺一人喋ろうが、喋らまいが、泉くんがいればそれは関係のない
ことになっていた。

だけど、別に理由もないけど、咲良とは喋るようになった。

ただなんとなく、合づちを打つだけ。

ただ、それだけのこと。

中学に、クラスに、馴染むようになつた頃。
クラスの男女で日曜日、遊ぶようになつた。
部活のない日曜ぐらいい、家でのんびり過ごしたいものだ。
ばかじやねーの、お前等。

そんな本音も言つわけにはいかず、親戚の家に行くとか、家族と
出かけるとか、絶対に在り得ないような嘘を言つて断つた。
でも、せつかく誘ってくれる泉くんの手前、断りきれずに月に一
回は参加するようにした。

七月はカラオケ。

八月は夏祭り。

九月はボーリングに行つた。

他の奴らと喋るのが面倒くさいから、隣の咲良と喋つていた。

手をつないだわけでも、二人で出かけたわけでも、付き合つてい
るわけでもない。

恋愛の話が好きな年頃なのだろう。

他人の話で盛り上がりたいだけなのだろう。面白おかしく噂を立てたいだけなのだろう。

別に俺は否定も肯定もしなかった。

そんなこと、俺に面と向かって聞いてくる奴もいなかつたが。ただ、それだけのこと。

秋になった。

体育祭、合唱コンクール、日帰り旅行と行事が続いた。

そして、写生大会。

これは小学生も中学生も変わらない行事。

中学では、校内の好きな場所を選べた。

サッカーゴール、グラウンドが見渡せる階段の上、校門の木、校舎、そんな人気の場所には当然人が群がっていた。

俺は事前に人気の少ない場所を選んでいた。

美術の時間にあらかじめ下絵を済ませている。

今日は色を塗り完成させるだけ。

しかも午前で終れるから楽。

といつても、午後は部活だが。

「晃君。」

呼ばれても振り返らなかつた。

「()に居たのね。探しちゃつた。」

いちいち返事をしなくとも、相手の顔を見なくとも、話しかけてくる咲良は楽だつた。

「美術の時は、どこを描いてるのかわからなかつたけど。」「いいね、ここ静かで。」

そう言つと、覗き込むよつとして隣に座つた。
肩上の、邪魔する髪を耳へとかける。細くて真つ直ぐな柔らかい
髪。

「ああ、やつぱり色がつくと落ち着くね。」

美術の席が隣の咲良。

授業が終ると、必ず俺の作品を覗き込んだ。

すじいとか、上手いとか、そつこいつ言葉は昔から言われ慣れていた俺には、言葉はうんざりする。

誰も誉めてくれなかつた絵。

誰にもわかつてもらえなかつた絵。

咲良はそんな在り来たりな言葉は使わなかつた。

俺も何も言わなかつた。

それでも咲良は美術の授業が終るたび、俺のところへ來た。

「空の色。」

俺は一瞬、咲良の言葉に耳を疑つた。

「空の色を塗つてているのね。ずっと奥まで続いている。」

思わず、絵筆を止め、咲良の顔を見る。
思わず、絵筆を止め、咲良の顔を見る。
思わず、絵筆を止め、咲良の顔がある。

「ん？」

どうかしたと言つ表情の咲良。
何も言わない俺。

咲良は再び視線を絵へと戻した。

空の色・・・か。

俺は急にあの田のことを思い出した。
空があっちまで続いていると言つたあの子。
遠近法を見抜いたあの子。

僕の絵をわかつてくれたあの子。

小学四年の夏に描いた一枚の絵。
この絵から、描くのを辞めた一枚の絵。

その年転校生は来なかつた。

その翌年、転校生は男だつた。

どうせ蓮田小と蓮田第一小を勘違いしたのだらう。

ただ、それだけのこと。

ふと、咲良が第二一小の出身であることを思い出す。

忘れていたし、思い出すこともなかつたこと。

探そうだなんてそんな面倒くさいこと、どうして俺がするだらう。

でも・・・

そういえば、この学校のどこかにいるんだよな。

どこかに・・・

翌週、写生大会の絵は、優秀作品として選ばれた数名が、美術室
の前に展示された。

どれも校舎やグラウンドを描いた、模範的な絵。
当然、俺の絵が飾られることはなかつた。
それでいい。

俺は、好きな場所で、好きな時間を過ごし、好きな絵を描けた。
それでいい。

賞を取るために描いた絵ではなく。

それでいい。

ただ、それだけのこと。

3.

十一月。

席替えをした。

一年に何度も行われるこの席替え。

こんな面倒くさいことはない。

なにが良くて席替えなんかするのだろうか。

騒がしくなるだけだ。

新しい友達？

何を今更・・・

三階から中庭の見下ろせる窓際、ベランダ席。後ろから一列目。
良い席になれたと思つた。

席は。

隣が・・・

竹田だった。

その日の放課後、部活を終え、忘れ物に気がついた。

図書室で借りた画集。

別に明日でも良かったのだが、教室へ取りに戻ることにした。

席替えをしたことを忘れ、元の自分の席へ足が向いていることに

気づいて方向を変える。

と、

窓際、ベランダ席に人が立っていた。

まさに俺の席。

当たり前か。

その隣は竹田の席でもあるのだから。

でも、気づく。

まさに俺の画集。

竹田が手に取っていた。

「あ、『』、ごめん。勝手に……」

竹田は教室に入ってきた俺に気づくと、慌てて画集を机に戻した。
俺は何も言わずにその画集を鞄へ閉めた。
視界に入ったのは、奴の制服に付いた土埃。
かかわりたくない。

まさに今さっきまで、呼び出されてシメられてました感のある、
ズボンに、腰に、肩に、土埃のついた制服。
かかわりたくない。

最近まで休みがちだった竹田。
久しぶりに出てきたと思ったたら、まだいじめに合っているらしい。
夏前からずっと……。
かかわらないように、帰るひつと思つたその時、

「雅画伯とかつて好き?」

「え?」

思わず聞き返してしまった。

「これ、おれも借りたことがあるんだ。」

「もしかして、KEIGOのとかも好きかなって。」

緊張と興奮の入り混じったような、か細い声で、間を空けずに、必死に喋りかけてきた竹田。

俺はとすると、驚いて声が出なかつた。

竹田の、泣きやうな位の声に、ではなく、竹田の言つた画集の話に驚いて。

「か、勝手に」「めん。」

「いや・・・」

やういうのが精一杯だつた。

「お、おれと話すとこ見られたら大変だもんな。
「話しかけたりして」「めん。」

申し訳なさそうに、でもどこなく表情に安堵の色が窺えたのがわかつた。

俺は重い口を開いた。

それは久しぶりだつた。

「いや、違うんだ。意外で・・・」

下を向いていた竹田の表情が変わつた。

「その・・・この学校にこんな話が出来る奴がいるとは思つてなくて・・・」

俺だつて同じだつた。

他人とのかかわりが苦手で。

面倒くさくて、どうでもよくて。

自分のことを話すことなんて滅多に無かつた。

だから・・・

「雅画伯のはあつても、図書館にKEIGOのは無いよな。」

そう言つと、竹田は慌てて口を開いた。

「け、KEIGOなうつむに最新号あるナビ見る?..」

「あんの?」

「うん。あ、でもおれなんかと喋ると・・・」

再び竹田は不安の表情に戻っていた。

「じゃあさ、明日の放課後見に行かせてよ。」

「えつ?」

「都合悪いか?」

「う、ううん。でも、部活は?..」

「サボる。」

「いいのか?」

「いい。KEIGOの方が見たい。」

「じゃあ明日。」

「おう、明日な。」

竹田は、殴られ、蹴られ、痛むであろう体を、軽く弾ませのうつにして帰つて行つた。

うれしかつたんだ。
たぶん、俺、嬉しかつたんだ。

中学に入つて、面白くなかった。

勉強は元々つまらなかつたし、部活も好きで始めたわけではない。周りに人は集まってきたけど、別に俺が居ても居なくても、俺が何を言おうと言つまいと、関係の無いところで時間は過ぎてゐる。別にそれで良かった。

そうして過ぎることを望んでいたのだから。

別にそれで良かった。

誰ともかかわりたくないから。

他人とかかわるより、自分一人の方が楽だから。

でも・・・・

初めて自分の好きなもの、好きな時間と合つ奴を見つけた。見つけて、出会つた。

それが嬉しかったのだろう。

ただ、それだけのこと。

翌日の放課後、俺は部活をさぼつて竹田の家へ行つた。

「誰にも見られなかつたか？」

「ああ。」

竹田は変なところに氣をつかう。

根は真面目で良じ奴なんだとつぐづく思つ。

「どうぞ、上がつて。」

「あります。まーくんにお友達なんて久しぶり。お茶出すわね。」

玄関で迎えてくれたのは、一目見てわかる優しそうなおばさん。体格の良さも、この家の穏やかさ、豊かさを語つているだろう。そして何よりこの家の広さ、大きさ、豪華さが、竹田家そのもの

を表している。

何の苦労も知らない、幸せ金持ち一人お坊ちゃんとしているか。
これはいじめの対象になるわけだ。

竹田の部屋に通される。

十畳はあるだろう、これまた広い個室に、大型テレビ、その横にはゲーム機、パソコン、冷蔵庫まで完備の部屋だった。

「すげーな。」

思わず口に出てしまつた言葉。

「親が会社の社長なんだ。」

少しだけ、竹田の表情が曇つたのがわかつた。
なぜだろう。

親が社長で、こんな大きな家、広い自室を『えられ、優しそうな
母親に、豊かな暮らし。

幸せではないはずが無いのに。

そう思つた時、部屋にノックの音が響いて、やつきのおばさんが
お茶を運んで來た。

「さあさあ、どういへ。」

「いただきます。」

「ほんとまーくん、久しぶりだわね。お友達が来るならそいつと言つ
てくれればよかつたのに。急だとお菓子も揃わないわよ。まあまあ
・・嬉しいわね、まーくんにこんなお友達が・・・
「あー、もういいから。いつたいた。」

まだまだ喋り足りないという感じのおばさんに、竹田が話を止め

た。

「あーあー、じゃあ、ゆづくつしていつて下せーね。」

「はーはー、お茶ありがと。じゃあね。」

おばさんは、名残惜しそうに部屋を後にして行った。

「悪かったな、騒がしくて。」

「いや。」

「お手伝いさんなんだ。」

「そうなんだ。」

母親だと思ったおばさんは、お手伝いさんだつた。
どれだけ金持ちなんだ、この家は。

改めて部屋を見渡すと、ベットの置かれている壁と、机の脇に、
大きなポスターが貼られていた。

「KEIGO?」

「そう。東京で個展開いた時の。」

「すげーつ。」

「あつちのは雅画伯の。」

「おおー。」

感嘆の声。といつのはいつこいつ時に使うのだつ。

どう見ても一般的な中学生には手に入らない、高そうなポスター
が貼りられている。

「で、これがKEIGOの載つてる創刊誌。」

「おおー、本屋で立ち読みできないんだよなー、これ。」

「良かつたら毎月見においでよ。定期購読してるからや。」

すつげ。

今度は言葉にならなかつた言葉。

定期購読つていいくら払つてんだよ。

これがただの雑誌だつたら、俺もこいつの言い方にイリつときてんのかな。

確かに金持ちで、物持ちで、物知りでは、自慢気に聞こえてしまふところもあるかもしない。

こいつの、そういうところがいじめの原因なのかもしないな。本人悪気はないのだと思うけれど。

「あ、良かつたらポスターもあげようか?」「え?」

「同じの一枚あるから気にしなくていいよ、持つてつて。」「いや、でも・・・」

「KEIGOの良さがわかる奴にあげたいんだ。」

そう言つた竹田の表情には笑みが浮かんでいた。
本人悪気はないのだと思うけれど。

こんなでかいポスターを、自室に飾るわけにはいかないだろ?。兄ちゃん達が見つけたらうるさいだろ?し、絵にまだ興味があると思われるだろ?し。

面倒くさいことは御免だ。

「あ、そつだ。パソコンの中にも入つてるから見てよ。」

そう言つと、今度はパソコンを開き始める竹田。
やつぱり嬉しそうである。

「すげーな、パソコン使えるなんて。つーか、パソコンが部屋にあ

る自体すげーよ。」

また少し、竹田の表情が曇った。

「これ、CADで作ったやつ。で、こっちがおれの最新作。」

「すげー、これ竹田が作ったのか?」

「趣味なんだ。パソコン使って絵描くの。」

ますます、感嘆の声は続いた。

「J—ゆーの、別世界の話だと思つてた。こんな身近に、使いこなしている奴がいただなんて。」

「親がIT関係の会社やってるから知識はそこから。」

「なるほどね。」

やつぱり持つべきものは親、金、権力ってとか。
筆しか持つたことの無い俺にとって、パソコンを使って絵を描く
なんぞ考えられないことだった。

絵の具しか混ぜたことの無い俺にとって、パソコンでカラーを作
るなんぞ考えられないことだった。

表現方法の違いに、俺はしばし見入つていた。

「将来はイラストレーターってどこか?」

俺は当たり前のようなことを当たり前に発したつもりだった。

だが、竹田の表情がいつそう曇つた。

なんだ、先から冴えねー表情するな。

こんな恵まれた環境で、裕福な生活をしているのに、何が不満な
んだ?

「おれの将来は決められているか？」
「は？」

テーブルに戻り、お手伝いさんの運んでくれたジュースを口に入れる」と話し始めた。

「選べないんだ。おれは。」

「選べないって？」

「おれがこうして自由に趣味を続けていられるのも高校まで。そしたらお絵かきなんて辞めさせられる。高校を卒業したら、親の決めた大学へ行つて、親の決めた勉強をして、親の会社を継ぐ。」「これがおれの決められた将来。」

「えつ・・・・せつかくこんな技術持つてんのに? 何も辞めなくても・・・」

「両立は無理なんだ。わかつてる。」

「・・・・・」

「IT会社つて言つても専門分野があるからさ。おれがやつてることなんて、ただのお絵かきとしか見られてないんだ。グラフィックデザイナーなんてカッコいい言葉だけど。そんなの認めてもらえるはずが無いんだ。」

「そつか・・・・」

何の苦労も知らない、金持ち坊ちゃん。

幸せでないはずが無いのに・・・

そんな風に思つていた自分に嫌悪した。

お手伝いさんが言つてたが、お友達が来るのが久しぶりだと。

俺も人のことは言えないが、中学に入つてからこいつと遊ぶ奴は

いなかつたのだろうか。

久しぶりに誰かを家に呼ぶ。

久しぶりに話す会話。
久しぶりに話す友達。

わざわざお手伝いさんがいることは、両親ともに仕事で遅いのだろう。

おそらく、このお手伝いさんが竹田の生活の世話をしてきたのだ
る。

両親も、兄弟もいない一人の時間。

竹田も長い時間を一人で過ごしてきたのだろうか。

物持ちは一人っ子だから。

物知りなのは本を読んでいるから。

知らせたがりやなのは話し相手がないから。

兄弟揃つっていても一人で過ごしてきた俺。

なんだ、一緒じゃないか

幸せだなんて誰が決める？

一人っ子でも、兄弟がいても、金持ちでも、金持ちでなくとも、
母親がいても、いなくても、そんなのなんの関係も無い。

「おれの話はいいからさ。えっと……穂高のこと聞かせてよ。」「

「晃でいいよ。」

「じゃあ、おれはタケで。」

「タケな。ていうかさ、なんでタケは俺がKEIGOのが好きだつて
知つてんの？」

「晃の絵を見たらわかるよ。」「

「絵で？」

「うん。」「

「空の絵だよ。」「

「写生大会？授業の時のか？でもタケ学校にあんまり来ないし……」

絶句してしまった。

「小学生の時描かなかつた？空の絵。確か・・・小4か5の時。同じコンクールでおれも賞取つて、会場で見たんだよ。晃の絵。確か、当時の新聞切り抜きして取つてある。」

「それで名前覚えてて。でも次の年のコンクールには出てなかつたから、中学入つたらまた会えるかと思つて。」

「そしたらさ、なんと同じクラスじゃん。話しかけようか迷つてるうちに、おれ目つけられちゃつて。学校行くのもダルくなつて。家で一人でパソコンしてる方が楽じやん。」

「でも、図書館で晃見かけた時にさ、雅画伯の画集借りて、あー、やつぱりこいつ空の絵を描いた奴だーって思った。雅画伯は風景画の中でも空専門だし、その雅画伯唯一の弟子がKEIGO。ほら、つながるだろー。」

一人で喋つて、一人で納得。雅史お坊ちやまはジュースを一気に飲み干しました。

一方、俺はとすると、突然の展開についていかれず思考回路しばらく中断。

そんなこんなで、竹田家第一回訪問を終了した。

十一月に入つた日曜日。

一足早いクリスマス会というのをやることになつて、泉くんを中心にクラスの男女でパーティー。はじめは断るつもりだった。

でも。

俺は一つの決心をして、クリスマス会に行つた。

「じゃー、既狭いけど適当にべつりいで。」

「クリスマス会はじめまーすつ。」

「全員ジューース持つた?」

「ではでは、乾杯。」

「乾杯ー。」

「メリークリスマスー。」

重なるグラスの音。

部屋中に響き渡るクラッカーの合図。

CDプレイヤーから流れるクリスマスソング。

お調子者で笑いをとるのがうまい奴のモノマネ披露会。

フライドチキンにケーキ。

女子の焼いてきたクッキー。

男子の持ってきた酒類。

部屋には溢れんばかりの笑い声。

盛り上がっている中、俺は一人で泉くんの隣へ行った。

「楽しんでる？晃君。」

「泉くんさ、ちょっとといいかな。」

「んー？」

一人で話せる窓際へと移動した。

「頼みがあるんだけど。」

「へー、珍しい。いいよー、晃君の頼みなら、なーんでも。あ、告白はなしね。オレ女の子がいいから。」

いつも通りの泉くん。

幼稚園からずっと一緒にクラスの泉くん。

明るくて、スポーツも出来て、面白い、女子に人気がある。同性からも人気を得ている。

そんな泉くんが、どうして俺なんかに目をかけてくれているのか、ずっと不思議だった。

泉くんの存在には何度も助けられた。

鳴り止まないクリスマスソング。

メロディーに合わせて歌つている奴。

赤い帽子に白い髪でコスプレを楽しむ奴。

盛り上がるお喋りに、かき消されそうな声で言つた。

「竹田を何とかできないか。」

泉くんはこっちを見ずに一度だけ目を閉じた。

その横顔が、少しだけ悲しそうに見えたのは気のせいだろうか。

「いいよ。」

時間が止まつたかと思つた。

「ただし、一つだけ条件がある。」

じくつと唾を飲む音が聞こえた。

どうやら俺は緊張していたらしい。

タケのこと、泉くんならなんとかしてくれのではないか。

あれから一ヶ月、隣の席とはいえ、タケと話すようになつた俺には何も起こらない。

普通、いじめているターゲットと話したり、助けようとした奴なんかは一緒にやられる。

でも、俺には泉くんがいるから手を出せないのである。

やつ考えた時、泉くんなら、タケを、あこひのこじめを止めることができるのではないかと思つた。

「条件?」

「そう。」

なんとなく、予想はしていたこと。

条件。

泉くんの言つ条件とは、俺もこのグループから抜けをせられる・
・だろう。

いくら裏番長的存在の泉くんでも、いじめを止めることはできても、辞めさせることはできないだろう。

いつの時代にも、どこにも、いじめはある。

どんなクラスにも、女子にも、男子にも。

だから、ターゲットを変えることくらいしかできないだろう。

タケから俺へ。

そうしたらもう、泉くんとは居られない。

ここにはもう、居られない。

それでもいいと思つた。

タケと出会いて、初めて友達と呼べる、共感できる奴に会つた。人とかかわるのを避けて、面倒くさそうに他人と接するこんな俺の、これまでの中学生生活を支えてくれた泉くんには感謝。

俺は抜けるよ・・・・・

「咲良のこと好きなんだ。」

「へつ?」

気の抜けた声を出してしまつた。

条件・・・

条件?

「そんな変な顔するなよ。これでも悪いーと思つてんだからよ。」

どんな顔してたのだらうか、俺。
自分でも予想外の展開に驚いていた。

「誰にも言つてなかつたんだけどさ、モーグーとなんだ。」

モーグー」と。
モーグー」と?
つ、つまり、
つまり、泉くんのいつ条件つて……
条件つて……

「え？ そんなんでいいの？」
「そ、そんなんで、晃君？ 意味わかつてる？」
「全然OKだよ。」
「えつ、マジで？ エフフてこつか、ちやんとわかつてる？」
「わかつてるよー。」
「マジで？ エフフ、だつて晃君、咲良の」と好きなんじや……？
「いや。」

きつぱり即答した俺に、泉くんは本氣で焦つていた。
そんな普段見られない、意外な泉くんを見られるのも貴重だ。

「えつ……と……、晃君咲良としか話してねーし、つき合つ
てるつていう噂もあつたし……」
「いや、好きでもなんでもないけど。」
「や、そうなの？」
「おひ。」

「なーんだ、マジ焦つたー。」

「そりゃー、そりゃーそりゃー……ってか、晃君が俺に隠し事するなんてことないか。そりゃよな。付き合つてるならさういつよな。頼みごとも珍しいけど、隠し事もしないもんな。」

そういつと、泉くんは二三二三しながら俺の背中をバンバン叩いてきた。

なんだかいつも強く見える泉くんが、今は子供っぽくて可愛らしい、なんて言つたら怒られそうだけど。

とにかく、突っ張つた顔ではなく、微笑ましい、明るい笑顔の似合つ泉くんだった。

そんな泉くんが人気者で、ちょっと不良っぽいけど、喧嘩も強いけど、皆から好かれるのもよくわかる。

そしてそんな友達がここにいてくれたことを誇りに思つ。

「じゃあ、今度は竹田も誘つてやれ。」

「えつ？」

「入れんだろ？俺らのグループに。」

「え、でも・・・・」

「なんとかなるんじやねー。」

そう言つた泉くんの顔からは、わつきまでのあどけなさは消え、何かを企んでいるかのような悪戯な笑みを浮かべていた。

「俺、泉くんが好きだよ。」

「なぬつー。」

自分で言つて、自分で笑えた言葉。

泉くんは俺に冗談は似合わないと、焦つて付け加えていたが。ど肝を抜かれたかのような、顔をしていた。

「泉ぐーん、一緒にゲームやろーよー。」

「おー、ひつ。」

女子に呼ばれ、泉君はテーブル席へと戻つていった。
まだ鳴り止まないクリスマスソング。
隣に咲良がやってきた。

「何一人で話してたの?」

「べつに。」

咲良は隣に腰を下ろした。

私服の茶色いワンピースからは、色白の肌が見えている。
背が高く、細身の体型の咲良とは、座ると田の畠さが一緒になる。

泉くんが好きな子は咲良だった。

泉くんは俺の好きな子が咲良だと思っていた。
確かに咲良はかわいい、といつか美人だろう。

性格も悪くは無い。

他の女子とより咲良と話す方が楽だったし、一緒に居て別に嫌だ
つたことはない。

確かに、噂が立つたこともあった。

でも・・・・・

「なあーに? 嬉しそうな顔してる。」

「晃君のそんな顔、初めて見たわ。良い事でもあったの?」

相変わらず、俺が何も言わなくても咲良は話しかけてくる。
俺が何を言おうが、言つまいが、泉くんがいてこそ俺。
そんな俺は楽だったよ。

「あたしさ、泉君と晃君好きだよ。一人が一緒に居ると」ひ、良いなつていつも見てた。」

「おまえは転校生か？」

少し間が空いた。

咲良は、自分の質問と全く意に反したことが返ってきたことに笑つて言った。

「違うよー。」

意味のある言葉。

意図のある絵。

人と人との関係にも、意味はあって意図がある。

後日、俺は一度だけタケを誘つて皆と遊びに行つた。
なんとなく違和感の、でも穏やかに流れしていく時間は、人と人との関係を修復に導くには十分だった。

それから俺達は一人で遊ぶよになつた。
タケの家へ行くのが大半を占め、時々買い物にも付き合つた。
はじめに話してくれたタケの、家のこと、将来のこと、自分のこと。

ふと、思う。

タケが聞いてこない、俺のこと、母親のこと、家のこと。

少しずつ・・・

少しずつ話そう、自分のこと。

はじめて友達と呼べる奴に出会つた、タケになら。

俺のこと、絵のこと、母親のこと、兄貴達のこと。
きっとタケになら、話せるだろう。

話してみよう。

ただ、それだけのこと。

年明けて、出席日数が危ないと、タケが毎日学校に来るようになつた。

もつとも、もう学校に来られない理由も無い。

泉くんのお陰で、タケはだいぶ明るさも取り戻した。
知つてることを、自分目線でなく、教える立場になつて考へるようになつた。

元々頭の良いタケ。

休んでいても、定期試験だけは受けに来ていた。
その試験で毎回十位以内に入っている程。
そんなタケが、試験になると皆にノートを貸したり、泉くんに
勉強を教えたりするようになつた。

いつの間にか、タケの周りにも、人が集まるようになつていた。

「タケやーん、英和辞書貸して。」

「またか？」

「だつて家に無いから毎日持ち帰つてるんだもん。」

「今日うちにクラス英語ないぞ。」

「知つてるよー。でもタケやんなら学校にも家にもあるでしょー。
一個。」

「おまえ、それが人に借りる態度か？」
「きやー、『めんなさーいつ。ははは。』

最近、タケのところに出入りしている女がいる。

第二小の出身だろう。

大抵、辞書だのノートだの、借り物の用事で来る女。

「ショーガネーな。ほら。」

「ありがとー。」

「授業中寝てヨダレつけんなよ。」

「だーいじょーぶつ。ありがとね。」

そう言つと、パタパタと足音を立てて帰つて行く女。
いつもへらへら笑つていて、頭悪そうな感じの女。
でも、その女の後ろ姿を、こつも見えなくなるまで見ているタケ。
好きなのか？なんて思ったことも。

あのクリスマス会の後、泉くんは咲良に告白をしたらしい。
咲良の返事は・・・

オッケーをもらつたと嬉しそうに泉くんが話してくれた。
泉くんが笑つてくれるなら、泉くんの役に立てたなら、今まで泉
くんに助けられてきた俺は救われる。
そう思つた。

恋に恋する年頃もある。

噂話は楽しいひと時。

誰かが誰かを好きだなんて。

俺にはそんな気持ち、あるのだろうか。

俺にはそんな想い、あるのだろうか。

「晃、KEIGOの三月号届いたぜー。」

「おー、じゃー、放課後タケんちなー。」

まだ要らない。

タケの家から帰る途中、大きな夕焼けを見た。

水色とオレンジの入り混じった空。

空を見ると思ふ。出で。

あの田のひと、あの絵のひと。

母親のこと、父親のこと、ばあちゃんのこと、兄貴達のこと。

空はどこまでも続いていて。

追いかけても追いつけない苦しい道。

でも、そんな空へと続く道は、もうつむいて見つかっているのかもしれない。

2・俺の空

1.

中学一年になった。

何も変わらないと思っていた。
でも、またクラス替え。

二年三組。

タケと同じクラスになった。
泉くんとは別のクラスだった。
ただ、それだけのこと。

二年は一階の教室に、一つ階を下げた。

出席番号順で座る席。

前の席に、健太という幼稚園からの顔馴染みが座った。
一列離れた席に、タケがいた。

タケは、一富という奴を連れて、俺と健太のところへ来た。

「どおーもつ、一富英明、にのつて呼んで。よろしく。」

「にの、俺健太。よろしく。で、こっちが晃。」

「おっ、晃君の噂は聞いてるよ~。」

どんな噂だよ。

見るからに、軽そうで、つむかえそうで、お調子者タイプの一富。
タケと同じ蓮田第一小の出身なのである。つ
タケにこんな友達がいるとは意外だった。

男子の中にも色々ある人間関係。

クラスを仕切りたがる、目立ちたがりタイプ。

真面目、優等生、学級委員タイプ。

静かに一人でいるタイプ。

裏番長的存在なタイプ。

これらのどこにも属さず、属せず、属す機会を失った、おどおどした奴がいじめにあうタイプ。

そして、お調子者で、笑いを取るのが上手いタイプ。
まさに「富英明」。

「あ、舞ちゃん同じクラスだね～。よろしく。」

「おっ、木村君。今年もよろしく。」

「美樹ちゃん、隣のかわいい子、お友達？ オレのことはこのつて呼んでねー。」

次タクラス中を挨拶してまわる「富」。

タケの連れてきた「富」という奴は、わかりやすいくらいお調子者タイプだった。

新しい教室、新しいクラス、新しい担任、新しい教科書。

そんな新しづくめの新学期も、友達には別に困らなかつた。

ただ、それだけのこと。

面倒くさいが、委員会というものがあつて、何らかの委員に属さなければならなくて。

先日、その委員決めを行つた時のこと。

大抵、学級委員という大役はすぐに決まる。

どこにでも、クラスに一人か二人はいる、真面目、優等生、学級委員タイプ。

ましてや去年学級委員をやっていました的な奴はすぐに目をつけ

られる。

松岡 聰一。同じ蓮田小出身で、小学校の頃から学級委員タイプ。まさに去年も一年間学級委員を務めたお墨付き。

次に、生活委員という、風紀問題や、生徒の学校生活に携わる仕事をやらされる、副学級委員的な存在の役。

これもすぐに決まって、いかにもという感じの奴が選ばれていた。ここまでの一委員は推薦で決めるのだが、あの委員は立候補だつたり、残り物に自然に属すといった感じ。

もちろん、委員会によつて活動の差があり、はつきり言えば楽な委員と損な委員がある。

損と感じるかどうかは人によりけりだとは思うが。

この後の委員決めは、早速選ばれた男女学級委員が司会進行をし、生活委員の男女が黒板と記録帳に書記をする。

適材適所。

何も言わなくとも、何もしなくとも、なんとなく、それなりの人で決まって行く。

明るく元気なお調子者、一宮は体育祭委員。

そこに便乗して健太も一緒に体育祭委員。

タケは文化委員に入り、俺は理科委員になった。
なんてことない、ただの雑用係りだ。

そして今日が、委員会の初顔合わせとなつた。

新学期が始まり、一週間が経つていたが、俺はクラスの奴らの名前と顔を覚えることはしなかつたし、いちいち覚える必要も無かつた。

クラスの大半が同じ蓮田小出身の奴だから、じつらの顔はだいたいわかる。

残り数人、第二小出身者がいるが、別に努力して覚える気はない。委員会も同じ。

理科室に集まつた、一年の大抵の顔はわかる。

ただ、同じクラスから、同じ委員になつた奴が、知らない顔だつた。

「穂高君、去年は何委員だつたの？」

在り来たりな質問が、隣の席からやつてきた。

相手の顔も見ず、適当に答える。

それ以上、話が広がらないことに、相手も焦つていふことだらう。それでいい。

俺は人とのかかわりが面倒くさいんだ。

だから、これ以上話しかけてくるなよ的なオーラも出す。

配られたプリントに名前を記入する欄があつた。

ふと、横目で隣のプリントを除く。

瀬戸　由利。

綺麗な字でそう書かれていた。

蓮田第二小出身の奴だつた。

委員会は一年から三年までの、各クラス二名、計三十六名が集まつた。

そこから、委員長というのをまた選ぶのだが、これは三年がなるので関係はない。

次いで、副委員長も三年、書記の一名が一年と一年から一人ずつ決められた。

あーだのこーだの、面倒くさい。

もう役決めは飽きたぜ。

自分には関係が無いので、大抵別のことを考えていた。

「あ、あの、今日の会議録、私書いておくね。」

さつやとは違ひ、躊躇した、か細い声で話しかけられた。

「ああ。」

一言だけ返事をする。

すると、瀬戸由利は黒板と記録紙を往復するだけの田線に落ち着いた。

横目に見る。

綺麗な字。

可哀想だなんて思つたことはない。

俺はこういう奴だから。

ただ、俺は人とかかわるのが面倒くさいだけ。
女と話すのなんて、特に面倒くさいだけ。

ただ、それだけのこと。

委員会が終わり、教室へ戻るとタケがいた。

他にもクラスには数人、委員会を終えた奴、終る友達を待つている奴、部活動へ行こうと準備している奴等がいた。

「おう、晃、もうすぐ終るから待つて。」

「あつーちよつ、タケやん、ちゃんと抑えててばー。」

「あ、悪い。斎藤さん。」

俺の返事も聞かぬまま、タケは慌てて前に向き直った。

どうやら、同じ委員会になつた斎藤さん、という奴と、のり付け作業をしているらしかった。

この斎藤さん、とやらも、第一小出身だらう。

そういえば……

一年になって、タケはまた明るくなつた気がする。
クラスが変わつて、一年の時のタケを知る奴も少ない。
去年、タケのいじめを見て見ぬふり、知らぬふりをしていた奴もない。

泉くんのおかげで、三学期は毎日学校へ来ていたタケ。クラスの奴らとも馴染んだ頃の一年のクラス替え。タケにとつては良かつたのだろうか。

日に日に表情が良くなつている。

それは……

「たつだいまー、おつかえりー。」

そう大声で一人、叫びながら教室へ入つてきたこの男、一宮の影響もあるのだろうか。

「にの、うるさいつ。」

「なーんだよ、恵子は冷たいなー。」

「あ、にの。健太。おかえりー。」

「だからタケやん、ちゃんと押さえて。」

「はいはい。」

登場した一宮と健太の方を振り返ろうとして、タケはまた、斎藤さん、とやらに厳しい一言をもらつっていた。

この、一宮の無駄に明るい、お調子者タイプ、はつきり言って俺にはどうにも合わないタイプなのだが。

でも、もし。

もし、一宮が去年、同じクラスについて、タケのそばにいたなら……

「こじめは起こらなかつただろうか。

」このいつタイプのやつが、そばにいたり……

「それから、にの、恵子つて呼ぶなつて言つてゐるでしょ。」

「いいじゅーん、恵子も英明つて呼んでいいんだよ?」

「そういう意味じやない。」

「なんだよー、幼稚園の頃は呼んでくれただろ、英明ちゃんつてなつ。」

「ばーかつ。そんな昔の話は忘れた。」

「忘れただつてー。ひどくなーい?」

「にの、頼むから邪魔をするな。おれが斎藤さんに怒りれる。」

そう言つて間に入る、タケ。

ゞひやう、斎藤恵子と一宮英明は幼稚園からの付き合いらしい。

「別に怒つてないわよ。」

「十分怖いよねー、由利ちゃんつ。」

「にの・・・またけいちゃんに何か言つたの?」

その後教室に入ってきた、俺と同じ委員の瀬戸由利に話をふる一
宮。

「由利、委員会大丈夫だった?」

「うん。大丈夫。」

「そう。」

斎藤は瀬戸由利に心配そうに話しかけた。

なんだ? こいつ、ずいぶん一宮の時と態度が違うじゃねーか。

「由利ちゃんは恵子みたく怖い顔なんかしないもんねー。由利ちゃん

んはかわいいもんねー。」

「そう言つと笑顔で瀬戸由利に話しかける一宮。

対応に困る瀬戸由利。

それを見た斎藤の表情が変わる。

「にの、いい加減にしないとほんとに怒るわよ。」

「はいはい。じゃあ、部活にでも行きますか。」

「それがいいわね。」

「じゃあ皆、まつたねー。」

「おー。」

笑顔で手をふり去つて行く一宮に、タケと健太だけが答えていた。

タケ、一宮、斎藤、瀬戸は同じ第一小出身か。

タケもこいつらといふ時はリラックスしている雰囲気だな。
穏やかじやなさそなのは斎藤恵子か。

女子の中でも最もかかわりたくないタイプだな。
面倒くさい、かかわらないようにしよう。

ただ、それだけのこと。

五月になった。

一年生最初の定期試験が終わり、その結果が掲示板に貼られた。
成績上位三十名の名前が載っている。

タケと見に行つた。

「おー、晃九位、おれ六位。」

「タケ、また順位上げたな。」

「やっぱ授業出でるものと、出てなことでは違つてしまふ。」

そう言つたタケは笑顔だつた。

去年、学校を休みがちだったタケも、定期試験だけは受けに来ていた。

そして、その全試験の結果で、十位以内に入つていた。学校に来なくても、授業に出なくとも、タケは頭のいい奴だつた。そんな学校に來ていなかつた頃の、苦しい経験も、笑つて話せるようになつたのだろうか。

「おひ、頭いい一人だなー。触つとこひつ。」

一宮が後ろからやつてきて、俺とタケの頭を撫で回す。一宮は背が高いので、俺達よりも頭一個分、出ている。

「俺らよりもっとすぐーのがいるじゃん。」

タケが指差したところには、クラスの学級委員になつた松岡の名前があつた。
第一位。

「マジでー聴ーくんとこ行つて拝ませてもらおーっヒ。」

そう言つと、一宮は足取り軽く、教室に戻つて行つた。

クラスも落ち着いてきて、いくつかのグループが出来上がりつた。

俺はタケと健太と過ごしていた。

タケの連れてきた一宮はとつとつ。

あいつは落ち着かない奴だつた。

俺達のところへ來たと思うと、ふらーっとまた別のところに行つて、一日に一度は必ず話したけれど、あいつは色々なグループに顔

を出していた。

クラス絵図。

真面目、優等生、学級委員タイプの奴ら、学級委員の松岡を中心 に、六人のグループが出来ていた。

最も、ここに入つたら無難に学校生活が送れるだろう。

ここにいる奴らがいじめをするようなタイプではないし、学級委 員の松岡は、成績も良いし全クラスの先生からも信頼されている。 こういう奴をわざわざ敵に回す馬鹿はいない。

だが、その松岡グループを良い風には思っていない奴らもいる。 クラスを仕切りたがるタイプの奴ら。

当然、面白くは無いだろう。

先生も、女子も、松岡グループには一目置いている。

そんな反、松岡派の奴らも、頭は悪くないから下手な動きはしな い。

影で悪口を言つ程度。

静かに一人でいるタイプも、どこにも属せず、属す機会を失つた、 おどおどした奴もいじめの対象にはならなかつた。

そして、お調子者で、笑いを取るのが上手いタイプはただ一人、

二宮英明。

一宮は、松岡グループにも顔を出す。松岡も一宮を受け入れてい る。

反松岡派のグループにも顔を出し、冗談言つて笑つている日もあ る。反松岡派グループからも気に入られていた。

それから驚いたことに、静かに一人でいるタイプの奴にも話しか けているし、どこにも属さずおどおどしている奴とも、二人きりで 笑つて話しているのを見かけた。

俺にはそんな一宮が、全く信じられなかつたし、理解できなかつ

た。

いつか二二二、明るく生きやか。

どにも属わず、女子のところにも男子のところにも、ふりと
やって来ては、また居なくなる。

そんな風のような奴が一高。

だからこのクラスにはいじめがなかつた。

ただ、それだけのこと。

その夏は暑かつた。

夏休みに入つたが、部活動は続いていた。
宿題もあるし、夏休み明けには試験もある。

お盆を過ぎても一向に涼しくならない暑さ。
照りつける太陽が憎い。

宿題を片付けていたが、暑さが邪魔して思うようにはかどらない。
気分転換に、市立図書館へ行こうと居間へ降つると、ばあちゃん
がいた。

「晃、麦茶入れたよ。」

八畳間に、ばあちゃんと一人で座つた。

縁側には、まだ強い日差しが入り込んでいる。

「クーラーつけないの?」

「扇風機で十分だがな。」

ばあちゃんはそう言つて、麦茶を口につけた。

「今年は例年には猛暑だつてよ。」

「毎年やつぱりじゅうねん。」

ばあちゃんの淹れてくれた麦茶は冷たかった。
やかんで沸かし、冷蔵庫で冷ます。

グラスも一緒に冷蔵庫で冷やしてくれる。

「うわうわ。」

「図書館かい？」

「うそ。夕方には帰るよ。」

そう言つて、家を出た。

外もまた、アスファルトの照り返しが強く、むりとする暑さ。
呼吸が苦しくなる。

さつきまで飲んでいた冷たい麦茶を体が思い出す。

麦茶はばあちゃんの味がした。

夏休み、タケの家へ遊びに行くと、お手伝いのおばさんが麦茶を
出してくれる。

部活の合間、図書館の帰り、自動販売機で買つ麦茶。
どれも、ばあちゃんの麦茶とは違うと感じた麦茶。
幼い頃からのばあちゃんの味。

その日、図書館から帰るとばあちゃんと一緒に夕食を食べた。

焼き魚に、大根とがんもの煮物、暑いのに味噌汁。

前に一度、タケんちでのお手伝いさんに廻食を引いた走になつた
ことがある。

オムライスにサンデイッチ。オレンジジュース。

いかにも洋食派という感じの食卓。

タケが少し体格いいのも、お手伝いのおばさんの体格も、わから
なくもない。

子供ながらにわかつていたこと。

俺の家は皆の家とは違うこと。

父親は相変わらず仕事が忙しい人だし、兄貴達とも顔を合わせれば嫌味を言われるだけ。

中学に入り、部活に入り、だいぶ家に居る時間は少なくなったが、それでも生活動作が重なることもあるわけで。

「晃どう飯を食べるのも久しぶりだねえ。」

「そう?」

「中学は忙しいかい?」

「まあまあ。」

「夏休みなのにゆっくり出来ないねえ。」

「全部が部活じゃなによ。遊びにも行つてゐる。」

「そうかい。」

「あちやんはゆっくり食べてるので、気がつくと俺の皿は空になつていた。

「勝もないし、もつとゆっくりしてや。」

「ただいま。」

玄関の扉が閉まり、居間へと続く廊下に足音が鳴る。

「いいわいいわ。」

俺はそつと、席を立ち、食器を台所へ下げる。
ちょうど背中を向けた時に、兄貴が居間に入つて來た。

「おかえりー、回。今日は早いんだね。」

「あちー、ばあちゃん、クーラーは？」

「扇風機で十分だがな。」

「昭和何年だよ、つたぐ・・・」れだから

年寄りは。

そう言いたかったのである。う。

が、その言葉は焼き魚と共に口へと飲み込まれた。

「魚は頭にいそづじよ。でー、しーしー？」

「D H A。」

「そづじや、それ。」

「もう何十回目だよ、ばあちやん。」

やれやれといった表情の兄貴。

二人のやりとりの間に、俺はさつと台所から姿を消す。

生活動作の重なる時間。

もう何年も、食卓に全員が揃つて座る」とは無かつた。

ばあちゃんは決まって六時までには夕食を済ますし、部活を終えて帰る俺は七時を過ぎる。

塾へ通う兄貴は夕食が夜食代わりになっていた。父親が家で食事を食べることは滅多に無い。

俺には一人の兄貴が居る。

一番上の勝兄は、この春から東北の大学に進学し、寮に入った。

一番田の田兄は、高校三年。

勝兄がいなくなつてからは、だいぶ家の雰囲気が変わつた。

男三人兄弟、年寄り一名。

ただでさえ、男三人が家中、同じ部屋にいるだけでも暑苦しいだろう。

ばあちゃんをはるかに超える長身の兄一人。
育ち盛りの俺。

年々腰の曲がっていくばあちゃんにとって、孫達の顔を見上げる
のに一苦労。

立派に育ててくれた男三人兄弟。
ただ、それだけのこと。

2.

一学期が始まった。

席替えをした。

一年に何度も行われるこの席替え。

相変わらず、こんな面倒くさいことはない。
なにが良くて席替えなんかするのだろうか。
騒がしくなるだけだ。

予感的中。

隣の席は瀬戸由利。

かかわらないうにしていたが、同じ委員なので、月に一度は一
緒に会議に出る。

そして、一週に一度は当番で、理科室か化学実験室の清掃及び点
検を行うのが仕事。

それだけ。

かかわりはそれだけのはずだった。

だが・・・・・

夏休み前、男子達の恋愛話に付き合っていた時のこと。

クラスの奴らの一番人気は瀬戸由利だった。

クラス内だけでなく、他のクラスにも由利を好きだという奴がい

るとか。

「どこがいいんだ？あんな奴。
やつ思つて聞いていた。

「やっぱ由利ちゃんでしょ。」

「なんだおまえもかよー」

「やつゆーおまえも一年時から由利ちゃんかわにして書いてたよ
な。」

「あ、覚えてた？」

「やっぱまだ好きなのか？」

「とーぜん。」

「でもやー、かわいいよな、由利ちゃん。」

「俺」の間やー、落とした消しゴム拾つてあげたらありがと。って
言られたー。」

「なにー！それは羨ましい。」

「お前らそんな由利ちゃん好きなの？」

「なんだよ、悪いか？」

「いや、悪くは無いけど、由利ちゃんつて確かに顔かわいいけど、
おとなしくない？喋らないし。」

「バカだなー、そこがかわいいんだろう。おとなしくて、静かで、
その辺の女子とは違うさー。」

「やつやつ、由利ちゃんの良さがわからないなんて。」

「ばかはおまえらだろ。」

「そんな本音はもちろん言えず。」

「おとなしいのがかわいい？」

「なんだそりや。」

「ばかな男の恋愛話を大人しく聞いていた。」

「とにかく、由利ちゃん好きな奴、抜け駆けは禁止だからな。」

「おお。そうだな。」

「自分だけいいとこ持つてくのはなしな。」

「俺、まじで今年由利ちゃんと同じクラスで良かつた。」

「体育ん時の由利ちゃんとか超かわいくね？」

「かわいー。」

「だなつ、だなつ。」

「他のクラスの奴らには味わえねー、かわいさだよなー。」

「俺、由利ちゃんの困った顔がすげー好き。」

「あ、それわかるかも！顔赤くして、下向いてるのとか。」

「ちょっときつい言い方するとなるよな。」

「そうそう、泣きそうな顔もかわいよなー。」

「なんだ、おまえわざときつい言い方してんのか？」

「だつてー。」

「やめろよなー。そうこうの。」

「そうこうお前だつて。」

「お互い様だるー。」

「かわいいこと思つのは一緒に。」

「だなーつ。ははははー。」

やつぱつぱかだ、じつひ。

困らせてかわいいつて、それっていじめてるだナジちゃん。
どこつもこいつもアホだな。

女の話なんて面倒くせーな。
早く終わんねーかな。

「そーいや晃君で、由利ちゃんと同じ委員じゃん。」

「あーいいなー、由利ちゃんと一緒に委員会。」

「由利ちゃんと一緒に理科室で仕事。」

「すつー。」

すっかり人事に聞いていた話が、ひょんなとこから自分に降り注がれていた。

「なー、晃くんも由利ちゃん狙い?」

「まじで?」

「それ、聞いとかないとー。」

男共の視線が集まる。

面倒くさい。

いちいち、面倒くさい。

「いや、別に。」

「なーんだ、そつかあー。」

「良かつた良かつた。」

「それならそーと言えよなー。」

「でも、あんま近づくなよ。」

「そうそう、由利ちゃんのかわいさを知つたら好きになっちゃうかもだし。」

付き合いきれなくて、その場を離れた。

それはちょっとした時間だった。

タケと、健太のいない時に、話に付き合つただけ。

反松岡派で、クラスを仕切りたいタイプを含む、松岡派に入つてない男子のグループ。

どうやら今は、松岡よりも由利への執着が強いようだった。
ただ、それだけのこと。

席替えで由利の隣になつて一週間が過ぎた。
評判通り、由利はおとなしくあまり喋らない。

必要に応じて、授業で使うものなど、隣の席同士の協力が不可欠となることがあるのだが、由利は消極的だった。

むしろ、躊躇したような、困っているような。

視界に入つてくる由利の手。

綺麗な字。

だから書き物なんかは由利が書いた方が適材だと思うのに。

そういう時でさえ、由利は消極的で、躊躇つて、どうしようかと常に誰かに助けを求めているような態度。

そんな態度に、俺はだんだん不快感を感じるようになった。

それに加えて、休み時間になると集まつてくる由利を好きだとう男達。

由利の席まで来ては、さり気無く机にぶつかつて物を落としたり、それを拾つて由利にお礼を言わせてみたり。

最初はこの程度のいたずら、気にもならなかつたが、だんだんとエスカレートしていくと、さすがに由利に留まる。

わざとらしさが目に見えている。

由利の背中にこつそり紙を貼り付けたり、消しゴムを隠したり、由利が困ることをまるでゲーム感覚のように仕掛けてくる。

それを、少し離れた所から見物してゐる男達。

笑いながら、プレイヤーの様子をジャッジしているのはまるで遊び感覚。

当の本人は、困ったあげく、泣き出すこともしばしば。

泣いたら百円なんて、賭けの標的にもされている始末。

十分の休み時間でこんなことをする奴らも大したもんだ。

「あんたたち、いい加減にしなよー。」

「おー、斎藤さん登場。」

「おー、こわこわ。」

見るに見かねて斎藤が由利を助ける」と、しげしげ。

「由利も。あんたも自分でちやんと言わなきゃダメよ。」「でも……けいちゃん……。」

泣きつく由利に、斎藤は最もなことと言つてはいるが、その時俺は思つていた。

おとなしくて、はつきりしない、かわいさ。

そんなのあるのか？

男が男をいじめる」とはなかつたけれど、「のクラスは男が女を標的にしていた。

いじめとはまた違ひと思ひナビ。

意地悪・・・・

確かにしたくなる、そんな気持ちにさせる奴だった。由利は。ただ、それだけのこと。

「にーのっ。辞書貸して。」

「もえっ。」

「今日英語あつたでしょ？ もう使わない？」

「んー、残念だけどオレの辞書は貸し出し中ー。」

「えー、そんなあ。」

「タケやーん。」

休み時間、タケと健太と喋っていたら、このに連れられあの女が来た。

「英和辞書貸して。」

「また忘れたのか？ 家か？」

「はずれー。今度は塾。」

「塾に忘れるか？普通。」

「あー、もうこんな時間。タケやん、ありがと。」

「おこ、まだ貸すとは言つてない・・・・・」

「今度ジュークおーじるからー。」

「うひーと去つていった。

全く騒がしい女。

去年から、タケのところにノートや辞書を借りに来ていた女。今年になつてもそれは続いていた。

むしろ、今年の方が頻繁だ。

どうやらタケではなく、一廊の方に来ているらしきが。

廊下ですれ違う時とか、一廊に話しかけている。

そこにタケも同乗して話している。

完全に顔は覚えたが、そういうえばこの女の名前は知らなかつた。別に、知る必要もない。

ただ、それだけのこと。

かかわりたくないと思つているのに、隣の席だと由直を組んでやらなければならぬ。

まったく面倒くさい。

ただでさえ、由直なんて面倒くさいのと、その上、組む相手が由利。

「じみ捨て行つてくるから、由利書いておいで。」

「あ、あ、はい・・・・・」

「うひーと去つていった。

田頃から女子と喋るのが面倒くさいが、由利には喋らないといふわらないことが多い。

それなのあの返事。

当たり前のこと。当たり前前に言っているだけなのに、なんでも
んな躊躇して、困った顔をするのだろう。

今までにも男達からちやほやされ、何も言わなくても、何もしな
くても、許されてきたのだろうか。

おとなしいから、喋らないから、誰かがやつてくれるから、皆が
助けてくれるから。

かわいいという、だけで。

それだけで何もかも手に入れた女。
そういうの、不快に思う。

焼却場の「ミ山」に、持ってきたごみ袋を思いつき投げつけた。

「 っ！」

膝に痛みを感じた。

最近、夜中に痛みで目を覚ますことがある。

腕の関節、膝の関節に突然走る痛み。

成長期、なのだろうか。

中学に入つて毎年四月に行われる身体検査では、身長だけが大き
く数字を伸ばしていた。

一年生で百五十五センチだった身長は、この四月に測つた時には
百六十六センチになっていた。

教室へ戻ると部活へ行く支度をはじめた。

当然、由利に任せた日誌は終わっているものだと思い。
だが・・・・・

「あ、あの、」「・・・・・」

そう言つて日誌を持つてきた由利。

それを見た俺は啞然とした。

全くもつて空欄の方が多いであらう。

「こいつは俺がごみ捨てに行っている間、いったい何をしていたのだ。

何をしていたら、ここまで終わっていないんだ？

込み上げてくる不快感。

「なんて書いたらいいのか・・・」

「適当でいいんじやん。」

「えっと・・・でも・・・」

下を向き、困った顔の由利。
ため息をつく俺。

「書くから。」

そう言つて、由利から口誌を取り上げた。
すると、

「きやつ・・・」

え？

なんだ？

こいつ・・・

口誌を半ば強引に取り上げたかもしれない。

由利の手に、触れたかもしれない。

それだけのことなのに、なんだ？

こいつのこの反応・・・

下を向くのはいつものこと。

泣き出すのはいつものこと。

怯えてこるのはなぜ？

「あーー！」

「何由利ちゃん泣かせてんだよー。」

そう言つて一人の男子が教室に入ってきた。

「由利ちゃん大丈夫？」

「おまえ由利ちゃんに何したんだよ？」

由利のこと好きだという浅野、小田切だった。
おまえらこそ、なんだんだ。

面倒くさことになつた。

「別に。」

「別について、なんだその言い方。」

「おまえが何かしなかつたら由利ちゃんが泣くわけないだろ？」

何もしなくてもそいつは泣くぞ。

何も言わないとも、何もしなくとも、泣けば誰かが助けてくれるのだから。

泣けば皆が助けてくれるのだから。

「つでか、マジなに泣かせてんだよ。」

「おまえ調子のつてんじやねーよ。」

睨み付けてくる。

だから睨み返してやつた。

「なんだよその皿。」

大変気分を損ねたようだつた。
だが、俺も気分が悪かつた。

また関節が痛む。

何も言わない由利がムカつく。
その由利を庇う奴らがムカつく。

「おまえさー、ちょっと頭いいからって調子のんじやねーよ。」

「由利ちゃんと隣の席だからって立つことすんなよ。」

頭がいいのも、席が隣なのも関係の無いことだろ。
単に、おまえらのおもちゃを横取りされたのが気に入らないんだ
る。

そんな単純なこと、わかんねーのか。

そんな単純なこと、わかんねーのか、俺は。

相手にすることない。

かかわることない。

かかわらなくていい。

ただ、それだけのこと。

それなのに、なんで俺はこんなにイライラしてるんだ?

翌日。

昨日の放課後は散々だった。
部活をサボって家へ帰った。

不快なことというのは連鎖するようで。
珍しく塾の無い旦兄と帰りの時間が重なってしまった。
旦兄と田が合つ。

「部活も勉強も中途半端か?」

ふつと鼻で笑いながらそう言い残し、一階へ上がった。
俺は何も言わなかつたし、何もしなかつた。
ただ、それだけのこと。

四時間目が体育だつた。

男子は体育館でバスケ、女子はグラウンドでマラソンだつた。
体育の授業は男女別、一二クラス合同で行われる。
三組と四組が同じ授業。

スポーツは嫌いではないが、好きでもなかつた。

「ピピ　　っ、交代。次、ことログループ、コートに入れー。」

体育教師が笛を吹く。

休憩が終わり、俺のいるCグループが試合をする番になつた。

「晃君、見ててくれたー？オレのスペシャルショートツー！」

さつきまでの試合で疲れているはずが、
いつも通り陽気な声の主、一宮。

「もうちよいでダンク行けると思つんだけだなー。」

確かに、百八十近い長身の一宮なら、できなくもなさそつだ。

「やっぱオレ、陸上辞めてバスケにすつかなー。」

相変わらずおめでたい奴だ。

俺だけでなく、あつちこつちに言つて話しかけている。
あれだけ動いたのにお喋りは止まらない。

元気な奴だ。

タケも、健太も、さつきの試合に出ていたグループなので、二人とも床に転がり込むようにして座っている。

運動部でない一人にとつてはきつい時間だったのだらう。

「ピ。。」

再び笛が鳴り、試合がはじまる。
嫌いじゃないが、好きでもない。

授業であるから適当に。

無難な動きをしているつもりだった。

バシッ！

味方からバスがくる。

受け取る。

バシッ！

またバス。

バシッ！

おいおい、俺はそんなに頑張るつもりはないから、現役バスケ部員栗山の方へまわした方が利口だぞ。

そんな風に思っていた。

ところが・・・

その同じチームの、現役バスケ部員栗山からバスがまわってくる。

しかも頻繁に。

そしてだんだんと速くなる。

おいおい。

バスというより、俺目掛けて投げてないか?
しかも強い球・・・

ベシッ！

「 つつ！」

今度は背後から、球が飛んできて首辺りに当たった。

痛みが残る。

おいおい、ちゃんと「ノントロールしろよな。
いくらなんでも背後の「ースは読めねーよ。

今度は真横から。

受け取りきれずに、耳の辺りをかすめた。

「ピッピッ。」

ボールが外へ出る。

「ピッ。」

笛の合図でスローイン。

試合再開と共に、またも次々と激しいボールが飛んでくる。

肩に、背中に、腹に、膝に・・・・・

おいおい、これじゃあバスケじゃなくてドッジボールだらがつ。
バシツツー！

「いって！」

受け取れず、避けきれず、もろに顔面に当たった。

「わりー。」

「せんせー、穂高君と交代をさせて下さい。」

待機していた交代枠の一人が、コートに入る時、俺に言った。

「調子に乗つてんじゃねーよ、バーかつ。」

「コート内に響き渡るかすかな笑い声。

どの表情も笑みがある。

ああ。なるほどな。

俺は何も言わないけれど、何もしないけれど、その時初めて全てを理解した。

ただ、それだけのこと。

体育館から出ると、同じく体育を終えた女子がグラウンドから戻るところだった。

「由利ちゃん。」

「女子はマラソンだつたの？男子はバスケだよー。」

「由利ちゃんに見て欲しかつたなー、俺のショート。」

「おれもーおれも。」

バカな男達が由利を囲む。

困つて下を向く由利。

その男達を睨み付けている斎藤。

いつものことだ。

いつもの光景。

「おっ、もーえーつ。」

「にのっ！」

「男子はバスケ？いいなー。」

「女子はマラソン？」

「十五、タイム計測だつたよー。もーいや。」

「ははは。もえは短距離派だもんなー。」

「あ、タケやん。」

「なんだ？辞書なら持つてないぞ。」

「ちがうよー。」

いつもの辞書女。
いつもの光景。

いつもと違うのは・・・

そういえば、辞書女、体育が一緒にことは四組つてことか。
隣のクラスだったのか。

まあ、クラスなんて知ったところで俺には関係ねーか。

次は教室で授業か。

由利の隣の席で。

由利にはもうかかわりたくない。

ただ、それだけのこと。

それから体育祭があつて、合唱コンクール、日帰り旅行と行事が
続いた。

理科、化学、体育、美術、技術、音楽、これらの授業は移動教室
なので隣の席に由利が座ることはない。

朝と帰りのH.R、一日の授業の中で三つか四つ、隣の席に座る由
利との時間。

常に誰かに見られているような、見張られているようすで、睨まれ
ているようで、苦痛。

相変わらず由利は下を向いているし、少しきつこことを言いつと泣
き出す。

俺にはそれが理解できない。

だから余計に不快。

由利を見ていると苛々する。

そんな由利を庇うバカな男達を見ると苛々する。

だからつい、由利への態度が悪くなる。
だから余計に男達から睨まれる。
そんな悪循環。

痛む関節。

成長期なのだろうか。

幼稚な考えの男達も、成長してはくれないだろうか・・・
抜け出せない悪循環の輪。
ただ、それだけのこと。

「あははははー。」

「笑うな。」

「だつて・・・あははっ・・・」

「タケ、笑い過ぎ。」

「わ、わりー・・・だー、笑える。」

まだ笑っているタケ。

笑いをこらえようとしているのだろうが、肩が笑っている。

「そんな事で苛々するとは、晁も人間ぽいってことじゃん。」

日曜日、タケの家に遊びに来た俺は、由利の事を話してみた。

「しかも、晁マジな顔で話すからや、それがまた笑える・・・く
く・・・」

再び笑いのつぼにはまつたタケ。
真面目な話しのつもりだが。

「晃が人のこと気になるなんてな。」

「気にしちゃいねーよ。」

「そういうの、気になるって言つんだぞ。」

「わかんねー。」

「そしてそれを人は恋と呼ぶ。」

「ありえねーよ。」

氣にする？

氣になる？

俺が？

由利を？

まさか。

氣にするどころか、見ているだけで苛々すんだぞ。
隣に居る時間は苦痛なんだぞ。

それが恋なわけねーだろ。

タケに話した俺が間違っていたのか？

いや、タケなら話せるとと思つたし、タケになら話してもここと思つた。

タケしか話せる友達なんていないけど。

笑いがおさまったタケが言つた。

「おれもあるべ。」

「え？」

「なんつーか、氣を引きたくないじわるしちゃう?..」

「それはあいつ等のやつてることだろ。幼稚ないじめ。」「確かに。晃の言つ通りだな。」

俺は別に由利の氣を引きたくない苟々しているわけでもないし、さ

ついたことを言つて泣かせているわけでもない。

ただ・・・・・

どうにもならない、無性に苛々するこの気持。

なんなんだ？

「じゃあさ、なんで晃は由利ちゃんのこと完全無視、できないの？」

「え？」

「かかわらないうち決めたらさ、今までの晃ならとことんかかわらないじゃん。相手が困るしが、泣こうが、関係なく自分のスタイルを貫いてた。」

そうだな。

確かにタケの言う通り。

女子に何を言われようが、言われなくとも、関係なかつた。

基本、人とのかかわりが面倒くさいし、まして女子なんて面倒くさい。

だから俺が居ようが居まいが関係のなかつた・・・・・

そう、去年の俺は泉くんに守られた、泉くんの作ってくれた人間関係の中にいたから、それで許された。

それが許された。

でも、今は違う。

泉くんはいない。

代わりに、友達というタケを見つけた。

俺はそれで満足だつた。

俺はそれで良いと思つた。

タケがいれば、それでいい・・・・・ヒ。

でも、タケは違う。

俺とは違う。

タケと出会つてから、俺は自分のこと、家のこと、母親のこと、兄貴達のこと、少しづつ話せるようになつた。

でも、まだ話していない事の方が多い。

タケは自分についてのほとんどを話してくれている。

タケは、裕福な生活を手に入れながら、いざれ自分の好きなことを諦めなければならない。

そういう境遇に立ち、見た目よりもお金よりも、中身を大事にする、そんなタケだから、俺はここにいる。

「まあ、恋じやないとしてもだ、周りが自然に晃のこと、わかってくれると思うぜ。」

「別に俺は・・・」

去年、タケが変わったのは泉くんがいたから。

裏番長的存在の泉くんが、クラスのやつらにタケを受け入れさせてくれた。

俺は何もしていない。

俺は何もできなかつた。

一年になつて、泉くんがいなくとも、タケが変わったのは自分の力。

俺は何もしていない。

それでもタケはうまくやつている。

タケ、健太、一宮、クラスの奴ら。

俺は今度こそ、自分で人間関係というのを築かなければならぬのか。

そんな面倒くさいこと、しなければならないのか。

俺が一番面倒くさいとしている、人とかかわること。

そしてそれは一番苦手なことでもある。

ただ、それだけのこと。

十一月になつた。

毎年恒例の「写生大会」。

去年と同じ、人気の無い、静かなあの場所を選んだ。タケと健太はグラウンドの方で描くと言つていた。サッカーゴール、グラウンドが見渡せる階段の上、校門の木、校舎、これら定番人気の場所には毎年たくさんの人人が群がつていた。そんな所で落ち着いて絵なんか描けるかよ。俺は来年もこの場所で描こう。そんなことを思つて過ごした。

静かな中庭。

空を背景に、緑の芝に色を落とす。

絵の具の匂いは落ち着く。

まだ家で絵を描いていた頃、縁側に座つて描くのが好きだつた。ばあちゃんに買ってもらつた絵の具を、縁側に並べて、眺めているだけでも幸せな気分になつた。

そんなので幸せを感じられるなんて、幼稚だらう。でも、あの頃は、それで良かった。それが良かつた。

お絵かきは、楽しかつた。

今日は午前で終わり。

午後は部活。

行事続きの一学期も、終わつてしまえばなんてことはない。

俺は静かに、学校生活を送りたいだけ。

ただ、それだけのこと。

その日、家に帰るとばあちゃんが言った。

「あら。絵の具の匂いだが。」

年をとつても、嗅覚は衰えないようだ。

「写生大会だつたんだ、今日。」

「制服脱いだらよこしー。干しどかんと匂い消えんで。」

俺は制服を脱ぐとばあちゃんに渡した。
ばあちゃんが制服をハンガーに掛けながら言った。

「懐かしー匂いばす。」

「そう?」

「晃がちつちえ頃は家ん中、よつ絵の具の匂いしてたが。」

消臭スプレーを吹きかけると、外へ干しに行つた。

「縁側が好きでなあ。よつじこで描いとつたが。」

俺も今日同じことを思い出していたので驚いた。
ばあちゃんも覚えていたのか。

絵の話。

小四の時に描いた一枚の絵で賞を取つた。
家族の誰もいい顔をしなかつた。
それだけはよく覚えている。

だから俺はその日から、家で絵を描かなくなつた。

絵の具も、絵筆も、画板も、全て学校に置いたまゝ。

があちやんの横顔を見る。

絵の話をして思い出すのは母親のことだらう。

アトリエで、絵を描いていて、早産で、発見が遅れた母親。俺が生まれたことと引き換えに、命を落とした母親。

絵の話は、決まって家族を苦しめる。

絵の話は、俺の立場も悪くする。

でも・・・・

その日見たあちやんの横顔は、それほど悲しそうではなかつた。ただ、それだけのこと。

一学期も終わらうとしている十一月。

先日行われた期末試験の結果が掲示板に貼り出された。健太に付き合つて見に行つた。

「だー、やつぱり入つているわけがないか、俺なんて。」

貼り出されたばかりの掲示には、人だかりができていた。

「晃君は十三位だし、タケは五位。そして一位は聰一君。うちのクラスどうなつてんだよー。」

少し順位を落とした。

由利の隣になつてからだ。

と、そう決め付けるのは俺も小さい奴だなと自分で思ひ。他にも要因はあるだらう。

部活は皆入つてゐるし、塾にだつて通つてる奴もいる。

勉強の時間なんて、取ろうと思えば自分次第。

勉強するのもしないのも、自己責任。

今までは特にすることもなくて、一人で過ごす時間は無駄にあつたから、勉強には困らなかつた。

タケと遊ぶ時間が増えたからといって、タケは順位を落とすどころかむしろ上がり続けている。

そんなのは皆同じ。

自己管理。

ちょっと自分が情けねー。

「あー、負けたあ。」

「よつしゃ、帰りのジューースは萌けやんのおいりなー。」

「くやしい。」

「一勝一敗。」

ふと、聞き覚えのある声の方に目を向ける。

辞書女。

と、同じ蓮田小出身の笠原 祐也。

相変わらず辞書女は元気に喋り、跳ね回つてゐる。
ジューース一本の賭け事位で、一喜一憂できるとは幸せな奴だ。
何の悩みもなさそう。

「もー、次こそは負けないからねー。
「受けてたどーー。ははは。」

笠原祐也の順位を探した。

十二位。

おいおい、俺より上だつたんじやないか。

つてことは、辞書女、祐也に負けたものの・・・三十位内に入

つてたつてことか？

二勝一敗、つて言つてたか。

祐也が一敗は負けているといつことは・・・
おいおい、そんな変わんねー位置に、いつもいたつてことか?
頭悪そうに見えたのに。

人は見かけによらねーのか。

ただ、無駄にうるさい奴だと思つていた。

ただ、それだけのこと。

また田直当番が回つてきた。

当然、隣の席、由利と。

おそらく、由利と組むのはこれで最後になるであろう。

三学期に入ればまた席替えがある。

そう思えば多少の苛立ちは抑えることが出来た。

「ほ、穂高君、ここに記入はこれでいいかな？」

「いーんじゃね。」

相変わらず消極的で、自分で進められず、いちいち人に確認を求める由利に、苛立ちを覚えながらも、俺は俺で確認もせず、適当に返答する。

それがまた、由利にとつてはつらうじようじで、また下を向いてしまう。

そろそろ泣くか？

由利のパターンは単純だ。

まず相手に話しかけるまでに、躊躇、緊張があるから、話しかけて冷たい態度を取られると、すぐに困る。

次に話しが進まないものなら、困つておどおど。

そこにきつい一言または態度が入ろうものなら、泣き出すである

う。

かかわりのパターンを決めてしまえば、でもなるものだ。
困るもの、下を向くのも勝手だが、泣き出すのだけは勘弁しても
らいたい。

俺だつて好きで女を泣かせているわけではないし。
そういうことをわざとする誰かさんとは違つじ。
そう、違うと思つていた。

でも・・・

由利の口説きの速度に合わせてやることにした。
隣ではなく、前の席に座ることにして。

相変わらず綺麗な字。

由利が書く字には、つこつい田を奪われる。
気がつくと、由利は見られていることに緊張して、シャーペンが
進まなくなるようだが。
やしてこうなる。

「あっ。」

消しゴムを落とす由利。

俺も拾おうとして、二人の手が重なる。

次の瞬間

この顔だ。

この顔が、たまらなくイライラする。

今にも泣きそうな、悲しみいっぱいのその表情。

涙をこらえるのに必死です的な、表情。

こらえているから、泣かせてみたくない。

こらえているから、泣かせたくなる。

次の言

「男嫌い？」

「」の一言で決まる。

「そんなかわいいとか、大変じゃない？」

命中。

外したことは無い。

単純明解。

こんな簡単な答え、テストにも出ないぜ。

「なんか言つたら？」

零れ落ちる涙。

まったく簡単でつまらねー。

試合をしてもいなのに、勝った気分だな。

後悔も罪悪感もない。

俺はこういう奴なんだ。

由利を泣かせてなんになる？

俺はいつたい何をしたい？

俺のやつてることはあいつらと変わらないじゃないか。

俺が嫌つてるあいつらと。

結局同じ、俺も幼稚なまま。

体は成長期かもしれないけれど、中身は全然変わつてない。

むしろ、幼稚園児の方がもっと純粹だろう。

幼稚な考えを持ったまま、大人の考えも知つてしまつた。

小さい頃から自分がどういう立場にあつて、どうすればいいかを

悟るのが得意だった。

母親が亡ないのも、父親が居ないのも、ばあちゃんに育てられて
も、それは関係ない。
ただ、それだけのこと。

「てめー、いい加減にしろよ。」

「由利ちゃん平気?」

また出た。

浅野、小田切、由利好き二人組。

「前にも言ったよな? 調子のんなつて。」

「おまえ由利ちゃんに何したんだよ?」

「・・・・・・・・」

「黙つてねーで、何とか言えよ?」

別に。って言つても前みたいに納得はしないだろ。
だから黙つてたのに、何か言えつて・・・・・
学習能力の無い奴らだな。

「由利ちゃん泣かせたらどうなるか位わかってるんだろうな?」

「ムカつくんだよ、おまえ。」

おまえらだつて、似たようなことやつてんじやん。

由利が泣こうが泣かなかうが、どちらにしろ由利に近づくだけで面白くないんだろ。

もうこんな面倒くさいこと、終わらせないと。
俺にビーナスをつけて・・・・

「あつれえー? 何してんのー?」

気が抜けるほど、陽気な声。

こんな声を出す奴は一人しか知らない。

「あらら。また由利ちゃんいじめてー。男三人だなんて卑怯だよねー、由利ちゃん。」

一宮が教室に入ってきた。

「ちげーよ、にの。」

「そうそう、由利ちゃんいじめてんのはーいっ。」

「えー、晃君?」

「そう。俺らは由利ちゃんを助けたの。」

「そつそつ。」

「ふーん。」

「」の状況下においても、相変わらず意氣揚々と、笑顔をふりまく一宮。

「でもさつ、やっぱ俺には由利ちゃんを三人がいじめているようにしか見えないけどな。」

「あ? にの、何言つてんの?」

浅野の表情が変わる。

「だつてさあー、浅野つちと、小田切くんが由利ちゃんを助けているにしては、由利ちゃん泣いてるし。」

「あ? 意味わかんねー。」

浅野の険しい視線が一宮に向けられた。

「ふつづく、助けてもらひたらい泣き止むもんじやない？」

一高は去ることなく明るい調子で話し続ける。

「ねー、由利ちゃん。」

確かに。

一高が入ってきてから、由利は泣き止んだ。

浅野と小田切と俺との言い合いがはじまった時には、大粒の涙をいじぼしていた由利。

そんな由利の顔を見て、浅野が一步怯む。

「そ、そんなことないよねー。由利ちゃん。」

「由利ちゃんもしかして、俺達のことも怖かった？」

小田切が笑顔を作つて尋ねる。

「クン。

由利が小さく頷く。

「ほらねー。由利ちゃんをいじめてたのは君達三人。はい、全員由利ちゃんに謝るー。」

そう言つと、手で俺達三人の頭を押して下げさせる一高。
何で俺が謝るんだと、不服ながりも一高の長身から出る手の力には逆らえなかつた。

「由利ちゃん、ごめんね。」

まず小田切が謝る。

「『めんな、そんなつもつじや・・・』

「はい、浅野つち、やり直し。」

「えー、なんでえ?」

「言い訳はしない。謝るだけ。」

再び一富に頭を押される浅野。

「だつて、もとは穂高が・・・」

「はい、浅野つち、やり直し。」

「お~おい、なんでだよおー。」

「潔く、謝りましょうー。」

鋭い一富のツッコミ、浅野はムツとした様だが、そのツッコミを見た由利が少し笑つたので、浅野はとつとつ諦めたようだつた。

「『めん。由利ちゃん。』

「合格。」

一富が満足そうに呟く。

「はい、次、晃君も。」

「・・・・悪かった。」

「ダメつー全然だめー。」

「は?」

「気持ちがこもつてない。」

「気持ちつて・・・」

「はい、やり直しー。言い訳無用。」

「悪い。」

「ダメつー。」

「悪かつた。」

「ぜんぜん、ダメーつ。」

「悪い・・・と思つてます。」

「却下ー。」

ダメつて何がだ？

気持ちがこもつてないつて何だよ？

何なんだいつたい・・・・・

「じー、じめん。」

「ブー、言葉変えてもダメです。」

「・・・・・じめん・・・・・なさい。」

「晃君、女の子に謝つたことないの？そんなのじゃ全然伝わりまつせーん。」

「ぶはつははははつー。」

「あはは、おもしれー。」

それまで黙つていた浅野、小田切が突然吹きだして笑い出した。
それを見た由利も笑つている。

「穂高、それはマジで笑えるわ。」

「謝り方、棒読みだもんなー。ははは。」

まだ笑つている浅野、小田切。

「はー、もう一回。真面目にやつてよ、晃君。」

「・・・・・俺はどつすれば？」

「はい、やり直しー。ちゃんと謝るー。」

「だからどうすれば・・・・・」

「悪いことをしたら謝るー。そんなことも知らないのー。お子ちやま

だねー、晃君は。」

さりに笑い出す浅野、小田切。

「だから、悪かつたつて。」

「うーん、微妙に違うんだよなー。」

首を傾げる一瞬。

「この、おまえの微妙って・・・」

笑いの止まらない浅野が言つ。

「まあ、仮合格ってとこですかね。」

「か、仮合格つて・・・そんなんあんの?」

今度は小田切がツッこむ。

男子達のやりとりを、由利はもうすっかり笑つて見ていた。

「どうする? 由利ちゃん。」

「え、えっと・・・大丈夫。」

「だつて。良かつたね、晃君。」

「よ、良かつたな、穂高。ぐははは。」

まだ笑っている浅野。

「おもしれー、謝るのにこんなにやり直しせられた奴、初めて見たー。」

「あははは、マジ笑える。」

「穂高、おまえおもしれーな。」

「なつ。なんか穂高つて喋んねーし、何考えるかわからなかつたからつい突つかかつちゃつたけど。」

「そつそつ、静かなガリ勉野郎かと思つてた。」

「女子と話がないのに、由利ちゃんにだけはちょっとかくに出すしゃ。」

「でも、謝つたことがないなんて、笑えるよなー。」

「ほんと。あれば笑えたー。棒読みー。由利ちゃんもびっくり?」

思い出し笑いに入った小田切。

「やつぱ由利ちゃんは笑顔もかわいいつ。」

「結局それかよー。」

「由利ちゃん、また困つた時に呼ばんでねつ。謝らせ屋ー! 頭參上ー。」

「だははははー。」

「この、それいいー!」

俺は面白くもなんともねーよ。

面白くしたのがいるからそつ見えるだけ。

そつ、面白くした奴が。

そいつは、最後にこう言つた。

「由利ちゃんも、泣く前に、ちゃんと自分の気持ち言わなきやだめだよ。」

その後で、由利の見せた顔は、ちよつとかわいいと思つた。

可愛いと、可愛そうは似ている気がした。

ただ、それだけのこと。

その日、いつもより遅く登校すると、玄関からあの騒がしい声がしていた。

「やっぱ今川焼きは小倉でしょ。」

「えー、カスターだよー。」

「小倉。」

「カスター。」

「小倉。」

「カスターだつてばー。」

「じゃあ、今度の練習試合にどう?」

「いいねー! 祐也が負けたら私にカスターだからねー。」

「小倉は一倍返しで。」

「負けないもん。」

「こいつら、朝練を終えて玄関に入ってきたといふ感じで、手に持っているのはラケット。テニス部だったのか。辞書女。

「あ、予鈴鳴る。」

「やべつ、俺担任に呼ばれてたんだつたー。」

「祐也のデージッ。」

走り出す祐也。

「生活委員の笠原くーん、廊下を走ってはいけませんよー。」

「萌ちゃん・・・覚えてるよー。」

「いやですよーつだ。きやはははは・・・・・・」

そう言つと、たちまち静かになつた。

そして、職員室へ続く廊下を、彼の姿が見えなくなるまで、見ていた。

「はよー。」

「おっす、晃君。」

「おお。」

教室へ入ると、浅野、小田切に話しかけられた。
俺も挨拶を返す。

「おっはー、晃君珍しいねー、時間、ギリギリ。寝坊？夜更かし？それともごめんなさいの練習？」

「ぶははっ。まだ練習してんの？」

「にの、面白すぎ。」

盛り上がる三人を通り、自分の席へ座った。

「ごめんなさいの練習って？」

「タケ、聞いてたのか？」

「聞こえたの一。」

タケの顔には笑みが浮かんでいた。

「あいつらと仲良くなつたんだ。」「別に。」

挨拶する程度にはなつたが。

「ふーん。」

笑みを込めた返事を打つタケ。

「ほ、穂高君、おはよっ。」

隣の席から由利がつぶやく。

「ああ。」

小さな声だつたけど、下を向いていない分、ちやんと聞こえてくる。

由利は相変わらず躊躇して、消極的で、泣きそうになる奴だけど、そんな由利に「うつとくる」ともあつたけど、そんな時、すかさず飛んでくる奴がいる。

「謝らせ屋一富、ただいま参上ー！」

それだけで、周りの男子が笑う。

それだけで、睨んでいた斎藤がため息をつく。

それだけで、由利が笑う。

そしてそこには・・・・・

いつの間にか、人が集まつてくれる。

泉くんのようだ。

お調子者タイプであり、裏番長的存在でもあつたつてことか。
泉君くんのようだ。

認めるよ。

俺が嫌いとしていたタイプに、自分が救われた存在だったなんて。笑える話だ。

もし、一富が去年、同じクラスについて、タケのそばにいたなら・・・

・

いじめは起こらなかつただろうか。

「こういうタイプのやつが、そばにいたら……
これだけは言えること。

俺は一宮みたいにはなれない。

だから、タケには俺がいて、健太がいて、一宮がいる。
それでいいじゃないか。

それで。

ただ、それだけのこと。

雪が降りそくなくらい寒かつたその日。

放課後、図書室へ行くのに美術室の前を通った。

辞書女。

勝手にそう呼んでいたが、正確な名前は知らない。
美術室の前にいた。
完全に足をとめて。
見つめる先には……

「めぐちやーん、行くよー。」

呼ばれてもなお、名残惜しそうに、視線を向けたまま、去つてい
つた。

俺とすれ違う。

もう田線は友達へと戻つていた。

辞書女が立つていた位置に、俺も立つ。

一瞬、言葉を失つた。

そこに飾られていたのは・・・

先月の写生大会で優秀作品として選ばれた八名の絵。

その中に・・・

サッカーゴール、グラウンド、校門の木、校舎、どれも人気の定番場所を描いた絵の中に、一枚だけ・・・

どこともわからない風景画が一枚。

俺の絵だった。

どうして。

当然、賞を取るために描いたものではない。

どうして。

俺の絵が、選ばれていようが、飾られていようが、誰も何も言わないじやないか。

どうして。

あの辞書女が俺の絵を見ていたとは限らない。

どうして選ばれた。

ただ、それだけのこと。

一学期の終業式。

なんだかんだ長かった一学期も終わる。

体育館での終業式が終わると、教室へ戻つてHRとなつた。

冬休みの諸注意等、担任の話がある。

最後に通知表。

まあまあ・・・か。

全九教科、五段階評価。

一応、五教科はオール五。残り四教科は四。

HRが終わると、教室をはじめ、廊下からも賑やかな声が聞こえてくる。

明日から冬休みか。

部活へ行く者、帰る準備をする者、待ち合わせをする者、人々のざわめき。

「由利ちゃん転校生なんだよね。」

「は？」

思わず変な声を返してしまった。
タケは気づいていないようで、話を続けた。

「訳有りで。母子家庭。噂によると父親に暴力を振るわれたとかで、男が苦手なんだって。」

「へ、へー。」

そう言つのが精一杯だった。

転校生という言葉を久しぶりに聞いたからなのか、由利がその転校生だったからなのか、俺は動揺を隠せなかつた。

「どうした？ 晃、そんなに驚くことか？」

「い、いや。」

自分のこと、家のこと、母親のこと、少しづつ、タケには話すようになつていたが、絵のことを話したことはなかつた。

「転校してきたのって……小五か？」
「いや、小三。」

答えを聞いて、ホッとしたのはなぜだ？

「でも、そん時にも由利ちゃんにじめはあつたわけだ。」「ふーん。」

「まあ、いじめって言つてもかわいいもんだけどな。転校生なんて珍しかつたからさ。まあ、おれもその一味だったわけだけど。」

前に、タケが。「あれもある」と言つていたのを思い出す。由利をいじめたことがあるとこいつだつたのか。

転校生・・・か。

確かに、転校生は珍しいよな。

「オレもわかるなー、その気持ち。」「にの。」

「タケやん、晃君、由利ちゃんの内緒話しぃダメだよー？」

「聞いてたのか。」

「聞こえたのん。」

ハイテンションで答える一宮。

「いつの元氣はどうから來るのか不思議な位だ。」

「うんうん。オレもあるなー。つい、かわいくてな。どう接したらいいのかわからなくて気がついたら意地悪して？みたいなつ。オレって悪い子。」

「でも、そんな昔の若氣の至りつてやつ？そのお陰で俺はこうしてクラスの皆を守る立場にあるわけだ。うんうん。女の子には優しく。男の子には親切についてねー。これ、オレのモットー！」

よくこれだけ一気に喋れるものだ。しかもジエスチャー付で。

「二一のつ。」

「おー、もえーつ。」

廊下から呼ばれると、すぐに反応してこの場から去って行く二富。
こいつの目と耳はいくつあるんだ？全く活動的な奴である。
そしてその二富を呼んでいたのは、あの辞書女だった。

「にのも由利をいじめてたのか？」

「いや。にのはその時違うクラス。にのがいじめた転校生はあつ
ち。」

「そう言つて、タケが視線を送るその先にいたのは・・・
なんと、あの辞書女。

「あいつ、転校生なのか？」

「そう。小五ん時の。で、にのがいじめまくつてた。信じられない
だろ？」

「・・・・・」

言葉が出なかつた。

「にのもあーみえて、昔はけつこう威張つてる奴でさ。あいつのこ
と大事にしてんのは、そんなにのを変えたのがあいつだから。」

「あいつって？」

俺はそう言い、タケの次の言葉を待つた。

早く、聞きたいような、聞いてしまいたいような・・・
聞きたくないような、聞いてはいけないような・・・

「あれ？知らなかつたっけ？」

俺は首を縦に振った。

「椎名 萌。」

忘れていたし、思い出すこともなかつたこと。
探そうだなんてそんな面倒くさいこと、どうして俺がするだろ？
でも・・・

そういうえば、この学校のどこかにいるんだよな。
どこかに・・・
ただ、それだけのこと。

冬休みに入った日曜日。
タケの家でクリスマスパーティーをした。

クリスマス・・・なんて雰囲気は一つもないが。

「やつぱケーキ位置えよかつたか？」
「いんじょん？別に食べねーし。」
「そうそう。こうしてゲームがし放題なだけで幸せ。
「タケんち広くていいよなー。」
「お手伝いさんも優しいしー。」
「今日はいなによ。」
「え？ そつなの？」

男六人、クリスマスパーティーのわけないだろ？
今日がクリスマスだから。
二十五日に集まつたから。
ただ、それだけのこと。

「おい、焼けたぞ。」

「おー、すげー。」

「いー匂い。」

「なんだなんだ？ケーキじやん！」

「マジで？ケーキだ、ケーキだ！」

「すっげー。こんな作ったの？」

「晃君が？」

タケの家がいくら広くても、野郎六人も入ればうざいだけだ。それなりに、人とのかかわりから遠ざかっていた俺にとっては、例え男であろうが、一度に六人も集まれば面倒くさい。

ゲームは対戦四人までしか出来ないし。

ゲームの順番が空いた時間に、お手伝いのおばさんがいなという台所を借りただけ。

小麦粉と、卵と、牛乳と、苺があれば簡単だ。

「晃君、いいお嫁さんになれるぜ。」
「嫁さんっておいつ。」

「あはははー。」

「晃君にこんな特技があるとは。」

「ただのガリ勉くんではなかつたんだなー。」

「あー、でもなぜ男の作ったケーキ食べるクリスマス・・・。」

「彼女欲しい。」

「オレも欲しい！」

「由利ちゃんとクリスマス。」

「おまえ由利ちゃん由利ちゃんつてしつこ過ぎー。」

「謝れー。」

「あはははー。」

タケ、健太、浅野、小田切、栗山。

ここに「富の姿がない」というのもいつも通りだ。
あいつはどこかでふらふらしているのだろう。
声はかけたが、一つのグループに入らないのが「富だから。
あいつのそういうところ、すげーと思つたんだ。
俺にはできない。

「タケ、第一小の卒アル見たーい。」

「おお、いいよ。」

「あ、俺も見たい。」

「おまえはどうせ由利ちゃん探すんだろう。」

「バレたー？」

「バレバレー。」

集まつた中で、タケ以外の奴は蓮田小出身だった。

「あー！由利ちゃん見つけ！」

「どーどー？」

「おっ、ほんとだー。かわいいーな。」

「由利ちゃんこん時からかわいかつたんだー。」

「いーな、タケは同じ学校で。しかも同じクラス。」

「なんで由利ちゃんは第一小だったんだ？転入するなら蓮田小でも
よかつたのにー。」

本気で悔しがっている浅野の表情。

小田切と栗山も由利ファンだけあって、アルバムの中の由利に見
入っている。

「なに？由利ちゃんて転校生なの？」
「なんだ、健太、そんなことも知らないのかー？」

「そんな基本情報はとっくに入手済み!」

「いや、だつて俺、別に由利ちゃん好きじゃないし。」

「あつや。ライバルが一人減ったというのアラッキーだ。」

「そうそう。」

「あ、そういうえば晃君、由利ちゃんのこと好きになつちやつたか?」

「は?」

急に話を振られたことでもうだが、あまりに情けない質問だ。

「だつてさ、後期の委員会は別々になつたものの、席は隣のままだつたじやん。」

「だよな。由利ちゃんの隣、やっぱ羨ましいぜ。つーか憎い。」

「三学期の席替えは、俺が隣になれますよーに。」

「オレもなりてー。」

浅野の両手は祈りポーズをとつていた。

「で、晃君、由利ちゃんのことどう思つてんの?」

「別に。」

「でたつー別に。」

「それ、どつちの意味でも捉えられるからさー。よくないぜ。」

「晃君つー、ああ。とか、別に。とか、多くね?」

「あ、それ俺も思ったー。」

「面倒くさい。」

「やつぱり面倒くさい。」

「男とはいえ、かかわるのが面倒くさい。」

「こんな時、あいつがいれば、一人で五人分は喋るのに。」

「あいつがここに居たら、俺は何も言わなくとも、何もしなくても、

関係なかつたのに。」

そうやつて、人に人間関係を築いてもらひて、任せているのがよ
くないんだよな。

それはわかつたけど、

それはわかつていいのだけど……
やつぱり面倒いと思つてしまつのが本音。

「へへへへ。」

それまで黙つて聞いていたタケが笑い出した。

「晃はそんなんだよ。一年時からずっと。」

「そうなの？」

「そつ。あんま喋らない。」

「ふーん。」

「でも、ちやんと話は聞いてるから、道理に合わない」とはしない
奴だぜ。」

「タケ、それまじで？」

「マジで。それは俺が保障する。」

タケは俺の方を見ながらそつと言つた。

「じゃあ、俺らが由利ちやんのこと好きなの聞こてるの?」
「晃君は好きになんない?」

「そりゃー……好きになるかならないかは自由だねー。」

「えーっ、じゃあやっぱ晃君はライバル。」

「決定だな。」

「なんだよそれ……。」

俺の言葉も虚しく、浅野はうんうんと、首を縦に振つて納得して
いるようだつた。

「じゃあ、次、タケは？」

「おれ？」

「そう。タケの好きな奴は？」

「誰？誰？」

「ははっ、安心しろ、由利ちゃんじゃねーよ。」

「よおっし。健太とタケはライバルではないな。」

「そうだ、タケの知つてゐる由利ちゃんの話しが聞かせてよー。」

「小学校の話とか、由利ちゃんの好きな奴とかの話。」

浅野に頼まれ、思い出すように由利のことを話し始めるタケ。

由利・・・・か。

由利は転校生だった。

それは、小三の時。

蓮田第一小の転校生か。

ふと、思い出す。

小四の夏、賞を取つた絵のコンクール会場で会つた子。

蓮田小に転入すると言つていた子。

その年、転校生は来なかつた。

次の年も、転校生は男だつた。

転校生・・・・か。

第二小の卒アルに目を落とす。

タケと同じクラスに・・・・

見つけるその名は・・・・

椎名 萌。

この間、こいつも転校生だと知つた。

顔を見る。

かわんねーな、今と。

あの時会った子の、顔はもつ思い出せない。
ただ、それだけのこと。

5.

三学期になつた。
席替えをした。
由利とは離れた。

一年に何度も行われるこの席替え。
やつぱりこんな面倒くさいことはない。
騒がしくなるだけだ。

予感的中。

隣は一宮。

「あつあらへーん。隣の席だなんて。にの感激！」

騒がしい三学期のはじまりだった。

「あれ? にの、席替えしたのー?」
「もえーっ。廊下から見えにくいい席になつたから寂しいでしょ?」
「いや、見てないつて。」
「えー、もえ、オレのこと見てくれてないのー?」
「あははは。」

早速、やつて來た辞書女、椎名萌。
早速、つむぐくなる休み時間、一宮の隣の席。

「オレはもえのことをつむ見てるよ。今日せいつに縛つてゐね。」
かわいいー。」

「ほんと? 一つに縛るのと、一つに縛るのどちらが似合つかな?」

「んー、もえならどうかわいこー。」

やうひつて、「西は椎名萌の頭を撫でた。

正直、どうちでもいい話だろ。

一つに縛りうが、一つに縛りうが、関係ない。

「おまえら離してね。」

タケがやつて來た。

「椎名、今日も辞書か?」

「ちがうよー。今日は借りないよー。」

「今日は。か。」

「もー、タケやんのいじわるー。」

「なに? タケやんだらうが、オレのかわいいもえをこじめるやつ
は許せーん。謝らせ屋! 西! 参上!」

「あはははー、なにそれー

「こつものことだ。」

このを冷たくあしらひタケ。

「めぐみやーん、まだ?」

「千夏つー。」

廊下から西に反応した「西せ、西」、田畠に走つていった。

「わへ、西のひどい。ちなみやんへの態度わかりやすやう。」

そう言つと、後を追つ椎名萌。

そして、その後姿を田で追うのはタケ。

この間、タケの好きな奴の話になつた時……
由利ちゃんじゃねーよ。 そう言つていたタケ。
タケの好きな奴は……こいつか？

廊下からは引き続き喋り声が聞こえてくる。

一匂、椎名萌の姿も見える。

やたらと一匂に戀している。

一匂も、女子とは常に話しているが、他の女とは違う扱いをして
いる。

タケも田で追つてる女……

あいつの先には……

あ。

ほら。

そう。

あいつが見ている先にいたのは笠原祐也。

部活のない休日。

珍しく、父親が家に居るのに気がついた。

何となく嫌な予感はしていたが、トイレに行きたいので一階へ降
りないわけにはいかなかつた。

足音を立てないよう階段を下つる。
予感的中。

居間にいたのは、父親と、ばあちゃんと、旦兄。

「だからなんでダメなんだよー。」

「旦、駄田とは言つていないだろ。話を聞きなさい。」

なにやらもめている気配。

「旦、おまえの氣持けもよくわかる。でもな、うちにはまだ晃もいるんだ。」

「あんな奴のことなんかしらねーよ。」

「ひつやつ、旦。」

「あいつがどうしようが俺には関係ないし、あいつのせいで俺が被害を被るなんて御免だ。」

「旦、いい加減にしーやつ。」

ばあちゃんの怒鳴り声が聞こえてくる。

タイミング悪く・・・

水を流す音と共に、トイレから出てきた俺。

当然、ばあちゃんに気づかれ、声をかけられる。

「ちよーどよかつた。晃もきんしゃー。」

開けたままの襖から、畳に向かって座る父親と、旦兄の姿が見えた。

ばあちゃんに言われるがまま、俺は襖の近くに座ることとした。
「晃。母さんから学校のこと聞きたい。成績も安定してこらうだな。」

久しぶりに見る父親。

久しぶりに聞く声。

それなのに、今更何の話をじょうとううんだ。

亘兄には睨みつけられた。

余計なこと言つなど。
わかつてゐる。

面倒くさいことは御免だ。

「今年は晃も受験だらう。高校はもう決めているのか?」

「まだ。」

「こいつに決めることなんてできねーよ。」

「ひりやつ、亘。」

「父さん、こいつはまだ絵を描いてるんだぜ。まさかとは思うが、
美大に行きたいとか言わないよな?」

美大。

絵。

そのワードに家族全員が反応する。

俺も、ばあちゃんも、父親も、その言葉を口にした本人亘兄でさえも。

「そりなのか?晃。」

絵の話。

小四の時に描いた一枚の絵で賞を取った。
家族の誰もいい顔をしなかった。

絵の話をして思い出すのは母親のことだらう。

アトリエで、絵を描いていて、早産で、発見が遅れた母親。
俺が生まれたことと引き換えに、命を落とした母親。

絵の話は、決まって家族を苦しめる。

絵の話は、俺の立場も悪くする。

「高校はM校を受ける。」

それだけ言うと、俺は席を立った。
そうしないと、誰も動けないから。
そうしないと、ばあちゃんが悲しむから。
そうしないと、俺がもたないから。
ただ、それだけのこと。

三月の朝の校庭はまだ冷え込む。
朝早く目が覚めてしまったので、学校へ行くことにした。

いつもより早い登校時間。

校庭には朝練に励む奴らが数人。
そのほとんどが、ランニングをしている。
基礎体力メニューというところか。
基本的に朝練は自主性なので、よほど好きでない限り、早起きなんじゃないだろう。

三月に入ったとはいえ、寒い朝に。

部活動によつて熱心なところは全員が参加しているようだが。

その中に、あいつを見つける。

校庭でランニングをしている、椎名萌。隣で走っているのは河野ヒロアキか。あいつら一人、テニス部だったのか。走ってる時まで笑つてんのか。無駄だな。走ってる時まで喋つてんのか。無駄だな。いつも二口二口、うるさい位に喋つて騒いで。無駄な奴。

「おっす、晃。」

誰もいないとthoughtいた教室に入ると、タケが来ていた。

「珍しいな。早くね?」

「タケこそ。」

「おれはプリント探してて。」

「プリント?」

「そつ。選択授業のプリント。提出今日までだろー? 昨日の夜気づいてさ、焦つたー。家に無いから学校だらうとは思つたけど。それで早く来たつてわけ。」

「ふーん。」

「晃は? 選択授業何にした?」

「まだ決めてない。」

「まじ? ジゃあ一緒にじょーザつ。どうせ成績評価には関係ねー時間だし。」

一週に一度、選択授業が設けられている。

音楽、書道、美術、家庭科、英会話、体操、社会調査、パソコン、ボランティアから選ぶことになっている。

一選択が二十名前後の定員での活動となり、同学年の生徒がクラスに関係なく少人数で同じ授業を行う機会となっている。

例年人気は、音楽やパソコンに集中している。

人気のないところを選べば、十人以下の少人数で授業ができるので、静かに過ごせる。

今年はパソコンを選び、騒がしかつたので、来年こそは静かに過ごしたいと思つている。

「なー、美術は?」

「え?」

「晃、美術にしねー？」

タケに、美術と言われ、自分でもよくない顔をしたのはわかる。

「晃？」

タケと出会い、自分のこと、家のこと、母親のこと、少しずつ、タケには話すようになつていていたが、絵のこと話をしたことはなかつた。

タケの表情は落ち着いていた。

だから、話せる気がした。
だから、話そうと思った。
だから、話すことにした。
タケなら・・・
タケなら・・・
わかつてくれるだろうか。

恵まれた環境、裕福な生活を手に入れながら、いざれ自分の好きなことを諦めなければいけないタケなら・・・

「タケ、俺も、絵は・・・もう・・・」
「晃が絵を描かなくなつたのって、親父さんとか、兄さん達のこと関係あんの？」

俺の言つ前に、見事に俺の代弁をしたタケ。
やつぱりこいつになら話せる。

「やつぱりね。そんな気がしてた。」

俺が何も言わなくても、仅仅是居るだけで、タケとは話せる。

「もつたいねーな。雅画伯やKEIHOの味を知ってる晃の描く絵、俺すげー好きだつたんだけどな。」

俺が何も言わなくても、タケは話を続けてくれるし、俺の言ったことが伝わっている。

俺が何も言わなくても。

「晃さ、やっぱ美術にしねえ? そうすれば俺らの好きな時間に使えんじゃん。」

「いい案だと思わね?」

俺らの好きな時間。

その言葉で、十分だった。

「そうだな。」

「おっし、決まり。プリントも見つかったことだし、書いて提出だー。」

それ以上は深く聞いてこないタケ。

俺たちの距離感。

俺たちの時間。

タケと出合つて、一年目の春が訪れようとしていた。

その日は一富と口直だった。

ごみ捨て、戸締り、備品チェック、日誌記入。

全てが終わつたところで、聞き覚えのある声がしてきた。

「『』苦労さまでーす。」

「もえーつ。」

「このつ。田直だつたんだー。」

「もえに会えるなんてラッキー。ねー、ねー・・・」

「はー、一宮君、田直の業務が終わってからにしてね。」

そう言つて、椎名萌と一宮の間に入つたのは笠原祐也。

「ぶーだつ。業務ならもう終わつてるもんねー。」

「えー、この早 いつ。このクラスが一番早いねー。」

「んだんだ。」

どうだと言わんばかりの態度を見せる一宮。

祐也は苦笑いで日誌にチェックを入れている。

どうやら祐也と椎名萌は生活委員らしい。

生活委員は、田直の業務を終えた各クラスを回つて、戸締り等の最終チェックを仕事としている委員会。

「そついえば、小耳に挟みましたぞ。笠原君。」

一宮が邪魔をするよつに祐也に話しかけていく。
気の毒に。

一宮の話につかまると長いぞ。

俺は荷物をまとめ、帰る準備を始めた。

「なんだ?」

「とつぼけちゃつてー。つしづ。いいねー、彼女とラブラブでぇー。」

「

祐也の表情が硬くなる。

少しの間が空く。変な空気が教室に流れたのを感じたのは俺だけ

だろつか。

「もおーこの、からわつのやめなよ。」

いつまでもここを喋り女も、気を遣つたような声を出していた。
なんだ？

遠慮がちな会話。
相変わらず明るい一宮。

笑顔が険しい祐也。

ただ、それだけのことだが。

祐也、彼女いんのか。

へえー。

じゃあ・・・

こいつは・・・

「あつきりへん帰るのー？おつかれー。」

鞄を持って教室を出ようとすると、一宮に言わされた。
まるで、その言葉が合図のようだ。

祐也は日誌の記入に戻った。

椎名萌はうるさい位の声で喋り始めた。
俺は、一度だけ振り返り、教室を見た。

椎名萌。

蓮田第一小の転校生。

一宮が可愛がっていて、タケも田で追う女。
うるさい位いつも喋っていて、元気に駆け回って、さわがしい女。
借り物が多い辞書女。

休み時間、一宮のところへ来ると、騒ぐだけで騒いで帰っていく。

騒いでいても、喋っていても、笑っていても、俺は関係ない。

俺には関係がない。

お互い様。

だつて、こいつは俺を見ることがなかつたから。
そいつの見ている先には笠原祐也がいるから。

だから俺はこいつが転校生だろうが、なかろうが、
もう関係ない。

もう関係が無い。

ただ、それだけのこと。

中学一年の春もさりげなく、でも確実に時を重ねて過ぎていった。

なんだか周りがいつもより少しだけ賑やか。

自分には関係が無いと言い聞かせてしまえば済むことだ。

楽に過ごして何が悪い。

楽に考えて何が悪い。

いつも通り、俺は俺の描いた道を歩くだけだ。
ほら。

夕日はもうとっくに落ちていた。

三・物の空

1.

「ねー、あきらかさんのマドリード去哪儿るの?~」

「ひひひ、しーちゃん、やれは聞こやダメでしょ。」

「えー、なんでえ?~」

「す、すみません。」

そつに母親は子供の手を引き、足早に去って行へ。

「ねー、なんでえ?~」

「ママーなんでえ?~」

子供の質問は続く。

「異、お団子買つて帰ろつか。」

ばあちゃんが言ひ。

僕は、ばあちゃんと手をつないで、夕日が照りす、オレンジ色の道を帰つた。

幼稚園の記憶。

「やーー、おまえの母さんーーなーつ。」

「はははー。おっかしーの。母さんーーなーなんでー。」

「あやせー。」

「ひひひ。意地悪なー」と言つてこのま誰?~」

「やべーせんせーだ。」

「言つて良い事と悪い事があるつて、この間の国語の時間で語つたでしょ。穂高くんに謝りなー。」

謝りగれても、何にも感じなかつた小学校の記憶。

俺には母親がない。

ただ、それだけのこと。

兄ちゃん達から嫌われている。

ただ、それだけのこと。

親も、家族も、兄弟も、友達も・・・・

別に困らなかつた。

別に要らなかつた。

ただ、それだけのこと。

人とかかわるのが面倒くさくなつた。

いちいち説明しなければいけないのが面倒くさくなつた。

初めましての挨拶が一番嫌い。

自己紹介なんてもつと最悪。

だから、俺は最低限のことしか言わなかつた。

ただ、それだけのこと。

中学三年になつた。

何も変わらないと思っていた。
でも、またクラス替え。

三年四組。

健太と同じクラスになつた。
タケとは別のクラスだつた。

「穂高です。」

ただ、それだけの自己紹介。
十分だろう。

一分以上、だらだらと自分の好きな物の話や、部活動のこと、好きな芸能人のこと、バカみたいに一発芸なんかを取り入れる奴もいる。

出席番号順に座った席で、順番にはじまる自己紹介。

面倒くさい。

今更知らない奴もいないだろつ。

面倒くさい。

この無駄な時間が面倒くさい。

三年は一階の教室になった。

やつと下がった一階。

ここは中庭が見渡せる。

静かに、過ごしたい一年。

今年こそは。

ホームルームが終わり、タケに貸しものの約束をしていたので、隣の五組へ行つた。

教室を覗く。

タケは奥の窓際にいた。

ここから呼んでも気づかない位置だとすると、聞き覚えのある賑やかな声。「一富だ。

女子を集めてのトークを展開中らしい。

相変わらず。

どこのグループにも属さず、皆と仲良くなるタイプの一富。

一学期初日にして、このクラスのムードメーカー的存在になつてゐる。

タケと一富は一緒にクラスか。

タケはまだ気づかない様子。

どうじょひかと思つてゐると、すぐ手前に見覚えのある顔がいた。

「タケ呼んで」

初めて、田が合つた。

椎名萌が俺を見たのが初めてだつたから。ただ、それだけのこと。

翌日は、良く晴れて四円にしては暖かい日だつた。

面倒くさいこと、三年になると、最高学年だけあって、部活に、委員会にと任せられることが多くなる。

中でも面倒くさい、部活の新入生歓迎。

一週間の勧誘期間と、一ヶ月の仮入部期間がある。

今日はその活動について、ミーティングが行われる。

別に本気で部活をやううなんて思つてないので、俺は適当にサボつていたし、適当に活動していた。

「晃君。四組になつたんだねー。」

「ああ。」

「今日のミーティング四時に変更になつたから。」

「わかつた。」

「あ、関君に伝えといってくれる？隣の五組だから。」

「わかつた。」

バレー部部長の奥居に言われ、五組へ行くことになつた。

タケにもちようじ用事があつたし。

教室を出て、隣の五組へ向かつた。

相変わらず賑やかな一富の声が聞こえてくる。
すっかり、このクラスの雰囲気を自分のものにしている。
クラスの雰囲気は、教室へ入る前と、入った瞬間に感じることが
できる。

クラス絵図。

クラスを仕切りたがる、田立ちたがりタイプ。

真面目、優等生、学級委員タイプ。

静かに一人でいるタイプ。

裏番長的存在なタイプ。

これらのごこにも属さず、属せず、属す機会を失つた、おどおどした奴がいじめにあうタイプ。

そして、お調子者で、笑いを取るのが上手いタイプ。

まさに、一富。

そしてこいつは、色々な意味で、世話を焼くのが好きといふか、
周りをよく見ている裏番長的な存在でもある奴。

そんな一富がいるクラスには、不思議といじめは起こらない。

でも、このクラスにはどこか今までとは違つた雰囲気を感じた。
蓮田小出身の奴らはもちろん知つてゐる。

蓮田第一小出身が数名。

目立ちたい、クラスを仕切りたいタイプがないな。
そんな印象を受けた。

一富、タケ、そして、同じ部活動の関君がいる五組。

「関君。」

「四時からミーティングになつたから。」「おお、わかつたー。」

「あっす、晃。」

「タケ。今週の日曜は塾か?」

「いーや。ないよ。」

「じゃあ、日曜遊びに行つていいか?」

「オッケー。」

「じゃあな。」

「おうつ。」

「おうつ。」

ふと、帰り際、一宮の横にいる椎名萌が視界に入った。
そうか。こいつも五組なのか。

一宮、タケ、関君、そして、椎名萌のいるクラスか。
ただ、それだけのこと。

新学期が始まり、三週間が経つた。

恒例の委員会決めも終わり、授業にも慣れた頃、選択授業が始まつた。

二年の終わりに、タケと決めた選択授業は美術。

一選択が二十名前後の定員での活動となり、成績評価に反映され
ないこの時間は、割と自由に過ごすことができる。

美術に集まつたのは十六人。そのうちの半数が顔見知りだった。

「では、このプリントをまわしてください。」

担当の先生からプリントが渡される。

適当に座っている生徒達がプリントを受け取ると、他の人へと順
次渡していく。

手に渡つたプリントを見ると、授業の進め方のよつなものが記さ
れている。

?興味のあること

?その中からやつてみたいことを課題に設定

?必要な道具

?一年の目標

目標・・・ねえー。

今更・・・

別に絵が描きたくて美術を選んだわけではないし。タケと、好きな時間に使おうと思っただけだし。予想通り、人気のない選択だったから静かに過ぎさせそうだし。

「あつー！」

上がった声と共に俺の足元に、プリントが散らばってきた。

「ごめんなさい。」

「なにやってんだよー。」

「めぐちゃん大丈夫？」

面倒くさいことをしてくれたものだ。
まったく。

「ごめんね、拾う。」

聞き覚えのある声。

足元のプリントを拾つて渡してやつた。

「あ、ありがとう。」

顔を見ると、椎名萌だった。

なんだ。

こいつも選択授業美術なのか。

騒がしい女。

「しーな、プリント。」

「あ、ごめん、今配る。」

「しーなはおつかよこちよいだな。」

笑っているのは、河野ヒロアキ。

隣に居るのは、北川千夏。

なんだ、こいつらも同じ選択にしたのか。

一年の時に同じクラスだった三人。

ヒロアキは三年の今、俺と同じ四組。

改めて美術室を見回すと、意外と知っている顔が並んでいた。

それもそれで面倒くさい。

静かに過ごせる時間にしたいものだ。

プリントの記入をし、担当の先生に提出をした者からそれぞれの課題に取り組み始めた。

外へスケッチに出掛ける者、粘土を捏ね始める者、絵の具を出す者、バケツに水を用意する者等。

あの騒がしい三人組は教室から出て行つた。

これで少しは静かになるだろう。

「晃も早く出してこいや。」

「ああ。」

先に提出してきたタケが戻ってきた。
俺もプリントを提出に行くことにした。

「お願ひします。」

「あ、穂高君。」

前の奴と同様、提出するだけだと思っていたのだが、先生に呼び止められた。

プリントに目を落としている先生。

なぜ、俺のだけ。

なんか変なこと書いたか？

適当に・・・でも、不真面目な要素を含むことは書いていないはず。

「穂高君絵は描かないの？」

なんだ、この先生。
何が言いたい？

「まあ、いいわ。これ、返すわね。」

俺は何も言わなかつた。

返されたのは、二年の写生大会で描いた絵だつた。
この間まで、美術室の前に貼られていた絵。
今更・・・

「晃、資料室、行こうぜ。」

タケと美術室の隣の資料室へ向かつた。

「なんだ？それ。」

「去年の絵。」

「ああ、返却か。」

「そう。」

俺は、資料室の隅にそいつを放り投げた。

傷んだ画板や、書き損じの油絵、スケッチブック等が乱雑に積まれている廃棄の山へ。

タケは何も言わなかつた。

「やつぱ面白そうな本はねーか。」

資料室といつても、図書館に置かれているのビジュアルも冊数もそつ変わりはない。

「おつ、パソコンあんじやーん。」

そう言つて、タケは一台だけ置かれたパソコンの前に座り、手を動かし始めた。

俺は、資料棚の中から、古い画集を取り出し眺めることとした。しばらくの間、お互ひ何も喋らなかつた。
何も言わなくても、わかっているから。
何も言わなくても、わかつてくれるから。
そんなタケとの関係が楽だから。
そんなタケとの時間が心地良いから。
穏やかに流れる。

マウスをクリックする音だけが室内に響く。

「そりゃやれ、」

タケが口を開いた。

「雅画伯が講師やる話つて知つてる?」

思いがけない言葉に、一瞬言葉に詰まつた。

「え？」

「あ、やっぱ知らんかった？」

「ああ。」

器用にマウスを動かすタケの手。

それは止まることなく、話は続く。

「この間ネットで見たのだけど、代々木の美大の付属の高校で講師するんだって。」

「まじで？」

「マジ。この四月からだってさ。」

思考が停止するような話。

慎重にタケの話に耳を傾ける。

「雅画伯に会えるとかの話じゃなく、雅画伯に教えてもらえたんだぜ。すごいね？」

「す、すげー。」

「しかも美大でならわかるけど、高校でだぜ？確かに代々木の美大は有名だし、数ある美大の中でも難関だよな。付属の高校に入ればそのままエスカレーター式で上がれんじゃん。でも、まずはその付属校に入るるのが更に難関な話だ。」

タケの手は止まらなかつた。

それはまるでマジックのよう・・・

一枚のデザイン画を仕上げる。

マウスは筆。

色彩は鮮やかに塗られていぐ。

「おれはさ、大学はもつ選べねーじゃん。でも、ま。もしな、もし……」

そう言つたタケは、マウスから手を離した。

「もし・・・なーんて考えねーけどなつ。」

少しの間が空いて、タケは人差し指で強くENTERキーを押した。

決定キー。

まるで、タケの意思も決定されたかのように。

決定キーは、画面上に、素晴らしいデザインを完成させていた。

その日の夜は疲れなかつた。
自分でもわかっている。
今日の選択美術のこと。
タケとの会話を思い出していた。
タケがあの時言いかけた言葉。
言いたかつた言葉。
その言葉の続き。
俺にはわかる。
俺ならわかる。
美大・・・か。
美大・・・か。

叶わぬ夢。
叶えぬ夢。
どつちも同じじやないか。
ただ、それだけのこと。

五月に入った。
連休といえど、部活はあるが、塾に行っていない俺にとっては自由な時間は多かった。
もちろん、家族で出掛けるなんてことは嘘をつくまでもなく、無かつた。

一日だけ、タケと遊ぶことができた。

「晃、待たせたな。」

タケが大きく手を振っている。

「悪かつたな。塾まで来てもうしちゃって。」

「いや。」「ふー、肩こったー。」

そう言つと、タケは眼鏡を外し、そのまま伸びをした。

「塾つて大変?」

「まーな。それぞれにもよるけど、おれんとこのは金持ちぼっち
やんばつかで退屈。」

タケは、一年の秋から塾に通い始めた。

元々、頭の良い奴だったが、親が選んだ塾へ通うことになつたのだと言つていた。

「「」は高くて有名だもんな。」

「そう。冷暖房完備、自習室、休憩室が使い放題っていう施設設備と、有名な大学出身の講師ばかり集めましたってだけで高い授業料。」

「へー。授業料ねー。」

「この授業料あつたら、毎月ゲーム買い放題だぜっ。」

「そうだな。」

「まつ、その塾に親の金で入れてもらってるおれもおれだけどな。」

「

タケが笑う。

笑顔ではなく、失笑。

そんな塾でも、行かなければならぬのが現実。
受け入れなければならぬのがタケ。

「晃は行かないの？塾。」

「んー、今のところは。」

「行かなくても十分圈内か。」

「そんなことはねーけど。あんま家の金使いたくねーし、そもそも面倒くさい。」

「出たー晃の面倒くさい。」

タケが笑う。

今度は笑顔で。

「晃つてさ、塾に行くつつーより、塾で過ごす時間が面倒くさいんだろ？講師とか、生徒とか、また何で学校みたいなところにまたもう一つ行かなきやならねーんだって。しかも金を払って面倒くさを買うなんて馬鹿らしこと。」

ああ。

何も言わなくても、わかっているから。
何も言わなくても、わかってくれるから。
そんなタケとの関係が楽だから。

そんなタケとの時間が心地良いから。
だから俺はここに居る。

「あれ？」

タケの足が止まりそうになつた。
タケの視線の先を見る。

「智美ちゃんと……」

「ああ。」

「生徒会の笠原か？」

笠原祐也に彼女がいるという話を思い出した。
その彼女とは、今すぐ違った智美ちゃんとやらのことは、
タケが知っているということとは、蓮田第一小出身の女か。

「へー、あいつら付き合つてたんだー。」

タケは知らなかつたようだ。

「テニス部男女部長同士かあー。」

「へえー。」

それで話題は変わつた。

そういえば、タケは知らないのだろうか。

椎名萌の好きな奴が笠原祐也ということ。
そしてその笠原祐也には彼女がいたわけで。

まあ・・・

どうでもいい。

面倒くさいのはかかわりたくない。

ただ、それだけのこと。

連休が明けると、中間試験があった。

試験が終わると部活再開。

五月から新入部員を迎えた。

田直の当番が回ってきた。

面倒くさいが、クラスの奴らが帰った後、口綿りやじみ捨て、日誌の記入をしていた。

すると、他のクラスの女子がやつて來た。

「ねー、みつこ、聞いた?」

「五組の椎名萌って、松岡君のこと好きなんだって。」

おいおい。

聞こえてるんだけど。

「えーっ！ なにそれーっ。」

「あ、やっぱ知らなかつた？」

「聞いてないよ。」

おいおい。

だから聞こえてるつて。

「私もせつめ、アヤちゃんから聞いたんだけど。なんか、手紙とか渡してみつて。」

「マジでー、むかつー。」

「でしょー。一緒に帰るのを見たつてナモコるんだつてー。」

「そんなの許さないー。」

おこおこ。

じうでもここの話は、田直の仕事、終わらかにかいつまな。

「だからね、ここの話、暫くも伝えてー。」

「了解ー。」

「じゃあ、私、会長のところに行つてくれるか。」

「うん。また何かあつたら教えてねー。」

全部聞こえたんだが。

聞こえてもいい話しつづとこか。

鞄を持って帰ろうとした。

「あ、穂高君。」

今度はなんだよ。
顔だけ振り返つてみた。

「ああ、日誌全部書いてくれたのね。」

あなたが書くのを待つてたら、こつこなるかわからんじ。

「じゃあ、しみ捨て……せ終わつてるか。」

あなたは何もしなくとももう終わつてるじ。

「あ、じゃあお疲れさま。ばいばい。」

日直を組んだ、隣の席の女子が手を振つていて。
俺は何も言わずに教室を出た。

「なによ、挨拶くらい・・・・」

悪いけど俺は人とのかかわりが面倒くさいから、挨拶もしない奴
だし。

おいおい。
だから聞こえてるつてば。
聞こえてもいい話し・・・・か。

翌朝だった。

「おはよう。」

下駄箱で、声をかけられた。
どう見ても、俺しかいない。
面倒くさい。
挨拶も人とのかかわりも、面倒くさい。
特に、女子なんて。
特に、椎名萌なんて。
ただ、それだけのこと。

だが。

あの挨拶以来、面倒くさいかかわりが始まった。

タケに用事があつて、五組へ行くと、視線を感じるよつになつた。

廊下で、教室の前で、タケの席で。

タケと話していると、椎名萌の視線を感じる。

なんなんだ。

おいおい。

面倒くさい。

挨拶無視したことまだ根に持つてゐるのか。

面倒くさい。

たかが挨拶くらいで。

面倒くさい。

放課後、先日の中間試験の結果を見に行つた。
成績上位三十名が掲示板に貼り出されている。

「晃君、五位かあゝすぐーなつ。」

いつの間にか、同じバレー部の関くんが隣に来ていた。

「オレ一度も入つたことねーし。おっ、タケやん発見。」

「ういえ、関くんは五組だつた。
タケとも仲良くなつたようだ。」

「タケやんも六位じやん、頭いんだー。あとは・・・」

一年からずつと超えられなかつたタケを、今回初めて一つ上回れ
た。

まあ・・・

連休暇だつたしな。

勉強する時間なんて腐る程。

「おつとー五組、椎名さん入ってるじゃーん。」

椎名萌。

かかわりたくないが、掲示板に目を戻すと、十一位にその名があった。

「ほえー、あの子頭良いんだー。けつこうおつちゅうちゅいなになー。」

人は見かけによらず。

確かに・・・・

うるさいし、騒がしいし、借り物多いし。

頭良さそうには見えなかつたよな。

十一位とは。

「晃君も知つてるよね? 椎名さん。」

「ああ。」

「おもしろい子だよねー。」

「ああ。」

「にのがすんげー、可愛がつてんだけど、それもまた面白いんだ。一人を見ててさ。つーか、にのみたいな奴に会つたのも初めてだな。にのも面白い奴だよなー。」

関くんは笑いながら話している。

俺達は掲示板をして、部活に行く為体育館に足を向いた。

「来月の修学旅行、オレ、にのと椎名さんと同じ班なんだー。晃

君は?」

「健太と一緒に。」

「そつかー、楽しみだよなー。京都。ハツ橋買わなきゃー。」

五組の関君。

タケ、一宮、そして・・・

椎名萌のいる五組か。

ただ、それだけのこと。

その日は部活をさぼって図書室で過ごした。
放課後、時々部活にこもらず、しあわせて図書室で過ごす時間をとる。

それほど広いわけでもなく、綺麗なわけでもないが、図書室は落ち着いた。

最も、利用する生徒が少ないから、静かに一人の時間を過ごすことが出来る。

テスト期間中も図書室で過ごすことが多かった。
勉強もしたけれど、ここで過ごす大半は本を読んだり画集を開いて眺めたりしていた。

絵や写真を眺めている時間は好きだ。
何も考えなくてすむ。

だが・・・

目に入る。

美術関係の雑誌に、雅画伯の記事。

雅画伯がこの春からU美大の付属高校で特別講師をしていると。
以前、タケから聞いたこと。
現実に・・・記事になつている。

雅画伯の描く空の絵。

小さい頃から好きだった。

家に一冊だけあった、雅画伯の画集。

その中の空を、いつも描いていた。

今は眺めるだけのこの空を・・・

今更・・・

頭の中を過ぎる文字。

今更。

もう決めたこと。

もう決まったこと。

もう戻らない。

もう戻れない。

ただ、それだけのこと。

下校のチャイムが鳴つたので、図書室を後にした。

そのまま帰るつもりだったが、教室に寄りしつと足を向けた。

誰もいない廊下。

戸締りの終わった教室。

校舎に響いている声は、外のもの。

校庭で、部活終了の挨拶の声が響いてくる。

元気な声は一年生。

三年になって、一階になつた教室。

中庭に差し込む光は夕日に変わつている。

五組の前を通ると、数センチ程扉が開いているのに気がついた。

数センチの隙間から零れるのは溢れんばかりの夕日の色。

オレンジに輝く・・・
隙間を覗いた先にあつたもの。
まるで放課後を切り取った一枚の絵が描けそうだった。

「おい。」

夕陽の中に一人。

「おいつ。」

机に顔を伏せている。

「おい。」

話しかけるが返事がない。

「椎名。」

“ガタンッ”

返事の変わりに、椅子が倒れた。

「な、なに？」

なんだ。

立てるのか。

「いや。」

「何か用？」

何か用つて……
椅子、起こせよ。

「べつに……」
「べつに……」

べつに用はないけど。
どうでもいいけど、なんかこいつもい違わねーか？

違う？

なんだ？

椎名萌がこいつを見た。
目が合づ。
すぐに逸らされた。

ああ。
なんだ。

泣いてたのか。
どうでもいいけど。
つーか、かかわりたくない。
面倒くさい。

教室から出立つとした時、

「あきらへん、だよね？」

おいおこ。

思わず振り返つてしまつた。

「あきらへん、だよね？」

おいおい。

「そうだけど、晃くんつて……」

いきなり名前で呼ぶかよ。

この間から、挨拶されたり、視線を感じたり、変だとは思つてい
たけど。

そもそも、騒がしいし、うるさいし、借り物多いし、変な女だと
は思つていたけど。

だからかかわりたくないんだけど。
面倒くさい。

「だつて私あなたの苗字知らないもの。皆があきらくんて呼んで
いるから……」

「穂高。」

「えつ？」

「穂高晃。」

自己紹介をするなんで御免だ。

なんでこいつの為にわざわざ。

誰か教えてなかつたのかよ、俺の名前。

おいおい。

ああ、そつか。

なんだ。

簡単なことじゃないか。

椎名萌が俺の名前を知らなくて当然。

だって椎名萌は俺を知らないのだから。

だって椎名萌は俺に気づいていないのだから。

だから椎名萌が俺を知ったのは今。

だから椎名萌が俺に気づいたのは、初めて田が合った日。

椎名萌が、うるさくて、騒がしくて、よく笑って、よく喋って、

借り物が多いのは、俺が見ていたから。

ただ、それだけのこと。

3 .

学校行事なんてどうでもいいけど、修学旅行。

一泊三日で京都・奈良へ旅行。

出発の朝。

「お土産はいーかんね。」

定番のばあちゃんの見送り。

三日間、この家に帰つて来ないと想つと嬉しさもあり、複雑な気持ちになる。

父親も、兄弟も、別に何も変わらない。

一日居ようが、居まいが、何も変わらない。

ただ、学校行事も面倒くさい。

三日間、四六時中誰かと一緒に過ごすんだなんて。

一人の時間を長く過ごしてきた俺にとっては、それなりの苦痛かもしれない。

ただ、それだけのこと。

朝七時集合。

最寄り駅から新幹線が走る駅まで出て、さらに新幹線で東京駅へ

向かう。

それだけ奥まつた田舎。

東京なんてそう簡単に行ける距離ではない。

昼前、東京駅に到着。

新幹線を乗り換え、京都行きの車内で昼食。

弁当だった。

「あ、めぐつ、トマト食べなさいよ。」

「やーだあー。」

聞き覚えのある賑やかな声。

後ろを向くと、二列後ろの座席に椎名萌が座っているのが見える。

「トマト嫌い、まだ直つてないの？」

「トマトはずーっと食べません。」

「あんたねー、」

旅行中は、クラス行動と班行動がある。

一班男女五人の編成。

班毎に座っている新幹線の中で、どうやら俺の四組六班は、五組一班と続きの座席に座っていた。

「ほら、もえっ、俺の卵焼きと交換してやるから。」

「わーい。」

「にのつ、甘やかさないで。」

同じく五組一班であのひつ、椎名萌に続き、一回、斎藤恵子もいる。

「にの、だーいすきつ。卵大好き。」

「オレは卵と同位かあ？」

「あはははー。おもしれー。」

笑い声は関君。

「馬鹿なだけだ。」

ため息混じりなのはタケ。

そういうえば、関君が言つてたな。修学旅行の班が一緒に。

「めぐはね、小学校の時から給食でトマト出ると食べなかつたのよ。そこで、にのが代わりに食べてた。」

「けいぢやーん。」

「はははー。そんなに嫌い?トマト。」

「嫌い。」

「ほら、そんなに嫌いなトマトだ。食え。」

「ああああー、タケやん、ひどーいっ。せつかく居なくなつたのひーー。」

「あはははー、おもしれー、タケやん。」

大きくなる関の笑い声。

見なくても、聞こえてくる声だけでわかる。

そもそも、二富がいる班つてだけでだいたい想像ができる。
そしてさわがしい女、椎名萌のいる班なんて。

昼食が終わつた。

初日の観光地、奈良に着くのはまだ一時間先。
暇すぎるるので寝ようと思つた時。

背後から足跡が聞こえてきた。

「おう、晃。健太。」

「タケ。」

「席、近かつたんだな。」

「タケどこにいた？」

隣に座る健太が聞いている。

「三列後ろ。」

「おつ、近いじゃん。」

「だろ。」

あれだけ騒いでいればわかるだろ？
健太は気づいていなかつたのか。

「夜さ、おれらの部屋来いよ。」

「おう、行くいく。」

「にのもいるし。」

「タケー、いい誘い？」

「いい誘い。」

「ラジヤツー。楽しみにしてるわ。竹田君。」

「機嫌な健太。

おそらく、男子の喜びそうな話題があるのだろ？
修学旅行の夜なんて、そんなもんだろう。
男子の好きな話なんて、そんなもんだろう。

観光地、奈良。

五重塔、興福寺、東大寺、奈良公園。

クラス写真の撮影が終わると班毎の自由行動になつた。
鹿と写真を撮る者、お土産を買う者、ソフトクリームを食べている者、皆それぞれ過ごしていた。

健太と公園のベンチに座つてると、同じ班の女子三人が買い物から戻ってきた。

「健太君、穂高君、写真撮ろー。」

「おおー。」

健太がベンチを立つた。

「晃君、写真だぜー。」

健太に急かされる。

「俺押すよ。」

「え？ 穂高君入らないの？」

「ああ。」

「えー、班の皆でつて思つたのだから。」

「いいじやん、とりあえず。まだ明日も明後日もあるんだから。」

「そうだね。」

「撮ろう、撮ろう。」

「じゃあ、穂高君よろしくー。」

旅行の中で、面倒くさいのは写真。

いちいち場所が変わる毎に撮りたがる。

特に女子は、誰ちゃんと、とか、皆で。と、特定の奴等と撮りたがるから面倒くさい。

写真なんて・・・

その時、本当に撮りたいもの撮るべきだろう。
だから写真は嫌いだ。

ただ、それだけのこと。

旅館へ戻ると、部屋割りはクラス毎、六人部屋だった。健太とは部屋が別れた。

「晃君、ジューース買つてくるけどいる?」

「いや。」

三年になつて三ヶ月。

このクラスにも慣れた。

別に俺は健太がいれば問題はなかつた。

でも、このクラスも悪くはなかつた。

一年、二年と、何かとかかわりの面倒くさかつた時期もあつたが、この一年はこのクラスで静かに過ごせそうだ。

クラス絵図。

色々なクラスを見てきたけれど。

このクラスにはしつかりとしたグループが無かつた。

割と誰とでも話すタイプが多く、グループへの所属意識が低い。

クラスを仕切りたい奴や、目立ちたい奴もない。

学級委員になつた奴も、優等生でもなく、真面目でもなく、学級委員タイプではなかつた。

一人で過ごす奴はないが、皆周りの誰とでも話し、その日、その日が過ぎていく。

逆を反せば、誰ともそこまで仲も良くないということか。

三年にもなると皆落ち着くことなのか。

有難いことに俺には楽なクラスだった。

風呂に入り終わると、健太からタケの部屋に行こうと誘われた。風呂上りにジューースが飲みたかったので、健太には先に行つても

うつこにした。

館内の見取り図を思い出す。

この旅館は本館と別館がある。別館を後から付け足したということが、見ればすぐにわかるような作りになっている。

本館に客室、別館に大浴場。

別館から本館へは面倒くさいが専用の階段を使わないと移動できないようだ。

大浴場の近くの自販機で買っておけばよかつたと後悔したが、遅かつた。

人が多いのも面倒くさかったし。

本館の自販機に行くことにした。

ところが。

お茶やスポーツ系ドリンクは全て売り切れ。

残っているのは炭酸飲料かコーヒー飲料。

風呂上りに飲みたい種類は皆同じか。

仕方なく、コーラを買ってその場で飲み干した。

缶を捨て、階段を下りはじめた時、下から上がってくる人と目が合つた。

「あ。」

そう言つたのは椎名萌。

「なに?」

珍しい、一人か。

「い、いえ。別に。」

珍しく、控えめに返してきた。

いゝもほゝぬをい位嘆る奴なのに

一七二

じつか、一瞬のところでも行へるだらう。

卷之三

卷之三

そして、はい、外れ。

卷之三

珍しく慌てている顔。

「上は自販機しかないぜ。」の部屋なら「りちゅう」と名前を付けていた。

「じ、ジュース買つてから行こうと思つたの。」

セツシテ、椎名萌は階段を上がつて、つた。

おもしれー。

ほつこくはがくじかで感じて

ほんとにばかだな。

なぜだろう・・・

興味が勝つた。

かかわりよりも、興味が勝つた。
ただ、それだけのこと。

俺は、椎名萌の後に付いて行った。
自動販売機の前に立っている。

金を投入する様子はない。

やはり。

ジュースを買いに来たというのは後から付けた理由。
俺に部屋の間違いを指摘され、とつさの行動に出たのだろう。

おもしれー。

旅館で迷うのか、こいつ。

「買わないのか？」

「・・・・コーヒーと炭酸飲めないの。」

笑いそうになるのを抑えた。

おもしれー。

とんだ災難というのはこのことか。

旅館で迷ったことを隠すために繕つた嘘が、自分の好き嫌いによ

つて自滅するとは。

こういう場合、嘘でも買えばいいのに。

おもしれー奴。

そしてばかな女。

笑いそうな顔を隠すため、俺は先に階段を下りた。
椎名萌が付いてくるかどうかを試す為でもあった。
本当に付いて来ている。

本気で「富の部屋がわからなかつたのか。
ばかだな。

「「」ーの。」

「おつ、もえ。どうした？あれ、晃君も一緒に？」

「た、たまたま会つたのよ。そこで。」

そこで。

どこで？

おもしれー。

やつぱりばかな女。

「そうか。まあ、入つて、入つて。」

部屋の奥にタケ達がいた。

タケと話していると、聞こえてくる会話。

「もえ、よく一人で来れたな。迷わなかつたか？」

「こ、来れるわよ。」

「え？ 旅館で迷うの？」

不思議そうに聞いたのは関。
笑いそりになつてしまつた。
なんだ。

やつぱり迷うのか。

「もえは昔からよく迷う奴でな。」

「「」ーの。」

「そうそう、小学校の時の修学旅行でも迷つていたよな。」

「亮ちゃん！」「..」

「ほんとのことだなー。」

「へー、椎名さんてこいつかりしていると思つたのー。」「

「関くん、もえは意外とおっちょこちょいだぞ。」

「もー、一人とも変なこと言つのやめてー。」

ばか女決定だな。

こいつらの会話に、周囲にいた男子達も笑っていた。
俺は笑うのを抑えていたが。

再び、タケと話していると、視線を感じた。

そして、そいつはぶつぶつと一人言を言つて居る間に聞こえた。
が。

いきなり指を向けられた。

「あーあきちゃん。」

「あきちゃんこじょつ。」

「なんだよ、あきちゃんつて。」

ばか女に突っ込んでやつた。

「私がつけたの。今からあきちゃんて呼ぶ」としたの。

さつきまでの強がりはもう無く。

いつも通りのひめわい、お喋り女になつていた。

「ははは。あきちゃんか。いいね、それ。椎名さん良一よー。」

おいおい。

良いわけねーだろ。

「あきちゃんね。うん、いいんじゃない。」

おいおい。

だから、いいわけねーだろ。

周りの男子が笑っている。

男にちゃんと付けして何が楽しんだ。

おいおい。

「あ、もえ髪濡れたまま。ちゃんと乾かしたのか?」

わうわうと、持っていたタオルを椎名萌の頭にのせ、拭きはじめ
る一瞬。

その様子を見ていた、同室の男子達が声をかけた。

「おまえりって仲良くな、付き合つてんの?」

どのクラスでも、じつじつ話、あるんだな。

男子達の、恋愛の話。

好きだよなー。

面倒くさいだけ。

「まさか。」

「それはない。」

慌てる様子も無く、きっぱりと答えた一人に男子達は期待はずれ
といった感じであった。

「ここからは小学校の時からこんな感じ。」

そう言つたのはタケ。

「へー、そうなんだ。」

「確かに、にのにお父さんみたいなだものな。」

「おいつ、父はないだろ。せめて兄にして。」

一箇の答えに笑いが起こる。

相変わらず雰囲気を掘るのが上手い一箇。

「いつがそばにいたら、どんな奴でも楽しめるのだりつ。」

「じゃあ椎名さんの好きな人って誰？」

「誰？」

「俺も聞きたいー。」

「えつ、何でそんな話に・・・」

次に、男子達の話は、椎名萌の好きな奴の話で盛り上がっていた。
笠原祐也だらう。

答えを知っている問題なんて全くつまらない。

俺は黙つて聞いていた。

椎名萌は困つていた。

こんなところで自分の好きな奴の名前を正直に答えたりしたら、
またそれはそれで面白いといつか、頭の悪い奴といつか、ばかだな。
そう思つて聞いていた。

が。

意外にも、男子達からは松岡が好きな奴だと言わればじめていた。

「えー、まじで？！松岡聰一？」

「つていう噂聞いたよ。」

「なにそれ？ほんとか？」

「ち、違うよ。」

本人は否定したが、どうやら男子達は全く聞いていないようである。

その後も松岡の話題を押し付け、椎名萌をからかい、困らせ、それを見て喜んでいる・・・

「その噂なら俺も聞いた」とある。

-シテ?」

しゃあほんとなのかな？」

「アツ一話問題のハハ又ハ子キウのハニ。

「生徒会長だしなつ。」

「椎名も面食いなんだな」と

「……ちよ、ちよ」と待てども、みんな勝手にそんなこと……

もはや椎名萌の話など聞かずにその場は絶好調に盛り上がりつた。

「で、告つたのか？」

「告つたのか？」

おたなじた。言ひでせんか?」

木間春

卷之三

幼稚な男の考え方。

どこかで

とじかで俺も経験のあること

目の前で繰り広げられているのは、男子が女子をいじめている図。本人達にその自覚はないのだろうが。

「いやつて、端から見ているとよくわかる。

観客側に立っている俺。

でも、前は俺も当事者だった。

今思えば簡単なこと。

今思えばくだらないこと。

ただ、それだけのこと。

困らせて泣かせて、楽しむのはまるでゲーム感覚。

そんな男子達から椎名萌を救ったのは、間違いなくあの男。

「おいつ、いい加減にしろ！」

一瞬で静かになった。

一言で十分だった。

「そんなん噂だろ、もえが違うって言つてんだからやめろよ。」

一高の低い声が静かな部屋に重く響いた。
皆の表情が変わった。

「に、この。わかつたよ。」

「わ、悪かったよ。」

「ごめんな、椎名さん。」

「違うんだよな。」

「にのも、そんな怒んなくともな。」

「だつて俺は“お父さん”だからなつ。」

相変わらず、雰囲気を変えるのが上手いな。

一高の笑顔に、男子達に安堵の表情が浮かんでいた。

「もー、にの驚かせんなよ。」

「あせつたー、まじキレさせたかと思つたー。」

「ははは、俺はいつでもマジだぜ。よろしく。」

いつの間にか、またいつも空気が流れていた。
そう、いつもの。
まるで何事もなかつたかのような。
ただ、それだけのこと。

修学旅行一田田の朝。

今日は一日班別行動になつていて。

京都市内をバスや地下鉄を使って観光。

班毎に先生から注意事項を聞いてからの出発となる。

「おはよう。」

隣の列から声をかけられた。

椎名萌と田が会つ。

俺は何も言わなかつた。

「おはよう、あきちゃん。最初ビビ行くの?」

次に、ふぞけた声で話しかけてきたのは関君だった。

「金閣寺。・・・・あのなー、関君。」

「やめて、あきちゃん。」

続けてからかおつとする関君に、返す言葉が見つからなかつた。

「おーい、つかの班出発するぞー。」

「はーい。」

一瞬が呼んでいる。

これでやつと一人から解放される。

「じゃあね、あきちゃん。」

最後も関君。

「あきちゃんて何?」

聞いていたのは健太。

「つけられた。」

「え? あだ名? あきちゃんって?」

驚くのもわかる。

ふざけたあだ名だらう。

そんなの付けられたのは俺だつて初めてだ。
驚いた後の健太は笑っていた。

おいおい。

笑えねーよ。

京都、一日観光。

京都駅はにぎやかだった。

複雑に走るバス。

マス目上を几帳面に走るのは地下鉄。
路線図は面白いように入り組んでいた。

金閣寺、銀閣寺。

祇園や南禅寺。

嵐山、嵯峨野。

清水寺、二年坂、三年坂、清水の舞台。

今日最後の観光地、清水寺のバス停を降りて気づいた。

「何?」

「落し物?」

健太も気づいた。

「いや。」

足元に落ちていたテレホンカードを拾い、自分のポケットへと閉
まつた。

「ねえねえ、抹茶ソフト買つてくれるー。」

「おお。」

女子三人が売店へと向かった。

「晃君も食う?」

「いい。」

「オレも食べよ。あちー。」

健太も抹茶ソフトを買いに行つた。

確かに暑い。

京都は盆地というだけあって、六月だといつにても真夏のよつて照り付ける太陽が熱い。

そして、夕方になつても蒸し暑い。

日陰のベンチを探して腰掛けた。

ポケットから、さつき拾つたテレカを出す。

今朝、ばか女椎名萌が関君に貸していたテレカ。

たぶん、そう。

見間違えるはずがない。

だつて。

カードの右下にはKEIGOのサイン。

青い空。

カードいっぱいに広がる青い空。

なぜあのばか女椎名萌がこれを持つている？

「穂高君、抹茶ソフトと撮つてー。」

「あ、あたしのカメラもお願ひ！」

嬉しそうに笑つている女子三人。

なにが楽しくてそんなに笑えるんだ？

なにが楽しくて抹茶ソフトとなんか撮りたいんだ？

女はわからん。

昨日から今日一日で、すっかりカメラ係りになつた。

最も、一緒に撮ろうと言われるよりはましだが。

空気を読んだが、女子達は班全員での写真を諦めたようだ。

それでいい。

それがいい。

ただ、それだけのこと。

旅館へ戻ると、同室の男子が皆寝そべっていた。

「あ、晃君、おかえり。」

暑い中、一日歩き回っていたのだから、疲れも出るだろ。荷物を置いて、タケのところへ行くことにした。

階段を下がっていると、下から上がってくる椎名萌が見えた。
おいおい。
また迷っているのか？

この部屋は一個下だつて。
ばかな女だな。

「いたつ！」

階段の踊り場ですれ違ひ際、髪をひつぱつとやった。

「な、なに？ いきなり。」「
この部屋なら下だぞ。」「
し、知ってるわよ。ジユース買ひに行への。」「
ふーん。」

昨日とは違い、慌てる素振りはなかった。
どうやら本当にジユースを買いに行くらしい。
つまりん。

別にこいつとかかわりたいわけではないので、先に進むことにしてた。

「あ！ それ。」

た。

突然指を指されて、行く手を阻まれた。
指の先にあるのはシャツのポケット。
ああ、なるほど。

「これ？拾つた。」

「私のだ。今日の朝使つた後、無くしたと思つて・・・」

「拾つてくれてありがと。」

ポケットから出したテレカを受け取ろうとした。
だからそれを上へと上げてやつた。

「え？！」

不思議そつな顔。

「返してくれないの？」

再び受け取るつとしていたので、更にその手を上へと上げてやつ
た。

「？！」

変な顔をしている。

おもしれー、こいつ。

「返して・・・」

「返してよー。」

ジャンプをしている。

「みつと、返してよ。届かないよ。」

ジャンプをしても届かない。

それでも跳ねているのが可笑しい。

「ずることよ、身長差があるのでから、届かないよ。」

そりや、当たつ前だ。

チビのお前がいくらジャンプしても届くわけはないだらう。
届かないようにしてくるのだから、

ばかな女。

「もー、返してよ。」

「返してよ。」

表情が変わる。

怒ってきたようだ。

「ねえっぱ。」

真剣に飛び跳ねてこるので面白い。
とにかくだ。

「ねえ、返してー。」

「返して、あきちゃん。」

「あきちゃん。」

「あきちゃん。」

何度も呼びながら、何度も飛び跳ねながら、諦めようとしないのを見ていると、届かなければいいのに、届くわけがないのと、と思

う。

「こんな簡単なこと如きに、真剣になるなんてばかだ。
真剣になるなんて、夢中になるなんて。
真剣になつても、夢中になつても、手に入らないものだつてある。
ばか女にはわからないだらうな。
いつだつて、笑つていて、
いつだつて、楽しそうで、
いつだつて、真剣に、
いつだつて・・・・・

何かに真剣になるなんて。
何かに夢中になるなんて。
俺にはできないこと。
こいつは・・・・・
ほら、笑つている。

「あつ、タケやん。」

指差された方を見る。
誰も居ない。
その隙にテレホンカードを取られた。
騙されたか。

「嘘つき。」

もう言つてしまつた。

「いじわる。」

即答で返されたのも、なんだか面白くなかった。

「んなばか女を相手にしていた」とれえ、どうかしていた。
当然、KEIGOのテレカを何故持っていたのかを聞くこともな
かつた。

「じゃあな。」

先に田を反りじてその場を後にした。

「あ、待つて。」

「おいおい。
まだ何かあるのかよ。」

「あの・・・」

今度は顔を上げず、言ひ難そつに話し始めた。

「この間のこと、誰かに話した?」

「おこおこ。

この間って・・・

思い当たるわけがない。

「いつのこと?」

「前に、放課後教室にいた時の事。」

さりに声が小さくなつて。

言い難い上に気まずさそうである。
気まずいことなのか?

あれは。

「覚えてない。」

単に、面倒くさいだけだった。
かかわりたくなかつたこと。
ただ、それだけのこと。

「そ、そつか。」

届くことなんてわかつていたこと。
はじめから。
最後は届くとわかつていた。
届かないものなんてないのかもしぬれないな。
こいつには。

その夜は静かだった。

二日目の夜、男子の部屋なんて、またくだらない話で盛り上がる
のかと思っていた。
面倒くさいが付き合わないわけにはいかないだろうと、思つてい
た。

でも、この部屋は静がだった。
楽な奴ら。
楽な付き合いは大歓迎。

まだ早い就寝時間に、俺は目だけ閉じて起きていた。
隣の部屋から聞こえてくるのは陽気な声。
昂揚が空氣の中に漂つ。
この部屋のまだ起きている奴の氣配も感じる。
その中で、俺は最後に眠りに付く。

二日目の朝。

最終日の今日は、京都半日クラス観光。
バスでの移動。

一条城に到着した。

高さを誇る石垣と、雄大な縁の敷地が続いている。
クラス毎にガイドの説明を受けながら観光していると、

「みつこー、松岡君と写真撮りたいから会長に頼んでもらえない
？」

「えー、無理だよそれは。」

「お願い。そこを何とか。」

他のクラスの女子がやつて来て、頼み」としてこいつだ。

「無理だつて。」

「だつてー、撮りたいもん。記念に。」

「今日はうちちらの番じゃないから無理。諦めて。」

「えー、いいじゃんちょっと位。」

「そりだよ、こんなに頼んでるのにねー。」

おいおい。

会話、まる聞こえなんだけど。

「うるさいこなー。あんた達のこじと余儀元囃しつよー。」
「わ、わかったわよ。」
「い、じめん。またこするよ。」
「やうじい。」

おいおい。

そんなキレるようなことなのか?

「いえーな。」

そう言つたのは健太。

「健太君、聞こえぢやうつて。」

止めたのは同じ班の女子。

「なんだ?」

「晃君知らねーの?」

「ああ。」

「松岡ファンクラブ。」

「なんだそれ?」

健太に続き、同じ班の女子が説明に入った。

「松岡君と写真撮りたい女子はいっぱいいるからねー。ファンク
ラブの役員達が、クラス毎に撮影日を決めたらしいよ。」

「や、撮影日。すげーなー。」

健太が驚いている。

俺だつてびっくりだ。

おいおい。

聞こえてくる話。

聞こえてもいい話。

聞こえた方が都合が良いつてことか・・・

面倒くさい話だ。

庭園にかかる石橋を渡つてゐると、下の池を覗き込んでゐる奴等を見つけた。

背中を軽く叩いてやつた。

「うわあつー。」

奇怪な声を出して振り返つた。

「あきりやん。」

椎名萌と、同じクラスの河野ヒロアキ。

「落ちるぞ。」

一人して焦つた顔をしてくる。
おもしれー。

「押したのはあきりやんでしょ。」

「あつー。」

続けて大きな声をあげた。
表情はもう変わつていた。

「写真、写真撮つてない。あきりやんと。撮りつ。」

なにかと思えぱ。
そんなこと。

「やだよ。」

勿論、即答で答える。

「えー、撮るつよ。」

「やだ。」

当然却下。

「撮るつよ、ねつ、いいでしょ。」

「いやだ。」

面倒くさい。

ただ、ただ、面倒くさい。

「写真の一枚くらいいいじゃない。あきちゃんのけち一つ。」

「あのなー。」

けちといつ言葉に反応してしまった。

「わかつた。じゃあヒロアキも入れて三人で撮るつよ。それならいいでしょ。」

わずかに反応してしまったことを後悔したが、遅かった。
三人とか人数の問題ではないと言いたいところだが、それも遅かつた。

「一條城バックに撮つてもらおう。はい、入つて入つて。」

既にクラスの奴にカメラは渡つっていて。

「はい、あきちゃん撮るよ。」

「チーズ。」

不覚にも、写ってしまった。

「ありがと。あきちゃん。」

そう言つと、満足そうな笑みを浮かべて五組の列に戻つて行つた。
おーおい。
おまえは満足かもしれないが。
俺は不満足だぞ。
笑えねー。

「写真、一日間あれほど嫌がつていたのに今日は撮るんだな。」

健太がやつて来て言つた。

「椎名萌か。そういえばあいつ、松岡聰一のこと好きらしいぜ。
晃君知つてた?」

「へー。」

それ以上何も言わなかつた。

健太も何も言わないし、何も聞かなかつたから。
あいつが誰を好きであろうと、
俺には関係の無いこと。
俺には関係がないこと。
ただ、それだけのこと。

帰りの新幹線も静かだった。

旅の疲れからか、満足感からか、車内のほどこじで寝息を立てていた。

喋るつもりで座席をボックス席に変えた奴らも、爆睡している。進行方向を向いて座っている俺の席からは、駆け抜ける新幹線のスピードを感じることができる。

後ろの席には五組が座っていた。

その、ボックス席に変えた奴ら、一両の班と背中合わせに座っていた。

ふと、通路側から後ろを覗くと、真後ろに座っているのが椎名萌だつた。

だから額を叩いてやつた。

“バシッ”

そんな鈍い音がした。

「あきちゃん。」

なんだ。

起きていたのか。

「前の席だつたのだね。タケやんなら寝ちゃつたよ。」

寝てたら面白いかったのに。
普通の反応でつまらん。

「お前は寝ないのか？」

「うん。昨日そんなに遅くなかったしね。
寝たの何時？」

「一時くらいかな。」

「勝つた、一時。」

「あきちゃんは眠くないの？」

「全然。いつもそんぐらい。」

「えつ、一時？！あ、もしかして勉強？」

「は？」

「だつて、あきちゃん頭良いでしょ、見たよ中間テストの順位。」

なにを言つたかと思えば。

勉強つて。

そんなやうりねーだろ。

「起きてるのはゲーム。」

「えつ？ゲーム？勉強じやなくて？それで五位？」

おいおい。

五位は関係ないだろ。

「おまえもいつも入つてるじゃん。」

「えつ？」

表情が変わる。

おもしれー。

勉強じゃなく、ゲームつてだけでこの反応は面白い。

「ねえ？あきちゃんて私のこといつから知つていた？」

「は？」

「ねえ、いつから？」

「いつからって、おまえずっとタケんとこ来てたじやん。」

「ずっとって？」

「一年の時から。」

「い、一年?...」

声が裏返つた。

なんだ?

その反応は。

「ひ、ひよっと待つて。一年の時つて・・・もしかしてああち
ゃん、一年生もタケやんと同じクラス?」

「ああ。」

「一年も、一年も、タケやんと同じクラス・・・・」

それきり、黙ってしまった椎名萌。

なんなんだ?

「何で?」

「い、いえ、べつに。」

また声が裏返つている。

なんだ、その反応。

当たり前のことと、当たり前に答えただけ。

そんなこと知つて何か得なのか?

わからぬ一女。

変な女。

ただ、それだけのこと。

「おかえりー。」

「ハツ橋買つてきた。」

「何もいらんてゆーたじやろ。」

と、言いつつ、さすがに土産のハツ橋に手を伸ばしているのせばあちゃん。

旅行鞄から洗濯物を出していると、玄関の扉が閉まる音がした。

「おかえりー、皿。ハツ橋食べるかい？ 晃が買ってきたんよ。」

「いらねーよ。」

そのまま1階へ上がつていった。

「美味しいのに。」

まあちゃんはお茶を煎れて一人でハツ橋を食べていた。
数日、居ても居なくても変わらない、この家。

俺が旅行へ行こうが、行きまいが、変わらない。
何も変わらない。
何も変わっていない。
ただ、それだけのこと。

修学旅行から帰ると梅雨入りをした。
毎日シートと降り続ける雨。

外の部活は雨が降ると中止になるが、残念ながら体育館競技の俺らの活動が中止になることはない。

晴れでも雨でもやる気の無さは変わらないが。

基礎トレーニング室へ入った。

ちょうど前に使つていた奴等と交代の時間だつた。

「椎名さんだ。」

関君が声をかけた。

椎名萌がこっちを見る。

「椎名さん、今終わり?」

「うん。今日も雨だからね。」

「いいなー、オレらこれからだもん。」

「頑張つてね。」

「うん、また明日。」

一度だけ目が合つた。

俺は何も言わなかつた。

いつもの光景。

そう。

いつもの。

一年の時も、一年の時も、こつして椎名萌はいつも笑つて挨拶をしていた。

誰にでも愛想良く笑つて、よく喋つて、つるをこへり、騒がしい女。

違うのは、視線を感じるようになつたこと。

違うのは、今日はうるさくなかったな。

珍しく静かだった。

ただ、それだけのこと。

翌日。

休み時間、タケに用事があつて五組へ行つた。

「あ、あつあらへんだー。」

相変わらず元気に声をかけてくる一宮。
タケも、関君もいる。

「ねーねー、」

いつも笑顔の一宮の隣に、あいつがいない。
珍しいな。
あのうるさい女がないなんて。
そう思つて教室を見渡すと、ちよこんと自分の席に座つてゐるで
はないか。
珍しい」ともあるもんだ。

「次の理科、実験室に移動だつてー。」

係りの生徒が大きな声で伝えてゐる。

「実験室かー。遠くてめんどいなー、移動。
「校舎の一番奥だもんなー。」

「よーし、じゃあ一着の者には、特別奉仕ー給食の牛乳をあげち
やつよー。」

「ぜつてーいらねーよ。」

「つーか走らないつて。」

「走つてにのに勝てる奴いねーつて。」

そんな事を言つて盛り上がる一宮の周り。

それでも会話に入つてこない椎名萌。

珍しい。

そう思つて見ていると、椎名萌は教科書で顔を隠すよつて教室を出て行つた。

なんだ？

明らかに不自然な行動。

ぎこちない仕草。

変な女。

やつぱり変な女だ。

次の週の朝だつた。

「おはよう。」

下駄箱で、椎名萌と会つた。

一瞬、目が合つたが、先に逸らしたのは椎名萌の方だつた。

なんだ。

なんか違う・・・

また違う・・・

ああ。

顔。

泣いた跡つて感じか。

また泣いたのか。

変な奴。

変な女はそのまま俺のクラスに入つてきた。

「おはよん、めぐりちゃん。」

「オーラス。」

四組には河野ヒロアキと北川千夏がいた。

「おはよう。」

クラスが離れても仲の良い三人つてとか。
よく続くよな。

俺は自分の席に座ると小説を開いた。

「おおーーすっげーな。強烈な文字。」

「いれね。」

「やつぱり?・ちなつちやんもやつぱり?・

おいおい。

聞こえてくる三人の会話。

「めぐちゃんに嫌がらせをしているのは、聰一君と話すのがダメとかじやなく、本当の目的は塾を辞めさせること。」

「塾?しーな、聰一君と塾一緒にだつたのか?」

「うん。」

おいおい。

だから聞こえてるって。

「そんなあまり知られていないところまで調べるとは熱狂的なフ

アンね。」

「つてことはこじめは続くのか?」

おこおこ。

そういう話は聞こえないよつて話せよな。
ばか女。

びひやひばかでも気づいたようで、それからは聞こえて来なくなつた。

小説を読む手が止まつた。

そういうえば、椎名萌の好きな男は松岡聰一だという噂があつたな。
噂か。

そういうの、楽しい年頃なんだろう。

人の恋愛で盛り上がって何が楽しいのだろう。
まったくわからん。

小説のページを一枚めくつた。

ん？

までよ。

熱狂的なファンとかいじめとか言つてたな。
松岡ファンクラブとかあるんだつけ。

ああ。

あいつ田を付けられたってことか。

ばかだな。
ばかな女。

それで・・・

泣いたのか？

いじめられて？

俺には関係の無いこと。
俺には関係が無いこと。

かかわりたくない。

面倒くさい。

ただ、それだけのこと。

「めぐーつ、めぐ、来てる?」

「けいちゃん。」

廊下から椎名萌を呼んだのは斎藤恵子だった。
登校時間が近づき、教室も廊下も賑やかになってきた。

小説を閉じる。

顔を上げると何故か北川千夏と目が合った。
そのまま教室を出て行く北川。
なんだ? 今の。

「おはよ、晃君。」

健太が登校してきた。

廊下がいつもより騒がしい気がした。
気のせいかな。

「おいつ、なんかすげーぞ。」

廊下から声がした。

「なになに?」
「どうした?」
「ケンカ?」

「おいおい。
喧嘩つて・・・

すっかり野次馬の一人になっているのは健太。
興味は無い。

登校して来た生徒であつといつ間に廊下には黒い影ができていた。

「めぐらしゃんこじめにあつてこるりしこよ。」

興味は無い。

「おい、五組の斎藤と椎名がもめてんやー。」

興味は無い。

河野ヒロアキが慌てて廊下に駆けつけたのを見た。

「椎名をさつてほり、松岡君の事。」

「ああ、なるほど。会長に目付けられたのね。」

「松岡君を好きになるなんて度胸あるよねー。」

おいおい。

今朝の話かよ。

興味は無い。

が、聞こえてくるのだから。

聞こえてもいい話しつてことか。

「めぐ、黙つていってもわからないでしょ。」

斎藤恵子の厳しい声が聞こえてきた。

「わかるから・・・どんなにつらいか、わかるから。」

椎名萌の声ははつきりとは聞き取れない。
それくらい、立場が悪いってことか。
見なくても、なんとなく状況はわかる。
興味は無い。

「だからってこんな事して言い訳ないでしょ。」

齊藤の声は更に大きくなっている。

変わらないな。

あいつはいつだって正しいことを声を大にして言つ。

由利の時もそうだつた。

齊藤は、自分の立場を悪くしても、椎名萌をフォローしているのがわかる。

あいつはそういう奴だ。

そしてもう一人・・・・・

「松岡のこと好きだつて、言ひちゃえよ。」

「そうだそうだー。」

面白可笑しく盛り上げようとする、周りの野次。
人事のようにただ、見ているだけの野次馬。

「そんな訳ないだろ、デタラメだよ、デタラメ。」

「おつ、椎名の父、登場か。」

「その尊ならもう古いぜ。もえの好きな人は聰一君じゃないよ。
それに聰一君がもえを相手にするわけないだろ。相手にされないつ
て。無理、無理。」

笑いながら話す一富に、周囲の雰囲気が変わっていく。

徐々に。

そう、徐々に。
でも、確実に。

周りの雰囲気を変えていく一富の存在。
相変わらず。

見事。

「相手にされないのは言えてるな。」

「だな。」

「確かに椎名さんって松岡って感じじゃないよな。」「言われてみれば、にのとの方がお似合いじゃん。」「にのは父だけどな。」

「あはははー。」

「あはははー。」

簡単なことだ。

人が人をいじめるなんて。
今日は当事者かもしれない。
明日は傍観者かもしれない。
紙一重。

そんなまるでゲーム感覚のような幼稚な事。
それを上手く操れるのが一宮。

「じゃああの噂は嘘か?」

「そうそう。信じた奴残念だつたなー。」「ダッセー。」

「誰だよこんな噂流したのー。」

「ガセネタじゃん。」

「あははー。」

周囲は笑いに包まれていた。
いつものように。

「チャイム鳴つてるぞー、教室へ入れー。」

HR開始のチャイムが鳴り、廊下に先生達の姿が見えた。

さっきまでの人山があつといつ間に無くなつた。
そしてはじまる。

いつものH.R.が。

ただ、それだけのこと。

その翌週からは一学期最後の期末試験がはじまつた。

あれだけ騒いだあの朝の事も。

試験が終わつた頃には、誰も噂のことを言つ者はいなかつた。

またいつもの朝に戻つた。

「おつす、晃。」

「ああ。」

「KEIGOの八月号、いつ見に来る?」

「日曜は?」

「オッケーじゃあ日曜。」

「わかつた。」

毎月タケの家に届く雑誌を見せてもらいに行つている。
変わらない事。

次の休み時間だった。

「見たか?」

「見た見たー。」

クラスの男子の話し声が聞こえてきた。

特に興味は無い。

「椎名だろつ。」

「すっげー、バツサリいってたよな。」

バツサリ？

特に興味は無い。

「晃君、行こーぜつ。」

健太に呼ばれた。

次の授業は技術室へ移動だつた。

五組の前を通つた。

ふと、教室の中を覗く。

相変わらず元気に騒いでいるのは二宮。

そしてその横に

変わっていた事。

椎名萌が髪を切つていた。

ただ、それだけのこと。

技術室に入ると、前の授業だつた三組がまだ数人残つていた。

「見た？椎名の髪。」

「見た見たー。かなり短かつたよなー。」

聞こえてきた会話はテニス部の男子達。

髪を切つただけでそんな盛り上がる話なのか？

「俺まだ見てない。」

「あれ？祐也見てないの？」

聞こえてきた声は笠原祐也。

「見てない。」

「朝練は？」

「来てなかつた。」

「へー、珍しい。」

「なんで俺だけ見てないんだ？」

「五組行けばいるだろ。」

「あれは失恋とみたな。」

「まじでえ？」

「あんなバツサリ切つたらそいつしょ。」

おいおい。

だいたい、なんで女はわかりやすく髪を切るかね。
なんかありましたって言つてるようなもんだろ。

ばかだな。

ばかな女。

失恋で髪切る女なんでもつとばかだな。

あれ。

あいつの好きな奴つて・・・

松岡のことは片付いたし。

そういうえば、あいつが好きなのは祐也で・・・

祐也に彼女がいるのは前から。

今更なぜ髪を切る？

つてか、失恋で切るのか？

わかんねーな、女つて。

わかりたくもないけど。

関係ないけど。

放課後、うちのクラスに椎名萌が来た。

「あきちゃん。」

目が合つ。

少しの間が空く。
俺から逸らした。

「しーな、お待たせ。部活行こうぜ。」

「あ、うん。行こう。」

ヒロアキと教室を出て行く。
その後姿を見送った。

肩よりも上で揺れる髪。

おそらく、三十センチは切ったのだろう。
別にお前が髪を切ろうと、切らなくてても。
俺には関係ない。

俺には関係がない。

ただ、それだけのこと。

七月も中旬を迎えた。
中学生最後の夏。
部活動の集大成、引退試合の中体連。
そして受験生となる。

俺は相変わらず適当に部活に参加。

六時間の授業をこなし、適当に委員会に出席して、適当に学校生

活を送っていた。

今年の夏も暑いけれど、一階の教室はそれでも風が通る。

「それでは今日はここまで。夏休みは七月いっぱい美術室を開けておくので各自課題を終わらせるように。」

「礼。」

「ありがとうございました。」

選択授業が終わり、皆次の授業に向けてそれぞれ移動し始める。資料を片付けていると、奇怪な声が聞こえてきた。なんだ？

声の主はお騒がせ女、椎名萌だつた。

またかよ。

つむきみつみつ女。

「ははは。もえ、昔の癖直ってなかつたんだ。」

「え？癖？」

「もえはね、いつもすると」

再び言葉にならない声を出して首をすくめていた。

「首が人一倍くすぐつたいらしょ。小学生の時、よくいつかってからかわれてたよね。」

「もえー、行くぞー。」

「はーい。」

「ひやあああー @ @ @」

ほんとだ。

やつてみたが、本当だった。

「あわのやん。あわしへ@ @」

変な弱音。

変な女。

「モー、モーといふやうで首聴こいの。」

変な弱音。

おもしろいこ女。

だから。

次の日も、やつてみた。

昼休み、タケと関君と話してたら、椎名萌が来たから。
後ろを向いていたから。
やつてみた。

「ひやあああー @ @」

声を上げ、首をすぐめる。
おもしろい。

「あわのやん、モーやめてよ。」

「はは。椎名萌さん、すつかつあわのやんにせりぞてこるね。」

「モー。」

予鈴が鳴る。

「じゃな、あきひやん。」

関君が教室へ戻る。

タケも後に続く。

教室へ戻る者、移動教室へ向かう者、廊下がざわつく。
しばらくすると静けさを取り戻した廊下に、残っているのは一人。

「入らないの？」

「入れば。」

沈黙が流れれる。

「じゃあね。」

そう言つと椎名萌が教室へ戻つた。

本鈴が鳴り、授業が始まった。

ただ、それだけのこと。

期末試験の結果が貼り出されていた。

成績上位三十名。

相変わらず一位を独占し続けているのは松岡聰一。
タケは六位。

調子は良かつた。

順調に。

俺は四位に座つた。

そして視界に入つてくる。

椎名萌が後ろを向くから、やりたくなる。

「ひやあああー @ @ @」

奇声と共に首をすべめる。

「もー、あきちゃん。やめてつばー・・・あーあきちゃんすい
いね！4位だなん・・・・」

「ひやあああー @ @ @」

再び奇声と共に首をすべめる。

椎名萌の順位は俺にとってはどうでもよかったです。

反応がおもしろい。

ただそれだけのことだが、しばらく飽きなかつた。

「晃君。」

帰宅途中で声をかけられた。

「今帰つ？途中まで一緒帰るー。」

「ああ。」

後ろから走ってきたのは市井里美だった。

市井は近所に住んでいる。

短髪にハスキーナ声の持ち主は、昔から男友達のような感覚でいた。

「晃君試合、どうでやつの？」

「第四中。」

「そつかー、また遠征かー。」

市井とは、別に特別親しいわけでもなく、家が近いからといって交流も無い。

健太と遠い親戚にあたる関係らしく、たまに一緒に遊んだりしている。

「あ、そうだ、晃君も行くよな、ここのに誘われた日。」

「ああ。」

「と、まずは中体連か。終わつたら思いつき遊ぼーっと。」

家の前まで歩いた。

「じゃあね。晃君。」

「ああ。」

そう言つて別れた。

家に帰るとばあちゃんが蚊取り線香に火をつけていた。

「おかえりー。」

「ただいま。」

縁側に置かれた蚊取り線香の匂いが漂つている。

「昨日トイレに起きたら、晃の部屋まだ明かり点いとつてなー。」

「そづ。」

「勉強かい?」

「まあ。」

俺は無難な返事をしておいた。

「あちやんが何を言いたいのか、なんとなく感じ取れるから。

「無理せんと。」

「わかつてるよ。」

すかさず次の言葉を投げた。

これ以上聞かれないように。

これ以上話し込まれないように。

わかつている。

わかつていいから。

大丈夫。

大丈夫だよ。

調子は良いから。

勉強は、好きではないけれど嫌いでもなかつた。
時間はたくさんあつた。

だから困つたことは無かつた。

塾へは行かなかつた。

困つたことは無かつた。

俺には二人の兄貴がいる。

一番上の勝兄は東北の大学へ行つていて。

一番目の亘兄は私立の高校の三年。

亘兄は勉強のできる奴だつた。

高校受験の時、俺は小学六年生だつた。

今でも覚えている。

悔し涙を流していた亘兄の背中を。

なんでそんなことで泣けるのだろうか。

そう思つていた。

亘兄は第一志望の高校に不合格。

滑り止めで合格していた私立の学校に通うことになつた。

「おまえのせいだ。」

春休み、亘兄にそう言われた。

俺が居なければ、俺なんかが居なれば。

合格したのか？

ただのハツ当たり。

そんなのわかつていた。

ただ、それだけのこと。

中学に入学すると、担任の先生から、穂高兄弟の三番目か。と言
われた。

兄貴達がそれだけ優秀だったということだろう。

別に俺には関係ない。

俺には関係がない。

そう思つていた。

だが。

こうも考えるようになつた。

亘兄が出来なかつたこと。

亘兄の第一志望の高校に、俺が合格したら・・・

そんなことを考えなくも無かつた。

ただ、それだけのこと。

今日は一学期の終業式。

校長先生の長い話に続き、夏休みの諸注意等が話される。

前に並んだ健太に話しかけられた。

「晃君、あれほんとに行くの？」

「ああ。」

「カラオケ好きじゃないのに?」

「べつに。」

「椎名萌がいるから?」

「は?」

健太から出た言葉の意外さに驚いた。

「だって、晃君最近椎名とよくいるし。」

「にのの金魚のフンだろ。」

「ぶつ、そ、それは確かに。」

噴出しそうになるのを抑えた健太。

終業式中なのでふざけていてはまずいだろう。

前を向いたが、肩が小刻みに震えてるのがわかる。
笑いをこじらえているのだろう。

先日、一回から皆でカラオケに行かないかと誘われた。
タケが居るなら別にいいし。

塾があるわけでもない俺は暇だし。

確かにカラオケは面倒くさいが、べつに断る理由も無かつたから。
ただ、それだけのこと。

面倒くさい。

そんなのに俺が出るわけがない。

だから、バレー部は部長の奥居と副部長の梶原に任せた。

終業式が終わると、壮行会が始まった。

壮行会は、中体連に出場する選手を応援する会のようなもの。
三年にとつては引退試合ともなる、記念式典のようなもの。

面倒くさい。

俺は一般生徒席からそれを見ていただけ。

「晃君。」

教室を覗く奥居と梶原。

「いないのかー。あ、椎名ちゃん。」

「あきちゃや・・・じゃない、穂高くんいなければあるから戻つてくるのじゃないかな?」

「おつけー、椎名ちゃん、元気してた?」

「はははー。元気だよー。」

教室へ戻るといひで、廊下からの賑やかな声に気づいた。

奥居と梶原・・・と椎名萌。

知り合いだつたのか?あいつら。

しかし椎名萌は相変わらずつるわい。

「晃君、今日は一時半になつたから。」「わかつた。」

「そういうや椎名ちゃん髪ばつさり切つたね。」

「おつくん、その話古くない?」

「あはは。確かに。」

いつもの笑顔。
いつもの喋り。
いつものばか女。

「じゃあ、椎名ちゃんまたね。」

「うん、ばいばいー。」

ああ。

奥居と梶原と椎名萌は同じ第一一小の出身か。

「ひや あああー @ @ @」

奇怪な声を上げ、首をすくめる。

「あきちゃん。モー、やめてよー。」

おまえが後ろを向くからだろ。

「おっくんと仲いんだ。」

「あ、うん。おっくんとかじくんね、小学校の時にけっこつ話し
ていたよ。中学に入つてからは今久しぶりにあんなに話したかな。」

「ふーん。」

教室に入り、席へ戻つた。

椎名萌も付いてくる。

「めぐちゃん、トマト食べてあげるかい、卵焼きちょうだい?」

「椎名、通知表見せるから春巻きくれ。」

「あのねー。通知表はいじよ別に。」

ヒロアキと北川。

三人で弁当を食べていたのか。

相変わらず仲の良い、騒がしい三人組。

「あきちゃんは通知表どうだった? 良かった?」

「見るか?」

「え？いいの？」

「おまえのも見せうよ。」

「え？だつてあきちゃんの方が頭いいし」

「

互いの通知表を交換した。

「あれ？・・・・あれ？」

椎名萌の表情が固まった。

そして、手に持った通知表と、俺の顔を交互に見て、驚きを隠せない様子。

椎名萌の通知表は思つた通りだつた。
ほとんどオール五に近い。

通知表は絶対評価じやないからな。
定期試験の結果が全てではない。

授業態度、積極的に取り組む姿勢、周りとの協調性。
そんな要素が含まれての評価が通知表。

だから、こいつみたいに愛想良いくつも笑つてゐる奴の方が通知表の評価は高いさ。
だから、そう言つてやつた。

「絶対評価じやないからな。おまえみたいに愛想のいい奴の方が得をするつてこと。」

ありのままを伝えただけ。
ありのままに伝えただけ。
ただ、それだけのこと。

そして翌日から中体連がはじまった。

大抵の運動部は、市営競技場の中で試合を行う。

陸上部、野球部、サッカー部、テニス部、卓球部、バスケットボール部、剣道部、柔道部。

各校の応援も盛り上がりでまるで祭りのような大歓声の中、試合が行われる。

バレー部は決勝戦を除く試合を、会場となるそれぞれの中学校で行っていた。

だから、そんな祭りのようなめでたい感覚ではなかつた。
もちろん、決勝戦にまで残つたことなど一度も無い。

そう。

これが引退試合となる。

会場となつた第四中学校の体育館は蒸し暑さと人の熱氣で汗が止まらない程。

当然アウターなのだけれど、こんなに観客がいなければもつと気温が下がるのではないかと思う程。

「あれ？ 椎名玲ちゃんじゃない？」

暑くて集中力が鈍るのに、奥居の話もまた暑苦しく感じた。

「見間違いやない？ こんな所まで来ないでしょ。」

「かじくん、よく見てよ。あそこ、ほら。」

奥居が指をさす方を見る。

「あ！ ほんとだー、椎名玲んだー。」

関が先に気づいたようで、駆け寄つて行った。

「珍しい組み合せだ。」

そう言つて奥居も向かつた。
「これからは、いつも見えるが、いつも見えない。
どっちでもいい。

別に椎名萌が来ようが、来まいが。
別に椎名萌が居ようが、居まいが。
俺には関係ない。

俺には関係がない。

ただ、それだけのこと。

暑い。

体育館の気温はどんどん上昇していく。
こんな中で試合をやるのか?
集中どころではないだろう。

暑い。

「いやー、びっくりだね。」

「こんな所までわざわざ見に来るなんて。」

「物好きもいるもんだー。」

「しかも変な組み合せ。」

「椎名さんと市井だろ?」

「完全アウローからは抜けたな。」

「同じようなものだろ。」

「ははは。そうだな。」

「おっしゃー、俺らはこつも通り。最後の試合、やんぞー。」「おおーつ。」

第四中選手と挨拶を交わし、コートに入る。

いよいよはじまる。

隣に奥居がやって来て言った。

「晃君を見に来たんじゃない?」

それだけ言つと、笑みを浮かべて自分のポジションに就く奥居。

おいおい。

偉い余裕 だな。おっくん。

緊張感もありやしねー。

おいおい。

関係ないね。

椎名萌が俺を見に来ようが、来まいが。

椎名萌が居ようが、居まいが。

俺は自分のことをやるだけ。

そう。

自分のことを。

追い続けるボールの先に、眩しいライトの火が射していた。

ただ、それだけのこと。

暑い。

どれくらい経ったのだろうか。

暑い。

どれくらい動いたのだろうか。

暑い。

どれくらい・・・

試合は負けた。

負けたら終わり。

今日は終わり。

明日も終わり。

もう、終わり。

ただ、それだけのこと。

試合は負けた。

別に部活なんて本気じゃなかった。

本気になれなかつた。

夢中になることなんてなかつた。

夢中になれなかつた。

結果なんてどうでも良かつた。

どうせ運動で叶わないことぐらい知つていいから。

あいつに叶わないことはわかっているから。

そう、あいつ。

俺には二人の兄貴がいる。

一番上の勝兄は、昔からスポーツが得意で、中学では陸上部に入つていた。

百メートルハードルで、県の大会記録を持っている。

東北の大学へはスポーツ特待生として入学。

だから、俺は陸上部へは入らなかつた。

中学に入学すると、部活動の勧誘期間が一週間あつた。

あの兄貴の弟なのだから、ぜひ陸上部にと。

先輩だけでなく、顧問の先生からも勧誘を受けた。

あの兄貴の弟なのだから。

皆、そうやつて決め付けた。

俺は別に走るのが嫌いなわけでも、苦手なわけでもなかつた。

遅いわけでもなく、タイムは速い方だつただろう。

でも・・

必要なのは俺じゃない。

俺じやなくて、勝兄。

俺じゃなくて、勝兄を見ている。

勝兄を通して、俺を見ている。

例え、勝兄を超えても超えなくても。

勝兄を超えたても、超えられなくても。

答えは同じ。

皆、勝兄を見ているのだから。
当然。

超えても、勝兄の弟なのだから。

超えなければ、勝兄の弟なのに。

そう言われるだけ。

答えは同じ。

勝兄いての俺。

ただ、それだけのこと。

そんなこと、わかつていて、居られるわけがない。

その後、陸上部が駄目ならサッカー部、テニス部と、走りを見込まれ勧誘を受けたが、どれも断った。
どれも同じことだから。

もう運動部に入るのはやめようと思った。

美術部に入ろうかとも考えたが、絵を描き続けることは、家族の中で、俺の立場を悪くするだけ。

わかつていたこと。

絵だつて、好きな時に好きな場所で好きな絵を描くのが好きなだけ。

決められた課題を描くのが好きなわけではなかった。
部活を決める、仮入部期間の一ヶ月は俺を悩ませた。

そもそも。

なんで部活に入らなきゃいけないんだ。

面倒くさい。

ただ、ただ、面倒くさい。

ただ、それだけのこと。

仮入部期間が終わる寸としていた時、一人の生徒に声をかけられた。

「バレー部、入らない？」

最初は先輩の勧誘だと思った。

それ位、二人とも身長が高かったから。

当時、俺はまだクラスの女子より背が低かった。

「今年人気無くてさ、部員集まんないと試合できないんだよ。つて訳で見学レッスン！」

「オーッ。」

俺の返事も待たず、両脇を奥居、梶原という二人に挟まれ、体育馆へ連れて行かれた。

なんなんだこいつらは。

体育着のカラーデ、先輩ではなく、同じ一年だということを知つた。

面識が無いということは、第一小出身の奴ら。

抵抗する力も虚しく、長身の二人に両脇を抱えられて足を踏み入れたのがバレー部だった。

「先輩 つ、仮入部希望者一名でーす。」

「おい、俺はちがつ・・・」

「いいから、いいから。」

「おー、ありがとなー。」

「おまえら一年に勧誘やらせて悪いなー。」

「いえいえ。暇があつたら練習しましようよ。」

「それに、おっくんかじくんコンビなら先輩より新入生に人気ありますから。」

「なにいー?！」

「あははー、確かに。」

「あいつ、笑い事じやなぞ。」

「あははー。」

なにやら和やかな雰囲気。

見たところ、先輩は六人。一年が四人。

確かに少ない部員数。

バレーが何人でやるものなのか、知らない俺でさえ、この部員数では存続の難しさを感じた。

「で、何君？」

笑いが収まつた時、先輩の一人が口にした。

連れて来られたままだつた俺。

「知らないっす。」

「ええつ？！」

「そういえば、何君？」

「おいおい、マジかよ。」

「あつくん、名前も知らない子、勧誘してきりやつたの？」

「あはははー。」

「おもしれー。」

再び笑いの渦が起こつた。

「で、何君？」

改めて、聞く奥居に、先輩達は肩を震わせ、笑いをこらえていた。

「穂高です。」

「穂高君です。」

「ぶはははー。」

「あはは、皆聞いてたし。」

名乗つた俺のすぐ後に、梶原が先輩達に紹介したのがウケたらし

い。

再び笑い声に包まれた。

「やつぱおもしれーわ。あつくんかじくん。」

「一緒にしないで下さい。」

「いいセットプレーを期待しているよ。」

「よつ、相棒！」

「で、何君だっけ？」

その後、笑いが収まるのに時間がかかったのは言つまでもない。

五月に入り、仮入部期間が終了した。

俺はバレー部に入部した。

理由は一つ。

誰も兄貴を知らなかつたから。

ただ、それだけのこと。

だから、俺が本気で何かに夢中になるなんてことない。

だから、俺が本気で部活をするなんてことない。

本氣で・・・

試合に負けた。

ただ、それだけのこと。

なのに。

なのに・・・

なのに・・・

なんで、泣いてるんだ？

負けたから？

終わつたから？

部活から解放されたから？

あれ？

あれ・・・

なんで。

なんだこれ。

穂高と名乗つても、兄貴の事を聞かれなかつた。

出身小学校が違う奴等は知らなかつた。

決して活躍している部活ではなかつたから適度な活動だつた。

少人数だけど、属すには適切だつた。

部活なんて、たかが所属。
試合なんて、たかがゲーム。

ルールやプレーは身に付けていつたけど。
試合をこなす毎に動けるようになつたけれど。

身長も伸びていつたけれど。

ただ、それだけのこと。

ただ、それだけのこと。

なのに。

なのに。

いつの間にか。
知らない間に。

好きになつっていたのか。

バレー。

いつの間にか。
知らない間に。

好きになつっていたのか。

顔を上げた。

泣き崩れる仲間達を見る。

体育館の蒸し暑い熱気。

外を見る。
照りつける太陽の光が、眩しかつた。

ただ、ただ、眩しかつた。

目が合つた。
日差しが照り返すアスファルトからは熱気が溢れていて。

歪む視界の中に。
椎名萌が立つていた。

ただ、それだけのこと。

4・夏の空

1.

「これ、誰が描いたの。」

「ぼくだよ。」

「そう。上手ね。」

夢を見た。

まだ小さい頃の俺。

何処か知らないが、でっかい草原が広がつてて。
小高い丘の上に座り、一人で絵を描いていた。

空の絵。

すると知らない人がやつて来て、誰が描いた絵かと聞かれた。

知らない人は女性だった。

白い帽子を深く被つて、白い洋服を着た、女性。

それが誰かなんてわからないけれど。

それが誰であつても関係がないのだけれど。
なんだか遠く、惹きつけられる夢だった。
上手ね。

その言葉が耳に残つた。

誰の声かなんてわからないけれど。

それが誰の声であつても・・・

「晃。」

カーテンが開けられる音がした。
体が重かつた。
まだ瞼も重い。

「朝じゅよ、晃。」

差し込む光で目を開けた。
眩しい。

「珍しく起きて」んから。」

体を起した。
眩しい。
明るい。
といつより、暑い。

「あれ。」

時計を見ると暁を過ぎていた。

太陽はまたにてんぺんに上り詰め、誇らしそうに照り付けている。

「部活はもうないんじやろ。」

「たまには遅起きでも良かろつ。」

何年振りだろつ。
ばあちゃんに起されたなんて。
何年振りだろつ。
朝方、一度も目が覚めず眠り続けただなんて。
何年振りだろつ。
夢を見て目が覚めただなんて。

「着替えて昼飯こしよーや。」「うん。」

着替えを済ませて居間に下りた。

扇風機に扇子。

ばあちゃんは新聞を読んでいた。

「そりめんにしたよ。」

「うん。」

「今日も暑いの一。」

「クーラーつけないの?」

「扇風機で十分だがな。」

毎年。

何も変わらない。

今年もばあちゃんの煎れた麦茶を飲む。

また、夏が来た。

ただ、それだけのこと。

「(ノ)馳走様。」

そうめんを食べ終えて、思い出した。

今日は午前中学校に行く予定だつた事を。

今日から始まつた夏期講習。

塾に通つていない俺でも、学校で開かれる夏期講習へうちは参加しようと思つていた。

が、終わつてしまつたのだから仕方ない。

明日から行けばいいだろう。

長い夏休みのはじまり。

まだまだ時間はあるのだから。

「出掛けてくる。」

「帽子被つてくんよ。」

次に思い出したのは、午後遊ぶ予定だつた事。
確かタケんちに行く約束。

の前に、一宮達と遊ぶんだつたか。

面倒くさい。

大人数で遊ぶのは久しぶりだ。

一年の時、泉くんに誘われて、時々顔を出していたこともあった
が。

タケと仲良くなつてからは、一人で遊ぶことが殆どになつた。

今更・・・

面相くさい。

ただ、それだけのこと。

「おつ、講習サボつたな。」

タケが笑つて言つた。

「おつす、晃君。」

「あきちゃん、昨日はお疲れー。」

関君も来ていた。

なんだ、この大人数は。
聞いていたよりも増えている。
面倒くさい。

更に面倒くさい。

カラオケなんて、もつと面倒くさい。
この後タケとの約束が無ければ、帰つていたな。
確實に。

騒ぎたい奴らで勝手に騒げばいいだろ。』

それほど広くも無い一部屋に、十数人が一緒にいるだけで気分が悪い。

外へ出ることにした。

カラオケの室内もそれほど涼しくはなかつたが、外の暑さは比べものにならない。

三時を過ぎたというのに、七月の太陽は容赦なく照らし続ける。

少し離れた階段の所に、暇つぶしを見つけた。

「ひやあああー @ @ @」

声を上げ、首をすくめる。

「あきちゃん?」

振り返り驚いた表情を見せる。

「びっくりしたあー。」

後ろを向いているから、やりたくない。

「戻らないのか?」

「あ、うん。ちょっと暑くなつて・・・外で涼もうかと。」

暑い?

外で涼む?

やつぱりばかな女だ。

そのばか女の隣に腰を下ろした。

「あきちゃんは何か歌わないの？」

「聴きたいな、あきちゃんの歌。どんな曲歌うの？」

「別に。カラオケ好きじゃないし。」

しばらく、下を向いて黙つているばか女。
つるやくて、騒がしいのはどこへ行つた？

そういえば。

今日は騒がないな。

今日は騒がないのか？

こんな所に一人でいることも珍しいよな。
おバカ騒ぎ、好きそうなのに。
隣に座る横顔に視線を向けた。
あれ。

こいつ、こんなんだつけ？

こんな顔してたつけ？

こんな顔？

どんな顔？

いつも笑つていて、つるやくて、騒がしくて。
何の悩みもなさそうに見えた、変な女。

だよな？

なんだ、この顔。

そういえば・・・

昨日こいつに会つてゐんだつけ。

わざわざ試合見になんて来てたんだつけ。

「晃君を見に来たんじゃない？」

奥居に言われたことを思い出した。

まさか。

有り得ないだろ？

だつて。

だつて、こいつの好きな奴は・・・

あれ。

誰だ？

誰だつけ。

笠原祐也。

松岡聰一。

どれも解決したんだつけ。

じゃあ・・・

「好きな奴いんの？」

聞いてみた。

「えつ？」

「今いるのか？」

「い、いる。」

予想外に小さい声。

あれ。

なんだ。

こいつ、こんな顔もするのか。

こんな顔。

どんな顔？

「ふーん。」

再び、椎名萌は下を向いた。
やつぱり変な女だ。

「歌、楽しいか？」

「え？ あ、カラオケ？」

「楽しいよ。テストとか終わるとストレス解消によく来るよ。部活では大会とか終わると畠で来て、勝ったら歌う歌、負けたら歌う歌があつて」

「

一気に喋るその姿は、いつものつるさく騒がしいばか女に見えた。変な女。

変と言えば。

さつきもにのが言つてたつけ。

一畠父。

「名前、なんでもえなの？」

「めぐみだよ。」

「知ってる。」

「あ、そつか。」

思わずつっこみたくなる程、ばかな答えが返つてきた。

「ずっとか？」

「つづりん。小学校の時にね、私転入生だったのだけど、先生が黒板に名前を書いたのをね、当時にのが、“しーなもえ”って読んだの。ほら、萌つて、もえとも読むでしょ。それからだよ。」

「ふーん。」

「今でもそう呼ぶ人は少ないけどね。にのと亮ぢゃんくらい？」

なんだ。

こいつ、ちやんと喋れるんじゃないかな。

転入生というワードも引っかかつたが。

そういうえば。

一畠が昔こいつをいじめてたとかいう話、聞いたことがあったな。

だから余計に今大事にしているとか。
なるほどな。

「あ、あきちゃんは？何て呼ばれていたの？」
「とくになし。」

「え？ そうなの？」

「おまえに付けられたのが初めて。」

「あら。じゃあおうちでは？」

「あだ名なんてねーよ。男三人兄弟だし。」

「あ、そ娘娘んだ。三人兄弟なんだ。真ん中？」

「一番下。」

「兄弟多いといいね。私お兄ちゃんが欲しかったんだ。」

「別に。仲良くなーし。」

沈没。
撃沈。

そんな台詞が似合うだろうか。
ばか女のわかり易い表情。

読むのは簡単だ。

あだ名なんていうのがつくのは、周りからかわいがられている証。
周りから注目を浴びている証。

一富がなにより証明しているじゃないか。

適材適所の人間。

さすがのばか女も、兄弟の話はまずかつたと思つたのだろう。
口を噤めているのがわかる。

「じゃあ、あきちゃんのお兄さんだったのだね。」

おいおい。

まだ続けるのか？

「校長室の前の、名譽賞。陸上部にお兄さんの名前が。」

「おいおい。
懲りないのか？」

「穂高って、同じ名字だとは思つていただけれど。」

「おいおい。

空氣読めねー奴だな。

「やつぱりあきちゃんのお兄さんだったのだね。」

「やつぱりばか女決定だな。

うんざりだよ。

その話はうんざり。

もう慣れただけ。

勝兄の活躍は、今後記録が塗り替えられることがない限り、ずっと光を浴び続ける。

そして、俺はずっとその光の下にいなければならぬ。

光の下。

それは当然明るいところではなく、光の下は暗闇だ。
ばか女も、光がすじことこのうだらづ。

そのすじに勝兄の弟だと。

「私はあきちゃんの描く絵がすじこと思ひナビ。」

「は？」

「去年の写生大会の絵、飾られていたでしょ？ 美術室の前に。」

「ああ。」

「穂高晃つて名前の人気が描いた事知った時、どんな人かなつて思

つていたら、タケやんの友達だった。あはは。「

そう言つと、ばか女は笑つた。

いつも。

そう、いつも笑つているばか女の顔とは違つた。
そして。

違うのはそれだけじゃなかつた。

兄貴のことを。

あの兄貴のことを、聞いたのに。

何も言わないのか？

何も聞かないのか？

比べないのか？

すごいと言つたのは兄貴ではなく、俺の絵。

俺の描いた絵。

俺の・・・

去年描いた絵。

誰にも気付かれなかつた絵。

誰にも誉められなかつた絵。

誰にもわかつてもらえなかつた絵。

まさか。

まさか・・・

「あ、晃君こりんなどこにいたー。」「

やつて来たのは市井だった。

「めぐちちゃんの曲、もうすぐまわつてくれるよ。

「あ、うん。じゃあ、戻るね。」

そう言つとばか女は立ち上がつた。

転入生だと言つた椎名萌。

俺の絵をすごいと言つた椎名萌。
いつもと違う顔をしている椎名萌。
なんだ。

よくわかんねー。

わかんねー、女。

とりあえず。

今日も変な女だということだ。
ただ、それだけのこと。

その後、カラオケが終わり、タケんちに行つた。

「お邪魔します。」

「あら、晃君いらっしゃーい。」

相変わらず健康そうで元気そつなお手伝いのおばさんに挨拶する。

タケと仲良くなつてから、俺達は遊ぶ時間の大半をタケの家で過ごしてきた。

この家の使い勝手も覚える位に。

「何か飲む物貰つて来るから、好きにしてて。」「おう。」

タケが部屋を出て行つた。

俺はテーブルの上に置かれた雑誌を開いた。
ふと。

テーブルの隅に置かれたアルバムが目に入った。

見慣れない物。

美術やゲーム関連雑誌以外の物が置かれているのは珍しかった。手に取り、開いてみる。

一面四枚が収納された、フォトブック。

修学旅行の写真だつた。

奈良公園、鹿、五重塔、清水寺、金閣寺、銀閣寺、太秦、嵐山、

二条城。

風景写真の中に、人物写真。

同じ班だった、二宮、関、斎藤恵子、椎名萌。

相変わらず二宮はふざけて写っているが、彼本来の活発さがよく映し出されている。

そして隣で笑っているのが椎名萌。

こいつもいつも笑っているな。

うるさくて騒がしくてばか女。

あれ。

一枚の写真に目が留まつた。

なんだ。

こいつの顔。

こんな顔もするのか。

こんな風に写真に写るのか。

こいつはこれが一番自然に見えるな。

うるさくて騒がしくてばか女に見えるけれど。

この写真はあいつらしい。

「気に入つた？」

飲み物を持つてタケが戻ってきた。

「こ」の写真はな。

「ふーん。」

このに、アクセントを置いて言つたつもりだつたが、タケの表情は緩んでいた。

「二百円。」
「バーカ。」

その後、雑誌を読んで、ゲームをして。
いつも通りタケと過ごしていたのに。

そう。

いつも通り。

なのに。

頭から離れなかつた。

一枚の写真が。

帰り際。

「気になつた。」

その一言と、百円玉を一枚置いて帰つて來た。

タケは笑顔だつた。

ただ、それだけのこと。

2 .

翌朝は登校日だつた。
いつも通り。
そう、何も変わらない。
ただ、夏は暑いだけ。

そして、部活がないだけ。

教室に入ると、にぎやかな声が聞こえた。
いつも通り。

そう、何も変わらない。

ただ、うるさいだけの、三人組。

「あきちゃん、おはよう。」

そのうちの一人、ばか女が声をかけてきた。

「はよ。」

そして、返事をしただけ。

ただ、それだけのこと。

ばか女は再びにぎやか三人組へと戻つていった。
こいつら毎朝毎朝、よく話に尽きないな。

鞆から小説を取り出し、ページをめくつた。
いつも通り。

話している内容もまる聞こえだ。

ばかな奴ら。

そして、ばか女が自分の教室へと戻つた。

一人抜けても尚、話し続いているのは北川千夏と河野ヒロアキ。

「めぐちゃんに新しい好きな人ができるたりどうするの？」

おいおい。

聞こえてるって。

「だからオレは別にそんな気はないって言つてんだろ。」

おいおい。

だから、聞こえてるって。

「晃君はどう思ひ？』

「おじつ、なんで晃君に話を振るんだよ。』

慌てて千夏を止めたのはヒロアキ。

おいおい・・・って。

おいおい、マジですか。

「おじつ、オレは別にいつて言つてんだからな。』

「面白くなりそうね。』

「面白くねーよ、北川あんま暴走するな。頼むから。』

「晃君悪かつたな、北川が変な事言つて。』

「いや。』

おいおい。

聞こえてもいい話しだったのか？

ばか女も変な女なら、その友達も変つてことか？

ばか三人組。

そして、ばか女の新しい好きな奴か。

別に。

どうでもいいけど。

放課後になり、タケを迎えて五組へ行つた。

蒸し暑い教室も、放課後となると少しは風が通る。

扉と窓が開いている教室からは、丁度やかな声が聞こえてくる。

一富の声。

いつも通り。

そう、一富の明るい声が響く五組。

そして重なる複数の声は、まるで合唱のよう。

教室の中に目を向ける。

廊下側に椎名萌とタケが座っているのが見えた。

聞こえてくる一人の会話。

「あと、カラオケは好きじゃないって言っていたから、ボーリング
は来てくれるかなって思つて。」

「彼はボーリング得意だよ。」

「ほんと? 良かつた。」

おいおい。

今日は周りの会話がよく聞こえてくる日だな。
世の中、人に聞かれてもいい話ばかりなのか?
タケもタケだ。

俺に聞こえてるってわかつてて、話してやがる。

「晃がお前の」と氣にしてる。」

おいおい。

だから、聞こえてるって。

「えつ?」

驚いた声を出したのは椎名萌。
次に、俺に気づいた二人。

「八月三日、夏祭りだつて。」

タケは俺に向かつてそう言つと、鞄を持って教室を出た。

俺も後に続いた。

ただ、それだけのこと。

気にしてる……か。

俺が？

俺が？

まさか。

まさか？

タケのあの意味深な笑み。

前にもあつたな。

ああ。

由利の時か。

気になるのが恋とかなんとか。

ありえねー。

気になるなんてどうつてことない。

恋だなんて。

恋なわけがねえ。

ない。

無い。

引き出しから一枚の写真を出す。

気になる。

気になつたのは写真。

そう、写真。

この写真が。

俺の生まれた日。

母親は亡くなつた。

だから、俺と母親が一緒に写っている写真はない。

写真でしか見たことのない母親。

これが母親。

それが母親。

それが母親？

そこから出てくることはない。

そんなところに閉じ込めておくなんて、写真ってなんだ？

生きる人を写したもの。

亡き人が写されたもの。

何を写す為のもの。

何が写る為のもの。

だから俺は写真が嫌いになった。

風景写真を見るのは好きだつた。

風景画を書くのに、写真を模写したこともある。

そこに写る風景に。

行つたこともない風景に。

見たこともない風景に。

見ているだけで時間は流れた。

ただ、ただ、見ているだけで。

知らない場所の、知らない写真。

だから人物写真に興味を持つことなんてなかったのに。

タケの撮つたあいつ。

背景さえはつきりしない。

でも。

こんな風に写るのは悪くない。

ただ、それだけのこと。

翌日、学校へ行くと同じ講習に椎名萌がいた。

自由参加の講習だが、自分の塾の夏期講習に出ている者が多く、一クラス分になる程度の生徒数しか集まっていない。

文系、理系の二つのコースに分かれ行われている。

いつものうるさい三人組は揃っていなかつたが、それでも十分椎

名萌は元気だつた。

こいつがあの時何を考えていたかは知らない。

タケがどんな風にこいつを撮ったのかも知らない。

偶然かもしれない。

ただ、気になる一枚ではあつた。

あの表情。

あの顔。

あんな表情、するのか？

あんな顔、するのか？

そう思つたから、見てみただけ。

ただ、それだけのこと。

改めて椎名萌を見てみると。

やつぱり変な奴だつた。

朝からよく喋り、よく笑う。

よく動き、よく笑う。

疲れないのか？

午前の講習が始まつた。

同じ列に座つた椎名萌の横顔が見える。

勉強中は真剣な顔・・・

でもないか。

真剣な表情でもなく、黒板を見つめる表情でもなく。
なんだろう。

あの顔。
どの顔。
その顔。

こいつの表情はぐるぐる変わるな。

常に一定ではない。

やっぱり賑やかな奴だ。

そして、変な女だ。

休憩時間になつた。

トイレに行く者、席を立つ者、教室内が騒がしくなる。休憩中も、あいつの表情は忙しくらい変わっていた。外を見たり、人を追いかけたりと視線がぶつかる。特に一富の姿を目で追っているのは・・・
金魚のフンだな。

一富父がいないと不安そうな表情をするのか？隣の奴が席を立つと、椎名萌の目線がこっちに向けられた。

「あ、あのね、あきちゃん。」

少し表情が変わる。

写真の顔・・・とは違う、

「さ、昨日の」となのだけど

そう言つと、いつむいたまま、顔を上げよつとしない。

なんだ？

その顔。
なんだ。

「な、なんでもない。」

おいおい。

なんでもないって・・・

おいおい。

なんだ、その顔。

俺は何も言つていなし、何もしていなide。

それなりに、ぐるぐる変わる表情。

変な奴。

変な女。

やつぱり変な女。

午前の講習が終わった。

片付けをしていると。

あの奇怪な声が聞こえてきた。

「ひやあああー @ @ @」

声をあげ、首をすくめてくる。

「ああひりやんやめ

」

おこねこ。

やつたのは俺じやないぞ。

「椎名ひりやん首弱いつて本当だつたんだ。」

笑顔で立っていたのは北山。

「あ、うん。」

「この間あきひりやんがやつてこゐの見てや、おれもやつてみよつか

なーなんて。」「

おーおー。

どうでもこいけど、落とした物ぐらーい拾えよ。

「これ。」

二人の間にプリントを差し出す。
わざわざひ拾つてやつた。

「ありがと。」

この時の顔も、写真と違つた。

そう、写真と。

今日も変な女だった。

ただ、それだけのこと。

3 .

七月末。

今日は校外模試。

県内から受験生が集まるという、面倒くさいが受験生には付き物だ。
前回の定期試験は順調だったが、所詮校内試験。

これで県内の自分の位置がわかる。

面倒くさいが会場までは電車移動。

当然、見慣れない制服を着た他校の生徒も乗っている。
受験生・・・か。

午前三教科、昼休みを挟んで午後二教科。

昼休み、別の教室で受験していたタケがやつて來た。

「 楽勝 」?

タケは笑つていた。

「 まあ、あれだね。終わりがないね。受験も。俺等も。」

俺等も。

そう言つた、タケの気持ちはよくわかる。

高校受験。

たかが受験。

でも、タケにとつては、俺にとつても、十分意味深い。

だから、わかる。

だから、わかるお互いが。

だから、一緒に居る。

その時が来るまで。

試験を全て終え、最寄り駅に着く頃には、辺りはすっかり暗くなつていた。

同時にお腹が空いてきたと男子達で駅の立ち食いそば屋に駆け込んだ。

んだ。

ふと、顔を上げると。

視界に入る。

ばか女が一人でふらふらしている。

今日はばか女を観察しなかつたな。

それだけ俺に余裕がなかつたつてことか。

なんだか笑えてしまう。

たかが校外試験に。

自分が囚われていただなんて。

認めたくないけれど。

事実。

今日は余裕がなかつた。

どんな結果が出るのか。

一人でふらふらしているばか女。

一富父はそばに夢中らしかつた。

変な女。

どんな顔をしているのか。

暗くてここからはよく見えない。

だが、

「ねえー見てー」

そう言つて振り返つた顔。

笑顔が見えた。

いつもの、笑顔。

そして、田が呟つ。

距離はあるけれど、確かにあいつも俺を見ていた。

俺はあいつを見ていた。

一富父が見てくれないことに気づいたのか。

ばか女はそのまま固まつっていた。

とぼとぼと、ゆっくり歩いてきたばか女。

顔は下に向けているのでわからなかつた。

どんな表情をしているのか。

どんな顔をしているのか。

暗くてよく見えない。

あの写真の顔とは違う。

そして、一富の後ろに隠れるようにして帰つて行く。

「あきひやん、俺らも帰らひつよ。」

「ああ。」

同じ方向に帰る関君に声をかけられた。

最後。

方向が分かれる曲がり角のところで、一度だけ。

一度だけ振り返った。

そして、目が合つた。

そして、外された。

視線を逸らした。

あいつも俺を見ていた。

俺はあいつを見ていた。

どんな表情をしているのか。

どんな顔をしているのか。

ここからではよく見えなかつた。

騒いだり、笑つたり、静かだつたり、ふらふらしていたり。

下を向いたり、目を逸らしたり。

やつぱり最後も変な女だつた。

ただ、それだけのこと。

それから五日が過ぎた。

八月に入ると相も変わらず、夏はただただ、暑かつた。
部活のない長い夏休み。

特別、何をするわけでもなく。

俺はゆっくりとたくさんの時間を過ごしていた。

「おはよっ。」

居間に下りると、ばあちゃんがスイカを食べていた。

「晃、おはよう。今日も学校かい？」

「うん。」

「暑いのに大変じゃの？。」

一応俺も受験生なんだけど。

ばあちゃんに塾へ通うことを勧められたことはあったけれど。

それ以外、ばあちゃんから勉強の事をとやかく言われることがなくな

かつた。

いや。

言わせないよ、聞かれないよとしていたのかもしれない。

「今日は夏祭りじやて。」

「うん。」

「晃は行くん？」

「うん。」

「ほお。珍しい。」

「ううか？

去年もタケ達と行つた覚えがあるだ。

ボケたか？ばあちゃん。

「じゃ夕食はいらんね。」

「うん。」

別に。

祭りが好きなわけでも、嫌いなわけでもないけど。

祭りとか、クリスマスとか、行事が好きな奴らが一般的なようだ。

別にそれに合わせる位はするわけで。

特別、何があるわけでもないけれど。

なんとなく、誰かに誘われるので、毎年行っていた。

今年は一宮達と行くんだった。

また大人数。

でもタケもいるから仕方ない。

ただ、それだけのこと。

午前は学校へ行った。

講習を受ける教室で、あいつと顔を会わせた。

「お、おはよう。」

いつもの挨拶。

にしては、何かおかしい。

おかしいのはいつもか。

変な女、椎名萌。

「ひやあ@#@@」

「椎名ちやん、おはよー。」

挨拶に加え、首をくすぐったのは北山。

「北山くん、やめてって言つていいよ。」

「今日楽しみだねー。祭り。椎名ちやんの私服姿も楽しみだ。
「椎名さんのお私服ってどんな感じなの？」

北山の声に前回参加していなかつた男子が会話に加わる。

「今日もスカート？」

「えつ、ミニスカ？」

「ハハなの？」

「お前ら変なこと考えてんじゃねーの。」

「それは北山だろー。」

「はははー。」

おいおい。

どうでもいいが、騒ぐなりあつちでやつてくれ。

朝からつるさいのは勘弁。

次々会話が飛んでくる。

と。

周りの奴等から、あいつはどう思われているのか。
少なくとも北山は椎名萌に興味有りだな。
ちょっかい出すのも、わざとらしい行動も。
見ていてわかる。
見てればわかる。
まるで以前に見た光景。
あの時と同じ。

こんな時、あいつはどんな表情なのか。

男子達にからかわれ。

北山にちょっかいを出され。

黙るか？

困るか？

泣くか？

いや。

泣かない・・・か。

こいつは由利ほど弱くはないか。

こんな時、いつもだつたら助け舟を出す一富が今はいない。

「北山。」

「なにー？」

「前にお前が欲しいっていっていたやつ、タケが持ってるって。」

「まじで？」

「今日持ってきてるってよ。」

「見る見るー！」

そう言つと嬉しそうにタケの方に駆け寄る北山。
俺も後に続くことにした。

視界の隅に入ってきたのは、教室から小走りで出て行く姿。

泣いてない・・か。

あいつは強いのか？

教室では北山が抜けた後も男子達の会話が続けていた。

「椎名さんて下ネタ系苦手？」

「あ、おれもそう思ったー。」

おいおい。

聞こえてるつてば。

「可哀想なことしたか？」

「純情ぶつているだけだろ。」

「案外やり手だとおもうぜ。」

おいおい。

だから、聞こえてるつてば。
いくら本人がいないからって・・・

「だつてあいつ松岡のこと好きだつたろ？」

「あー、そーいやそんな噂あつたな。」

「でもあればテーマだつたんだろ?」「

「でもキタは椎名狙いかな。」

「おもしれーじゃん。」

「下向いて顔真っ赤だつたじゃん。」

「まんざらでもないつてことか?」

「誰が顔真っ赤だつたってえ?」

盛り上がりでいる男子達の輪に、教室に入ってきた千夏が駆け寄った。

「めぐちゃんがなんだつて?」

「椎名が顔真っ赤だつたつて話?」

笑いながら尚も会話が盛り上がりでいる男子達。

「へえ~。それはどんな楽しい話をしていたのかしら?」

「違うだろ。やり手だつて話?」

「おいおい、直接だなー。」

さりに笑いが起る。

「ふーん、それでえ?」

千夏の表情に怒りが込められていくのに気がついた男子が慌てて口にまわる。

「いや、別に俺達は下ネタ系の話が椎名やひと苦手なのかと・・・」

「な、なあ。」

「そ、そいつ。」

全員頷き、苦笑いをしている。

どうやら北川を怒らせてしまったことに気が付いた男子達。

「あのねー、めぐちやんにそんな話持ち掛けないでよね。するなら私が相手するから。」

「そ、そうだよな。」

「ははは、北川さんには勝てないなー。」

自分達が言に過ぎたことに非を認め始めた男子達。

「ー、講習そろそろ始まるかなー。」

「そうだなー。」

苦し紛れな言い訳をして散つていった。

「まつたぐ。」

バカな男子にうんざりといった表情の北川。
ここにもいたか。
ばか女の親友?が。

そして、もう一人。

「ちーなつつ。」

後ろから一富が二コ一コしてやつてくる。

「あんたどこのフラフラしたのよバカっ。」「わあ。こきなり怒んなくてもいいじゃん。」

「一畠父、登場。

今回はだいぶ出遅れたな、一畠。
おまえの出る、お得意場面だったのにな。
北川に怒鳴られている一畠。

俺は一畠のようにはなれないけれど。
一言言つただけ。

ただ、一言。

ただ、それだけの」と。

そして夜から、夏祭りへ行つた。

「おーいー。」

「あ、関君だー。」

夏祭り会場へ向かう途中で、健太と市井、関君と合流した。

「いやー、まいつた。探すの苦労したよ。」

そして一畠達とも合流。

相変わらず背の高い一畠はよく立つ。
待ち合わせの田畠には最適だ。

「じゃあ、とりあえず中心の神輿会場まで行くか。

「そうだな。」

「そこで飯くおーぜ。」

「しーなぢやんばぐれないよひよねー。」

「う、うん。」

北山は椎名萌の隣を歩いていく。

それにしても人だらけ。

それだけ祭りが好きな奴が多いということか。

夜になり、少しほ涼しくなるはずが、人混みにいると蒸し暑ささえ感じる。

すれ違う人。

交差する人。

同じ方向を向いている人。

立ち止まっている人。

走っている人。

皆、どこへ向かうのか。

これらの人、どこから来て、どこへ行くのか・・・

そんなことを考えてしまう。

人の多さに、隣の奴との会話も聞き取りにくく。
スピーカー放送からは祭りの音楽が流れ続ける。
的屋の呼び込み。

飛び交う人々の会話。

泣き叫ぶ赤ん坊。

歩行者天国の道は、まるで果てしなく続く異空間のようだ。
そんな通りをしばらく歩いて行く。

冷め止めざわめきの中
ばか女の姿が消えた。

おいおい。

こんな人混みの中、迷子になる気かよ。

前に修学旅行で迷子になつたレベルじゃねーぞ。

つたく、ばかだなー。

ばかな女。

こんな所で。

こんな時に。

ばかだなー。

やつぱりばかな女だ。

それ以上でも、それ以下でもない。

ただの、ばかな女。

変な女。

振り返った視界の中に、見つける。

その姿。

その顔。

おいおい。

仲良く喋ってる場合じゃねーぞ。

自分の置かれている状況にさえ、気づいていないばかな女だな。

ばーか。

おっ、気づいたか。

慌てた表情。

慌てた動き。

ばーか。

無闇に動くんじゃねーよ。

余計に迷うだけだぜ。

ばーか。

おもしれー。

やっぱおもしれー奴。

変な奴。

そしてばかな奴。

そんな顔？

そんな顔。

困つて。

焦つて。

戸惑つて。

慌てて。
ぱーか。

やつちじゅねーよ。

「やつ・・・」

掴まえようとした腕は、勢いよく振り払われた。
こんな力、どうから出してんだ?

「あきちゃん・・・」

顔を上げた。

おい。

おいおい。

おいおいおい・・・

なんだ。

なんだ、その顔。

「ごめん、はぐれちゃった。」

震えているのは声。

震えているのは体。

震えているのは表情・・・

なんだその顔。

泣きそづな・・・

「私・・・首と・・・心臓と・・・がつぶよつ、首に迷惑かけりや
」

今度は力を入れて腕を掴み、道の端へと連れて行った。
人混みはさらに像を増していった。

「友達？」

露店から離れた所まで来ると掴んでいた腕を離した。

「え？」

「さつきの。」

「あ、うん。前の小学校の友達なの。私転校生だつて話したかな？」

「ああ、聞いた。」

「懐かしくてつい…」めんね。みんなに迷惑かけていくよな、私。」

まだ震えている声。

まだ震えている体。

いつもよりも早口に喋つてこる。

そして・・・

その顔。

その表情。

「前の小学校つてどこの中になんの？」

「え？」

「もし転校してなかつたらどこの中学だつた？」

「第一中。」

「ふーん。」

少し、会話が戻つている。

声も出てきた。

少しほ落ち着いたか。

表情は・・・

さつきとは違う。
なんだ。

なんだ、その顔。

今度はなんだ。

なんだ、この感情・・・

「あきちゃん、知つている人いる?」

「部活で顔見知りは何人か。」

「そつかあ。」

転入生というワード。

何回か、聞いたことがある。

こいつの口からも。

転入生。

こいつは転入生。

小五の時の転入生。

俺が探してた・・・

「一本道だから、にの達はこの先で待つていてるだろ。」

「あ、そつか。そうだよね、御神輿見るつて。それまで一本道だね。」

「

転入生。

お前は、転入生なのか?

あの時の・・・

コンクールの会場にいたのか?

聞きたい。

聞いてしまいたい。

いや。

関係ない。

関係がない。

こいつか転入生であろうと、無からうと。

俺にはもつ。

今更・・・

「「めんね、あきひやん、迷惑かけて。」

「私バカだねー、真っ直ぐ歩いていけば着いたのにね。」

そう言つと、笑つてみせた。

ばか女が笑う。

いつもの顔。

いつものうるさくて、騒がしくて、ばかな顔。

それだけなのに。

それだけのことなに。

ただ・・・

「でも・・あきひやん私がいなくなつたのに戻つこてくれたのだね。

」

おまえがその顔をするから。
おまえがそんな顔をするから。
俺は・・・
なんだ、この気分。

「見てたから。」

目が合ひ。

こいつが俺を見ている。
俺がこいつを見ている。
それだけのこと。
それだけのことなのに。
おまえがその顔をするから。

おまえがそんな顔をするのか。

俺は・・・

なんだ、この気持。

「あきちゃん、」

「この間ね、タケやんが…あきちゃんが私のこと気にしているって
言つていたの。」

なんで。

なんで、その顔。

なんで、そんな顔。

なんで・・・

俺は・・・

「その話、ほんと?」

「さあ?」

「ほんと?」

なんで。

なんでおまえはそんな顔をしてくる?

何を考えている?

何を思つている?

何を・・・

俺は・・・

「おまえは、俺のことを想つてたの?..」

俺は・・・
何を・・・
何を・・・
何を考へていろ?

何を思つてゐる?

何を・・・

これは何だ?

この感情は何だ?

「さあ、気になるよ。」

「ふーん。」

気になる?

気になるつていつのか?

気になるつて・・・

「じゃあ、この前好きな奴いるつて、誰?」

答えを言つてくれ。

この感情の。

この気持ちの。

この想いの。

答えを・・・

「・・・あきぢやん。」

「ふーん。」

「俺もおまえのこと気になる。」

「ほ、ほんと?」

驚いた表情で聞き返していく。

「あきぢやん、ほんと?」
「ああ。」
「ほんと?」

「ああ。」

「ほんと?」

「本当。」

「ほんとう。」

表情が明るくなり、笑顔がほられる。

ああ。

この表情。

この顔。

こいつは、この表情が良い。
俺が見たかったのはこれ。
俺が見たかったのはこいつ。

「しつこいぞ。」

「本当なんだね。」

「もう行こう。」

「うん!」

「うん!」

先を歩いていると、小走りで隣に追いついてきた。

「あ、あきちゃん。」

「ん?」

「手…つないでもいい?」

さつきとは違う表情。

下を向いているけれど。

薄暗いけれど。

それはわかる。

「あ、ほら人多いし、またはぐれると……」「あんな。嫌なら

嫌なら

「

「ほひ。」

手を差し出した。

「もう行こう。」

そう言つて歩き出した。

それから、手に触れるとついて來た。
さつき掴んだ腕とは違う感触。

あの表情とあの顔と。

あの感情と手の感触。

なんだ。

なんだ。

答えは簡単じゃないか。

答えは簡単だつたんじゃないか。

俺が見ていたのはこいつで。
俺が見ているのはこいつで。

表情が気になるのは。

顔が見たいから。

何でとわからなかつたのは。

顔が見たかつたから。

わからぬい感情は。

こいつを見ていればわかる。

手の感触は。

こいつが教えてくれた。

だから俺はここに來た。

だから俺はここに居る。

こいつを見ていたから。
ずっと見ていたから。
だから。

だから俺はこいつが気になるんだ。
だから俺はこいつを気にするんだ。
ただ、それだけのこと。

「あ、来た来たー。」

「おーい、椎名さん、あきひやんー。」

神輿会場に着くと皆が待っていた。

「ごめんねー。」

「びっくりだよ、いつの間にかいなくなつてんだもん。」

「しーなちゃんかき氷食べる?」

「わ、みんな買つてるんだ。私も何か買つて来ようかな。」

「一人で行くなよー、迷子になるから。」

「あははー、言えるー。」

「も、もう大丈夫だよ。」

「あははー。」

屋台の方へ向かっていく表情は、さつきまでの顔とはまつ違つて

いた。

皆と会つて安心したのか。

またいつも賑やかな椎名萌に戻つていた。

「あきちゃん、もえの事ありがとな。もえ、方向音痴だから毎年
よつこはぐれでさ。」

「ああ。」

毎年・・・か。

不思議だな。

毎年來ていたはずの夏祭り。

この人混みのどこかに、一回とあいつも來ていた夏祭り。
これだけの人の中で、何も見ず、何も感じず、毎年過ぎていた夏祭り。

見ようとしていなかつたのは俺。

感じようとしていなかつたのは俺。

何も見なくとも良かつた。

何も感じなくとも良かつた。

別に困ることなど無い。

別に必要も無い。

そう思つていた。

でも・・・

「にのーつ、見てみてー、りんご飴。」

「おー、もえ、買えたかー？」

嬉しそうに。

そう、嬉しそうにはしゃぐあいつを見ている。
あいつを見ている俺。

さつきまでの表情とは違う。

泣いたり、笑ったり、困ったり、騒いだり。
くるくる表情が変わる。

そんな変な奴だけど・・・

そんなあいつを見て何かを感じたのは俺。
あいつが気になると感じたのは俺。

気になるのは・・・

白いワンピースから日焼けした腕が伸びている。

その手が、あつひじひに元回る。

忙しそうに。

しつかり掘まないとどこかへ行つてしまつ。

そう。

捕まえられないくらい、あいつはいつだって元氣だ。

「あきちゃん、はい。」

手渡されたのはチヨコバナナ。

おいおい。

甘いだろ。

それでも隣で美味しそうに食べているのを見ると。
それも有りかと思つてしまつ。

暑くて、うるさくて。

ただ、ただ、面倒くさいはずの夏祭りも。
こいつが見せる表情には合つてこない。
そう思つた。

「じゃー、解散。」

「気をつけてねー。」

「バイバイ。」

「またなー。」

それぞれの岐路に着く分岐点。

明かりの少ない道端で。

あいつの顔がまた違つて見えた。

さつきまでの祭りの会場の明るさよりも。

薄暗い今の方が落ち着いて見えた。

涼しい風吹く帰り道。

夏の夜空は星がぼやけて見える。

霧がかかつたような空。

あの青い空のように、澄み切った空はまだ見えない。

いつか・・・

また見えるだろうか。

また見ることができるだろうか。

夜空に向かって手をかざしてみた。

指の間をすり抜ける風。

指の間から見える夜空。

指の間から見えるのは・・・

暗闇。

手の感覚を思い出す。

あいつの手・・・

小さくて。

女の手。

小さくて。

温かい手。

女の手。

母親も、

小さい手で絵を描いていたのだろうか。

さつきまでの賑やかな祭りの音はもうとっくに消え
うるさいくらいに鳴いているのは虫の声。

夜の空。

それもいいかもしない。

暗闇に照らす光。

それは月明り。

それは街灯。

それでもいい。

夏の空、夏の風、夏の音。

感じたくなつた。

手を・・・

動かしてみたくなつた。

手で・・・

描いてみたくなつた。

急に。

絵を。

見上げたのは夏の空。

5・秋の空

1.

何処か知らないが、でつかい草原が広がっていて。
心地良い風が吹いていて。

上を見上げれば俺の好きな空。

青空。

なんだこれ。

夢か？

夢の中か？

人影。

後姿が見える。

誰だ？

わからない。

だんだんと近付いてくる人影。

俺が近付いているのか？

影の方が近付いてくるのか？

わからない。

そして振り向かない。

誰だ？

誰なんだ？

別に誰だとしてもいいじゃないか。

誰だとしても関係が無いじゃないか。

そう、関係ない。

でも・・・

なんだこれ。

この気持ち。

どこかで・・・

ああ。

そう。

気になる。
気になるだ。
この感情は。
気になる。

♪♪♪♪♪♪♪

いつもの音で目が覚めた。
そう、いつもの。
聞きなれた音。

見慣れない夢を見たせいか。
夢・・・
夢か。

一学期が始まった。

九月といえど、まだまだ暑い。
夏休みボケが抜けない奴ら。
部活ボケが抜けない奴ら。
微妙な空気の流れる教室で。
放課後、タケを待つていると椎名萌に話しかけられた。
少し、日焼けの残る肌が半袖の制服から見えている。

「髪切ったね。」

「切つてない。」

「うそ、切つたよね。」

「見間違え。」

「切つたよね。わかるもん。」

「暑いからな。」

「私も切らうかな。そろそろ肩についた。」

そう言つて、頭を傾げるから。

視界に飛び込んできた髪に、手を伸ばしたくなる。

「伸びたな。」

そう言つて髪に触れる、表情が変わつていくのがわかる。
これはこれでおもしろい反応。

最初は首をくすぐつてやるつかと思つたが。

「俺、長い髪つて好きなんだ。」

「そ、そりなんだ。」

「それかショート。」

「長いか短いかどちらかがいいってことね。」

少し残念そうな表情をして笑つているのがわかる。
が、次の瞬間にもう違う表情をしてくる。
ほんとこのいつの表情は忙しくなると変わる。

「あ、私も去年まではもう少し長かったよ。」

「知ってる。」

「そつか。残念だな。私は去年のあきちゃんを覚えていないもの。」

だろうな。

おまえは俺のことを知らなかつたのだから。
おまえは俺のことを知らうとしなかつたのだから。
俺はタケや一富の周りをウロウロしていた変な女と氣付いていた
が。

「よく見かけた。」

「その時の私はどんなどつたの?..」

「変な奴。」

「えつ? 变?」

「ぎやあぎやあうるさかつたな。」

「変でうるさいくて…って私良い所ないじやない。」

「いつも笑つてるから変な奴だと思つてた。」

「楽しかつたのかな、毎日が。」

「悩みもなさそうで、バカっぽく見えてた。」

「そうなの? 私印象悪いね。」

「でも、悩んでそなのも見て、ああ、別に変な奴ではないなと思つた。」

「そつかあ。」

そう。

いつも笑つてゐる、いつも騒いでいる、誰のつるせい女だと思つ
ていた。

でも、いつの間にか色々な表情を見つけてゐるつれい・たけひづれい・..

そう、こいつを見つけてゐる俺に気付いた。

俺が、こいつを見つけていた。

「俺のこと?」
「お前は?」
「えつ?」
「俺のこと?」

少しの間が空いた。

「えっと、印象ね。」

そう言つて、話し始めたこいつの表情は、見ていて飽きないくらいくるくると変わる。

ただの「うるさい女だ」と思つていた椎名萌と普通に会話をする日が来るなんて、去年までの俺には考えられないとだった。

人とのかかわりが面倒くさかった。

女子と話すなんてもつと面倒くさかった。

返事をしないと倍返しで騒がれる女、

大人しくてちょっとときついことを言われるとすぐに泣き出す女、自己主張が強く変な正義感を持つている女、

かかわるのが面倒くさい女子ばかりが周りにいた。

「はじめは怖かったかな。」

「ふーん。」

「話しかけても無視するし、笑ってくれないし。」

「でも、他の人としゃべっている時は楽しそうにしていて、もしかして私嫌われているのかなって悩んだりもした。」

「へー。」

「絵をね、あきちゃんが描いた絵を、あきちゃんが描いてるとは思わなくて、同一人物だと知つて驚いたよ。」

「なんだそれ。」

「だんだん話すようになつて、優しいとこや笑顔とか見られるようになって、印象変わったよ。」

「ふーん。」

絵か。

こいつが見ていた絵は去年の写生大会で描いた絵。

誰にも気付かれたかった絵。

誰にも誉められなかつた絵。

誰にもわかつてもらえなかつた絵。

俺にはもう一つ、

もう一つ抱えている絵がある。

目の前で笑う椎名萌。

俺と向き合つて話す女。

こいつの表情を見ていたいと思った。
うるさい声も、いつの間にか聞かない日は無くなつた。
気になつていた表情も、
気になつっていた感情も、
こいつを見ているといつの間にか答えが出ている。
不思議な女。

「お待たせ、晃。」

タケが教室に入ってきた。

椎名萌はヒロアキと千夏としゃべり始めた。
いつもうるさい三人組。

「KEIGO 10月号、そろそく見に帰りますか。」

「おう。」

始業式が終わると午前で学校は終わり。

下級生達が部活動に励む校庭を横目に、タケの家へと向かつた。

「晃、それ筆ダコ?」

さすが長い付き合いなだけある。

小さな変化に気付くタケも俺の事を見ててくれている唯一の友達だ。

「ああ。」

「え、じゃあ・・・描いたのか？」

「夏休み暇だつたからな。」

「ふうん・・・」

意味深な声。

だが、それ以上何も聞いてこないタケ。

わかつてくれているから、タケとの付き合いは楽だ。

「ベンだこかとも思つたんだけど、勉強じゃあそんなどりつけないよな。」

「タケは夏休み、塾大変だつたのか？」

「おうよ。ほとんじ毎日夏期講習詰めで死ぬかと思つた。」

タケは親から決められた進路を進む為に、親の決めた塾へ通わされていいる。

なんでも有名な教師のいる塾らしく、入塾するのにも大変なのだとか。

授業料も高くて有り難い。

「晃は？学校の夏期講習出てたのか？」

「気が向いた時だけ。」

「はは。晃らしいな～」

「絵、どいじで描いてたんだ？家じや描きびらこんだろ？」

「美術室。」

「あ、そつか。課題やつていいって、夏休み美術室開いてたんだっけか。」

「そう。」

「誰が来た?」

「誰も。」

「だよな~はは。選択授業の課題に誰も真面目に取り組まんよな~。」

夏の空。

あの夜、急に描きたくなつた。
暗闇の中に射したもの。
それは月明りだつたのか、
それは街灯だつたのか、
光だつたのかさえわからなかつた。

それでも・・・

夏の空、夏の風、夏の音。
感じたくなつた。

手を・・・

動かしてみたくなつた。

何年振りだらうか。

授業でも、課題でもなく、
自分の意思で絵を描いた。

その夜だつた。

まだだ。
またあの夢・・・
続いか?

いや、違う。

広い草原のような景色が一面に広がっている。心地良い位の風が吹いている。

そこに立つ一人の女性。

俺が近づいていいているのか、

相手が近づいているのかはわからない。

誰なのか。

誰であろうと関係はないのだが、

気になってしまふ。

誰なのか。

その後姿は・・・

白い壁。
白い天井。

どうやら田が覚めてしまったようだ。

最近、同じような夢を見て目覚めることが多い。覚えている時もあれば、覚えていない時もある。いつたい何なんだ。

何なんだ、この夢は。

始業式の翌日から試験が始まった。

部活動も引退し、いよいよ受験生となる一学期。

まだ蒸し暑く夏は終わっていないのに、もう秋になつたから受験生だと決め付けるかのように試験が押し寄せてくる。もう今までこれからは違うのだからと強引に先へ進めようと。

当たり前の事だが、受験対策の試験であつて。

出題範囲は中学3年間分。

今までの定期試験とは違い、範囲は全て。

限られた範囲さえ勉強しておけば解ける試験とは人縄ではいかない。

今更気付いた訳ではないが、今回の試験の手応えは正直言つとあまり無い。

塾の夏期講習詰めに遭つて死ぬかと思つた位勉強したタケ。

俺は・・・

夏休み後半、穏やかな気持ちで過ごしていた。

まるで受験生ということは頭から離れてしまつていた。

穏やかに。

そう、静かに一人で絵を描いていたんだ。

「ただいま。」

玄関に見慣れない男物の靴があることに気が付いた。

亘兄の物ではなかつたし、亘兄がこんな時間に帰つてくるはずもないだろ?つ。

その答えは意外なところにあつた。

「おかえりー、晃。手ー洗つといで。」

言われるまま、洗面所へ入ると、台所からばあちゃんの声が続いて聞こえてきた。

「勝が帰つて来とんよー。大学はまだ夏休みじやで。」

「東北の有名なせんべい買ってきてくれたとよー。」

勝兄は長男で大学3年。

東北の大学にスポーツ特待生として入学し、寮に入つてゐる。

去年も一昨年も正月にしか帰つてこなかつたが。
大学は9月になつてもまだ夏休みなのか。

「よう。でかくなつたな。」

「ほら、晃、座つて食べんしゃい。」

久しぶりに見る勝兄。

相変わらず体格が良い。

中学で陸上を始め、県の中学生記録を持つている。

未だその記録が破られていない為、今でも校長室の前には立派な成績が称えられている。

その穂高の名に、俺がどれだけ悩まされたことか。

「勝は来年教育実習を受けるとよ。」

嬉しそうにお茶を啜りながら話すばあちゃん。

三人兄弟の一番上。

昔からばあちゃんは勝兄を頼りにしていた。

明るい性格で社交性も有り、近所の人からも勝兄は人気があつた。

スポーツ推薦で東北の大学へ特待入学。

学費免除に寮生活、家計にとつても出来の良い兄
ばあちゃんの自慢の孫だろう。

「それで帰つてきて学校を挨拶行つて来たんで。」

別に興味の無かつた俺は、一応お茶の場に付き合つたが勝兄と話すことはなかつた。

物心付いた頃から、兄達に嫌われていたから。

6歳が離れた勝兄は小学校に上がる年に母親を亡くした。
6年分の母親との思い出。

小学生になつたのに母親が居なかつた事、授業参観にばあちゃんが来ていた事、色々と思うことはあつただろう。

頼りのばあちゃんは俺の育児にかかりつきりだつた頃でもあつたし。

生まれた時から母親を知らない俺にとつては、母親が居ないことが当たり前だつたから、学校でも授業参観でもばあちゃんが居るのが当たり前だつた。

ただ、それだけのこと。

弟を可愛がれ無かつた。

ただ、それだけのこと。

“コソコソ”

部屋に戻るとノックをされた。

一応教科書を開いたが、勉強しているフリと思われただろう。不自然さが残つてしまつた。

「ちよつといいか。」

意外な訪問者は勝兄だつた。
お互い顔は見なかつた。

「受験校は決めたのか?」

「一応。」

「ふーん。」

沈黙と同時に、勝兄の視線が部屋中に向けられていふことに気が付いた。

いや、気付くのが遅かつたのだろう。
既に。

「今日おまえの学校行って来たんだけど、」

「ういえば。

さつきはあちやんが、教育実習の挨拶とか話してたか。
それってうちの中学生事だつたのか。

教育実習ことは、勝元教師になるつもりなのか。
べつに、どうだつていいくど。

今年卒業する俺にとって、教育実習なんて関係が無いのだけれど。

「おまえさ、絵まだ描いてるんだって？」

緊張感。

いや、違う。

血の気が引くといふのはいつこいつ時に使う言葉なのか。
と、冷静にも自分を分析している俺がいた。

「美術の先生、俺の元担任だからさ。おまえが絵を描いてる」と
嬉しそうに話してくれたよ。」

「まあ・・・亘には見つかねーよつにな。」

「受験勉強頑張れな。」

最後の方は勝元が何を言つていたのか覚えていない。
覚えているのは・・・

絵をまだ描いているのか の台詞。
この台詞が頭から消えなかつた。

絵を・・・

知られた。

絵を描いていたことを・・・

知られた。

絵に興味があることを・・・

気付かれた。

絵に未練があることを・・・

気付かれた。

ただ、それだけのこと。

またか。

あの夢だ。

またいる。

あの女性。

後姿だが、髪が長い。

いつも俺は声をかけない。

いつも俺は触れようとしない。

でも・・・

徐々に近づいている。

相手が近づいて来ているのかはわからない。

誰だ。

いつたい・・・

誰なんだ。

何で俺の夢に出てくる?

何で俺の夢に・・・

手を伸ばしてみる。

届く距離に腕がある。

細い腕。

女の腕。

掴んで・・・

振り返えらせたその姿は・・・

“ガバッ！！”

勢い良く体を起こしたせいで、枕元に置いてあつた参考書の山が床に崩れ落ちた。

その音で、現実に。

一気に目が覚めた。

目覚まし時計を見ると6時半。

まだ起床時間の針まで迫り着いていなかつた。

8時に家を出れば間に合ひう距離。

だが、早く家を出ることにした。

勝兄と朝食の時間に顔を合わせたくなかつた。

学校へ着くと7時半。

校庭には朝練に励む運動部の下級生達が見える。

九月一週目の朝はまだ蒸し暑さが残つてゐる。

それでも、誰もいない校舎の中はひんやりしていた。

教室へは行かず、図書室へ向かつた。

静かな廊下に響く、自分の足音だけを聞くとなんだか安堵を覚え
た。

誰もいない図書室。

本の匂い。

木の長机。

そこに彫られた様々な落書き。

きつと何年も前から彫られてきたのだらつ。

好きな芸能人の名前、卒業年月日、誰かと誰かの相合傘・・・

勝兄も、亘兄も、

じに座っていたのかもしれない。

今朝見た夢を思い出す。

慌てて起きたせいで、普段使わない筋肉を使ったのだろう。
背中に少し違和感を感じる。

慌てて起きたのは、目を覚ましたかったから。
目を覚ます必要があつたから。

早く現実に。

一刻も早く夢を終わらせたかったから。

夢の中ではつと立っていた女性。

青空の日もあれば、無着色の空の日もあつた。

背景は違えど、女性はいつも立っていた。

俺は話しかけようともしなかつたし、

振り向かせようだなんて思わなかつた。

でも・・・

近づいて、手を伸ばせば届く距離になつてしまつた。

振り向かせてしまつた。

あいつだった。

振り向いた顔、あいつだった。

振り向かせた女、あいつだった。

そう。

椎名萌。

夢。

そう、ただの夢。

ただ、それだけのこと。

図書室に入ってきた。

気がつくと登校時間になっていた。

図書委員だらう。

本棚の整理を始めていた。

俺は静かに図書室を後にした。

教室までの道、避けて通ることもできたのだが、美術室の前を通つた。

今はもう飾られていない絵。

去年までは飾られていた俺の絵。

賞を取るつもりで描いたわけではないのに。

選ばれてしまった俺の絵。

誰にも気付かれなかつた俺の絵。

誰にも讃められなかつた俺の絵。

誰にもわかつてもらえなかつた俺の絵。

もう、いいじゃないか。

十分じゃないか。

「まだ絵を描いているのか」

勝兄の台詞が頭の中で繰り返される。

エンドレスリピート。

まるで、俺の生き方そのものだ。

勝兄に知られてしまった。

絵を描いていること。

勝兄に知られてしまった。

絵に興味があることを。

勝兄に知られてしまった。

絵に未練があることを。

俺が絵を描くことは家族を悲しませる。
俺が絵を描くことは俺の立場も悪くなる。

わかつていてることではないか。
わかつていたことではないか。

なのに・・・
なんで・・・
こんな大事なことを忘れていただなんて。
こんな大事なことを忘れていたんだ。

「あきちゃん、おはよー。」

いつもの声。
いつものうるさい女。

そう、いつもの。
でも、顔を上げることができなかつた。
あいつの顔を見ることができなかつた。
振り向かせてしまつたあいつの顔は。
ただ、それだけのこと。

家に帰ると、男物の靴は無くなつていた。
勝兄、出かけているのか。

「おかえりー、晃。」

和室から聞こえてくるこつものばあちゃんの声。

「勝、高校の友達に呼ばれたとて、今夜は遅くなるやつや。」

「そう。」

「せつかく帰つて、家でゆっくりする時間も無いがや。」

「勝は昔から友達が多かったからね。母親おらんで寂しいのを友達と遊んで紛らわしとつたんかねー。」

俺は何も言わずに、あちやんの煎ってくれた麦茶を一気に飲み干した。

何も言えない。

俺には何も言えない。

「勝な、卒業したうちは帰つて来ると。」

「」
「」
「」

「勝が教師ば・・・なんか信じられんねー。」

ばあちやんの嬉しそうな声。

勝兄が家に戻つてくる事、教師といつ立派な職業に就く事、どうりもあちやんことしては幸せな報告だつたのだ。

「晃は？」

ばあちやんの懶氣話から、一気に現実に引き戻されたので焦つた。

「晃は進路どりするん? 来月にはほり、あるじやひ、二者面談。」

「ああ。」

「晃はなりたい職業とかあるん?」

「べつに。」

「べつにて、無いんかいな。勝みたいに教師とか、医師みたいに医者とか。」

い、医者?
おこおこ。

亘兄が医者を田舎しているだなんて話、初耳だぞ。

「晃は・・・」

そう言つてばあちやんが言葉を選ぶよつて話し始めたのがわかつた。

勝、亘、晃。

それぞれに対する想いがばあちやんにはあるのだろう。男三人兄弟をばあちやん一人で育ててくれたのだから。

「晃は自分のやりたい事をやればいいんだよ。勝もそう言つてたが
や。」

「あんまり無理せんど、頑張りすぎんよ」

そう言つて、先に席を立つたのはばあちやんの方だった。
麦茶のポットを持つて。
ばあちやんの煎れる麦茶。

夏の味。

毎年当たり前のように飲んできた味。
九月に入つてもまだまだ暑い口が続いている。

ばあちやんが何を言いたかったのか。
勝兄はばあちやんと何を話したのか。
勝兄は、ばあちやんに俺の話をしたのだろうか。
ばあちやんは勝兄から俺の話を聞いたのだろうか。

「まだ絵を描いているのか」

止まることのないリピート中の台詞。
ばあちやんは知っているのだろうか。
ばあちやんもそう思つているのだろうか。

ばあちゃんを悲しませただろうか。

「あきちゃん、おはよう。」

翌朝も、いつものように朝が始まった。
下駄箱で声をかけられたが、返事はしなかった。
いつものこと。

教室まで隣を歩くこいつの顔が見れなかつた。
隣にいるこいつの顔が見れなかつた。
隣で話す椎名萌の声が耳に入つてこなかつた。
ただ、それだけのこと。

教室に入るといつものようにうるさい三人組が喋り始めた。
いつものこと。

でも、うるさく感じなかつた。

あいつらの声が耳に入つてこなかつた。

あいつの顔が見れないのも、

あいつの顔を見なくともべつにいい。
あいつの顔を見たいと思わないから。

あいつの事が気にならないのも、

あいつの事を気にしなくともべつにいい。

あいつの事を気にかけたいと思わないから。

俺は・・・

俺が絵を描くことは家族を悲しませる。
俺が絵を描くことは俺の立場も悪くなる。

わかつていてることではないか。
わかつていたことではないか。

こんな大事なことを忘れていただなんて。

人とのかかわりが面倒くさかった。

女子と話すなんて、もつと面倒くさかった。
かかわるのが面倒くさい女子ばかりが周りにいた。
椎名萌は最初からうるさくて騒がしい女だった。
借り物が多く、度々やつてきては騒いで去っていく。
いつも笑っていて、いつも喋っていて、無駄に明るくて元気で。
ばかな女だと思った。

何の悩みもないばかな女だと思っていた。
かかわりたくないと思っていたのに。

面倒くさいと思っていたのに。
なのにあいつはどんどん俺の中に入ってきた。
気付くと・・・
俺があいつを田で追っていた。
俺があいつを見てしまった。

もういいじゃないか。

俺は大事なことを思い出した。

もういいじゃないか。

俺は自分の道を進む。

あいつとかかわるのはもうやめよう。

数日後、勝兄は寮へ帰った。

ばあちゃんに、勝兄が何を話したのかはわからない。
勝兄がばあちゃんに俺の話をしたのかはわからない。
あれからばあちゃんも何も言つてはこない。

それでいい。

それでいいじゃないか。
ただ、それだけのこと。

2 .

休日。

タケの家へ遊びに行つた。

インター ホンを鳴らすと、いつものお手伝いさん・・・の明るい
声ではなく、明らかに不機嫌な声の持ち主だった。

「何か？」
「穂高です。」
「ああ。雅史は今勉強中だからまたにしてもうえぬかしら。」
「はい。失礼しま・・・」

「ちから」の声を最後まで聞かずに入り、インター ホンは切られたようだ。

休みの日にお手伝いさんが居ないのは珍しいことではないが。社長と副社長のタケの両親が家に居るというは珍しかつた。

何があつたか。タケ。

いや、今の感じだと俺も相当気に入られていなかつたな。タケと友達になつてから一年が経とうとしている。

頭が良く、成績は常に十位以内。

親が会社の社長だというお金持ちの一人おぼっちゃん。

一年の時に同じクラスになつたタケは、出身小学校の違いもあり、クラスでいじめの対象になつていた。

偶然、席替えで隣の席になり、雅画伯の写真集、KEIGOの雑誌と共通の趣味を見つけ友達になつた。

中学で同じ美術感覚を得ている奴に出会えるとは思つてもいいなかつた。

物持ちは家が裕福だから。

物知りなのはそれだけ本を読んでいるから。

金持ちはのも、一人つ子なのも、タケが悪いわけではない。

子供は親を選ぶことができないのだから。

そして、タケの将来は親の会社を継ぐと決められている。

親の決めた大学に入る。その為に親の決めた塾へ行かされている。

高校までは自由にやつていいと言われていたはずだが。

受験シーズンの始まつた日曜に、友達と遊んでる時間は無い。
そんなところか。

市立図書館に寄つて画集でも眺めよつかと思つたが、
館内に入る前に気付いた。

明らかに、いつもより停まつてゐる自転車の台数が多い。

自転車置き場から溢れている。
塾の帰りに図書館で勉強か。

そんなところだらう。

こんなところで学校の奴と顔を合わせるなんて面倒くさい。
もはや秋の図書館は静かに過ぎせる場所では無くなつたようだ。

足取り重く、家に帰ると珍しく父親が居た。
こんな田舎から都内の大企業に勤めている父。
主要都市に支店を構える企業らしく、父は日本全国を飛び回つて
いる。

出張、出張、また出張。

たまに家に帰ってきたかと思えば、半口も居ないで出かけていく
こともある。

ばあちゃんに三人息子の世話を預けたまま。
べつに、今更。

父親が家に居ようが、居まいが、どうでもいいことだが。

何となく嫌な予感はしていたが。

やはり父親が居るということは、単なる休日ではなかつた。
玄関で靴を脱いでいるばあちゃんに肩をたたかれた。

「晃、父さんが話があるて。」

居間に入ると、父親と、ばあちゃんと、亘兄。

何故、亘兄まで？
と、思つたが、

三人の表情を見てわかつた。
なんとなく、大体、わかつた。

「俺は絶対嫌だからな。」こいつの為に俺が被害を被るなんて。

「亘、いいかげんにしなさい。」

「晃、座りなさい。」

久しぶりに見る父親。

久しぶりに聞く声。

正月にちらつと顔を見たきり。

その後は・・・

そういうえば、前回もこんな感じでもめてたことあったっけか。
亘兄が俺を睨んでたっけな。

余計なこと言うなよ的な目で。

今回は・・・

「晃、来月の三者面談、父さん出るかい。」

「うん。」

「高校はもう決めたのか?」

「うん。」

「そうか。塾へは行っていないうだが?」

「フラフラ遊び歩いてるような奴に塾なんて行かせることねーよ。」

「こりゃっ、亘。」

「だから、父さん、俺にもう一つ塾行かせててくれよ。俺絶対、医

大に合格してみせるから。」

「亘、今は晃と話してるんだから待ちんしゃい。」

「だって、医大を目指す奴らはもっと有名な塾を掛け持ちしてるんだぜ。そりや、俺が私立の高校通つてるってだけで金かかってんのはわかってるけど、それでも勉強しないでフランフラ遊んでおまけにまだ絵を描いているような奴にかける金があるなら、もっと俺にかけてくれたっていいだろ!」

これにはばあちゃんも亘兄を止める」とをしなかつた。

父親は、展開についていけないといつ表情をあからさまに出していた。

ばあちゃんはびこまで知っていたのか、混乱ではなく困った顔をしていた。

最後まで言い切った亘兄だけが、すつきりした顔をしていた。

「亘がもう一つ塾に通いたい話はわかった。うん。検討しよう。それで・・・」

父親は一つ一つ整理するかのように、自分に納得させながら喋っているのがわかつた。

ばあちゃんも隣で一生懸命頷いていた。

亘兄の表情にはすっかり余裕が出ていた。

次の攻撃に備えて準備を始めているかのよう。

「晃は・・・オホン。」

「つまり・・・晃は、塾へは行かない。絵を描いていた・・・といひことか?」

父親の口から絵と云う言葉。

描くという言葉。

ばあちゃんの顔から、悲しみと云う表情。

それだけで十分だつた。

充分だつたよ。

わかつてゐることではないか。

俺が絵を描くことは家族を悲しませる。

俺が絵を描くことは俺の立場も悪くなる。

わかつていたことではないか。

こんな大事なことを忘れていただなんて。

俺はどうかしていた。

俺はどうかしていたんだ。

「高校はM校を受ける。」

「は！見ものだね）。俺が落ちたM校とはずいぶん生意気なこと言つてくれるね。」

「こりや、亘、辞めんしゃい。」

「だつてそつだろ、塾にも行かず、勉強も中途半端な奴に簡単に

M校の名前を出されちゃさー。」

「もう、亘は終わりにしんしゃい。」

攻撃の準備はどうやら間に合つたようだ。

そうくると踏んでいたのか。

その割りには普通の嫌味だつたな。

もつと痛いところを突かれるかと思つていたが。

まあ、

お陰ではつきりしたけどね。

俺も。

目が覚めた。

高校受験、亘兄は第一志望のM校に不合格。

滑り止めで合格していた私立の学校に通うことになつた。

「おまえのせいだ。」

亘兄にそう言われた。

俺が居なければ、俺なんかが居なければ。

合格したのか？

ただのハツ当たり。

そんなのわかつっていた。

中学に入学すると、担任の先生から、穂高兄弟の三番目か。と言
われた。

兄貴達がそれだけ優秀だったと「う」とだらり。
勝兄がスポーツ推薦だろうが、
亘兄が成績優秀者だろうが、
別に俺には関係ない。

そう思っていた。

だが。

こうも考えるようになった。

亘兄が出来なかつたこと。

亘兄の落ちたM校に、俺が合格したら・・・
そんなことを考えなくも無かつた。

それが今、現実になつただけ。
ただ、それだけのこと。

「じゃあ、晃、来月の二者面談で。」

最後に父親らしい台詞が言えて終わることができたか。

翌日。

先日の試験の結果が出た。

廊下の掲示板に上位三十名の名前が張り出される。
いつものことだ。

そう、いつもの・・・

廊下にざわめきが広がる。

なんだ？

そのざわめきと、この結果がつながっていたのかなんてわからな
い。

誰も俺の順位を気にする奴なんていないだろ？。

順位を落した。

十位内に名前が無かつた。

ただ、それだけのこと。

「晃、どうした？」

教室にタケが入ってきたことさえ気付いていなかつた。

慌てて時計を見る。

昼休み中だつた。

一瞬、今自分の位置がわからなくなつていた。

「昨日、悪かつたな。」

「ああ。」

「塾で全国模試受けたんだけどさ、運悪く、昨日結果持ち帰つち
やつて。母親にバレて大変だつた。」

全国模試か。

俺が夏に一度だけ受けた校外模試は県内模試だつた。

その時は適当に合格圏内の高校名を書いたつけ。

M校を意識してなかつた頃だからな。

確かに、書いた三校の合格率は合格圏内で良い結果だつた。

M校、今の俺には何パーセントの合格率なのだろうか。

夏休み、勉強した奴らとしなかつた奴の差があきらかに出ていた。

掲示板の校内順位、記載された名前に変動が現れていた。

相変わらず首位を独占し続ける松岡。十位圏内を外れたことのないタケ。

十位圏外に出された俺。

「タケは高校決めた?」

「それがさ、うち大学は親の決めたといふって言つてたじやん。」「ああ。」

「高校までは自由にしていいって言つてたのにさ、昨日母親が県内で一番の高校を受けなさい。とか言い出しちゃつてさー。」

「M校か?」

「そう。おれには絶対無理だつて言つたんだけど。」

「無理なのか?」

「おいおい、晃一。M校つて言えば超がつく公立の進学校だぞ。私立より金かからんし、有名大学への進学率も高いし。親孝行だつて。」

「タケ四位じやん。」

「いやいや、今回の校内模試で四位つづつても当てにならんよ。県内模試とか全国模試で他の中学の奴らと戦つてみないと。」

「その全国模試何位?」

「聞いて驚けよ。なんと、五百八十八位!」

「・・・・。」

「微妙でしょー。」

全国模試を受けたことのない俺にとっては、五百八十八位が良いのか悪いのかはわかるはずもなかつた。

単純計算で・・・

全国都道府県四十七で割つたとして・・・

四百七十位くらいの位置だと、県内で十番に入るといふことか??.そんな単純計算が通用するはずがないか。

「まあ、万年一位の松岡聰一なら受かるんじやん。おれはせいぜい頑張つて次のランクのＴ校かな。そもそも、担任からＭ校の受験許可下りないって。」

Ｍ校。

タケで無理なのか。

校内一位の松岡か。

県内、各中学校の一位の奴を集めたら・・・定員分の百八十名なんて簡単に集まるか。

校内一位か・・・

亘兄も一位、とったことあつたんだよな。

一位とっても、Ｍ校不合格。

悔しかつたんだろうな。

でも、まあ。

そんなの誰だつて同じだ。

Ｍ校か。

まずは受験できる範囲、校内試験で一、三位までに入らないとだな。

「ただいま。」

家に帰るとばあちゃんのいつもの返事が無い。

ついに耳が遠くなつたか。

そんな風に思いながらも、もしもの事を考えて、一応居間を覗いてみる。

なんだ。

いるんじゃないか。

居間の先の縁側に座つて外を見ているようだつた。

聞こえなかつたのか。

やつぱり耳が遠くなつたのか。

俺が居間に入つた気配にも気付いていないようだつた。

「ただいま。」

今度は聞こえたようだ、慌てて振り返つていた。

着替えに一階へ上がりつとすると、ばあちゃんに止められた。

「晃、昨日の話かて・・・」

「なに?」

「父さんも、ばあちゃんも、同じ気持ひじやつて。」

「うん。」

「晃、昨日はああ言つてたけんじ、本当は別のことにあるさじやなかと。」

縁側に腰を下ろしたまま、ばあちゃんは俺の方を振り返らずに続けた。

空はちよつとオレンジ色に染まつていて。

きれいな夕日が縁側の床板をオレンジ色に染めていて、昔、縁側でしていたお絵かきの事を思い出せた。

こんな時に。

「晃、自分のやつとつ事あるんだつたら・・・」

「べつにないよ。」

「父さんも、ばあちゃんも、反対したりせんよ。」

「なによ。」

「晃は、晃の好きな道を進めばいいんだよ。」

自分の好きな道・・・

昔、縁側でクレヨンを使つていて。

夢中になつて描いていたら紙をはみ出して床板に描いてたことがあつた。

絵の具を使つていた頃は、

バケツの水を取替えに行くのが面倒くさくて縁側から庭に撒くところを見つかつて。

どんな時も、ばあちゃんが見てたつけ。

俺が絵を描いていた時、ばあちゃんがいつも廻っていた。

そなばあちゃんを悲しませたのは俺。
そなばあちゃんを悲しませたのが俺。

お絵かきだつたから良かつた。

ただの、お絵かきだつたなら良かつた。

絵を描くと、上手に描けるようになると、ばあちゃんが喜んでくれた。
絵を描くと、上手に描けるようになると、学校の皆が喜んでくれた。

た。

小四の時、絵で賞を貰つまでは。

賞を貰つと、学校の先生が喜んでくれた。

賞を貰つと、クラスの女子が喜めてくれた。

賞を貰つと、クラスの男子に生意氣と言われた。

賞を貰つと、ばあちゃんは喜ばなかつた。

賞を貰つと、父さんは喜んでくれなかつた。

賞を貰つと、兄さん達は余計に冷たくなつた。

幼少の俺、小学生の俺、中学生の俺、母親は居なかつたけれど、母親に対しての考え方も感情も芽生えていた。

歳を重ねる毎に母親の存在を意識している。

母親を知らないから、俺はまだ救われている方なのかもしない。

母親を知らないから、平氣で絵が描けたのかもしない。

兄達は・・・

母親を知っているから。

絵を描く母親を知っているから。

辛いのかもしない。

父親も、ばあちゃんも。

俺が絵を描くことは家族を悲しませる。
俺が絵を描くことは俺の立場も悪くなる。

わかつていてることではないか。
わかつていたことではないか。
こんな大事なことを忘れていただなんて。
俺はどうかしていた。
俺はどうかしていたんだ。

だから、もう辞めよう。

だから、もう終わりにしよう。

絵のことは、忘れよう。

大事なことを思い出したのだから。

空の色。

何色？

薄暗い色。

でも地面は緑色。

心地良い風も吹いている。

広い草原。

どこまでも続く空。

佇む人影。

またか。

あの夢。

もう見ないとと思っていたのに。

なんで俺の夢に出てくる？

なんで俺の前に現れる？

徐々に近づいてくる人影。

髪の長い女性。

手を伸ばせば届く距離。

掴めば振り向かせることができる。

振り向かせたところで・・・

俺は何もできないのに。

俺はもう、何もしないのに。

あいつとかかわるのは辞めたんだ。

だからもう、振り向かせても・・・

あの日見た顔。

あの夏の日、俺が見たあいつ。

あの夏祭りの夜、腕を掴んで振り向かせたあいつそのものだった。

一週間が過ぎただろうか。

椎名萌と目を合わせなくなつて。

椎名萌を見なくなつて。

朝、いつものように挨拶をされたけど、
会話をしなくなつてどれくらい経つだらうか。

ばか女でもいい加減気付いただらう。

少しさ静かになつたといふことか。

俺にあいつを見る余裕もここ数日なかつた。
だから、今日は久しぶりに見た。

移動教室だつた。

廊下で偶然すれ違つた。

いや、毎週同じ移動経路なのだから、毎週廊下で会つてはいたの
だろう。

気付くか、気付かないか。

見てるか、見ていないか。

ただ、それだけのこと。

最初は下を向いていた。

だから表情はわからなかつた。

相変わらず一富の後ろを歩く、金魚のフン。

相変わらず歩くラジオ中継のような一富の声。

いつもは負けないくらいの周波数で喋る椎名萌が、今日は静かだつた。

すれ違う時、一瞬顔を上げた。
目が合つた。
確かに目が合つた。
泣きそうな顔をしていた。
それだけはわかつた。

今朝の夢。

振り向かせたあいつ。

あの日見た顔。

あの夏の日、俺が見たあいつ。

あの夏祭りの夜、腕を掴んで振り向かせたあいつそのものだつた。

友達とはぐれ、祭りの人ごみの中、迷子になつていていたあいつを見つけたのは俺。

恐怖心と警戒心の塊で掴んだ腕を振り払われた。

あの時、振り向かせたあいつを・・・
俺はこの手で突き放す。
人ごみの中へ・・・

もう、はぐれて見えない。

これでいい。

振り向かせてはいけなかつた。
俺が振り向かせてはいけなかつた。
これでいい。

もう、あの夢は見ないだろ？

俺は、俺の決めた道を進む。

「すごい顔してるんだ。」

急に話しかけられ、ハッとした。
最近自分でもこんなことが多ないと自覚はしている。

「タケか。」

「どうした？ 何かあつたのか？」

「いや、大丈夫。」

「そつか。」

こんな時、表情を読み取れるのもタケだけだろう。
読み取った上で、無理に話そうとしなくてもいいと言ってくれるのが楽である。

「いや、俺はいいんだけどさ。うん。」

「あのさ、椎名と何かあつたか？」

珍しく、ここで引かなかつたタケ。

そんなに俺は変だつたのか。

タケがこれ以上突つ込んでくるのは珍しい。

「べつに。」

「そつか。」

父親の事、ばあちゃんの事、兄達の事、

忘れかけていた大事な事
今の俺には進む道がある。
だから・・・

「椎名はさ、おれには何も言わないんだけど。」

「まあ、おれも人の心配しているような余裕も無いしな。うん、
べつにいいんだ。」

「久しづりだねー、あきちゃんと帰んの。」

「久しづりだねー、あきちゃんと帰んの。」

「久しづりだねー、あきちゃんと帰んの。」

「久しづりだねー、あきちゃんと帰んの。」

「久しづりだねー、あきちゃんと帰んの。」

放課後、珍しく関くんと帰り道が一緒になった。

「久しづりだねー、あきちゃんと帰んの。」

部活をしていた頃はよく一緒に帰っていたものだ。
部活。

バレーボルを引退して二ヶ月か。

過ぎてみるとあつという間だな。

一年以上続けてきた活動をぴったり辞めるといつのも変なものだ
が。

部活動が無くなり、放課後は自由になつた。
拘束されるものがまた一つ減つた。

「「一チがや、受験勉強ばっかしてると体鈍るからたまには動かしに来いって。」

「へー。」

「あきちゃんも行いりつよ。おっくんかじくんも誘つてさ。」

「ああ。」

「あとねー、今日授業で・・・」

適当に返事をした。

関君には悪いが、今はバーレービーではなかつた。

受験勉強で体が鈍るよりも、今まで鈍つていた頭を動かさなければならぬのだから。

「そしたらやー、椎名さんがねー、もう俺可笑しくつてー。」

適当に相槌を打ちながら歩いていたつもりだったが、その会話だけ鮮明に聞こえてきました。

上手くやつているつもりだったのに。

上手くかわしていたつもりだったのに。

なんだか自分が情けなくなってきた。

別に、関君から椎名萌の話が出たつていいじゃないか。

同じクラスで仲良いのは前から。

帰り道、椎名萌の話題が出る事だつて前からあつた。ただ、それだけのこと。

翌朝、下駄箱で会つてしまつた。

「おはよー。」

まっすぐに見つめてくる。

思わず目を逸らすを忘れてしまった。

先に視線を外したのは椎名萌だった。
先に歩き出したのは椎名萌だった。

俺は外しそびれた視線のやり場に困った。
仕方ないから、先を歩く後姿を見ていた。
髪、伸びたか。

肩まで伸びた後ろ髪を見て思った。

この間見た時は泣きそうな表情だったつけ。
今日は普通だつたな。

いつもの顔。

そして、いつものテンション。
いつものうるさい三人組。

教室に入るところまで見てしまった。
目で追いかけてしまった。
目が逸らせなかつた。
目が離せなかつた。
あいつから。

もうかかわらないと決めたのに。
あいつとかかわるのは辞めようと。

俺は忘れかけていた大事な事を思い出した。
俺は俺の道を進まなければいけない。

絵から離れて

M校に受かつて兄達を・・・

亘兄の叶わなかつたM校合格を・・・

俺が・・・

亘兄を越える為にはM校に合格しなければ。

なのに・・・

何故こんなにも簡単に揺れてしまう。

あいつを見なればいいのに。

あいつを気にしなければいいのに。

今までだつてそうしてきた。

人とのかかわりを避けてきた。

気にしないこと、見ないフリをすること、

今までそうしてきましたじゃないか。

あいつにもそうすればいい。

見なければいい。

気にしなければいい。

かかわらなければいい。

ただ、それだけのこと。

なのに・・・

何故出来ない。

気がつくと目で追つている。

気がつくと視線を探している。

気がつくとあいつを気にかけている自分がいる。

苛々する。

こんな自分に。

苛々する。

あいつの泣きそじつな顔を見ると。
苛々する。

俺の前に現れないでくれ。

俺の視界に入つてこないでくれ。

いつのこと・・・

俺の前から消えてくれ。

翌朝の朝食は箸が進まなかつた。

「（）馳走様。」

「晃、もう食べんのかい。」

「うん。」

「ちやんと食べんと体壊すよ。」

「平気。」

「昨夜も遅くまで電氣ついとつたし。無理せんでな。」

「あちやんはそれ以上何も言わなかつたし、
俺も何も言つことは無かつた。」

部活辞めて体動かさなくなつた分、食べる量も減つた。

それだけのことだらう。

いつも通り学校へ行つた。

いつも通りじやないことが待つていた。

「晃くん、ちょっとといいかな。」

下駄箱で男に待たれる趣味無いんですけど。
しかも何故、笠原祐也。

おまけに何故、空き教室へ移動する。

「オレ、栗原と別れた。」

は？

全くもって訳がわからない。

全くもって興味がない。

大体、何で普段しゃべったこともない俺に、そんな事を言つ必要
がある？

しかもこんな所で。

「だから、萌ちゃんのこと、オレ諦めてないから。」

は？

だから訳がわからないうつて。

だから興味ないうつて。

大体、何で椎名萌の話しになるんだよ。

こんな所で。

「オレ、萌ちゃんのことが好きだから。」

は？

俺に言われても・・・

つてか、何で俺？

大体、そんな大事な事は本人に言えば・・・

結局、俺は何もせず。

俺は何も話さず。

祐也は去つて行きました。
何だつたんだ。いつたい。

栗原と別れた?

椎名萌が好きだ?

だから何?

ん?

待てよ。

椎名萌が好きだって言つてたな。

まじかよ。

なんだ、祐也も椎名萌の事好きだつたのか。
なんだ、あいつも祐也が好きだつたじゃねーか。

なんだ、あいつ等両想いだつたんじゃねーか。

ばかみてー。

やつぱばかだな。

ばか女。

朝から無駄な時間を使つたな。

なんか体だるいし。

授業出んの面倒くさい。

朝から無駄なことに頭を使つたせいで
まつたくだ。

「おーっす、あつきらへんおつはー。

また騒がしいのが來た。

早く教室に入ってしまえば良かつた。
一步手前の廊下でつかまつた。

健太もいるし、仕方ない付き合つか。
亮と北山もいる。

タケの姿は無かつたが。
相変わらず朝からよく喋る一宮。
その後ろに・・・
あいつはいなか。

つて俺、何探してんだよ。
自分が自分で情けなくなる。
もうあいつとはかかわらないと決めた。
かかわるのを辞めた俺。

祐也の事だつて知るか。
今更あいつのことが好きだと、俺には関係が無い。

「そうだ、あきちゃんと一、ドクHどこまで進んでる? 宝島
もうクリアしちゃった?」

あきちゃんと、未だに男から呼ばれるのは慣れない。
あいつが勝手につけたあだ名。

面白がつて、周りにいた男子が呼び続けていた。

北山、そういうば。
ふと思い出した。

北山と上手くゲームの会話を、表面上はしながら思いついたこと。
こいつも確か椎名萌の事好きだったよな。
あからさまな態度、見てればわかる。

それから・・・

教室の中を見渡すと、見つけた。

河野ヒロアキ。

椎名萌と一年一年同じクラス、同じ部活。

そもそもて、こいつも椎名萌のことが好きなはず。つるやこ三人組やつてるけど、実は好きな奴がずっと側にいるのに気がつかないばか女。

そなばか女とはもうかかわらないと決めた。なのに、簡単に揺らいでしまう俺の弱さ。

そんな自分に苛々する。

椎名萌を好きだという奴を見ていると苛々する。

だから・・・

いつそのこと、あいつか誰かと付き合えば、

そうだ、

そうか、

そうだよ、ちゅうどいこじやないか。

あいつが誰かと付き合えば、俺はかかわらなくて済む。あいつが誰かと付き合えば、俺は気にしなくて済む。あいつが誰かと付き合えば、俺は苛々しなくて済む。

ただ、それだけのこと。

九月最後の週。

受験生だが、そんな事関係なく行事はやつてくれる。

一学期はやたらと行事が多く、面倒くさい。

体育祭。

体育祭委員会の奴らがはりきるだけ。

生徒会の奴らが最後の行事としてはりきるだけ。

運動部の奴らが一年に一度の見せ場としてはりきるだけ。

三回目となるが、毎年無難にこなして来た。
今年も同じ。

朝は直接、市の陸上競技場に集合して。

クラス毎の応援席に座つて。

一般公開となるから見に来たい保護者は来ていて。
熱心なご両親はビデオカメラを回して。

思い出作り。

修学旅行の写真も面倒くさかつたが、

体育祭の写真も面倒くさい。

スタンド席から見える景色は悪くはなかつた。

秋晴れ。

秋の澄み切つた空。

白い雲。

周りに高い建物が無いので、スタンド席からはきれいな空が見渡せた。

ふと、下を見る。

オレンジ色の競技トラック。

四百メートルトラックの白いラインが眩しい。

そして、運ばれてくる旗。
競技用具。

その中に、見つけてしまった。
見てしまった。

目で追ってしまった。

あいつの姿を。

旗を運んでいる。

隣には・・・

ああ。

なんだ。

祐也。

何を話しているのかは聞こえないし、
ここからは表情もわからない。

祐也、言ったのか？

好きだって、言ったのか？

つて、何言つてんだ俺。

俺には関係無いだろう。

そう、もうかかわらないと決めたんだから。

そうだよ。

俺にとつてはあいつ等がうまくいってくれた方が・・・
あいつらが付き合えば、もうかかわらなくて済む。
あいつらが付き合えば、気にしなくて済む。
あいつらが付き合えば、苛々しなくて済む。

そう思つて見てみると、田が合ひてしまつた。

慌てて逸らしたが。

勘違いかもしれないが。

だいたい、ここ、スタンンド席だしな。

隣の席はあいつのクラス席だし。

そつちを見ていたのだろう。

そう。

田で追つているから、田が合ひ。

田で追つてしまふから、田が合ひ。

逸らせばいいだけ。

ただ、それだけのこと。

午前の競技の最後はクラス対抗女子リレーだった。リレーの選手に選ばれるのは四田。

元陸上部やら、運動系部活動の奴らが選ばれる。

「おひ、しーなトップランナーじゃん。」

いつの間にか隣にヒロアキがいた。

まあ、同じクラスなのだから当然だが。

競技トラック、第一走者の所へ視線を移す。五レーンのところに椎名萌がいた。

スタートで足合わせをしていくよひだった。またあいつを見てしまった。

「晃くん知つてた?しーな、三年連續リレーの選手。」「へえ。」

あいつ、足速かつたんだ。

テニス部なのに。

いつも元気で、明るくて、

一富の周りをちらちらしてるだけのばか女だと思つていたが。

そういえば、テニス部の練習、見たこと無かつたな。

朝練しているのは見たことあつたけど、ランニングだったし。

そん時も走りながら無駄に喋つてたつけ。

テニスしてるあいつを見たことはなかつた。

そんなこと、考えたこともなかつた。

あいつは・・・

見に来たんだっけ。

俺の試合。

最後のバレー。

負けたけど。

何で見に来たのかなんて聞くことも無かつた。
別にどうでもよかつた。

椎名萌が来ようが、きまいが。
俺にとつては関係が無かつた。

あの時は。

いや、今も。

そう、関係ない。

もう、かかわらないと決めたのだから。

あいつのことは見ないと決めたのだから。

「位置について。用意」

?パンツ!?

放たれるスタートの合図。

湧き上がる歓声。

「し——な——！行け——！——！」

おいおい。

応援する相手間違えてんぞ。

ばかな奴。

卷之三

オレンジ色の競技用トック。白いラインを走るあたり。

椎名萌

まるで別人のようには見えた

だから、今だナホアーフを脱ヒーローと雖ウた。

百メートルの間だけ。

昼休みに入つた。

「めぐちゃんお疲れー！」

「乾不！」

隣のクラス席から否応無しに聞こえてくる。あいつらの声。

「アーリー、ウルフ、カーメン、マジーナ」

「ふふふ。一位取つちゃつた。

午後は少し一なのケーブルには負けねーからな

おいおい。

だからクラス違うって。

ばかな奴らはクラス域を超えて、盛り上がっていた。

昼休みが終わろうとしていた。

関君があいつを連れてやつて來た。

今度は大丈夫だ。

見ない。

気にしない。

もうかかわらない。

関君と、健太と、いつもと変わりの無い
他愛も無い話をするだけ。

そう、いつもと同じ。

それでいい。

これでいい。

俺があいつを見なければ。

俺があいつを気にしなければ。

ただ、それだけのこと。

スタンド席から見上げた秋の空には、もう夏の常に照りつけるよ
うな太陽はいなかつた。

どこか控えめに照らす太陽。

秋晴れの空とは裏腹に、どこかすつきりしない心模様で体育祭が
終わった。

放課後、珍しく居残りなんぞしてしまった。
選択授業の課題が終わらなかつた。

適当に描いて適当に終わらせて
それでいいやと思っていたのに。

選択授業なんて、成績評価の対象になんねーし。
好きに自由に使つ時間のはずだし。

課題の一つか二つ、別に・・・

面倒くさい。

なんか体だるいし。
やる気でねーし。

こんな時、選択授業に美術を選んでしまつたことを後悔する。
普段の選択授業中は自由に好きに過ごしていたけど、
課題の提出となると面倒くさい。

しかも絵だし。

適当に描いて適当に終わらせてが出来ない俺も美術バカだよな。

タケみたく家で出来ればいいのだが。

今の俺に家で絵を描く余裕なんぞ一ミリも無い。
課題といえど、家で絵を描く勇氣なんて無い。

「よつしゃー完成!」

隣の作業台からは陽気な声。

「ヒロアキ、終わった？ 鞄持つてきたよー。」「おー、サンキューリーな。今完成した！」

そしてタイムリーに入ってきたのはばかり。
ばかりお友達を迎えてたらしい。

思わず見ちゃったし、俺。
早めに視線逸らさないとな。

「げ、元気？」

話しかけられたが、下を向いたまま筆を止めなかつた。
元気つて・・・
そんな会つてなかつたか？
体育祭以来か。
一週間は経つてないぞ。

「しーな、片付けてくるから待つて。」「うん。」

ヒロアキがパタパタと足音を立てて水道へ向かつたのがわかつた。
帰るのか。

ちょうど良い。

これ以上ここに居ても何も無いぞ。

俺はもう、おまえにはかかわらないと決めたのだから。

「誕生日、近いね。」

いきなり、何を言い出すかと思えば。

いつの間にか、すぐ隣まで近づいていた椎名萌に気付かなかつた
俺も悪いのだが。

こいつが見ている視線の先に。
一枚のプリントがあつた。

自己紹介カード。

名前、誕生日、部活動、趣味等々・・・
クラスの暇な奴らの提案で書かれたことになつた用紙だつた。
これを見て言つたのか。

「あ、うん。邪魔だよね。」

さすがに課題の邪魔になると思ったのだろう。
ばかな女でもそれくらいは考えるのだらう。

慌てた様子でこの場から立ち去つとした時、
ふと、見て気付いた。

「髪、切つたのか。」

「あ、うん。揃える程度にだけ。」

「しーな。お待たせ!帰ろ!」

「うん。」

そう言って、うるさい一人が美術室からいなくなつた。
俺の前から消えてくれれば、それでよかつた。

あいつが髪を切ろうが、切りまいが、
俺には関係が無いこと。

なのに、どうして。

気が付いてしまった。

この間まで所々肩にかかっていた髪が、
肩上できれいに揃えられていたことに。
ただ、それだけのこと。

十月七日。

忘れられない日。

一年で最も忘れないと思ひ出す。
俺にとつては憎い日でもある。

それでも、ばあちゃんは毎年決まって呪つ。

「晃も十五歳か。大きくなつたのーおめでとや。」

朝食を食べていると一枚の封筒が差し出された。
裏の差出欄には父親の名前が。

毎年出張先から送つてくるらしく。

父親にとつても忘れられない日だらうから。

中身は図書カードだった。

父親らしい。

さて、何を買おうか。

それだけのこと。

あとはいつもと変わらない朝。

こつもと変わらない学校生活。

変えられるのは、決まってあいつの言動。

「お誕生日、おめでとう。」

選択授業で美術室に入った途端、言われた。全くもって理解できない奴だ。

「え？ 晃くん今日誕生日なの？」

「マジで？」

近くにいた北山、亮一が後に続ける。

「なんだよー、言つてくれれば良かったのにー。」

「おめでとー。」

拍手なんかしなくていいから。いくら少人数の授業といえど、周りの奴等全員に聞こえてんじゃねーカよ。

面倒くさい。

ただ、ただ、面倒くさい。

誕生日なんて。

授業が始まった。

ふと、横の列に座るあいつが視界に入った。

すつきつしました。つて顔しやがって。

誕生日を知られるなんて面倒なこと、今まで避けてきたのに。あいつのせいだ。

また、あいつのせいで俺は。
かかわらないと決めたのに。
あいつの方からかかわってくる。
どうしたものか。

だいたい、残念ながら、俺の誕生日は御めでたくも何でもないんだよ。
俺の誕生日イコール母親の命日だからな。

そう言つたら、あいつはどうするだろうか。
泣くか？
謝つてくれるか？

どうでもいい。
別にどうでもいい。
誕生日なんて。
家族の誰もが忘れてても忘れられない日。
それが事実なのだから。
ただ、それだけのこと。

決して特別な日ではないのに。
特別な日にしたいだなんてこれっぽっちも思っていないのに。
どうして悉く崩れしていくんだ。

俺は静かに過ごしたいだけなのに。

放課後。

また訳のわからないことに巻き込まれた。

関君に呼び出された。

五組の廊下前。

俺、帰りたいんだけど。

関君が連れてきたのは椎名萌だった。

おいおい。

またこいつかよ。

もういいだろう。

今日はもう勘弁してくれよ。

「はい、手出しひ。」

「は？」

「いいから、いいから。出す出す。」

「え、手？」

「はい。」

「はい握手。」

おい。

おいおいおい。

「おいつ、関君。」

一目散に逃げる関。
訳もわからず追いかけた。

夢中で走っていて気付かなかつた。
体育館まで来ていた。

「はあはあ・・・やつぱキツイね。全力疾走は。」

おいおい。

こんなとこまで走らせといて・・・

確かに俺の呼吸も相当乱れていた。

久しぶりに全速力で走つた。

部活以来。

いや、部活でも手を抜いていた。

真剣に、取り組んだことなんてなかつた。

誰もいない体育館の床に、寝転んだ。

乱れた呼吸を整える。

天井が高い。

体育館特有の臭い。

なんだか懐かしさを覚える。

たつた三ヶ月。

三ヶ月前まで、確かにここにいた。

暑い中、この体育館で汗を流し、ボールを追つていた。

ひたすら。

暑いのに。

ばかみたいに。

そんなこと、思い出すこともなかつた。

「椎名さんだが、俺らの最後の試合、見に来たじゃん。」

「まだ少し苦しそうに息を吐きながら、関君が言った。
誰もいない体育館に響く声。

「あれ、あん時ほんとは嬉しかったんだよね。」

「まあ、誰を見に来ていたのかは置いといて。」

「ふーっと、一つ大きく息を吐く。

「三年になつて、椎名さんと同じクラスになつて。修学旅行も
一緒ですよ。」

「すげーいい子だなつて思つた。」

仰向けに寝転んだまま。
見えるのは高い天井。

「あきちゃんもわー、好きになつちゃえばいいのー。」

「つて、思つたから、誕生日プレゼント。受け取つてもうつむか
やけつづかや
つた。」

「おいおい。
ちやつたーじやねーよ。

つーか、なんだよそれ。

隣に寝そべる関君を見た。

いい顔してた。

部活の時に良く見た顔。

ポイント獲った時、サーブが決まった時、ブロックポイント獲つた時。

あの顔と同じ。

コートの中で、チームメイトだった関君。

なんか、拍子抜けした。

別に怒るようなことをされたわけでもないのだけど。

俺にとってタケが友達であるように、
関君にとってはただの部活のチームメイトとしてではなく、
俺のことを想ってくれているんだろう、ということだけは伝わつ
てきたから。

なんか、とんでもない一日だった。

それだけはほつきり言える。

今まで過ごしてきた誕生日の中で、
もつとも騒がしい一日。

もつとも迷惑な一日で。

忘れてても忘れられない憎い日であることを
少しだけ忘れることができた日でもあった。

特別でない。

いつもの学校生活の中の一冊。

ただ、それだけのこと。

時計を見ると一時を過ぎていた。

気がつけば、長い一日も終わっていた。

もう明日だった。

寝る前に、ふと思いついた。

確かに手と手が触れ合っていた。

握手。

そう言わればそうだけれど。

手の感触。

覚えているはずがないのに。

あの夏の日、つないだ手。

小さくて、

細くて。

女の手。

母親の手。

あんな手で絵を描いたらどんな絵になるのだらうか。

母親の描いた絵はもう、覚えていない。

朝日が覚めて。

それが平日ならば

学校へ行くのは当たり前の事で。

中学生なのだから。

受験生なのだから。

時間割といつも表の上で
駒を一つずつこなしていく。

一コマ一コマ。

そしてコマの間にあくまで時間。

ただただ、繰り返される。

ただ、それだけのこと。

そして、繰り返される朝。

下駄箱で。

あいつと会う朝。

これもこつものことである。

「あ、あきゅあきゅ。おまよ。」

そう言つて、こつもの手に勝手に隸り始めた。
俺は句も言わないのに。

ただ、違っていた。
うるさいへんな表情が。
うるさいへんな顔が。
うるさいへんな顔が。
うるさいへんな顔が。
うるさいへんな顔が。
うるさいへんな顔が。
うるさいへんな顔が。
うるさいへんな顔が。

俺が見たあいつの顔。
泣いたのか？

一時間田は教室で授業だった。

さすがに三年の「」の時期。

さすがに受験生。

皆静かに授業を受けていた。

静か過ぎて怖いくらいだ。

静けさが、俺を惑わす。

泣きそうな顔。

作っている笑顔。

椎名萌が泣こうが、泣きまいが、
俺には関係がない」と。

椎名萌が笑おうが、笑うまいが、
俺には関係が無い」と。

そう。

俺はもうかかわらないと決めたのに。
かわらるのを辞めたはずなのに。

なの」「。

どうして。

どうして氣になる。

どうして氣になる。

「の問題を頭から消し去ることは・・・
の問題はどうやつたら解けるのか。

「この問題、試験とびつちが難しいのか。

翌朝。

いつもより早く目が覚めたので学校へ行つた。
最近、勉強時間と睡眠時間のバランスが崩れてしまっているのは自分
でもわかっている。

その上、余計な事を考えてしまう無駄な時間が多過ぎる」ととも。
そう、余計な事を考えさせられる原因。
その、原因。

祐也が尋ねて来た。

朝から・・・

早く着てみればろくな事が無い。

「最近、萌ちゃん元気無いんだよね。」

そんなこと知るか。

だいたい、何で俺にそんなこと聞くんだよ。

「廊下ですれ違った時とかで、全然笑つてないし。」

そんなこと知らねーよ。

だいたい、俺あいつの「と見てねーし。

「晃君なら何か知ってるかと思つてさ。」

おーおー。

何故に俺？

「知らないけど。」

「そうかな？」

即答で返され、
表情を変えられた。

何？

なんで睨む？

俺か？

「晃君が萌ちゃんに冷たい態度取つてるからじゃないか？」

顔も口調も充分怖いんですけど。

つーか、何？

何が言いたいんだ？

そんな怒りをむき出しへども俺は何の反応もしないんで、困るんですけど。

「オレの見る限り、晃君も萌ちゃんの事好きだと思つから叫つてんだけど。」

は？

もう少しで思わず口に出してしまつといひだった。
飲み込んだが。

怒つて叫ぶやうな顔。
でも俺にはさっぱりわからないので。
俺には関係の無いことなので。

べつに何か言つ必要はないと思つた。

そもそも、何で怒りの矛先を俺に向ける？
俺、祐也の怒りを買つような事したのか？

全然わからん。

考えたつて、思い出さうとしたつて、無駄無駄。

前回、祐也に栗原と別れたとかなんぢやら言られてから数週間。
べつに何もしてないぞ。
べつに何もなかつたぞ。
そもそも。
俺と祐也は何の関係も無いじやないか。
ばからしい。

「オッス。」「はよ。」

そう言つて教室に入つて来たのはヒロアキ。
祐也はヒロアキと挨拶を交わすと、そのまま教室を出て行つた。

「あきちゃん、おはよ。」

後ろにいたのは椎名萌。
なんだいたのかよ。
しかも、また作り笑顔かよ。

おいおい。祐也、
本人いるんだし、当事者同士で話せよ。
俺には関係が無いのだから。

まだ。

苛々する。

椎名萌を見ている俺に。

苛々する。

椎名萌が好きだという奴らに。
ただ、それだけのこと。

7.

行事続きの一学期。

体育祭に続いて写生大会。

題材に選んだ場所は、三年連續。

人気の無い、静かなあの場所を選んだ。

が、三年目の今年は生憎の雨。

雨天決行。

教室で色付けとなつた。

事前の授業で下絵は完成している。
だから雨でも問題は無いのだが。

問題は・・・
無いはずだったのだが。

雨のせいとか、教室だからとか、
一人で描けない環境だからとか、

そんな言い訳は通用しないだろう。

問題大有り。

全然筆が進まない。

なんだ。

なんなんだ。俺。

どうした？

たかが、写生大会。
たかが、学校行事。

何も難しく考へることはない。

賞を獲る為の絵ではないのだから。

賞を獲る為に描くはずがないのだから。

なのに・・・
なんで・・・

筆が止まる。
手が止まる。
頭が止まる。

描けない。

“キーンゴーンカーンゴーン”

無常にも教室内に鳴り響く終了の鐘。

「おっしゃー終わったー。」

「無理無理。終わんねー。」

「疲れたー。」

「帰ろうぜー。」

教室に缶詰状態で行われた本日の写生大会。午前中だけと言えど、皆の表情にも疲労が見える。

「今日終わらなかつた者は、家に持ち帰るも良し、各自で提出期限までに終わらせるよつじ。」

担任の話が終わると、教室内には一層のざわめきが広がつた。バケツの水を捨てに行く者、片付け始める者。

「冗談じゃない。」

家になんて持ち帰れるか。

写生大会の絵といえど、

家でなんて描けるか。

描ける訳がない。

描ける勇気が無い。

「あきちゃん、この後ヒマ?」

いつの間にか教室に閑ぐんが入ってきていて、隣から話しかけられていた。

「どうせ雨だしさ、ボーリングでも行かないかってこののが。」

俺は何と答えたのか。

曖昧に頷いたのか。

適当に頷いたのか。

まあ、そんなところだろ？。

絵が描けなかつた。

家になど持ち帰れる訳がない。

気分的にモヤモヤと苛々がある。

「あ、椎名さんも誘つてみるね～。じゃあ、時間決めたらまた知らせに来るから。」

氣付いたら、関くんは居なくなつていた。

氣付いたら、あいつの事を考えていた。

今日はまだあいつの顔を見ていなかつた。

別に毎日見ている訳ではないし、

つていうか、

あいつのことはもうどうでもよくて。

あいつのこと考えたりするから・・・集中できなかつたのでは。

あいつのこと気にしたりするから・・・絵が描けなかつたのでは。

あいつのこと・・・

苛々する。

あいつの事を考えている自分に。

苛々する。

あいつの事を気にしている自分に。

苛々する。

あいつの事が・・・

好きだという奴を見ると。

そう、笠原祐也。

バケツの水を捨てに行つた水道で。
明らかに違つた向きで立つてある。
明らかに違つた視線の奴がいる。

そいつは俺の足が自分の方へと向かつてくるのを確認すると
距離を縮めて言った。

「晃君、嘘ついてたな。」

は?
何が?

「そいやつて・・・人を騙して楽しかったか?」

は?
何が?

「オレの事、心ん中では笑つてたんだろ?」

は?
だから何が?

「何とか言えよ。」

「何の話だ?」

いい加減、黙つているのに疲れた。

訳のわからない奴から、訳のわからない話をされて。

もう充分怒り切ったしやる表情がヒシヒシと伝わってきて。
「いいたい、何の話だ。

「惚けんの？まだ嘘つくな？」「

「だから何の事か・・・」

「いい加減にしろよー！」

「おいおい。

だから何でおまえがキレる？

おまえの怒りを買つうこと、俺したのか？

だいたい、元々俺とおまえは関係が無い・・・

「萌ちゃんと付き合つてゐるんだろ。」「

は？
何が？

「オレが萌ちゃんのこと好きだつて言った時、本当は心中で笑つてたんだろ？」

は？

何が？

「オレが一人で馬鹿な事言つて思つてたんだろ。」「

は？
だから何が？

「そりゃー余裕な訳だよな。いつも黙つてて。自分は関係無
いような顔してさ。」

「ヒロアキもかわいそーな奴。あれだけ近くに居たのさ。晃君少
しあ悪いとは思わないの？」

おこおこ。

何故セレビロアキの話が出てへる。

「セーヤツヒオレーリのこと見下して樂しいか？」

「晃君にはがつかりだよ。話せば解る奴だと思つてたのさ。」「
付き合つてんのこ、自分には関係無いって顔して、平氣で萌ちや
んも泣かせて。」

「もう一度言ひナビ、オレ諦めるつもつないかい。つーか、負けね
ーから。」

立ち去る祐也。

おこおこ。

ちょっと待てよ。

俺はまだ何も言つてねーし。

俺はまだ何もしてねーし。

つーか、なんだよ。

何なんだよ、これ。

何なんだよ、一体。

怒りと皮肉たっぷりぶつけてきた祐也。
俺が卑怯者だって言いたかったらしい。

黙つて聞いていたが。

苛々する。

好き放題言いやがつて。

苛々する。

言つだけ言つて消えやがつて。
苛々する。

最初は意味わからなかつたけど。
俺には関係が無いと思つていたけど。
この苛々と
このムカムカと
この怒り・・・

俺に関係大有りじゃねーかよー!!

「あ、あきちゃん、ボーリングの時間だけど・・・」

関くんの声は耳に入つていなかつた。
あいつの顔も目に入つていなかつた。

見えていたのは・・・ヒロアキの顔。
抱えていたのは・・・怒りという感情。
抑えていたのは・・・力の込めた拳。
抑えきれなかつたのは・・・俺の右手。

「す、ストップ!ストップ!」

関くんの声は耳に入つていなかつた。
あいつの顔も目に入つていなかつた。

気がついたら、ヒロアキの胸倉を掴んでいた。
俺の左手。

見えていたのは・・・ヒロアキの顔。
抱えていたのは・・・怒りという感情。
抑えていた気持ちはどうかに吹っ飛んだ。
抑えられていたのは俺の両手。

そう、関くんが止めに入つていなければ
俺はヒロアキを殴つていただろう。

何故ヒロアキだつたのか。
何故ヒロアキに向けたのか。

最初は自分に苛々していた。

そう、最初は。

写生大会なのに、絵が描けなくて。
思うように筆が動かなくて。

家に持ち帰る訳にはいかなくて。

次に、あいつを思い出して苛々した。

あいつのことを考える自分に苛々した。

あいつのことを気にする自分に苛々した。

そして・・・

あいつのことが好きだという奴に苛々した。

祐也の話は全部は覚えていなかつた。
ただ、いつものようにはいかなかつた。
いつものように出来なかつた。

いつものようには済まなかつた。
いつものようには済まなかつた。

そう、いつものように・・・

何を言われても

何を言われようが

何を言われたとしても

俺は関係の無い事。

俺には関係の無い事。

そう、処理できなかつたんだ。

教室へは戻れず、

廊下をただただ、歩いていた。

歩きながら、必死に頭を回転させて考えていた。

少し冷静になってきた自分に気付く。
いや、まだだ。

まだ自分じやない。

まだ俺じやない。

どこかで抑えが利かなくなつてゐる。
どこかでまだ消化しきれていない。

まだだ。まだ。

そう・・・

まだ・・・

会つてはいけなかつた。

見てはいけなかつた。

会いたくはなかつた。
見たくはなかつた。

笠原祐也なんて。

椎名萌なんて。

あいつらがどうなるつと、俺には・・・

祐也はあいつを抱きしめていた。
祐也と椎名萌が抱き合っていた。

人目に止まらない場所。

階段の下。

俺がなぜそこに向かっていたのか。

俺がなぜそこに居合わせてしまったのか。

それは数秒の事だったのだろう。

だが、俺には

まるでそれが永遠に続くかのように残った。
たった数秒が、

ものすごく長く感じた。

そして振り返ったあいつの顔は・・・

ああ、ほら。

また、泣いている。

会いたくなかった奴に会ってしまった。
見たくなかつたことを見てしまった。
ただ、それだけのこと。

その後の事。

どうやつて家に帰ったのか。
ばあちゃんと何を話したのか。
夕飯、何を食べたのか。
自室で何を考え、どう過ごしたのか。
考えられなかつた。

覚えていなかつた。
記憶に無かつた。

何処だろう。

何処か知らないが、広い草原。
心地良い風が吹いていて。
上を見上げれば俺の好きな空。

青空。

ああ。

夢だ。

夢の中だ。

そして・・・

見えてくるのは女性。

立っているのは髪の長い女性。

その後ろ姿。

もう何度も見た。

近づいて来る。

腕を掴んで

振り向かせる

ほら。

あいつは・・・

泣いていた。

白い。

白いのは天井。

俺の部屋。

目が覚めた。

布団から手を出す。

夢の中で

あいつの腕を掴んだ手。

現実で

ヒロアキに向けられた拳。

今は開かれた指の間から白い天井が見える。

夢も現実も・・・

この手で・・・

そして思い出す。

あの感情。

怒り。

抱えきれなかつたもの。

抑えきれなかつたもの。

あの感情。
あの感触。

この頭の中で

抱えきれなくなつた

この手の中で

抑えきれなかつた

俺にもまだあつたんだな。
怒りという感情。

誰かに向けた感情。
誰かにぶつける拳。

物心ついた頃には兄達から嫌われていた。
一緒に遊んだ記憶は無い。

幼稚園に入ると気付いた。
普通の兄弟関係というやつに。
なんでもうちは違うのか。
どうしてうちだけ違うのか。

答えはすぐにわかった。
母親がいないから。

だから私は他とは違う。
だから私は皆とは違う。
違う。

違うってなんだ?
違うって思うのは、違わなかつたと感じたことがあるから。
違いに気付かなければいい。
違いを知らなければいい。

そうやって俺は周りと距離をおくよになつた。

幼くても悟ることはできた。
歳を重ねる毎に、上手くなつた。
物分りの良い子供になつていつた。

期待は持つから裏切られる。
希望は持つから失望がある。

だつたらはじめから期待なんてしなければ良い。
望なんて持たなければ良い。

俺は利口な生き方をしてきた。

俺は利口な生き方をしてきたつもりだつた。

でも・・・

それつて本当に利口なのか？

そうやってうまくやつてているつもりなのか？

そう思う自分がいなかつた訳でもない。

感情を押さえ込んで

何も感じなくなつた訳ではない。

感情を表に出さなくなつて
出でいなかつた訳ではない。

一年の時、いじめに合つたタケを見ていて苛々しなかつた訳ではな
い。

一年の時、特別扱いされている由利を見ていて感情が表に出なかつた訳ではない。

誰かがいるからとか、
誰かが止めてくれたからとか
誰かに救われてきた訳でもない。

泉くんが居ない時だつて・・・
にのが居ない時だつて・・・
俺は・・・

もう自分で何とかしないといけないのに、自分でどうにかしないといけなかつたのに。

苛々するのは原因があるから。

苛々するのは解決していない事があるから。

怒りの感情は苛々の積み重なり。

怒りの感情は・・・

もう発散してしまつたではないか。

ぶつけ。

ぶちまけて。

原因を解決しようともしないで。

その怒りをぶつけたのはヒロアキ。
怒りを向ける先を間違えて。

ヒロアキに謝る。

朝の教室。

いつのもおしゃべり。

いつものうるさい三人組・・・

ではなく、四組にいたのはヒロアキと北川千夏だった。

「ヒロアキ、昨日は悪かった。」

ふと、頭を下げた時思い出した。

こんな風に人に謝るのも数える程しかない。

去年、由利に謝る時は一宮の合否が必要だった事。

「ああ、いいよ。」

いつものヒロアキ。

ばかな女の友達。

「あのさ、晃君、祐也となんかあつた?」「

ばかな女の友達も馬鹿ではない様だった。
北川千夏が席を外すのが見えた。

気を利かせたつもりなのだろう。

「そんな有名な話?」

「いや、晃君と祐也が話してゐる見て。」

「ああ。」

「二人の接点って言つたら・・・椎名かなつて。」

どこまで話したらしいのか。

どこまで話していいのか。

そんな躊躇が伝わってくる。

「おれは祐也には協力できないって言つた。」

「そう。」

「すんげー機嫌損ねたみたいだつたけど。」

「ああ。」

想像はできる。

予想もつく。

多分、ヒロアキは間違つていなかつた。

勘違い。

伝え違う。

そんなところだらう。

でも、俺は間違えた。

怒りを向ける先を。

怒りを向ける相手を。

怒りの先にあるもの・・・

それは祐也の言葉。

怒りを向けるところ・・・

それは自分自身にだ。

祐也は俺と椎名萌が付き合つてると言つた。

そう言つたのはヒロアキだと思つた。

ばか女の友達で勘違いしているヒロアキだと思つた。

俺の勘違い。

祐也は俺と椎名萌が付き合つてると言つた。

黙つていた。

嘘をついていた。

騙していた。

卑怯者。

偽善者。

そんなところだらう。

怒りに怒りをぶつけても意味は無いのに。

人の感情を力でどうにかしようと考えるのは無意味なのに。

ちょっとと考えればわかること。
少し考えれば気づけること。

出来なかつたのは自分のせい。
感情をコントロールできなかつた自分のせい。

積み重なる苛々感と
込み上げてきていた感情を
処理できなかつた

処理できない状態だつたつてことか。
俺が。

いつからだつたか。
どこからだつたのか。
どこからはじまつていたのか。

浮かんだのはあいつの顔。

あいつと出会つた時からなのか。
あいつが俺を知つた時からなのか。
あいつが俺を見た時からなのか。
俺があいつを見た時からなのか。
俺があいつを気になつた時からなのか。

今日は来ないのか。
朝の教室。
いつもおしゃべり。
うるさい三人組。

中二なのに。

部活も引退して朝練もないのに。
わざわざ朝の教室に集まる三人組。

いつもばかな話をしていて
いつも無駄に笑っていて
自分の教室じゃないのに、そんな違和感を感じさせない奴ら。
いつの間にか、目で追っていた俺。
朝の教室で。

一時間目の授業が終わった。

次の授業は教室で英語。

訳を確認しようとノートを取り出した。

ふと、渡り廊下を歩く奴らを見た。
移動教室だったのだろう。

その中に、祐也の姿を見つけた。

いつもなら、祐也が居ようが居まいが
気にかけることなんてなかつたのに。
ただの、人の群れ。
その中の一人。

今は、それがはつきり祐也だと認めてしまつ。

昨日、俺に向けられていた祐也の感情。

怒り。

俺はそれを真に受けてしまった。

いつものように受け流す事が出来なかつた。

誰から聞いたのか。

俺と椎名萌が付き合っていると。

「付き合っていない」 そう答えれば良かつた。
そう答えれば済んだ話。
簡単な話だつたはずだ。
そう、簡単な話だつた。

面倒くさいことが嫌いな俺がどうじて。
人とのかかわりなんてもつと面倒くさい。

なのに・・・

冷静になれなかつた。

上手く処理できなかつた。

祐也は椎名萌が好き。

それでいいじゃないか。

俺には関係が無い。

もうかかわらないと決めたのだし。

俺はいいんだ。

かかわらなくて済むならそれで。

あいつ等が付き合おうが、付き合わなかろうが。
どうでもいい。

いや、むしろ、付き合つてくれた方が
俺はかかわらなくて済むのだから。
そして、祐也の怒りも納まるだらう。

そうすればあいつの事を気にしなくて済む。
あいつの顔を気にしなくて済む。

あいつの泣き顔・・・

祐也の背後に。

振り返つたあいつの泣き顔を思い出す。

なんで泣いたんだ？

祐也に抱きしめられて・・・
なんで泣くんだ？

祐也に好きだつて言われて・・・
なんで泣くんだ？

つて、結局またそこに戻る訳で。
どうかしてよ、俺。
頭ん中、ぐぢやぐぢや。
授業も全然頭に入つてこない。
英語だつたはずなのに、数学で難解な問題にずっと取り組んでいた氣分だ。

休み時間。
次の授業も教室。
移動は無し。
結局、何にも頭に入らなかつた英語の教科書を引き出しにしまい、
代りに次の社会の教科書を取り出した。

長い一時間目だつた。
まだ、二時間目なのに。
どつと疲れが出た。

すつきりしたかつた。

顔を見てすつきりしたかつた。

いつもの、うるさくて無駄に明るいばか女の顔を。

そう思つてわざわざ五組へ行つた。
わざわざ行つたのに。

いなかつた。

後はいつもの五組だった。

クラスのムードメーカー的存在の一宮を中心に入人が集まつていて。
男子も女子も、一宮を見ていた。

一宮の話に笑つていた。

そしてその後ろに・・・

金魚のフン的存 在でいる椎名萌がいなかつた。
珍しい事もあるもんだ。

10分間という短い時間。

このクラスは、笑い声の絶えない休み時間だった。

三時間目。

教室で社会の授業だつた。

グループワークだつた。

机を合わせて四人の班を作らされた。
面倒くさい授業だつた。

が、誰かが常に話しかけてくるので

課題を進める為にも無駄な事を考える暇は無かつた。

割と早く45分間の授業が終わつた。

休み時間になる。

足が廊下へと向かつて いた。

行き先は・・・五組だろ?。

「あ、穂高君、ちょっと持つてくれる?」

廊下に出たところでクラスの女子に声をかけられた。
さつきまで使っていたグループワークの資料。
資料と言つても紙だけでなく模型もあった。
かなりの重さだろう。

仕方なく、手を貸した。

「今、台車持つて来るといろだからもうひとつ付き合つてね。」

だつたら台車が来るまで大人しく待つていれば良かつたものの。
一人で持てると思ったのか。

面倒くさい。

人とかかわるだなんて。

女子だなんてもつと面倒くさい。

「良かったー。穂高君に声かけて。無視されたらどうしようかと思つてたけど。」

おいおい。

半ば強制的に持たされたようなもんなんですけど。

どう見ても、廊下に俺しかいなかつたし。

無視したくてもできない状況な時もある訳で。

「穂高君最近雰囲気変わったよね。前はちょっと話しかけづらかったよ。」

おじおじ。

ずいぶんなこと言つてくれるじゃねーか。

まあ、当たつてるけどな。

人とのかかわりを避けてきたし。

面倒くさいことは避けてきたし。

「お待たせー。台車到着。」

「穂高君ありがとね。助かつたわ。」

そう言つと、女子一人、台車を押して歩いて行つた。
途中、台車を取りに行つっていた方の女子がこう言つた。

「穂高に頼んだの？よく声かけられたね。」

「おいおい。

聞こえてるんですけど。

確かに。

こんな風に女子から何か頼まれることなんて無かつたな。
人とのかかわりが面倒くさかつたし。
特に女子なんて。

そういう雰囲気つて時間と共に伝わっていく訳で。
新学期の自己紹介から始まって、修学旅行、体育祭、合唱コンクールとクラス行事をこなす毎に全体周知事項になつていって。
クラスの中での俺の位置。

適材適所。

クラスを仕切りたい奴、目立ちたくない奴、リーダーシップを發揮する奴。

一人でいたい奴、目立ちたくない奴、平凡でいたい奴。

女子から雰囲気が変わったなんて言われたこと無かつた。

女子の方から俺に話しかけてくることが無かつた。
委員会の仕事や日直、学校生活の中でも最低限のかかわりしかして
こなかつた。

だけど・・・

あいつはそんな俺に話しかけてきた。
変なあだ名まで付けやがつて。

俺が無視しても

平気な顔して話しかけてきた。
俺が相手にしなくても
懲りずに話しかけてきた。

いつもうるさくて。

いつも騒がしくて。

無駄に元氣で。

無駄に笑っていて。

気がつくと・・・

人とのかかわりが面倒だつた俺の

女子とのかかわりなんてもつと面倒だつた俺の

俺の中にあいつはずかずかと入ってきていた。
そしていつの間にか俺を変えていた。

クラスの女子から声をかけられるようになるとは。

これだけのことでの休み時間が終わってしまった。

四時間目が始まる。

あいつの顔を見に行く時間が無かつた。

四時間目は数学。

数学は得意科目だ。

塾へ通つていらない俺にとって
家の勉強は予習が中心だった。

だから出来て当たり前で。

教科書通りの問題なら問題無かつた。

定期試験も教科書の問題から出されることが多かつた。

しかし、受験となるとそうはない。

教科書から問題が出ることなどまず無い。

教科書通りにはいかない。

応用問題に慣れておく必要がある。

週末、本屋へ問題集の買い足しに行こうか。

そんなことを思った。

授業ではヒロアキが指名されて黒板の前に出ていた。
チョークを持つ手が進まない。

解答が出ないらしい。

ばか女の友達はやはりばかだったか。

川野ヒロアキ。

同じ小学校の出身だがこれまでに接点は無い。

同じクラスになつたのは今年が初めて。

おそらく、あまり勉強は得意な方ではない様子。

朝のうるさいおしゃべりを聞いていれば分かること。

椎名萌とは一年二年と同じクラス。

同じテニス部で意気投合した同士といつところか。

男女の友情なんて在るわけがないのに。

そう。

あるわけが無い。

実際。

ヒロアキは椎名萌の事が好きだらう。
本人が気付いていなくても、
椎名萌が気付いていなくても、
見ていればわかる。

いつも一緒にいて。

いつも騒いでいて。

いつものおしゃべり。

これが当たり前で

これを壊したくなくて

これを壊してまで手に入れようとは思わない
恋より友情を選びましたってところだらう。

そこまでヒロアキが考へているかは知らないが。
そこまで相手に配慮する奴なのかも知らないが。

そして配慮が足りないのがもう一人。

ずっと一緒にいて

ずっと一緒にいるのに

相手の気持ちに気付かない奴。

相手の気持ちを考えたことのない奴。

今の関係がこの先もずっと続くと信じているばかな女。

昔から借り物が多くて
人の教室に来ては騒いで帰つて行く
無駄に明るくて

無駄に元気で
無駄に笑顔

でも最近・・・
いや、もつと前から
あいつは無駄に笑わなくなつた

最初に泣き顔を見たのはいつだつたか。
夕日が差し込む教室で
オレンジ色の光の中にあいつはいた。
すげー綺麗な夕日色の教室で
あいつは泣いていた

女子からいじめのターゲットにされた時は
朝から泣きましたつて顔してた
それでも笑つてた
ばかみたいに笑つてたな

泣きそうな顔はしてたけど
泣き顔を人前で見せない奴だつた。

泣きそうな顔
泣いた後の顔

そんなんばつかじやないか、こじんとこは。

今日は・・・
泣いたのか?
今日も・・・
泣いたのか?
今日はどんな顔をしているのか

何を考えているのか
何を想つて いるのか

祐也のこと考 えてるか?

当り前だろ うな。

祐也に抱きしめられて・・・

祐也に好きだと 言われて・・・

どう思つた?

つて、またあいつのこと考 えてるし。

今は数学。

数学の授業。

問題問題。

どんどん解かなきや。

そう、どんどん。

数学に解けない問題なんて無い。

数式に当てはめさえすれば答えは導き出せらる

でも・・・

あいつの事となると解けない問題が多過さる。

数式は勿論通用しない

あいつが祐也の事をどう思つて いるかなんて

あいつにしか解けない問題。

あれ?

まてよ?

解けない問題?

数式が使えない?

解けないのは原因があるからで・・・

解けないのは数式が通用しないからで・・・

その原因を考えないから俺はまた同じじりを廻ってしまつわけ
で・・・

あいつがどう思つてゐるのか

解けない問題

数式は使えない

あいつがどう思つてゐるのか

あれ？あれ？
なんだ？

何か一個足りない

頭の中で一箇所繋がつていらない

なんだこれ？

なんの数式？

どの数式？

あいつがどう思つてゐるのかを知りたくて・・・

そう・・・

あいつが・・・

おい？おい？

おいおい。

あいつがどう思つてゐるかなんてとっくに解けてた問題だらうが。

はあ。

俺は何でこんなに時間をかけてしまつたのか。
何故これ程時間をかけなければならなかつたのか。
頭悪りー奴みたいじゃん。

あいつがどう思つてゐるか

そんなの答えは出ていたじゃないか。
数式なんて使わなくても

あいつがどう思つているのか
数式なんて必要ない

あいつが好きなのは俺だつた。

“キーンコーンカーンコーン”

タイミング良く授業終了を知らせるチャイムが鳴り響いた。
俺の頭の中にも、鳴り響いた。
ゴーンと。
ガツーンと。

痛いくらい重い音が。

おかげで頭がすつきりした。
もうどんな難問でも解けるくらい。

すつきりした頭で食べる昼食はなかなか美味かつた。

今日の献立はカレーにサラダ。
サラダの中にミニトマト。

トマト嫌いなあいつを思い出させた。

今頃、一皿に食べてもらつてみだらうか。

椎名萌に甘い一富。

なんだかんだでタケも甘い。

友達にも厳しいのは斎藤恵子。

四人の関係を見て笑っているのは関くんだろう。

そんないつ等の賑やかな食事風景が田に浮かぶよつだ。
見なくてもわかる。

一つだけ、すつきりした頭の状態で確かめたいことがあった。

昼休み中の五組。

相変わらず中心にいるのは一宮。

いつものことだ。

そしてその後ろに・・・

あれ？

一宮の後ろ

金魚のフンが

またいない。

午前の休み時間もいなかつたよな。

珍しいというか・・・

なんというか・・・

なんだ?これ。

「めぐなら今田は休みだけビ。」

廊下側の窓から斎藤恵子が言った。

「タケに・・・」と俺も繕えれば良かつたものの。
機転が利かなかつた。

「はあ。」

溜め息。

その一言で充分だつた。

斎藤恵子の溜息一つで。

怒つてらっしゃるのが。

その怒りは俺に対する向けられていることが。

はいはい。

大人しく退散しますよ。

人とのかかわりが面倒くさかった
女子とだなんてもつと面倒くさい
斎藤恵子だなんて特に面倒くさい
友達想いで勝気な奴。

斎藤恵子とは一年で同じクラスだった。

タケと同じ小学校出身。

そのタケも斎藤には一目置いているのがわかつた。

三年になつて、椎名萌といつも一緒にいる。
その椎名萌に怒鳴りつけていることも何度か有。
男女問わず誰に対しても間違つていることは違うと言つ奴。
クラスを仕切るわけではないが、その一言でクラスの雰囲気を変
えるだけの力は持つてている。

そして俺のことを良くは思つていらないだろう。
いや、相当嫌われているだろう。

俺も苦手なタイプなので、かかわりたくない。

「晃君ー、次実験室移動ー。」

「ああ。」

健太に声をかけられ、時計を見ると昼休みが終わりかけていた。
今日初めての移動教室。

実験室へは五組の前を通りて行く。

いつもの事。

毎週同じ授業のコマを繰り返しているのだから。

移動教室への経路も同じ。

当たり前の事。

ただそれだけのこと。

なのに。

なのに・・・

違うのは・・・

五組はいつもと変わらない。

違うのは・・・

一富のいる五組はいつもと変わらない。

違うのは・・・

あいつがないこと。

あいつの姿が無いこと。

椎名萌が居ないこと。

「火の取り扱いには十分気をつけて実験を始めて。」

「穂高君、私が温度測って記録するから温度計よろしくね。」

「ああ。」

「じゃあ、オレ火一つける。いくぞー」

アルコール、温度計、マッチ、ビーカー、フラスコ、試験管と教科書通りの実験道具が準備され教科書通りに実験が進められていく。

そう。

あいつが居なくて
あいつが休みだらうと
学校は時間通りに始まるし
授業は時間表通りに進むし
教科書通りの解答が待つて

うるさい女がいなくても
朝のおしゃべりがなくて
何も変わらないじゃないか

ただ、あいつが居ないだけ
ただ、あいつが休んでいるだけ

朝から顔を合わせないことだってあつたじやないか。
昼休みまで顔を合わせないことだってあつたじやないか。
一日顔を見ないことだってあつたじやないか。
一言も会話をしない日だってあつたじやないか。

特に「こそこそ」と「あいつとはかわらないよ」をしていたのだか
ら。

あいつを見ない日だって・・・
あいつを気にしない日だって・・・

ほんとにそうか?
本当に?

それでも俺はどこかで感じていた。

朝の教室

いつもおしゃべり三人組

移動教室

渡り廊下

五組から聞こえてくる声

「あきちゃんおはよっ」

そう言って始まる学校。

あいつの声で始まる。

俺は返事をしないけど

俺が返事をしなくても

あいつはいつも笑つて・・・

懲りずに俺に話しかけてきた

一富達と大人数でしゃべつていっても

一人で五人分は喋る一富達がいても

その後ろに金魚のフンのようにくつついでいるあいつの声を聞いている

ている

あいつの声に耳を傾けている

あいつの声を聞いている

そこにいるのが当たり前で・・・

俺の近くにいるのが当たり前で・・・

考えたこともなかった

俺が見ればいつもそこにおいて
俺が田で追えるところにいて

だから考えたこともなかった

俺があいつを見ていたのは

あいつも俺を見ていたから

あいつが俺を見ていたのは
俺があいつを見ていたから

だから目が合つ

だから目が離せなくなる

だから・・・

「アチツ。」

小さい声だつたつもりだが。

周りのせいでの大事に変わってしまった。

「キヤー！ 穂高君ーー！」

「水！ 水で冷やしてーー！」

「先生ー、穂高君が火傷しましたー。」

「落ち着いてー。皆はそのまま続けて。火から目を離さないで。」

「その班は一度火を消して。実験を中断。穂高君は十分冷やしてから保健室へ行きなさい。」

「いえ、平氣です。」

「駄目よ。今は平氣でも後から痛みが出てくるかもしれないから。」

「保健委員誰だっけ？」

「香月君と涼子ちゃん。」

「あ、じゃあ一緒に行こうか？」

「いい。冷やせば治る。」

「はいはいー、皆は火から田を離さないでって言つたでしょ。実験

続けて。」

「穂高君は一人で保健室行けるわね？」

「はい。」

面倒くさかつた。

理科の先生も。

クラスの奴らも。

保健室も。

面倒くさいからその場は返事をしただけ。
わかつたフリをしただけ。

そうすることが模範解答だと知つているから。

ちょっとビーカーに触れただけ。
ちょっと熱かつただけ。

ちょっと考え方をしていただけ。

ちょっと上の空だつただけ。

いや、十分上の空だつた。
十分、考え方をしていた。

何やつてんだ、俺。

いちおう・・・

面倒くさいが

後々面倒くさいことになるのはもつと面倒なので
保健室へ寄つた。

これで模範解答は完璧だね！。

「どこのか具合悪いの？」

「指を少し火傷しました。」

「あらあら。見せて。」

保健室。

中学二年の間で最も足を踏み入れなかつた場所だろひ。
保健委員なんてやるはずもなく。

消毒液の匂こと白衣。

保健校医。

教師になるという勝兄と
医者になるという亘兄を
続けて連想してしまつた。

「十分冷やしたみたいだけど、腫れてきてるから薬塗つて処置する
わね。」

それから保健医は、いつ、どこで、どんな風に尋ねてきた。
答えるのが面倒くさかつたが、

保健田誌とやらに書かなければならぬ項目なのだらひ。
仕方ない。

余計なことは言わず、聞かれたことだけを答えた。

「実験中に火傷だなんて。何か別のことでも考えていたの？」

おいおい。

そんな余計なこと俺が喋る訳がないだろひ。

そんな面倒くさいこと俺がする訳がないだろひ。

「それとも・・・好きな子の方でも見て見惚れひきつてたとか?ー」

おこおこ。

俺はそういうキャラじやないってば。

残念だけどそういう話にのる野子ではないってば。

「まあ・・・中二の秋だしね。好きな子と高校別々になるかもって思つ不安定な時期でもあるわよね。」

おいおい。

だからなんでそんな話に・・・
しかもあんたずいぶんと楽しそうに話すな。

「私が中学の時はねー・・・」

おいおい。

だから聞いてないんだけど。

あなたの恋愛話なんて。

保険医つてこんな感じなのか?

こんな感じでいいのか?

中学の教師つていえば生徒になめられないよつて厳しいオーラが
出でんのに。

この保険医はまるで無し。

だいたい、生徒に自分の恋愛話をするか?
しかも楽しそーに。

いつになつたら終わる話しなんだ?

そもそも、俺、相槌も打つてなければ聞く気も全く無いんですけど。

「ハチの氣も知らないで勝手に話を・・・

ど。

一人で勝手に喋つて・・・

ああ。

あいつもそうだつたな。

俺が何も言わなくとも
俺が聞いていなくても
あいつは話しかけてきた

こいつちの氣も知らないで勝手に・・・

一人で喋つて
一人で騒いで
一人で笑つて
一人で泣いて・・・

あいつが一日学校を休んだ。

それだけのことなのに。
ただそれだけのことなのに・・・

どうしてこんなドジを踏んだのか
ちょっとの火傷くらいいどうつてことない

「はい、処置終わりー。これからは気をつけるのよ。」

「受験生って言つたつて、部活は辞めても恋は辞める必要ないのよ。
後で気付いたつて遅いことだつてあるんだからね。今は、今日は一
度しかないんだから。」

「失礼しました。」

まだ続きそうな話に別れを告げて。

保健室を出た。

どつと疲れた。

もう来たくはない。

もう来ないだろう。

もうこんなドジは踏まない。

あいつが一田学校を休んだ。

それだけのことで火傷なんて・・・

あいつがいたら何て言うか。

あいつがいたらどんな顔をするか。

あいつが居たら・・・

「今日は一度しかないんだから」

さつき保険医が言っていた言葉が頭に聞こえた。

今日あいつが学校を休んだ。

今日あいつは居なかつた。

今日・・・

あいつが居ないことに何故こんなにも引っかかる?

うるさい女がいなくてせーせーするだろう。

あいつがいなければ、気になることもないし。

あいつがいなれば、田で追うこともないし。

あいつが居なければ・・・

椎名萌を気にすることも

椎名萌を田で追うことも

椎名萌の顔を見ることも出来ないってことか。

「後で気付いたって遅いことだつてあるんだからね

保険医の言葉 聞いてないフリしてたのに

聞く気なんて全くなかったのに

十分影響受けてんじゃん、俺。

そう、今気付いた。

今更気付いた。

そこににあるべきことがあたりまえで
そこにるべきかたちあるものが

失くなつたことに気づくだなんて
失くなつて初めて気づくだなんて

居ない日を知つたから
居る日との違いを知る
違うと感じるのは・・・
違わなかつたことがあるから。

そう。知つているから。

この気持ちを。

この感情を。

思い出したから。

この気持ちを

この感情を。

あいつから教わつた気になるといつ気持ち。
そしてそれは・・・

俺もあこいつのことが好きだったといつーじ。

今日は長い一日だつた。

一時間由から五時間由までのいつも時間表。
単なる一コマ授業のはずだつたのに。

「おかえりー、晃。」

玄関先を掃いていたばあちゃんに会つた。
この時間にしては珍しい。

「どうしたん？ その指。」

面倒くさいことは避けたかった。
家に入る前に、取ろうと思っていた人差し指の包帯。
家に入る前ではあちゃんに気がつかれてしまった。

「ちょっと擦り剥いた。でももつ平気。」

「びっくりしたでえ。」

「保健医が大袈裟に巻いたんだよ。」

「晃が指に怪我するなんて何年振りじゃるなー。」

そう言つと簫と塵取を片付けながら家中へ入るばあちゃん。
静かに後に続いた。

「小さい頃はよくクレヨンやら絵の具やら塗つてなー。
お風呂入つても落ちんで、爪との間に色々な色付けてなー。」

独り言と受け流すこともできただろう。小さい頃の話だ。

別に気にする話でもない。

ただ・・・

「晃は絵の勉強をしたいと思わんのかい?」

「あやんの口から・・・

「あやんの言葉から・・・

「したいならしたいでいいよ。晃は晃のしたいことをすればいいんじや。」

「大丈夫だよ。俺はM校を受けるから。」

なるべく間を空けないで言った。
悩んでいると、迷つていると、
思われたくなかつたから。

夕食の席で、ばあちゃんの顔は見れなかつた。

あいつのことが好きだと気付いた。

だからといって、俺がM校を受験することには変わらない。
変わらないよ、ばあちゃん。

俺はM校に・・・

亘兄が受からなかつたM校に受かつてみせる。

俺がM校に・・・

ばあちゃんも喜んでくれるだろ?

俺がM校に受かつたら

俺が絵を描くと家族を悲しませる

俺が絵を描くとばあちゃんが悲しむ

悲しませばかりだつたばあちゃん。

大丈夫だよ。

俺がM校を受ければ家族は喜ぶ

俺がM校を受ければあちゃんが喜ぶ

大丈夫だよ。

俺はM校を受験するから。

その夜、見た夢はいつもと違っていた。
知らない風景、
俺の好きな空。
でも今回は白黒。

そして見えてくる女性の姿
が・・・

後姿でなかつた

最初からこっちを向いていた

いつもは俺が振り向かせたところで田が覚めていた

だが正面を向いている

こっちを見ている

白黒の夢だから

表情まではわからない

だが、あいつだとこう」とわかる

泣いてるのか？

泣いたのか？

どうした？

俺は近づこうとするのだけれど
距離は縮まらない

あいつはいつも向こへくるのに
距離が縮まらない

どうしたらいいのだろうか

どうしたらいいのだろうか

そんなことを考えていたら、朝になっていた。

朝の教室。

椎名萌の姿は無かつたが。
代わりにヒロアキが来た。

「ずる休み女、来たよ。」

「そうか。」

「おれもや、じょりく祐也とせ口聞こてねーんだナビ。」

四組の教室で。

俺とヒロアキが喋つているところのも

クラスの奴らからしたら珍しい光景なのだろう。そんな客観的なことを考えながら会話していた。

「今は祐也よりもしーなの気持ちの方を大事にしてやりたいって思つ。」

「祐也はさ、どう真面目な奴だし、生徒会とか部長とかで、やうに一つ完璧主義などこにあるからや。」

「おれみたいな奴から反する意見言われんのムカつくんだらうよ。でもさ、おれもばかじやないからしーなの気持ちくらいわかつてるしや。」

なんだ、こいつちゃん喋れるんじやねーか。

そんな風に思つてしまつた。

こんな風にヒロアキと喋れるとは思つていなかつた。ヒロアキとこんな話をするとも思つていなかつたが。

「おれ今日放課後しーなと話つけるから。もんじや食べに。」

「あ、河野君と穂高君、これ貼るの手伝つてー。」

「おっけー。」

おーおー。

なんで俺まで・・・

クラスの女子が掲示板の張替えをしているところだつた。椅子の上に乗つてゐるが、どうやら届かないらしく。たまたま近くにいた俺とヒロアキに声をかけたようだ。偶々。

ヒロアキはお安い御用と言わんばかりにさつと椅子に立つた。

そして俺は画鋲を渡された。

椅子に立つヒロアキに、一つずつ手渡していく。

「助かったー。河野君も穂高君も背高いから便利よね。」

「おいおい。

便利って・・・

そういう言葉の使い方するか?

「おれより晃君の方が背高いよね。」

「そうか?」

「おれ百七十一。晃君は?」

「あ・・・最近測つてねーからな。」

そんな他愛もない会話をしながら画鋲を渡していく。
貼っているのはこの間書かされた自己紹介カードだった。
一学期も半ばだというのに。

何故今更・・・

こんな面倒くさいことを。

考えた奴がいるのかが不思議だ。

「河野君、穂高君ありがとー。」

嬉しそうにお礼を言う女子。

満足そうなヒロアキの表情。

迷惑そうな表情の俺。

気付かれてはいないのだろうけど。

人とかかわるだなんて。
何かを手伝うだなんて。

面倒くさい。

特に女子とかかわるだなんて。
女子から頼まれごとをするだなんて。

面倒くさい。

その面倒くさいことをやり始めたのが・・・
あいつとかかわってからだつたな。

今日は学校に来たのか。
今日は学校に居るのか。

居ると聞いだけで
居るという言葉だけで

ホツとしている俺がいる。

好きな奴が学校に居る。
それだけのことなのに。

あいつのことを好きだと直覺した。
認めてしまえば後は楽だった。

あれだけ苛々していたのも

怒りという感情を表に出してしまったのも
今となつては良かつたのかもしれない。

人間、落ちるところまで落ちたら
後は上るだけ。

全部のもやもやと

小さな苛立ちの積み重なりが

全て消え去った後には

冷静さだけが残つた。

すつきり片付いた頭の中には

どんどん新しい事を詰めることができ

もうすぐ中間試験が始まる。

昨日の事が嘘のように、

今日は授業に身が入っている。

いつも通りの時間割を

いつも通りの教科書で

いつも通りにこなしていく。

移動教室があつた。

五組の前を通る。

いつも通りだ。

そう。

いつも通り。

ほら。

いつも通り。

一富の後ろ。
金魚のフン。
椎名萌の声。
見なくても。
聞こえてくる。

あいつの声。
あいつが居る。

帰りのHRが始まる前だつた。
廊下から視線を感じた。

ヒロアキか、とも思つたが。

一日振りに見る椎名萌は何か違つて見えた。

「体調悪かつたのか？」

「え、あ、うん。」

はつきりしないのは言葉だけではなく
表情もはつきりしていなかつた。

ヒロアキが言つていたはずの休みといつのも満更嘘ではないのか。

「私がいないのわかつたの？」

「ああ。」

「そつかあ。」

田を呑わせようとはしないのか。
俺は見ていた。

そして気付いた。

最初に感じた違つは、雰囲気だつた。
髪を縛つていた。

「変だつた。」

「え？」

「おまえがいなとなんか変だつた。」

「一つに束ねられたその髪に・・・
いつもつるさいばか女の
無駄に元気で走り回っている
その捕まえようのない髪に・・・
この手で触れてみたかった

「ちっちゃん。」
「そ、そうかな。」
「身長いくつ?」
「ひや、百五十五。」
「ちっせー。」
「ふ、普通だよお。」

百五十五。

そんなちっさかつたのか。
こいつの頭に手を乗せたまま、
改めて比べてみたが、
田線が合つことほ無かつた。

「あきちゃんは?」
「百七十・・・五とか?たぶん。最近測つてねーな。」
「まだ伸びてるの?」
「ああ、成長期だな。節々が痛む。」
「じゃあもつと大きくなるんだね。高校生になつたら・・・」

とそこまで言つて話を止める。
急に俯いた。

「なんだよ?」
「ううん、なんでもない。」

「途中で止めるなよ。なんだ？」

「いつに田線を合わせるには
いつの顔を見るのには
俺が屈まないといけないと今気付いた

「ほんとに何でもないの。」

屈んで覗き込んだ顔。

何でもないっていう顔じゃねーじゃねーかよ。

嘘つくの下手だな。

顔に髪がかかっていない分、表情がはっきりとわかる。

昨日何故休んだ？

どうしてそんな顔をしている？

泣いたのか？

何があつたのか？

俺は何も言わないし

俺は何も聞かない

廊下に教師が見えた。

H Rが始まるだろう。

「じゃあね、あきちゃん。」

そう言つと、小走りに自分の教室へと戻つていった。
その後姿を見ていたら・・・
一つの視線と交わつた。
たまたまだろう。

偶々。

五組の学級委員をしている奴と。

中間試験が始まった。

前回の定期試験の結果は散々だつた。

今回で挽回しなければ。

この試験の結果で来月二者面談を行つといつ。

この試験の結果さえ良ければ・・・

M校受験を担任に言つことができる。

試験は五科目一日間で行われる。

調子は良かつた。

気持ちの整理

頭の整理

そんなの今までの俺には必要の無いことだと思っていた。

でも・・・

あいつと出会つてから

あいつのペースに乱されて

あいつのことを考える自分を認めたくなかった

あいつのことを見ている俺

あいつのことを見ている俺

あいつのことが好きな俺

全部認めてしまえば次に進める。

次・・・

そう。

俺は次に進まなければならぬ。

M校に合格して。

亘兄が受からなかつたM校に合格して
亘兄を越えて・・・

ばあちゃんの喜ぶ顔が見たい。
ただ、それだけのこと。

8 .

あいつのこと好きだと認めた途端
見えてくるものがある

「おはよー、あきちゃん。」

いつもの朝。

下駄箱での挨拶。

いつもうるさい女・・・の、後ろに。

芳沢？ だつけか？

体育祭の後、

後期の委員会を決めた。

面倒くさいが毎年、前期と後期の一回委員会決めが行われる。

それで椎名萌は後期の学級委員になつたんだつけか。
確か、芳沢というやつと一緒に。

椎名萌は学級委員タイプには見えなかつたが。

お祭り好きな委員会ばかりをやつている「富の金魚のフン」。

「富の後ろにいるイメージだつたが。

そういうえば、生活委員はやつていたか。

一年の時も、二年の時も。

こんなつむさい女が生活委員?と思つていたが。

副学級委員的な存在である生活委員をやつていたら、そのまま学級委員を押し付けられるケースもあるか。

押し付けられたら断れないタイプだらうしな。

「昨日たのがねー」

またいつものように。

そう、いつものように椎名萌は一人で喋り始めた。

俺が何も言わなくとも

一人で勝手に話しかけてくる。

それで良かつた。

声が聞けるなら。

俺の隣に居るなら。

「じゃあね、あきちゃん。」

今朝は四組には寄り挂けて自分の教室へと入つていった。

芳沢と一緒に。

芳沢とは話したことはなかつた。

椎名萌やタケと同じ小学校の出身。

芳沢は見るからに学級委員タイプだな。

中間試験が終わって。

関くんに誘われて、部活に顔を出した。

面倒くさかつたが。

久しぶりに体を動かした。

十月の体育館に
湧き上がる汗。

「やべー 明日絶対筋肉痛ー！」

倒れこむように床に寝転んだ。

「先輩お先でーす。」

「おおー、気をつけて帰れなー」

関くんは今でもしつかり先輩だった。
俺は・・・

元々部活動に興味がなかつた。

勝兄の活躍のせいで、陸上部から、運動系部活動からの勧誘を受けた。

どれもこれも面倒くさいだけだった。
陸上なんて。スポーツなんて。

県大会の記録を持つ勝兄。

未だ誰にも破られない記録。

誰かに破られない限り、続く記録。

輝き続ける栄光・・・

そんな優秀な兄を持つた弟の苦労が
誰にわかるもんか。
誰がわかるもんか。

たまたま・・・

そう、偶々。

バレー部には勝兄のことを知る先輩がいなかつた。

それだけのこと。

それだけのことで入部した。

だから部活には真剣に取り組んだ記憶はない。
適当に。

「まだ絵を描いてたのか」

勝兄のことを考えていたからか。

急に頭の中で再生を始めた台詞。
もう何度もリピート再生したことか。

いい加減・・・

「最近どうよ? あきちゃん。」

横で寝そべっていた関くんの声が誰もいない体育館に響く。

「べつに。」

「でたーあきちゃんのべつに。」

「試験は上手くいったのー? つでオレに言われなくても完璧か。」

「それでもないよ。」

「またまたあー。」

体を休めていたら
だんだんと汗が引いてきた。

そろそろ着替えないと体冷えるな。

「あきちゃん、高校はどう受けんの?」
「考え中・・・」

関くんには悪いが、まだ人に話せる段階ではない。
M校なんて、言えるわけがない。

起き上がって、更衣室へと向かった。

「俺さー、高校行つてもバレー続けよつかと思つて。
『いいんじやん。』

『だからあきちゃんと同じ高校行けないかなーって。』

おーおー。

俺はバレーはやります。

「スポーツ推薦狙うのか?」

「まあ、そんなとこ。」

関くんらしい・・・と思つた。

進路・・・か。

そういうの考える時期だもんな。
誰だつて。

「普通高校バラバラになつちやうねー。ーねりー

ふと、思に出してしまつた。

何で思い出したのかは考えたくないが。

先日、保健室で。

保健医も同じような事言つてたな。

「椎名さんとも高校離れちゃうね。」

おじおこ。 関くん。

明らかにワザと言つてゐるだろ？ それ。

「あ、先のことよつも今。 まあ今だねー。 早くしないと誰かさんにて
取られちやうよー。」

なるべく無表情で着替えた。

やはり動きを止めた体は冷え始めていた。

「うー、うー。 って言つてこじやないの？ へん？ ん？

やつぱり。

何か企んでいるな。 関くん。

そういえば、誕生日の日、関くんの策略にハマつて
体育館まで全力疾走したよな。

「ふーん。 いいけどねー、別に。」

俺が話に乗つてこないとわかつてか
関君も自分の着替えを始めた

「でも知らないよー、椎名さんてああ見えてけつこいつモテるんだか
ら。 少なくとも、オレの知る限りでは3人！」

おいおい。

着替え始めたんじゃなかつたのかよ。

おいおい。

三人つて・・・

その話・・・

北山、ヒロアキ、芳沢・・・もか？

祐也もか。

あ、俺もか。

関君が何を企んでいるのかはわからないが。

関君はいつたいどこまで知つてているのか・・・

あいつを好きだという奴がいるのは知つている。

前回体育館で、関くんに「好きになっちゃえればいいの」「とか言
われたな。

あの時は・・・

あいつとはかわらないと決めていた。

あいつといふと、大事な事を忘れてしまうから。

絵を描くこと。

ばあちゃんを悲しませること。

家族で俺の立場が悪くなること。

でも・・・

あいつのことが好きだと気付いてしまつた。

認めてしまえば次に進めた。

それでいいじゃないか。

関君が思つ通りになつたじやないか。

でも・・・

俺があいつのこと好きだとしても

俺がM校を受ける」とは変わらないんだ

M校に受かつて

亘兄の受からなかつたM校に受かつて

「まだ絵を描いてたのか」そう言つた勝兄の「こと」も
教師になつてばあちゃん孝行をする勝兄の「こと」も
越えたい

そう思つていろ

だから・・・

そのためには・・・

俺がM校に受かるためには・・・

やつぱりあいつとはかわらない方がいいのかもしれない
そう思つた。

俺があいつのこと好きでも
あいつが俺のことを好きだとしても
両方は無理なんだ。
わかつている。

M校に受かること

あいつを好きでいること

ただ、それだけのこと。

中間試験の結果が出た。

相変わらず一位を独占し続いているのは松岡聰一。

タケは三位に入った。
俺は四位。

なんとか元に戻せたってところか。
これでM校受験を担任に切り出せるか。
来週、いよいよ三者面談。
あの父親と。

掲示板に群がる人々の中に

あいつの後姿を見つけた

今日は一つに縛つてているのか。

最近あいつの雰囲気が変わった
肩に付いた髪を結ぶようになつて

二つに結ぶ日もあれば

一つの日もある

かと思えば、結んでいない日もある

べつに椎名萌が髪を縛ろうが縛らなくとも

俺には関係がないのだけれど

そう・・・

関係はないが

気にはなる

あいつのことば氣になるんだ。

でも・・・

両方は無理なんだ

俺にはやらなければいけないことがある
忘れていた大事な事

だからおまえのことは・・・

そう、頭ではわかっているの
理屈は理解しているのに

体が・・・

手が・・・

あいつに向かつている

あいつに触れたくなる

あいつに・・・

手を伸ばしてしまうんだ

首に手をかけよつとしだが、

一つに結んだ髪が首筋をきれいに見せていた

だから彼女の髪をひっぱってみた

「わっ！・・・誰？」

振り向いた。

髪を縛つていると顔が良く見える。

「あきひやん・・・やめてよー、ほゞけつけつけ！」

緩んだ結び目を直そうと両手を後ろに回す女の仕草を見るのも初めてだった。

そしてその顔。

顎のラインがくつきり見えて。
すつきりした様に見えたのは気のせいだろうか。
少し痩せたのか？

「あーあきひやん見たよー。すいこね。」

急に顔中に笑みが広がった。

最近見ていた表情の中で一番良い表情をしてくると思った。

「やつぱあきゅやさんが描くのは違うね。」

え？

描く？何を言つてるんだ？

成績のことじやないのか？

「次元が違つていつのかな、空間が深いつていつか・・・

「何のことだ？」

「あれ？もしかして見てないの？」

「何を？」

「あきゅやさんの絵。」

「は？」

思わず口に出してしまつた。
いつもなら呑み込む台詞を。

「美術室の前だよ。見てないの？」「見てない。」

美術室？

俺の絵？

何のことだ？

「私ね、あきゅやさんの空の絵、感動した。」

おーおー。

その顔で言つなよ

おいおい。

その台詞で言つなよ

思い出してしまうだろ

忘れていたこと

忘れなきやいけないこと

忘れなきやならなかつたこと

あのコンクールのことを

あの転入生のことを

空の絵。

小四の時描いた絵で賞をとった

中二の「写生大会で描いた絵が入選した

中三の選択授業で描いた絵が選ばれた

それだけのことなのに・・・

「あれ？ 晃君次教室だよ？」

健太に呼び止められたが

そのまま進んだ。

今は進まなければならぬ気がした。

この田で・・・

確かめたかつた

あいつの笑顔。

あいつの言葉。

その答えを・・・

適当に描くつもりだったのに
適当にかけなかつた絵

居残りまでして仕上げたのは
選択授業の单なる絵
選択授業は成績評価に関係無し
関係ないのに・・・
適當が出来なかつた俺。

夏休みに描いていた絵
夏が終わつて・・・
勝児に絵を描いていたことが知られて
夏は終わつた。

秋になつて
忘れていた大事なことに気づいて
あいつから離れて・・・
そんな時期に仕上げた絵
少し歪んだ空の絵。

美術室の前で足を止めた。
時間割の中に一コマだけ。
週に一度だけある美術の授業。
それはあいつも同じなのに。

わざわざこんな校舎の一一番隅にある美術室まで
来たのか

偶々。

偶然だろう。

見に来るわけがない。

こんなところに。

誰も気づかない場所。

誰にも気づかれない掲示板。

誰も頼んでいないのに。

勝手に先生が貼ったのだろう。

誰も気づいていないのに

誰にも気づかれていなかつただろう。

あいつは・・・

あいつだけは・・・

俺の絵を見ている

昼休みだった。

職員室の前を通り過ぎたところで視線を感じた。

「そこ」の男子。

俺か？

周りを見渡したが他に誰もいない。

「君だよ、キミ。」

俺か？

やっぱり俺なのか？

「カムカムー。」

手招きをされた。

招かれた先は・・・

職員室の隣の・・・

保健室。

まさにあの保健医。

「穂高つて、あの穂高の弟君だったのね。」

“あの”というのはどっちのことだか。
県大会記録保持者の勝兄のことか
成績優秀者の亘兄のことか
どっちでもいいけど。

どっちでも同じだけど。

どうせ、兄達が凄いと言うのだから。

保健室に呼び止めて。

昼休みに・・・

貴重な休み時間に・・・

こんな保健医から・・・

その優秀な兄達の弟なのだからと

その優秀な兄達の弟なのにと言つのだらう。

もう聞き飽きたよ。その話は。

「お兄さん！」の常連客だったのよ。
「よく体育の授業で怪我してねー。」

は？

何の話を始めたんだ？

「この保健医は。

「スポーツに対する変なプライドかけてた子でね、頑張り過ぎて力が入りすぎちゃうから怪我するよね。」

「その上にお堅い頭でさ、勉強でも一位とらなきゃって根詰めてたタイプ。」

思い出し笑いをしながら話す保健医。

一位・・・

亘兄のことと言つてるのか？

「なんでそんなに一位に拘るのか聞いたの。そしたらー。」

「なんでも優秀なお兄さんがいるとかで。その人を越えるんだって。

「

亘兄のことだ。

保健室に通つていたことも

勝兄を越えたいと思つていたことも
知らなかつた。

「この間あんたが来た時に、どうかで見たことある顔だとは思つたのだけど。」

「その顔、同じね。人に知られなによつて、悟られなによつて、自分感情を抑えて。あんたのお兄さんとそつべつ。」

似ていると言われるのは心外だつた。
だから顔に出てしまつたのだろう。

思わず。

「その顔。あんたもお兄さんを越えたいって思つてるの？」

ひどく気分が悪くなつた。
体調ではなく、気持ちが。
この場から去りたかった。

「やうやつに逃げ出されると、お兄さんとやつへつ。」

床を蹴り上げた足を踏みとじめた。
似ていると言わるのが心外だつた。
だから似せないことが必要だつた。

保健室から出る」とは簡単だつた
だが・・・

「で？あんたは何と戦つの？」

心理戦に負けたのは俺。
勝つたのは保健医。

始めから勝負は決まつていたのかもしれない。

先日、この保健医に会つて。

もうここへは来たくないと思つていたのに。

足を踏み入れてしまつた俺の負け。

「上のお兄さんはスポーツで敵わないから、真ん中のお兄さんは勉強で敵わないから、そりやつて理由を付けるのは簡単だけど。
「いつまでも甘つたれてないで、あんたはあんたの生き方を見つけ

なさいよ。自分にしか出来ないこと。」

そう言つと保健医は俺から視線を外した。
そして何事も無かつたかのように、保健日誌を書き始めた。
もう帰つていいわよ。
そんな合図だった。

変な保健医。

この間も変わつてゐると思った。
教師とは思えない言動。
一人で勝手に喋り続けて
一人で勝手に終わる。
かかわりたくないと思った。
なのに・・・

あいつも同じ。

変な女で
一人で勝手に喋つて。
うるさい女。
かかわりたくないと思つた。
なのに・・・

保健医も椎名萌も・・・
兄達の事を・・・
知つていて
知つているのに・・・
誉め讃えることはしなかつた。

成績優秀者の亘兄

俺は・・・

教師になるといつ勝兄
医者になるといつ亘兄

俺は・・・

M校を受ける
それだけか?
M校に受かる
それだけか?

俺は・・・
俺は・・・

M校を受けて
M校に受かつて
M校に受かつて
どうするつもりだったのだろう

M校を受けて
M校に受かつて

亘兄の受からなかつたM校で高校生活を送つて・・・
その後は・・・

どうするつもりだつたのだろう

亘兄の受からなかつたM校で高校生活を送つて
次は亘兄より上の大学を目指すのか?
次は・・・

亘兄より上の大学に合格して

次は・・・

亘兄より優秀な医者になるのか？

亘兄より優秀な医者になつて・・・

次は・・・

その次は・・・？

そうやつて俺はどこまで兄を追い続ければいい

そうやつて俺はいつまで兄を追い続けなければならない

いつたいどこまで・・・

いつたいいつまで・・・

わかつていたことではないか。

勝兄は教師になる。

亘兄は医者になる。

社会に出れば一人の大人として、社会人として、

一人。

そう、一人だ。

一人の教師として

一人の医師として

別々の道を歩む

別々の道を進む

どっちが走るのが速いか
どっちが上の大学だとか
そんなの無くなる

兄弟でどっちが上とか下とか
兄弟で越えるとか見返すとか
そんなの無くなる

そんなの無くなる
そんなの無くなるんだよ

それなのに・・・

俺は・・・

俺が進もうとしている道は・・・

「あきちゃん?」

田の前にあいつの顔があつた。

「帰らないの?」

辺りを見回すと教室に残っているのは数人だつた。

「体調悪いの?」

前の席の椅子に座つて俺の顔を覗き込んでいた。
椎名萌に表情を読まれるだなんて。
ありえない。
在り得ない。

「いや、帰る。」

昼休み、保健室から教室に戻つて・・・

一時間授業を受けて。

掃除にH.R.

いつたいじりやつて過ごしていたのか覚えていない。
長い間一人でいた気分だつた。

「おまえは? 帰らないのか?」

「委員会の仕事が残つてゐる。四組覗いたらあきらめやん居たから、
寄り道しちやつた。」

そういうと笑顔を見せた。

椎名萌とは同じクラスになつたことは無いから

当然、教室でこんな風に前後の席で座ることも無かつた

席替えで、クラスの女子が隣になることも、前後になることも
当たり前のことだつたが。

椎名萌が目の前に座つてゐるところのは
なんだか不思議な感じがした。

「じゃあ行くね。」

そう言つて席を立ち
俺の横を通り過ぎるのが
まるでスロー再生をしているかのように
ゆっくり流れれる絵に見えた

だから思わず手を出しちゃつたんだ。

「なあに?」

掴んだのは左腕だった
振り返ったのはあいつの顔

なんだ。

何なんだ。

この感情。

どうしたんだ、俺。

「あきちゃん？」

気になるという感情も
好きという感情も
こいつが教えてくれた
じゃあこの感情は何だ?
何なんだ、これ。
どうしたんだ、俺。

「何でもない。」

そう言つて手を離した。

「変なあきちゃん。じゃあ、また明日。」

変といわれたことよりも、
また明日といつて言葉が耳に残つた。

いつものこと。

そう、いつものことじやないか。

朝はあいつのおはようから始まりて
帰りはあいつのばいばいで終わる

いつの間にか、学校生活の始まりと終わりにあいつがいて。
それが当たり前で
それが当たり前になつていて
気がづけば・・・
あいつの存在がどんどん大きくなつていた。

今日も一日が長く感じた。

そんな日は、決まって何か起つる日。
もう最近はそんなこと呑んで慣れてきたが。

ニアミス。

珍しく帰宅時間が一緒になつてしまつた。

亘兄と。

ふと、今日保健医から聞いた亘兄の事を思い出してしまつた。

「おまえ、本気で学校受けの気あんのか？」

もちろん田線は命わせない。

相手がどう出でくるか次第で返事も決まる。

「俺は先に行くぜ。おまえになんか構つてる暇ねーからな。」

俺の返事がイエスかノーか
それを聞いたかった訳では
それが聞きたい訳ではないらし。

高校三年の秋。

大学受験に向けて勉強の真っ只中だろ？。

中学三年の秋。

高校受験・・・はまだ志望校を決める段階。

「おかえりー。」

居間からばあちゃんの声が聞こえた。
亘兄は先に階段へと向かつていた。
俺は居間に顔を出した。

「あ、晃。焼きまんじゅうあるんよ。おいしーで。」

ばあちゃんはお茶を煎れているところだった。
穂のかな香りのする緑茶。
つい先月までは秋といえど、夏のように暑かつたので
麦茶を飲んでいたのに。
十月も終わりとなると、熱い緑茶が美味しく感じる。

「食べながら聞きんしゃいね。」

そういうと、ばあちゃんが話し始めた。

まるでこの為にお茶菓子が用意されていたかのよう。

「亘が志望大学を決めたそうでな、なんでも千葉の方にある大学へ
行きたいそうな。」

ふーん。千葉か。

通えない範囲じゃないか。

「それでな、東京の郊外におまえの母さんの実家があるんよ。」

「へー。そんなの初耳だな。
でもなるべく表情を変えないで聞いていた。

「『回に向』いつのばあちやんちに下宿させてもらつ話をしたんだがね、

「何でも自分一人で生活したいとな。断つたんよ。」

「旦兄らしげにな。

正直、そう思つた。

「疎遠になつとるが、あちらさんもずいぶん心配して下さつてのー、

「晃の絵の話したらぜひ一度遊びに来なにかつて仰つての。」

「ふほつ。

おこおこ。

お茶で咽たゞ。

「母さんと同じ、晃が絵を描くことそれは喜んでくれてのー、

「なんでも近くに美大の付属高校があるりじくてな、

「おいおい。
ばあちやん。
いつたいどうじしたんだ?」

「晃にまだ絵を描く気持ちが残つてゐるなら、ばあちやんはな・・・

おこおこ、
ばあちやん、
じつした、じつした。

「晃は昔から何も言わないが、そんな風に育ってしまった・・・」
「ばあちやんな、申し訳なこと思つとんよ。」

「そんなことないよ。」

やう言ひのが精一杯だった。
じつじょいかと思つた。
この場を、じつじょうかと思つた。
止めることもできただろう。
交わすこともできただろう。
適當。

受け流すこともできただろう。

でも・・・

ばあちやんの涙が浮かんでいたから
ばあちやんが悲しむ姿を見てしまったから
また、ばあちやんが絵のことだ
俺が絵を描くことでばあちやんを悲しませてしまったから・・・

「勝が帰つてくるのはな、自分と戦つた結果なんよ。」「教師になると決めたのも、よー自分と戦つて決めた結果なんよ。」

急に勝児の話しが始まった。
あれ。

「亘が一人で生活すると決めたのも、自分と向き合った結果なんよ。」

「もし大学受験に失敗しても、千葉で一人暮らししながら頑張りたいんで。」

おーおー。

今度は亘兄の話・・・
ばあちゃん?どうした?

「勝は自分の体力の限界と戦つて、亘は自分のプライドと戦つてるんよ。」

「晃は何と戦つてるんじやい?」

ばあちゃんを悲しませたのは俺。
俺が絵を描くことでばあちゃんが・・・
あれ、
あれ?
なんだ?
何なんだ?

ばあちゃんが言っているのはそういうことではない。
ばあちゃんが悲しい顔をしてているのはそういうことではない。

そう。

そうだろう。

田の前で話すばあちゃんが・・・

俺を見ている。

俺は・・・

どうしようかと思つた。

この場を、どうしようかと思つた。

止めることもできただろう。

交わすこともできただろう。

適当に。

受け流すこともできただろう。

でも・・・

俺は・・・

逃げる訳にはいかない。

もう・・・

こんなところまで来ていたのか。

もう・・・

いつの間にか来ていたのか。

夏が終わって

秋の始めに勝兄が帰つてきて

そこから既に始まつていたのかかもしれない

教師になると言つた勝兄。

中学生で県大会記録保持者。

高校ではタイムが伸び悩んだそ。

自分の輝かしい記録と戦う気持ちつて一体どんな苦労があつただ

るつか

東北の有名な大学へスポーツ推薦で特待生入学。
さらに圧し掛かる周囲からの期待とプレッシャー。

輝かしい記録と、有名な大学のネームバリュー。

そんな中で過ごしている勝兄の苦悩。

考えたこともなかつた。

医師になると誓った亘兄。

中学に入り、すぐに勝兄の弟と注目を浴びせられたことだらう。あの勝兄の弟なのだからあの勝兄の弟なのにと。

勝兄というスポーツ万能な兄をもつた苦勞。スポーツがあまり得意ではない亘兄。

だから勉強を頑張るしかなかつたのだらう。一位でなければならなかつたのだらう。

兄にスポーツで敵わないのなら、勉強で兄を越えようとしたのだろう。

一位を取る苦勞、一位を取つてからの苦勞、一位で在り続けることの苦勞。

そして、M校合格への期待とプレッシャー。考えたこともなかつた。

一人とも常に自分と戦つてたんだ。

いつまで？

どこまで？

見えない「ゴール。

見えたのは、目標が出来た時だらう。

教師という職業。

医者という職業。

社会人という具体的な自分を目指に掲げた時、解放されたのかもしない。

自分との戦いから。

いつまで追い続ければ

どこまで追いかけ続ければ・・・

いつまで追い続けても
どこまで追いかけ続けても・・・

やがて別々の岐を進むのだ。

社会に出れば

兄弟で上も下もない。

社会に出てしまえば

兄弟を越えるとか見返すとかそんなのは必要ない。

亘兄がさつき言つていた。

「俺は先に行く。」と。

兄の栄光の下、やつと自分の進むべき道を見つけたのだろう。
自分との戦いが終わり、次の戦いへと進むのだろう。

それに気づいたから。

そのことに気づいた者にしか分からない。

勝兄と亘兄が、

俺にも早く気付けよと知らせてくれたのかもしれない。

そうか。

そうなのか。

そうなのかもしねれないな。

ふーっと

大きく一つ息を吐いた。

「ばあちゃん、俺絵を描きたい。絵を描くのが好きだよ。」

「そうかい、そうかい。」

ばあちゃんは涙を流した。

ばあちゃんは笑っていた。

ばあちゃんを悲しませたのは俺。
ばあちゃんを喜ばせたのは俺。

ばあちゃんを悲しませたのは俺だった。
絵を描くことがばあちゃんを悲しませていたのではなかった。
ばあちゃんを悲しませていたのは俺自身だった。

小四の時に賞をとった絵。

その絵がばあちゃんを悲しませた。
絵を描くことはばあちゃんを悲しませる。
そう思い込んでしまうのも仕方がない。
まだ小学生の俺。

絵を描く描かないではない。

ばあちゃんに対しても俺の態度が変わってしまったのだろう。
いつからか・・・
いつの間にか・・・

物心ついたときから母親がいなくて
物心ついたときから兄達から嫌われていて

子供心に他の家と自分の家は違うことに気がついて
自分の立場を悟った
何かを期待するから裏切られる
何かを望むから失望がある

だつたら最初から期待しなければいい
だつたら最初から望まなければいい

小五で転入生が来ると言つた。

コンクールの時絵を讃めてくれた女の子。

でも転入生は男だつた。

翌年も転入生は来なかつた。

期待するから裏切られる
望を持つから失望する

そうやつて俺は・・・

周りにに対する程良い距離感を掴んでいた。

うまくやつているつもりだつた。

うまく立ち回ってきたつもりだつた。

でも・・・

ばあちゃんに對してもいつの間にか安全な距離を保つていた。

うまく付き合つてゐるつもりだつた。

うまく立ち回ってきたつもりだつた。

それが・・・

ばあちゃんにとつて一番悲しい事だとも氣づかずに。

絵を描くことがばあちゃんを悲しませていたのではなかつた。
ばあちゃんを悲しませていたのは俺が変わつてしまつたから。
そんな大事なことに今更気づくだなんて。

絵と向き合えなかつた自分。

絵と向き合つてこなかつた自分。

ばあちゃんと向き合つてこなかつた自分に。

もう十分だね。

母親のことも
兄達のことも
変えられない事実。

事実ならそこから逃げずに
変えられないなら変わればいいじゃないか
自分で。
自分が。

そうだろう。

ただ、それだけのこと。

10 .

「晃、待たせたな。」

十一月に入つて最初の日曜日。
塾帰りのタケに時間をもらつた。

「悪いな、疲れてるとこ。」

「何言つてんだよー。晃ここのんとこ俺んち控えてただるー。氣一使
い過ぎだつづーの。」

午前から塾に缶詰状態だつただるつ。
やつと開放されて疲れが溜まつてゐるであつて、タケは笑顔で
やつて來た。

「ここじゃ何だからどうか入ろうぜ。あー、腹減ったー。」

「ああ。」

俺達はタケの塾から近いファーストフード店に入った。塾と勉強のストレスからか、タケの注文商品は多かった。そういえば、秋になってタケがふつくらしてきた。元々ぽっちゃり系だったが。

「オレに話しあんだろ?」

「サイズのポテトを口へ運びながらタケが言つた。
さすが。

俺が何も言わなくともわかってくれている。

タケは俺の変化に気付いていたけれど
何も聞こうとはしなかった
俺の口から話されることを、ただ待つてくれた。

だから今日は話す。

一番に、タケに伝える。

一学期が始まつて
勝兄が一時帰省をし

絵を描いていたことが家族にバレた。

おまけに成績を落として、自分も見失いかけた。

椎名萌とかかわってからだと、あいつのせいにした。

だから椎名萌とかかわることを辞めた。

目標が持てない俺の存在は、一番目の兄に不快感を与えていた。

俺はこれまで築いてきた自分の感情が歪み始めていたことに気づくのが遅かった。

父ちゃんと両兄の前でM校受験を宣言した。

全てをM校受験の為に捧げるつもりだつた。
でも、受験勉強どころか授業にも集中できず
小さな苛々が積み重なつてもう自分では抑えきれない程にまで膨
らんでいたことに気づかなかつた。

爆発させて気づいた。

椎名萌のことが好きだつたこと。
兄貴達が戦つていたもの
があちゃんが抱えていた想い
そして・・・

ようやく自分自身と向き合えたこと

「そつか、良かつたじゃん。」

俺が話している間にタケは注文した商品全てを食べ終え、
最後に一気にジュースを飲み干した。

「晃ともつづいぶん長い間話してなかつた気がする。」

「なんだよそれ。」

俺は注文したコーラを一口飲んだ。

タケは紙ナフキンで食事を終えた口元を拭いていた。

「一年の時さ、初めて晃が話しかけてきた時、あれ以来かな・・・」

「おいおい。」

「まつ、それは[冗談として]いや、あながち[冗談でもないんだけど]

「タケ・・・・」

「だつて晃全然家のこととか話してくれなかつたじゃん。出身校違

うからさ、オレ健太とかに聞いたりしてたんよ。」

「それでなんとなく、訳アリなんだろ? なーとは思つていたけど。まあ、いつか話してくれるだろ? と思つてたら、三年の秋かよ。みたいな。」

食事を摂つて満足したからか
さつきまでの塾の疲れが吹き飛んだ表情をしているタケ

「でも良かつたな。うん、うん。俺も良かつた。晃の絵、俺好きだからさ。また見れると思つと。」

おいおい。

どつかで聞いた台詞だな。

ああ。

あいつが・・・

「あいつさ、最近髪型違つじゃん。」

「ん? 椎名か?」

「髪縛つてたり縛つてなかつたり。」

「・・・そうか? 気づかなかつた。あいつ元々縛つてなかつたか?」

「夏ん時は縛つてなかつた。」

「そりだっけか。覚えてねーな。」

タケは椎名萌を見ていなかつたつてことか。
タケは椎名萌を気にはならなかつたつてことか。
そんなことを思った。

「俺、元々あいつとはかわりたくねーと思つてたのに。ついでにい
し、にののフンだし。」

「あははー、にののフンだな、確かに。」

「なのに、髪縛つたり縛つてなかつたり。うるさかったのに、うるさくなくなつたり。無駄に元氣で馬鹿みたいに笑つていたのに、泣きましたつて顔しやがつてや。」

「へー。」

「いつたいなんなんだあいは。」

「ブハツ！」

タケが噴き出して笑っていた。

俺の方を見て、悪い悪いと合図をしてきたが、笑いは止まらないようだつた。

「晃からそんな風に思われる椎名つて・・・やばい、笑いのツボにハマッたー。」

一年の頃からタケに辞書だの教科書だのを借りに来ていた女。

そいつの後姿をタケがいつも見ていたから・・・

俺はてつくりタケは椎名萌が好きなのだと思つていた。でも、タケと過ごす時間が増す毎に違うのだと気づいた。気になるとか、好きという感情をあいつから教わつて。俺も気付いた。

タケはそうゆうのではなく、異性とかではなく、人として椎名萌のことが好きなのだろうと。

「俺、椎名のこと好きだつて認めた。」

さつきまで遠慮なく笑っていたタケの表情から一瞬笑みが消え・・・

「知つてたよ。」

タケの、歳に合わない表情を見た。

大人びたというか、少しハニカム感じの笑顔。
初めて見る表情が印象に残った。

それから俺達はいつものように他愛もない話をして別れた。

帰り道。

見上げた空は夕日色。

オレンジが茶色がかっていて。

秋の終わりを告げるかのように。

冬の始まりが近づいていたこと知らせていた。

中学に入つてから三度目の秋。

タケと初めて話したのも秋だった。

今日タケが言っていたつけ。

もうずいぶん長い間話してなかつた気がすると。

一年の秋、初めて本音で話せる友達に会つた。

共通の趣味、共感できる芸術感覚。

家庭環境から、自分のやりたい道をあきらめなければならぬ境遇。

遇。

でも、本音で話せたのも絵のことまでだつたのかもしれない。

家庭環境や境遇は似ていただけで、本来全く別物だつた。

そのことに気づいてしまつたから。

絵の事は話せても、母親の事、兄貴達の事は話せなかつた。

だから、タケが言つたこともあながち冗談ではないだろう。
全てを話せるまでに丸二年もかかつたのだから。

タケにしか・・・話せない。
タケにしか、話せなかつたよ。
タケに、話せて良かつた。
ただ、それだけのこと。

翌朝は月曜日。

また一週間が始まる。

「あさひちゃん、おはよう。」

いつも通りの朝。

そう、いつも通り。

あいつの挨拶で始まる学校。

そしてその横には・・・

芳沢。

椎名萌のことを好きだと認めたから
見えてくるものがある

相変わらず無駄に笑顔で元気ないうさこい女。

それに応える芳沢。

その対応から、丁寧さと親切さと・・・

ああ、ほら。

見えてくる。

芳沢が椎名萌を想う気持ちが。

べつに。

特に俺には関係のないことなのだけど。

そう、関係が無いと思っていたのだけど。

気になるし、好きなのだから仕方のないことなのだけど。

なんか変につつかかるんだよな。

曖昧というか、あやふやといつか、苛々とは違うなんだか違和感を感じるこの気持ち。

これ、なんだっけか？

一時間目が終わり、二時間目は移動教室。月曜日の時間表をいつも通りにこなすだけ。

移動教室への経路も同じ。

いつもの廊下。

すれ違う生徒達。

その中に・・・

ほり、いつも通り。

あいつもいる。

そして、いつも通り。

一人で喋っている一宮。

距離が離れていても聞こえてくる一宮の声。

その後ろ。

一宮の金魚のフン。

ほり、いる。

徐々に距離が詰まってきた。

あいつの顔が・・・

見える。

だが下を向いていた。

一宮の話に賛同することもなく。

ただ、一人、俯いていた。

また泣いたのか？

どんな表情をしているのか・・・

振り向かせたくなる。

気づかせたくなる。

俺とすれ違うこと。

俺が居ることを。

「あつあらぐーん、チャーオー！」

いつも通り、一畠のふざけた挨拶。

すれ違うだけなのに、無駄に明るくて元気印な奴。

この明るさに救われる奴もいるだろうが。

一畠の声でよつやく気がついたか、
顔を上げた椎名萌と目が合った。

今日は髪を縛っていなかった。

肩まで付いたミディアムヘア・・・とすれ違う。

縛つていなかつたので髪を引っ張ることが出来ず、
軽く額を叩いてやつた。

叩く・・・といよりは

俺が触れたかつたのだろう。

あいつに。

俺が触りたかったのだろう。

あいつの髪に。

昼休み。

タケを訪ねて五組で過ごしていた。

椎名萌のいる五組。

毎日が祭りモードの一室のいる五組。
相変わらずの昼休みだった。

そこへ響く奇妙な声・・・

「ひやあああー @ @ @」

聞き覚えのある声と現象。

タケと話しながら横目で見ると
北山が椎名萌の首をくすぐっていた。
以前やっていた俺が言つのもなんだが。
椎名萌の弱点でもある首。

懲りない奴。
両者共にな。

こうして客観的に見てみると
より分かり易い。

「クククツ・・・。」

横のタケが小声で笑つたので俺は視線を戻した。

「キタも懲りないねー。マジですかねー。」

タケの言いたいことはわかった。

北山が椎名萌を好きだと知ったのは夏前から。

だから今更・・・
べつに・・・
どうだつていいのだけれど。

それにほら。

いつも通りの光景。

好きな女を困らせて楽しむ幼稚な男子。

そうすることでしか好意を伝える手段がわからない幼稚な男子。

そしてそれを庇うのが一富。

困った時に一富に助けを求める椎名萌。

いつもの絵図。

五組らしい昼休み。

ただ、それだけのこと。

111.

十一月上旬。

いよいよ、二者面談の日となつた。

約束の時間5分前に父親がやつて來た。

前の面談者が終わるまで、廊下の待機椅子に座つた。

学校で、こうして父親と会うのは初めてではないか。
中学生は授業参観が無かつた。

入学式はばあちゃんが来てたつけ。

学校行事の体育祭も合唱コンクールも来たい保護者だけが來ていた。

小学生のように、誰の父さんだとか、母さんだとか、そんなのに
関心が無くなるのが中学生もある。

逆に、両親揃って行事を見に来ていたら、その生徒が恥ずかしい
思いをする位。

そういう年頃。

だから母親がいなくとも、父親がいなくとも、
中学では俺には関係がなかつた。

「UGH苦勞様です。」

「晃がお世話になつております。」

そんな会話から二者面談が始まった。

「晃君は成績も良く問題行動も無い真面目な生徒です。優秀なお兄
さん達と同じ位。」

でた。

余計な一言。

誉め言葉と勘違いして使つていいのだろうかと突っ込みたくなる。

「そうですか。」

父親がハンカチを取り出した。

十一月なのに額に薄つすらと汗をかいていた。

父親なりに緊張しているのか。

「「」家庭では何か学校の「」と「」について晃君から相談はありますか?」

お~お~。

お世辞の後はお決まりの家庭での様子かよ。

マニコアル通りな担任だな。

「お恥ずかしい話ですが、私は仕事でほとんど家におりませんので晃の祖母から学校のことは聞いております。」

お~お~。

そんな余計な話はいらねーよ。

「あ、お父さん確かに出張が多いと聞いておりました。失礼しました。」

お~お~。

だから言つただろ。

余計な話の展開は気まずさ全開になるだけだって。

家庭の事情は事前に把握しておけよ、担任。

「えー、では、進路希望調査では第一志望をK校とされていますが、その後お変わりはありませんか?」

きたきた。

やつと本題。

「その事ですが、晃と祖母と十分に話し合った結果・・・」

先月までの俺は、「」の場でM校受験を切り出したとしていた。

県内有名の進学校、M校。

「旦兄が受験に失敗したM校。

「晃の意思を尊重して、東京の私立高校を受験します。」

「えつ？！」

「おいおい。

そんなお決まりに驚かなくとも。

まあ、三年になつて二回提出した進路希望調査にはそんなことを書いてなかつたからな。

驚くのも無理ないか。

「S美大の付属高校を第一志望校に。第一志望校は県内のK校を考えています。」

「今度は俺の口から伝えた。
M校の名前を伝えるのではなく。

「そりだつたのか、穂高。先生は驚いたぞ。」

「ご迷惑をおかけするかもしれません、すみません。」

なぜそこで父親が謝る？

相変わらずハンカチで額を押さえている。

「県外の私立高校となると受験日程も異なりますし、美術という専門の学科は私詳しくないので、今度美術の先生にアドバイスをお願いしておきます。」

「お世話かけます。」

「いえいえ、晃君の力になれるよう、情報収集に努めさせて頂きます。」

「お願ひします。」

中学三年間、特に目立つた行動も起こそなれば

良い意味でも悪い意味でも地味な生徒で。

印象に残らせないようにしてきたのは俺自身だけ。

そんな無難でどちらかと言えば受け持つていて楽な生徒が
急に進路を変更した。

しかも、普通科の高校ではなく専門科の高校。

おまけに県外。東京。

田舎の中学からしたら驚きな話しだう。

ひょっとすると、M校受験を宣言するよりも驚かせたかもしだ
いな。

「県内の高校、K校に関しては晃君の成績でしたら十分受験可能と
思われます。」

「ありがとうございます。」

そんな会話で三者面談は締められた。
あつという間の一十分間が終わった。
進路を決める一十分間。
進路が決まる一十分間。

それぞれの生徒の
それぞれの家庭の
成績と進路。

「父さん明日から大阪だから今晚発つ。」

「うん。」

「晃も高校生か・・・早いな。冬休みに入ったら、一度母さんの実
家へ行つておいで。」

「うん。」

来賓者玄関口で父親と別れた。

同じ時間に面談だつたのだろう、他のクラスの女子が母親と一緒に帰宅するところだつた。腕を組んで仲の良い親子関係を象徴していた。

それぞれの家庭の
それぞれの生徒の
進路相談。

ふいに、タケの家は大丈夫だらうかと心配になつた。
父親が来るのか、あの母親が来るのか。

タケは第一志望校をM校にしたのか・・・？

タケのやりたい事と、親に決められた進路。
両方は無理なだと。
自由に出来るのは高校までだと言つていた。
両立・・・か。

M校受験と絵の勉強。
高校生活と趣味で続ける絵。
俺にも両方は無理だつた。
そう、両方は・・・

あいつのことも。

M校受験を決めていた時期、あいつのことも気になつていて。
かかわるのを辞めたけど
離れようと決めたけど

駄目だった。

絵の事も兄貴達の事もあいつの事も
かかわるのを辞めればそれで済むと思っていた。
それで終われると思っていた。

でも違った。

そこに終わりは無く、

離れようと避ければ避ける程

どんどん悪い方向に進むだけだった。

認めることで次に進むことが出来た。

認めてしまえば次に進むことは出来た。

でも・・・

次に進む道にはあいつはない。

絵を描くことはあいつと離れることになる。

俺がS美大付属校の受験に合格すれば・・・

あいつとは離れることになる。

あいつは泣くだろうか？

あいつを泣かせてしまつだろうか？

あいつを泣かせるとわかつていて、

このまま卒業までの時間を過ごすのか？

だつたら今のうちに・・・

あいつとは・・・

あいつの為にも・・・

やつぱりかかわらない方がいいのかもしねない。

「三番田のほつだかくーん。」

一番奥の美術室へ寄ろうと思つて
職員室の前を通ると

その隣の保健室から奇妙な声が聞こえた。

「あれが穂高父か。渋いねー。」

できれば聞き流したかった。
できることなら無視したかった。

「穂高父、何やつてる人?」

職員室の前の廊下といえば当然ながら静かな場所。
そこに響き渡る保健医の声。

絶対に止めたかった。

止めるためには仕方なく保健室に入るしかなかつた。

「普通のサラリーマンですけど。」

入ってきた俺に満足そうな保健医。
更に質問に答えた俺に嬉しそうに笑顔を向ける保健医。
うざい。帰りたい。

「普通のつていうのが引っかかるうー。」

「出張の多い大きな企業のサラリーマンです。」

半ばやけくそ状態で答えた。

この保健医に適当な返事は通用しないと知っているから。

「わお！大企業！さつすが穂高父ね！」

校庭に面した一階の保健室の窓からは
オレンジ色の夕焼け空が見えた。

サッカー部に陸上部、野球部とここからではグラウンドが見渡せる。
運動部に怪我はつきもの。

グラウンドからすぐに上がつてこれるようにと、保健室には外階段もあつた。

体育館競技のバレー部。

擦り傷切り傷程度なら、救急箱で対応していた。

保健室とは無縁だった俺。

いや、無縁で良かつた。

こんな保健医のいる保健室にお世話にならずに良かつた……。

「父は大企業勤務、兄は体育教師と・・・医学部だっけか？」

おいおい。

なぜに保健医が知っている。

いつたいどつからの情報だよ。

「で？二番田君は決めたの？進路。」

「はい。」

「ふーん。」

そこは聞いてこないのですか。
興味なしですか？

「あんた好きな子いるでしょ？」
「は？」

おいおい、思わず声に出たさ。
なんていきなりそんな話しちゃ
つてか、俺の進路は？
進路の話はどうでもいいのか？

「はい、当たりー！」

おいおい。

だからなんだんだよ。

この保健医は普通の会話できねーのか？

「認めちゃえれば案外納得のいくことばかりで自分が好きになれるわ
よ。」

おいおい、だから何で・・・
って、終わりかよ。

前回と同じ。

この保健医は自分の言いたい事が終わると
忙しそうに仕事をしてみせる。
もう、帰つていいくわよとこいつ会図。

まったく調子の狂つ。
毎回毎回思うけど
こんな教師、いいのか?
こんな保健医でいいのか?

勝手に一人で喋つて。
勝手に一人で盛り上がつて。

勝手に一人で終わる。

やつぱりあいつと似ている。
俺が無視できないのも
俺の調子を狂すのも
あいつの存在なんだ。

美術室は鍵が掛けられていた。

珍しいな。

もうそんな時間なのかと時計を見ると5時を過ぎていた。
図書室ならまだ開いているかと一回ターンすると

「あれ、あきちゃん。」

会つてしまつた。

椎名萌と。

「帰らないのか?」

三者面談の話を出されるのが面倒くさかったので
先に質問を出した。

「あ、委員会の仕事が残つてて・・・」

作戦勝ち。

先に質問を出せば、ばか女も勝手に喋りかけたりはしない。

「寄り道しに来たの。あきちゃんの絵、見に。」

絵？

ああ、美術室の前に貼つてある絵のことか。
校舎で一番奥にある美術室。
わざわざ遠回りするだなんてやつぱり馬鹿な女。

「あ、じゃあ行くね。」

掴んだのは右腕だった。

左にノートとペンケースを抱えていたから。

俺の横を通り過ぎるのが
俺の横を通り過ぎるのを
止めたかったんだ。

「あきちゃん？」

ああ。

そうか。
なんだ。

認めてしまえば簡単じゃないか。

俺が行かせたくなかつたんだ。
俺が？ まえていたかつたんだ。
俺が・・・
この手で・・・

両方は無理だとわかつていても
絵の方に進むことはこいつと離れるとわかつていても
今、離したくないんだ。

絵の方に進むことはこいつを泣かせてしまつとわかつていても
今、泣かせたくない。
俺が泣かせたくない。

ほら、その顔。

おまえのその表情を見ているとたまらない。
この気持ちは何だ？

この間、こいつの腕を掴んだ時と同じ。

同じ感情。

この気持ちは何だ？

「椎名さん、居た居た。」

廊下の向こうから聞こえてきた声。

見えてきた二つの影。

「職員室行つたらいいから探したよ。
「じめんなそーい。」

ぐるっと振り返つて小走りに走り去る。

椎名萌の後ろ姿。

正面に見えたのは芳沢と元生徒会長の松岡聰一。
迎えに来たのか。

やがて三つの影が遠くに見えた。

放課後の静まり返つた廊下に響く三つの足音。

それらの影と音とは別の方向に向かおうとした時だった。

足元に。

目に入った物。

生徒手帳が落ちていた。

あいつのか?

片手にノートとペンケースを抱えていた。

落としたことにも気づかないだなんて馬鹿な女。

追いかけるだなんて面倒くさいことどうして俺がするか。

拾つてやつただけでも有り難く思え。

明日渡すか。

あ、五組へ行けばまだ居るか?

図書室へ行くのを止め、

一応五組へ行くことにした。

頭の中で経路を確認したが遠かつた。

このまま玄関へ向かつて帰る方が余程楽だった。

美術室経路で行くと大分遠回り。

三年間通つた校舎なら当たり前にわかっていること。

なのに、あいつは寄り道をしたと言つていた。

わざわざ美術室に。

俺の絵を見る為に・・・か。

「認めちゃえば案外納得のいくことばかりで自分が好きになれるわ

よ。」

保健医の言つた事を思い出した。

こんな時に。

こんな時だからか。

あいつは俺の絵を見ていた。

俺の知らないところで。

俺の知らない間に。

いつの間にか・・・

俺の中に入ってきた

俺に絵を描くきっかけを与えてくれた

認めるさ。

あいつが俺に絵の大切さを気付かせてくれたんだ。

なるほど。

納得はいくな。

俺があいつを行かせたくなかつたんだ。

そういう自分もいるんだと。

認めるさ。

そんなことを考えていたら

五組の前に着いた。

三者面談は三時から五時の一 日八組。

計四日間で行われる。

五時を過ぎた教室にはもう誰も残つていなかつた。

あいつ等もいなかつた。

人の気配も足音も聞こえない廊下。

帰つたのだろうか。

同じ経路を通つてこなかつたので
すれ違うことも出来なかつたか。

まあ、明日渡せばいいだろ。

五時半か。

時折聞こえてくるのは部活動に励む後輩達の声。
グラウンドからか、体育館からか。

誰もいない校舎に聞こえてくるのは外からの音だけ。
四組に戻つてロッカーの荷物を持ち帰らうと思つた。

ふと、あいつの生徒手帳を開いてみた。

一年毎に更新される生徒手帳。

毎年四月に撮影される顔写真。

今よりもずっと髪の長い椎名萌の写真。

中二の終わり、中三の始まり。

そんな時の写真だからか。

少しだけ幼く見えた。

俺の知っている椎名萌。
俺を知らない頃の椎名萌。

あいつが俺を知ったのはいつだろうか。

四月、タケのクラスを覗きに行くと椎名萌がいた。

五月、挨拶をされるようになつた。

六月、修学旅行でも騒がしかつた。

七月、引退試合を見に来た。

八月、夏祭りで迷子になつた馬鹿女。

九月、表情がくるくる変わつた。

十月・・・

生徒手帳のスケジュールページを捲つていいくと

十月から委員会の予定がびっしり書き込まれていた。

後期から学級委員になつたんだつけ。

初めての委員長に選ばれて。

あいつ元々学級委員タイプじゃないしな。

馬鹿な女。

副学級委員的な生活委員をやつていたからといって、次は学級委員を・・・

てな感じで押し付けられたのだろう。

馬鹿みたいに人がいいから、断れなかつたのだろう。

雰囲気に流されて・・・

まあ、頭の悪い奴ではないから、引き受けたからには場の雰囲気を読み取つて責任を持つてやつてきたのだろう。

あいつなりに。

ばか女なりに努力もしてたのだろり。

元々学級委員タイプの芳沢と組むプレッシャーとか。

学級委員なのだからとかいう訳のわからん责任感を勝手に感じて。成績落とさないようによとか。

規則を守ろうとか。

頑張つてたのか。

あいつなりに。

落ち込んだり、泣きそうな顔したり、俯きがちだったり、暗い表情していたのも

あいつも自分と戦つていたんだよな。

十月の沢山の書き込みの中に・・・

一重丸印を見つけた。

BDという文字と共に。

その印が付けられていたのは六日だった。

ふと、ロッカーの上の掲示板を見上げる。

自己紹介カード。

一学期の中途中端な時期に物好きなクラスの奴らによつて書かされた物。

先月、偶々居合わせた時に女子に頼まれて後ろの掲示板に貼った物。

あいつ、これを見て俺の誕生日知つたんだっけか。
確か下書きの時点で持つっていた時。

誕生日を知られるだなんて面倒くさいこと。

俺の誕生日はめでたくも無く母親の命日なのに。

あいつはわざわざ皆の前で言いやがった。

おめでとうと暢氣に。

いつも無駄に元氣で無駄に笑顔で。
何の悩みも無さそうなばか女だと。
一人で勝手に喋つてうるさい女だと。
かかわりたくない。
思つていたのに・・・

いつの間にか、かかわりを求めているのは俺の方になつていた。
いつの間にか、居なくてはならない存在になつっていた。

大事だと思う。

あいつのこと、大事なんだと思う。

次の朝だった。

久しぶりに・・・

あの夢を見た。

色は黄色。

黄色いじゅうたんのような丘の上に
立っていた。

あいつが立っていた。

もう見ないとと思っていたのに。
今更・・・この夢?

夢だとわかつていても
覚めるまでは付き合わなければならぬ

そこまで意識ができていても
覚めないのだから仕方ない

だんだんと近付いてくる
俺が近づいているのか
あいつの方が俺に近付いて来ているのか
いつもわからなかつた

一人の距離が縮まって
手を伸ばせば届く距離

さあ、どうする?
振り向かせるか?

振り向かせてどうする?
その先は?

次の瞬間だった
あつという間に
景色が変わった
夢なのに
夢なのだから

教室で

俺の席で

あし一二を振り向かせた

二〇四

夢に出でたあこつだつた

—
“

夢の終わりを告げたのは意外にも目覚まし時計の音だった。いつもは目覚まし時計が鳴る前に目が覚めるのに。

おいおい！

学校が出てくるなんて初めてじゃねーか。

しかも教室だし。

「テジヤブ？」

“コンコン”

「晃起きたるかい？」

「うん。」

「ならいいんよ。朝ご飯おいで。」

寝坊も遅刻も滅多にしたことがない。

さすがにばあちゃんも心配して見に来たのだらう。

変な夢を見たから・・・

目覚ましを止めてからだいぶ時間が経っていたことに気づかなかつた。

一階に下りて顔を洗う。

洗面所を使っている時、玄関で声がする。

「行つてきまーす。」

旦兄だ。

毎朝、いつも通りの事。
生活時間帯をずらして。

朝食も別々に摂る。
ずっととやうしててきた。

「いただきます。」

朝食を食べ始めるとばあちゃんが向かいに座つた。

この時間のばあちゃんはいつもなら洗濯機を回すの。

「父さん今日から大阪じやで。」

「うん、聞いた。」

「やつかい。」

毎朝早起きなばあちやんは先に食事を済ませている。
それなのにわざわざ食卓に座つたといふことは何か話しがしたい
のだろうと思つた。

「父ちゃん、旦が一人暮らしを始めたら一緒に暮らす言つてたよ。」「へー。」

味噌汁を飲みながらやつかい答えた。

「出張多こそり、いげな田舎まで毎回帰つて来んと回と住んだら便利
じやで。」「やつだね。」

確かに。

父親は全国の大都市に支店を構える企業で働いていて。
こんな田舎から出張ばかり行つていて。
単身赴任にすれば良かったのに。
と思うことは何度かあった。

べつに父親が家にいてもいなくても
関係が無かつたし、
ばあちゃんがいたし。

でも子供ながらに思つていたこと。
父親の帰つてくる家はここなのだと。
どんなに短い滞在時間でも
荷物を詰め替えるだけでまた出かけてしまつことでも
決まって父親はこの家に帰つてきた。

特別何かを話すわけでもなく
食事を一緒にするわけでも無いけれど
父親にとつてはこの家に帰ることが何か意味を持っていたのかも
しれない。

それが何かは俺にはわからないし、
俺には関係がないのだけれど。
ただ、そんな風な考えもあるのだと。
今まで考えたこともなかつた。
ただ、それだけのこと。

朝の支度から少しづつ時間がズレて。
家を出る時間も遅かつたらしい。

八時に家を出れば十分間に合つ距離なのだが。

登校時間のちょうどピークにあたつたらしく。
いつもより下駄箱が込み合つていた。

喋りながら靴を履き替える奴。

履き替え終わつたのに友達を待つてゐる女子。

人の多さと比例して

聞こえてくるのは飛び交う複数の会話
その中から・・・

「五組の椎名さんと芳沢君が付き合つてゐるらしいよ。」

「えー、ほんと?」

「あ、私もその噂聞いたことがある。」

おいおい。

聞こえるって。

いぐらザワザワした中だからって・・・

「学級委員一緒にやつてるもんねー。」「

一緒に帰つてるとこ見た子いるってー。」「

えー、じゃあ噂は本当なんだー。」「

おいおい。

聞こえてるのは俺だけか?

噂ね・・・。

そういうの好きな年頃なのだろう。
誰と誰が付き合っているとか、
誰と誰が一緒に帰つていたとか。

一年の頃からあつたじゃないか。
人の噂。

良い噂も、悪い噂も。

噂なんて誰が最初に立たせるのか。
噂好きがあつという間に広げる。
そして噂話に拍車がかかる。

当事者の知らないところで。
当事者の知らない間に・・・

椎名萌と芳沢か。
だいぶ前から朝一緒に学校来てんじやん。
それだけで噂が立つのか。

それだけ・・・?

生徒手帳に書いてあつた委員会の予定。
委員会の仕事量。
それだけ一緒にいるつてことか。

まだだ。

また、変な気持ち。
この前も感じた。

曖昧といつか、あやふやといつか、苛々とは違うなんだか違和感
を感じるこの気持ち。

昼休み。

生徒手帳を返そつと思つて五組へ行った。

「おー、晃。」

教室の入り口の所でタケに呼び止められた。
関君と立ち話をしていたようだ。

「あ、あきちゃんだ。」

後ろから椎名萌が出てきた。
いや、元々関君の後ろにいたのだろう。
小さくて見えなかつた。
そこに珍しへ一富がいない。

教室の中を覗いてみると

中央で一富がちょっと大人しく席に座つてゐるのが見えた。

そして横には斎藤恵子。

なんとなく事態を理解できた。

「斎藤さんの怒りに触れて反省中。」

「あははー。」

「このも気の毒にな。」

一瞬、今度は何を仕出かしたんだ。
どうせまたばかな事をやって
斎藤恵子の用に詫びたのだろう。

五組の奴には慣れた光景のようでは、笑っていた。

隣に来た椎名萌に生徒手帳を渡そうとした時だった。

「ひゃああー @ @ @」

おーおー。
俺じやないぞ。

「よーすつー椎名ちゃん今日もかわいいねー！」

椎名萌の首をくすぐったのは北山。こいつも毎休みになると五組へ通つてくれる。マメといつか暇な奴。

「ねーねー、今度既でボーリング行こうよー、ねー、椎名ちゃんも

やー。」

「おー、こーねー、ボーリング。」

「だらつ、はい、関君参加ね！」

やう言つて、関君の肩を組む北山。

「あれ？このは？いつも一番参加のたのがいなーじゅん。あ、じゅん
あ椎名けやんやー・・・」

その流れにさすがにばか女も勘付いたのだらつ。

関君と肩を組んでいる左腕。

その北山の右腕が伸びてきてること。

半歩。

少しずつ・・・

後ずさつをしていくのが見えた。

廊下から急に現れ

首をくすぐった北山から

少しずつ離れる・・・

横に居たのは俺。

あいつの隣にいたのは俺だった。

「椎名けやんは？いつなら空いてる？」

「ど、土田は塾があるから・・・。」

「えー、そうなのー？」

「タケは？タケも塾とか言わないよね？」

「キタ、この時期受験生なら塾は当たり前だぞ。おまえも行つてる
だろ？」

「そりゃ行つてるけど、勉強に息抜きだつて必要じゃーん。遊ぼー
ぜー。」

「面を見たが、まだ斎藤恵子に捕まっていた。
こちらの様子には気づいていない……か。
いつもなら、こんな時。

椎名萌が困った時、庇つ一面。

困った時に一面に助けを求める椎名萌。

「ねーね、いつにする？ 椎名ちゃんは？ 塾終わった後は？」

「面がないから。

止めに入る奴も、話題を変える奴もない。
キタの誘いをどう交わすのか・・・
ああ、ほら。困った顔して。

「あれ、椎名ちゃん今日髪一つに縛つてるんだー。今気づいたけど
かわいいねー。」

え？

おいおい。

なんだそれ。

「キタ、とりあえず集まれる奴で行こうぜ。俺声かけてくるよ。」

「おお、関君頼んだー。」

北山に髪型を誉められ、触ろうと手が伸びていたのに気づいた。
あいつも気付いたのだろう。
とつさに？

偶々？

椎名萌が隠れたのは俺の後ろだった。

掴んでいたのは制服の袖。
意外と強く握られていた。
べつにいいけど。

生地が伸びる心配なんてしないけど。

そして俯いていた表情。
でも俺にはそれが見えたんだ。
俺にはそれが・・・
可愛く見えた。

なんだ、この気持ち。
最近わからない感情が多くすぎて。
あれとそれとこれと・・・
どれが同じ感情だつけ?
どこが同じ気持ちだつけ?

考えるよりも先に
頭よりも先に
体が反応した
体が答えた

答えは・・・

俺がこいつのこと好きだから
俺がこいつのことが好きだから
可愛いって思うんだ。
可愛いと思つたんだ。

「いやー、参つた参つたーのこの登場ーさすがに毎休み中喋るなは
きついわー。」

「あははー。に、の、皆笑つてたぞー。」

「ひどいよー、皆、助けてくれないんだもん。に、の、シヨツク。」

「あははー。齊藤さんを怒らせたにのが悪いんだぜ。」

教室の中央から、聞こえてきた声は

一気に教室中に広まり、笑いが起こった。

「おっ、もえ、どうした？下向いて。」

その声に、皆の視線が椎名萌に注がれた。
そして、慌てて顔を上げる。

「な、なんでもないよ。」

作り笑い。

俺にはそう見えた。

かわいくねー。

「そつか、もえちゃんの大好きなにのがいなくて寂しかったのね。

ヨシヨシ。」

「ち、違うよ。」

「だはははー。」

「に、の、調子良すぎー。」

沸き起こる笑い声。

クラスの中心に再び戻った二宮。

しかし五組はいつもの昼休みを取り戻した。

一人を除いて・・・

二宮が隣に戻つてきても

椎名萌の表情は暗かつた。

さつきの作り笑い、一富は氣づいていないのだろうか。
見ているようで・・・
見ていないのか。

一富は上手く騙せたつもりでも
俺は騙されないぜ。

その表情。

何かあつたのか？

そんなに北山の事、苦手なのか？

それとも・・・

芳沢との噂の事・・・か？

そんなことを考えていたら
昼休みが終わってしまった。
生徒手帳を返しそびれた。

放課後、再び五組へ行つた。

「あきちゃんだ。」

氣づいたのは椎名萌。

昼休みとは違う表情で出てきた。

「タケやん待つているの？呼ぼつか？」

「いや、おまえ。」

「え？私？」

驚いた表情。

その顔の前に生徒手帳を差し出した。

「あつ。」

更に表情が変わる。
やつぱり見ていて面白い。

「あきちゃんが拾ってくれてたんだー。良かったー。ありが・・・」

手渡す瞬間に腕を上にあげた。

「えつ？ ちよつ・・・」

素直に渡されると思つたら大間違い。
あいつの届かないところへ・・・

「あきちゃん、返してよー！」

「もー、するこよ、届かないってば。」

そう言いながら、ぴょんぴょん跳ね上がる。
ジャンプをしても届かない。

「あきちゃん、あきちゃんつてばー。」

前にもあつたな。

同じこと。

修学旅行で。

こいつが落としたテレカ拾って。

返す時にこんな風にして・・・

ムキになつて取り返そうとしてたっけか。

届かないのに無駄な努力して。

ばかな女。

そう思つてた。

でも・・・

いつの間にかその馬鹿真っ直ぐなところに惹かれて。
いつの間にかうるわしいお喋りが聞きたくなつて。
いつの間にか・・・

「落書きしといたから。」

「えっ？」

頭の上に乗せてやつた。
ついでに・・・
というか、俺が触りたかったのだろう。
頭に。
触れたかったのだろう。
髪に。

一畜みたいて、頭を撫でてやることはできない。
一畜みたいて、助けてやることもできない。

それでも・・・

俺はこいつの傍にいたい
俺がこいつの傍にいたい

「あきちゃん、中見たの？」
「ねえ、ねえつてばー、あきちゃん？」

そう言いながら後をついてくる。

振り返らない俺を振り返させようと必死に。

「もー、あきゅんてばー、何か言つてよー。」

掴んだのは制服の袖。

触れているのはあいつの手。

「別に減るもんじゃねーだろ。」

「えーっ、そういう問題じやないよー。」

振り返ったのは椎名萌。

立ち止まつたのは椎名萌。

「人に見られたら困るもんでも入つてたのか?」

「そおじゅないけど・・・」

「ならいーだろ。だいたい落としたことに気づかない方が悪い。」

「えーっ、そんなあー。」

「拾つてやつただけでも有り難く思え。」

「・・・う。」

不服そうな顔をしているのが面白い。
こいつの素直な表情。

椎名萌の今の表情。

俺が見ている今。

「おまえ意外と字汚いな。」

「ええーっ!」

「あと平仮名多過ぎ。」

「ひつビーーー！メモだもん！字なんて適当に書いてるよーだつ。」

意表を突かれてか、

恥ずかしさと怒りを込めてボロボロと呟いてくる。

「もーあきらやん意地悪ー。」

「イテ・・・痛いって。」

ちよつとからかつてやるつもりが、
大分怒りを買つてしまつたようだ。
結構本気で叩かれた。

「おまえなー、グーで叩くなよ。」

「どうせ私は字も汚いし、グーで殴る乱暴者ですよーだつ。」

力の強さとかではなく、ただ単純に
椎名萌が俺の腕をたたいていることが変な感じだった。
いつの間に・・・
こんな風にかかるようになったのか。

「だから痛いって。」

「あきちゃんみたいに絵も上手くないし、頭も良くないし、敵いま
せんよー。」

おいおい。

絵も頭も関係ないだろ。
つか、俺に敵つて何だよ。
やっぱおもしれー奴。

「こみみたいに気が配れないし、けいちゃんみたいに物事ハツキリ

おまえなこし・・・」

なんだよ。

何泣きわざな声になつてんだよ。
わざわざでの俺を殴る勢いせびつた・・・?

「おまえはおまえだな。」

「え?」

「五組に、このも薙藤も一人はこりうねーだな。」

ばーか。

ひしきねーつーの。

こんなこと言ひ俺も。

落ち込んでるおまえも。

「やのまこめのおまえでこいんじやん。」

椎名萌だから選ばれたんだが。

椎名萌が選ばれたんだが。学級委員。

押し付けられたら断れないタイプだらうナビ、

一度引き受けたら最後まで責任もつてやる奴だから。

「こーじゅんが一汚くても。黒板は書かないだな。」

「もー、そういうじやないもんつ。あきらやんの意地悪ー。」

「結局それかよ。」

「意地悪、意地悪、意地悪、意地悪

「

「ひやあああー @ @ @

「もー、首へすぐのせやめてよ。」

「こいつとこると調子が狂う。
ずっと前から思っていたこと。

「こいつとこると自分がじゃない俺がいる。
それが向き合いたくなかった自分。

認めてしまえば自分が好きになれる。
保健医がそんな事言つてたっけか。

こんな面倒くさい奴とかかわりたくないなかつた。
しかも女子とだなんて。

でも・・・
認めるよ。

こいつは特別なんだ。

椎名萌は俺にとつて特別なのだと。

「あ、いけない。芳沢くん待たせてるんだった。」

ほんと、表情がぐるぐる変わつて忙しい奴。

「行かなきや。あきちゃん、また明日ね。」

慌てて走り出した後姿を・・・
ずつと見ていた。

さつきまでこの手で触れていたあいつの髪。
あいつに叩かれていた俺の腕。

ふと、今朝の夢を思い出した。

夢なのに

学校で
教室で

あいつを・・・

掴んだのは俺

振り返らせたのは俺

夢の中で

学校で
現実で

あいつを・・・

掴んだのは俺

振り返らせたのは俺

あの夏、人ごみに紛れたあいつを見つけた俺。

あいつの腕を掴んで

あいつを振り向かせた

夏が終わって秋になつて・・・

その手を振りほどいたのも俺。

あいつを人ごみの中へ突き放したのも俺。

あの時に、戻ろう

もう一度、見つけに行こう

人ごみの中へ

迎えに行こう

あの夏の夜に

置いてきたあいつを
置いてきた自分を

もう一度・・・
あいつを振り向かせたい
もう一度・・・
あいつを振り向かせることが出来たら
今度はもう離さない

今日もあいつの挨拶で学校が終わる。
また明日。から、おはよう。までの時間が始まる。

帰宅途中で見上げた空は
もうすっかり冬の夕暮れ。

いつの間にか秋空と変わっていた。
夏の終わりと冬の始まり。

その間でしかない秋という短いはずの時期が・・・

俺にとつては長い長い秋だった。
終わりの見えない秋だった。
終わりが見えた秋だった。

冬の始まり。

それは自分の道を歩む始まり。
それは自分の道と戦いの始まり。
いざたて戦人よ。

1.

「おばーちゃん、見てみて。」

「はこはこ。」

「おばーちゃんてば、卑く卑く。」

「はこはこ。」

「どう? おこしそうでしょ。」

「ふふふ。上手だねー晃。」

「じょうずじゃない、おいしそうかつて聞いてるのー。」

「はこはこ。そうだねー、美味しそうなミカンね。」

小さい頃、絵が描けるとばーちゃんに一番に見せていた。
冬は寒くて外で遊ばなかつたから、
家の中で絵ばかりを描いていた。

家の中の物は大抵描いた。

テレビに電話、ストーブに炬燵。

炬燵の上のみかん。

一つだけ、描かなかつたものがある。

ばーちゃんの顔。

ばーちゃんはどうも上手いと讃めてくれた。

子供ながらに怖かつたのだろう。

ばーちゃんの顔を描くことが。

ばーちゃんに讃められなかつた「どうした」という不安。

「うーん・・・人物画の『テツサン』、来週までに描き直しね。」

「はい。」

「それから歴史の勉強も。忘れずに。」

「はい。」

「期末試験の勉強と重なつて大変だと思うけど・・・」

「大丈夫です。」

「そう。じゃあ頑張つて。」

十一月に入つた。

受験科目の見直しに追われていた。

普通科高校ではなく、美術科に変更した為、今までの受験勉強とは違う準備を始めた。

美術担当の先生に、直接受験の指導を受けている。

受験内容は・・・

基礎科目プラス美術科目に実技試験。

作品に関する理解力

作者の描いた歴史的背景等。

美術の授業では教わらない事も。

そして、今最も苦戦しているのが・・・

実技試験。

デッサン力。

課題に対する理解力と見合つた技術が試される。中でも・・・

人物画が苦手だった。

小さい頃から、縁側で絵を描くのが好きだった。

庭の風景や遊びに来る鳥達を。
大きな空を。

風景画が好きだった。

尊敬している雅画伯も風景画が専門だった。

人物画を描く機会が無かつた。

描きたい人物がいなかつた。

ただ、それだけのこと。

「晃一、終わつたか？」

美術室を覗くタケの姿。

放課後に、校舎の一番奥の美術室までわざわざ足を運ぶ奴は少な
い。

「どう？順調？」

「いや、書き直しだつて。」

「マジですか！厳しーつ。」

片づけを済ませ、タケと一緒に美術室を後にしてた。

「晃、期末試験と重なつて大変じゃね？」

「いや、準備期間ギリギリだし。」

「そつかー、もう来月試験なんだもんな。」

来月。

そう、一月の下旬にS美大附属高校の試験が行われる。
県外でしかも私立高校の受験なので試験時期が早まる。

「オレも一月だからってのんびりしてらんねーな。」

「タケはM校受けるのか？」

「まさか！」

「親父さん達大丈夫だつたのか？」

「まーね。三者面談で泣かれて恥ずかしかつたけど、K校で納得してもらつた。」

「そつか。」

タケはK校に決めたのか。

俺の第二志望もK校。

S美大附属の試験に失敗したら・・・
一月にはタケと同じK校を受験する。

本当はM校・・・と言いたいところだが、

今も、今まで、

俺の成績では届かないことはわかっている。

亘兄の受からなかつたM校。

いつまでもこだわっていたのは俺だけだったのだから。

俺は自分の道を見つけた。
俺は自分の道を進む。

けれど、妥協はしたくない。

今回の期末試験も。

美術科へ進むとしても、定期試験の順位は妥協したくない。

「まあ、期末試験もあと一日だしな。明日は晃の得意な数学と美術
だし。この後俺んち来るか？」

「いいのか？」

「もち！最近晃が全然来ねーからさ、カヨさんが寂しがっちゃつて。

「

平日は必ずいるお手伝いのおばさん。

一学期に入つてから色々あって、タケの家に遊びに行く日は確かに減つていた。

さすがに受験生だし。

土日は親父さん達も気にするだらうし。

俺も最近は自分の事で手一杯だつたし。

タケの家に最初に行つたのは中学一年の秋だつた。

雅画伯やKEIGOと好きな美術感覚が合つ奴と初めて会つた。それから毎月、定期購読をしている雑誌を見せてもらいに行くようになり、

中二の冬にはクラスの男子とタケの家でクリスマス会なんてやつたっけか。

「晃君久しぶりね。しばらく見ない間にまた大きくなつてー。若いわねー。成長期かしらー？」
「はいはい、カヨさん、また後でゆつくりね。」

久しぶりにお邪魔するタケの家だつたが
相変わらずお手伝いさんのカヨさんの出迎えはテンションが高かつた。
そして変わらずふくやかな体系だつた。

タケの家にこいつして遊びに来ることも
あと何回・・・とか思つてしまつた。
当たり前のことなのだけビ。

来月の試験に合格したら、俺は地元を離れる。
田舎から・・・東京の母方の家でお世話になる。

タケはK校に合格するだろ？

学年三位の成績ならM校も見えていたかもしね。

俺がもし来月の試験に失敗したら・・・

タケと同じ高校に通うことになるのかもしね。

タケのいる高校生活。

タケの家にこうして遊びに來ることも。

楽しいだろ？

でも、俺は・・・

自分の道を行く
そう決めたんだ。

「ほい、お待たせー。」

タケがジュースを運んできた。

「カヨさん久しぶりだからって張り切っちゃって。菓子焼き始めた。

「悪いな。」

「いーんだよ。嬉しくて焼いてんだから。」

広い部屋に十分な大きさのテーブル。

ジュースを置いても、菓子を置いても、まだ余裕がある。

「カヨさんに晃が県外の高校受験する話したらすんげー残念がつてた。友達、晃しかいないと思い込んでるから、あの人。」

そうだな。

中学に入つてからタケも色々あつたから・・・

今は友達も多いけど、塾が忙しくて遊ぶ時間も無いのだろう。

「そういうえばさ、晃が東京行く話しつつ四組ではけつこう知られてんの？」

「ああ、美術の課題で。個人授業みたいなもんだからな。」

「そつかー。」

タケがジュースを一気に半分飲んだ。

なんとなく、本題に入りたいという気持ちが伝わってきた。

「椎名にさ、聞かれたんだけど・・・まあかつたか？」

「べつに。」

「そつか、そうだよなー・・・。」

タケにそこまで気をつかわせてしまつのがなんだか悪い気がした。
そろそろ・・・
自分でなんとかしないとな。

「絵の勉強を選んだ時点であいつとは離れることになるってわかつてさ、」

「おお。」

「だったら今のうちに離れようって思つたんだけど。」

「後々面倒になるの晃嫌いだしな。」

「出来なかつた。」

「おー、意外な答え。」

「結局さ、あいつのこと考えちゃうし。気にしないようこじしても氣になるなら、もう面倒だから氣にしどうと思つて。」

「あははー。晃らしい考え方。割り切れてるねー。」

タケが笑つた。

割り切れてる。そうタケが言つてくれたのに救われた。

「あいつのことは好きだけど、好きだとか言つてしまつまねーし。卒業までこのままでここと思つてゐる。」

「へー。」

「あいつを泣かせることになるとはわかつてゐるけど、そん時はそんな時で、にににでも怒られればいいかなーって。」

「あははー。そりゃ当たつてるかもな。」

「タケは?」

「は?」

「タケは・・・いののか?」

前から気になっていたこと。

前から思つていたこと。

今なら聞ける気がして。

「はは。やーだなー・・・」

そういひとタケは残り半分のジュースを飲み干した。
さつきまでの笑顔とは別の顔を用意して。

「なんつーか、おれは小学校の時から椎名と一緒に。異性とか、恋愛感情とか思つたことは無いんだけど、まつとけなこいつーか。だからこのところの椎名を見ている時は安心なんだけど、このと付き合つとかは違う感じ。」

「おれんとこに辞書借りに来てたのも、半分は忘れてるんだが、けど、半分はおれの様子見に来てたこととかさ。」

「同士つてわけじゃねーけど、お互この事確かめ合つて試し合つながら過ごしてきた感じ。」

「だから、椎名が好きになつた奴のことは気になるし、椎名を好きになる奴も気になる。」

「まさか晃が・・・とは思つてなかつたからで、最初はビックリ反応したらしいのかわからなかつただけで。」

「今は・・・晃で良かつたと思つし、晃が椎名のことぢやんと考へてたつてことがわかつて安心したつーか。まあ・・・そんなどだ。」

“「ンン」”

「まーくん、お菓子持つてきましよ。」

「はいはい。」

タイミング良く・・・といふか、悪く？
カヨさんの菓子が運ばれてきた。

焼きたてのマドレーヌ。

部屋中が一気に甘い香りに包まれる。

「晃はせ、せつかく掴んだ道、諦めんなよ。」「え？」

「椎名のことは気にしなくていいから。卒業した後のことは。」

「ああ。」

「それくらいはおれが面倒見るからさ。」

マドレーヌを口に運びながら

俺達は明日の試験、数学の教科書を開いた。

タケの想い・・・

聞けなかつたこれまでと

聞いてしまつたこれからとで

何か変わるかといつたら

何も変わらないかもしけない

それでも・・・
聞いてよかつた。
聞けてよかつた。
また、納得して次へ進めるから。
ただ、それだけのこと。

2.

期末試験が終わつた。

一学期の試験はこれで終わり。
終業式までの二週間、あとは普通の授業に戻るだけ。
いつもの時間割がまた始まる。

教室移動で

渡り廊下で

あいつとすれ違つ

毎週繰り返される時間割の中の一コマ。

「クリスマス会しょーよ。ねーねー。」

「めんどうさい。」

「おれら一応受験生だし?」

「えーっ、またそれー?」

昼休み。

珍しくうちのクラスに人が集まつてきていた。

北山、市井、健太、他男子数名。

じゅやら隣の五組は五時間田が移動教室らしく空っぽのようだ。

当然、一宮に関君といつた常連がいない中で北山が粘つてこる。

「クリスマス会ー。絶対椎名ちゃん誘いたいし。」

「いや、無理だから。」

「椎名さんは無理っしょ。」

相変わらず北山は椎名萌がお気に入りか。

懲りない奴。

どう見ても、あいつは北山の事苦手だぞ。

「だつて最後だよ？中学最後のクリスマス。椎名ちゃんとは絶対同じ高校行けないし。」

「それは当たつてるな、キタ。」

「椎名さんてどこ志望？」

「T校とか言ってたな。」

「げつ、マジで？！」

「あの子頭良かつたんだ。」

俺も同感。

T校、県内ではM校K校に次いで三番目の進学校だ。でもあいつの成績なら十分合格圏内か。

「晃君知つてた？」

突然話を振られた。

おいおい。

俺は別に何も言つてないんですけど。

「いや。」

「へー意外。」

「椎名さんのことで、晃君が知らなかつただなんてな。」

おいおい。

なんだその反応は。

俺が知らないで何が悪い？

「あ、良い事思いついた！キタ、晃君に頼めば椎名さん来てくれるんじゃね？」

「そつか、晃君が誘えれば確かに。」

「キタが誘うより確実だな。」

「それじゃ意味ないじゃーん。つーか、あきちゃんズルくない？」

おいおい。

なぜそんな話になる・・・

いつ俺がズルをしたんだよ。

「あきちゃんだつて椎名ちゃんのこと好きなくせして一人だけ余裕な感じ？」

おいおい、北山。

それどつかで聞いた台詞だぞ。
俺、また怒りを買うのか？？

「キタ、それを言つたらおしまいだろ。」

「あははー、確かに。晃君と椎名さんて噂になつてるし。」

おいおい。

どんな噂だよ。

つーか、笑つて流せるような話しなのか？

「おれは絶対認めーん！決めた！椎名ちゃんに告げる……」

「無理、無理ー。」

「クリスマスの悲劇！」

「あははー。」

まあ・・・

北山が椎名萌を好きなのは夏前からけっこ有名な話しだしな。
本人も皆も知つてオーブンだつたし。
周りもその事で椎名萌をからかうよりも、
北山の方に注目が集まつていたから良かつたのだけビ。

「よしーあきちゃん、勝負だー！一緒に椎名ちゃんに告げー。」

おーおー。

あり得ねーつづーの。

「何で晃君と一緒に訳？」

「キタ一人で告ればいいじゃん。」

「やだ！おれだけ振られるの嫌だし。あきちゃんが何もしないで勝つのもむかつくし！」

「理由になつてねーし。」

「あははー。キタまじウケる。」

「あー、あきちゃん、この勝負、勿論受けてくれるよね？」

おいおい。

だからあり得ねーし。

だいたい俺にはあいつに告ぐる気はねーし・・・

「あー、いたいた。ねー、今日化学?使つた人いない?」

「椎名ちゃん!」

「おっ、噂をすれば本人登場!」

「化学?入つたからもつ?は使わなかと思つてたのに。?持つてない?」

おいおい。

なんでこんな時に教室に入つて来るんだよ、ばか女。
時計を見ると予鈴が鳴りそつた。
化学実験室から走つてきたのか。

「ほり、キタ、言つちやえよ。」

「今がチャーンス!」

「ねえ、?だよ??じゃなくて?、持つてる?」

慌てているばか女にこの状況は読めねーか。
会話がかみ合つていなことにも気ついてねーし。

「椎名ちゃん!化学よりも・・・おれ、ずっと前から・・・

ばーか。

「えつ?あきちゃん?」

椎名萌の腕を引っ張つて
教室から出た。

こいつがどんな顔をしてても今は俺のせいじゃねーからな。

「あきちゃん、どこ行くの?ねえ、私、化学?借りないと・・・

「泉君呼んで。」

「桐谷君ー、お密やーん。」

「はーい、あら珍しい。」

「化学の?貸して。」

「?ね。待つてねー。」

「あきちゃん、一組に知り合ったの?」

隣であよとんとしている椎名萌。

四組から一気に一組に連れてこられたのだから無理も無いか。

「ほい、化学?。?じゃなくていいの?」

「ああ。有り難う。そんで、こいつに貸すけどいい?」

借りた教科書を椎名萌の頭に乗せてやつた。

「おつけー。」

「ほり、予鈴鳴るわい。」

「わっ、ほんとー急がなきやー!」

「あ、ありがとー・・・」」やこめすつー

“キーンゴーンカーンゴーン”

チャイムと共に、走り去った嵐・・・のよつな女。

騒がしい問題に巻き込みやがつて。

・・・と、もう一つ。

新たな嵐が吹き荒れる予感・・・の男が一人。

ああ、面倒くさい。

「あつあらへん、今の子だあれ？」

思いつきり笑顔の泉くん。
視線が痛いし、面倒くさい。

「珍しいねー、晃君が借り物なんて。しかもそれを女の子に股貸し。」

「ねつ、何さん? 何せやん?」

「ちつちゅくて、かわいかつたねー。」

まるで子供のような無邪気な田で見つめてくる泉くん。

おじおじ。

新しいおもちゃを見つけて喜んでるガキと一緒にじゃねーかよ。

「後で返しに来るか?」

「あの子と一緒に来てねー。」

背中に聞いた声。

聞こえなかつたことじょひ。

聞かなかつたことにじょひ。

さて、一組まで来て。

四組まで戻るか。

北山は自分のクラスに戻つただろうか。
あの後どうなつたか・・・
面倒くさいな。

なんでこんな面倒くさいこと
自分で引き起こしてしまつたのか

自分が引き受けてしまったのか

あの時の・・・

あいつを見ていたら
いてもたつてもいられなくなつて。

気づいたら・・・

頭で考えるよりも先に
体が動いていた。

あいつをあの場から離したかった
あいつを北山から離したかった
ただ、それだけのこと。

五時間目が終わった。

HRまでの時間に・・・

あいつは来るだろうか。
と思って、廊下で待っていてやつた。

予想通り。

走ってきた。
一人で。

「あきちゃん、さつきは・・・」

「走ると『ケるぞ』。」

「わあっー」

ほんとにこけた。

馬鹿だ。

絶対ばかだ。

「ほい。」

笑いをこらえきれずに噴出しながら手を貸してやった。

「ありがとう。」

廊下に座り込んだのを立ち上がらせるのにそんなに力は要らなかつた。

「あ、教科書。」

「ん。返しとく。」

「えつ、でもお礼・・・」

「いーよ。」

急いで走ってきたのはやつぱり一緒に返しに行こうとしてたか。

「HR始まるし。髪、解けてる。」

「えつ?うわ?」

「ほんと。」

走ってきたのとせつとき口ケたので

一つに結んでいた髪が解けかかっていた。

荷物を片手に持ったまま、もう片方の手を後ろに回したが届かなかつたらしい。

「ど、届かない。どうなってるの？」

「それセツ。」

「えー、じゃあとひちやつて。」

言われるま。

結んであつたゴムを解いてやつた。

久しふりに見る。

おろした髪。

その髪に・・・

触りたくて・・・

つい手が伸びる・・・

「一組つて今日化学あつたんだね。知らなかつた。」

「いや。俺も知らない。」

「えつ？！だつて・・・」

「彼は一年の教科書も貸せると思ひ。」

「ええつ！？ずつと持ち帰つてないの？」

泉くんの話に驚いていて・・・

俺がこここの髪を触つていることは

別にどうでもいいこ・・・のか？

「おまえみたいな借り物の多い奴には教えたくなかったけどな。」「あ、ひつどーい。私のこと、忘れ物の多い子だつて思つてる?」

「よくタケんとこ借りに来てたし。」

「えー、やつぱつそのイメージ?」

「違うのか?」

「ちがつ・・・う時もあるもの。忘れる時もあるけど。」

「ふーん。」

「あきちゃんそれ、HR終わったら返しに行くの? やっぱり私も・・・

・

「いーつて。」

「

タイミングよく、廊下に担任の姿が見えたので
教科書を持って教室へ入った。

どちらかといふと・・・

泉くんに会わせたくなかつたんじゃなくて。
三組の前を通させたくなかつたんだ。
あいつを。

教室塔のある校舎は、真ん中に大階段があつて。
その階段を挟んで、
一組から三組の教室
四組から六組の教室
と分かれている。

普段、大階段を共有することはあっても、
一番奥の一組までわざわざ行くことは無い。
しかも、一組まで行くには・・・
三組の前を通りで。
さつきは夢中であいつの腕を引っ張つて行つたけど
今思い返してみれば、二組の前を通つた時、
祐也に見られたかと。

祐也とはあれ以来・・・

その三組寄りの大階段下の人目のつかない場所で

祐也が椎名萌に告白したであろう場面に遭遇して以来。

あいつも思い出すのだろうか。

あの階段下を見ると。

三組の前を通ると。

祐也のことを・・・

あれから何も言つてこないな。

祐也も。

あいつも。

放課後になつて一人で、一組へ。
泉くんのところへ行つた。

「晃君、久々に一緒に帰ろつぜー。」

万遍の笑みとはいつう時に使うのだらつ。

「えー、泉君今日カラオケ行く約束はー?」「悪い、ナナちゃん、また今度ねー。」「もー、しょうがないなー。」

「じゃあ、また明日ー。ばいばーい。」

「バイバイ。」

「桐谷君、バイバイー。」

「泉君また明日ー。」

教室で、廊下で。

次々に挨拶を受ける泉くん。

相変わらず・・・
というか、以前より女子からモテてないか?

一組でも人気者なのだろう。
泉くんのいるクラス。
見なくてもわかる。
泉くんの人柄なら当然。

「晃君向こう側になつてから全然会わなかつたし。」

向こう側とは、一～三組と四～六組とを
分けて呼ぶ以前からある呼び方。

「元氣してた?」
「まあ。」
「好きな子できたんだねー。」

おいおい。
いきなりですか。

「第一「小の子?」
「ああ。」
「オレにも知らない女の子がまだいたんだなー。」

おいおい。

そういう風に捉えるのか?

「で?付き合つてるの?ね?どいつなの?」

歩きながら肩を寄せてくる泉くん。

男同士気持ち悪いんですけど。

あれ。

中一で、並んだ時、泉くんの方が大きかったの。俺の背が伸びたのか。

「付き合つてない。」

「えー、なんでー??好きなんでしょー??」

相変わらず。

俺の一言に對して、倍・・・いや、倍以上に返してくれる。

「俺、来月私立校の受験するんだ。受かつたら・・・東京。」

「へー。」

「だから付き合つとかは無い。」

「えー、なんで付き合わないのー??そんなの変だよ。ー。」

おーおー。

俺の県外受験のことには触れないのかよ。

驚かねーのかよ。

「どうせ卒業したら離れるだろ。」

「晃君、その考え方、そんなのおかしいー。」

「そつか?」

「卒業まで付き合えばいいじゃんー思い出作ればいいじゃんー。」

いやいや・・・

なんとこかポジティブ感。

「俺の話はこいいよ。泉くんは?」

「もひー!割り切つて先に進むことが大切!」

いやいや・・・

恋愛感を聞いたんじゃなくて・・・

進路とか・・・をだな。

「一人の女の子を大切にするのもいいけど、沢山の女の子に喜んで
もらえることも大事な訳。うん、うん。」

「へー・・・。」

「なんつーか、今はまだ義務教育だし? 守られた環境の中 heraus
ることをする?」

おいおい。

話の展開についていけねー。

義務教育? なんの話をしてるんだか。

「人からどう思われるよ?とかさ、良く思われるよ?とか、そういうの
つて考え方やう訳。」
「でもさ、結局は自分の好きな子一人から良く思われていればいい
つて訳。」

「でもでも、いつか来るその日の為に、皆から好かれる人であれば
さ、その時は好いてもらえるんじゃないかつて。OK?」

いやいや、

全然わからん。

そう、顔に書いてあつただろ?」

「じゃあ次ね。ここは田舎だから、卒業したら出て行くよ。地元の
高校行つても、その先の大学は県外を目指すつしょ。」

「そしたらさ、三年後には皆バラバラな訳。だから晃君は三年早い
だけ。たつた三年だよ。」

「だからそんな難しく考えねーでや、今できること、今やりたいことをやればいいんだよ。ここで出来ること。ここでやりたいこと。OK?」

なんとなく。

おつけー・・・か?

偉い真面目な話をしたかと思えば
急にぶつ飛んだ話をはじめる。

ふざけているように見えて

話す内容のところどころに妙な説得力がある。

泉くんとは不思議と幼稚園から小学校六年間、中学一年までずっと同じクラスだった。

それだけ一緒にいるから、うちの事情も少し知っている。

それが楽で泉くんといた。

クラスのムードメーカー的存在で、頼りになる泉くんに目をかけてもらっていた数年間、平和な学校生活を送っていた俺。

泉くんのおかげで。

一年三年と泉くんとは別々のクラスになり・・・

俺も別々の道を歩むことになった

今度は泉くんに守られた学校生活ではなく
自分で過ごしてきたつもりだ。

今は・・・

あいつがいる学校が当たり前で

あいつといふ學校生活が当たり前になつた

この生活も卒業したら終わる。

あと二ヶ月

そしたらまた新しい生活が始まる。

あいつのいい生活が。

ただ、それだけのこと。

3

週明けの朝。

なんとなく嫌な予感はしていたが、

キタに呼び出された。

面倒くさい。

おいおい!

しもたにていた

しかも、この際つて、どの際だよ。

「こやせ、あさちやんの意見を聞かなくともオレはオレのやり方で
世間のひと懇づけだ。」

おいおい!

だったら俺に聞く必要ないんじゃ・・・

「一応……あやかさんの意見も聞こいやれつかと思つて。」

おじおこ。

朝から呼び出しなんかして
何言ひてゐのかと思えば・・・

キタなりに考へてきたことなのだらう。

言葉の節々に無理をしてくる感じが伝わつて来た。

素直じゃないといふか・・・
認めたくないといふ気持ちか・・・

キタの表情は硬かつた。

怒つてゐるかのよつとも見えるが、緊張してゐるよつとも捉えられた。

複雑なのだらう。

以前の俺だつたら、椎名萌を好きだとこゝの奴を見てゐると苛々した。

好きな子に対しても困らせるよつな幼稚な態度で接してゐるキタを見ていて。

中一の頃俺も同じように幼稚な行動をしていたことも思に出して。
でも・・・
今は・・・

「悪いなキタ、俺、椎名のこと好きだから。」

「おつとー」「うひー」「ぐつ」と言ひとじじゃねーの??

キタの表情がガラつと変わつた。

「あきちゃんが・・・あきちゃんの口からそんな台詞が出るなんて・

・「

信じられないか？

だらうな。

俺も信じられん。

そう思つたら、ちよつと笑つてしまつた。

「しかも、笑つてゐるし。なんだよー。」

「あ、悪い。」

以前の俺だつたら、
人とのかかわりが面倒くさいから、適当に答えていだろ。が。
なるべく物事を大きくしないように
なるべく穩便に済ませられるように
適度な距離感と
安全で的確な答えで。

「オレも薄々氣づいてはいたけど認めたくなかったんだよね。二人とも面想いなくせに付き合わないし。」

「だつたら・・・オレにもチャンスあるんじやねーかつて。あきちゃんがのんびりしている間に椎名ちやん獲つてしまえるんじやねーかつて。」

「でもなんか、ハツキリ言わいたら・・・逆にスッキリつづーか。しかも笑つてるし。あきちゃんも椎名ちやんのことでは笑うのな。」

昔から。

無表情とか、無反応とか言われてたつけ。

男子からしたら、そこがムカつくとか生意気だとか言われたこと
もあつたつけ。

でも・・・

泉くんや一富といふと俺が何もしなくても、俺は何も言わなくともいつもそこには人が集まつてきていた。

そしてその中には一つを見つけた。

無駄に元気で無駄に笑う騒かしい女。
やがて気づく。

あいつを見て

あいつを見ていると俺も少しだけ無駄に笑つてゐる」と

「あきちゃんに一つ、聞いてもいい?」

キタの表情は解っていた。

いつも通りの雰囲気と感じをすゝかり取り戻していった。

「なんで椎名ちやんと付き合わないの？」
「オレだったら、椎名ちやんと手つないで休田リートしたいとか、
色んなこと想像するぞ。」

キタの表情は既に好奇心旺盛で
ただ単に質問したいだけに変わっていた

「俺はあいつのことを泣かせたくないから。」

Год

「あいつが何で泣いてるかとかわからんねーし。
「え？ 検名ちゃんの泣いたの？ いつ？ いつ？」

おいおい!

椎名萌のことが好きだとかいっておいてそれはないだりつ。あいつはこう泣いてるぞ。

「だから今はなかせないよ、たうじになるべく笑つていてもうれようとするだけでいっぱいいつぱいつづーか。」

「オレの知ってる椎名ちゃんはいつも笑顔だけだな。その笑顔がかわいいし。からかうと反応面白いし。」

だからそれはキタが幼稚な態度で接するから・・・
いや、それはおいといて。

キタは何を見ているんだ？

キタにはあいつが毎日笑顔に見えるのか？

「椎名ちゃんのどこが好きなのかって聞かれたら、オレだつたら間違いなく笑顔！って答えるね。」

「あとはねー、タケとか周りの男子がゲームの話しがてても隣で二三二三聞いててくれるとか?ほらセー、よくいるじゅん、ゲームの話を嫌う女子とかつてー・・・」

キタの話しさはまだまだ続くよつだった。
今度は適当に話を聞きながら・・・

キタはあいつの笑顔が好きだという。
確かに無駄に笑顔で騒いでいるが・・・
あれは作りモノだろ。

笑つてるふりして、

元気なふりして、

皆をうまく騙しているつもりなのだろう。
つまく騙せているつもりなのだろう。

でも俺は・・・

騙されない。

気づいてしまったから。

あいつの作り笑いに。

だから思つんだ。

あいつのことを見てやりたいって。
あいつのことを見てやりたいって。

そして・・・

できるなら、他の奴らにもあいつを見てやりってくれと囁つんだ。
あいつのこと好きだという奴は・・・
あいつの笑顔の裏のサインに気付いてやってほしい。
あいつの悩みにも気付いてやってほしい。
あいつを見守つてやつてほしい。

「じゃあ、あきちゃん、そういうことでも椎名ちやんのことは諦める
から、アレ、来週には持ってきてねー。よろしく！」

え？

おいおい。
なんだっけか？

時計を見ると朝のHRが始まるうつとしていた。
キタと急ぎ足で校舎の方へと戻った。

ふと、前を歩く人山の中に、
祐也の姿を見つけた。

数人の男子の中から、特定できてしまうとこいつのも男同士でなん
だか気持ち悪いが。

そのまま後ろを歩き、キタとも祐也とも、大階段の曲がり角で別
々の方向へと別れた。

笠原祐也。

あれ以来特にかかわり無し。

祐也はあいつに告つて・・・どうだつたのだろうか。
あいつを好きだという奴には・・・
あいつのことを見守つてやつてくれつて・・・
それが祐也であつても。

そう思つていた矢先の事だつた。

放課後、受験の課題で残つていた。

美術室から教室へ戻つた頃にはすっかり下校時間を過ぎていた。
日直も、最後の戸締りを確認する生活委員も、当番を終え、帰つ
た後だつた。

誰もいない廊下に響く足音。

嫌いじやなかつた。

誰もいない教室に響く時計の針音。

嫌いじやなかつた。

誰もいない校舎に響く部活動の掛け声。

どれも嫌いじやなかつた。

一人でいたい時、

部活をさぼつた時、

図書室で過ごしていた時、

これらの要素はどれもが俺を落ち着かせた。

が、一変して崩れた。

教室の扉が少し開いた。

足音なんて聞こえなかつたのに。

なんだ、誰かまだいたのか?
おそらく数センチだろう。
開けられた扉から聞こえてきた声と共に・・・

「あきちゃん?」

入つてきたのはあいつだつた。
人が通れるだけの扉を開けて。

「あきちゃんだ。まだ居たの?」

胸に突き刺さる感情。
その声を聞いた瞬間。
胸の辺りがちぎれそうに痛かつた。

泣いた跡
泣いた顔
じゃなくて
泣いている顔
今、泣いている

「どうした?」

声をかけた途端
その目から涙が落ちた

その涙。
その泣き顔。

流れの涙に流されるよつじて・・・
俺の手が伸ばされた。

無意識だった。

無意識にあいつに触れていた。
あいつを腕で引き寄せて。
抱きしめていた。

「どうした?」

「なんでもない・・・」

「なに泣いてる?」

「泣いてないよ。」

「泣いてるだろ。」

いつもとは違つ声で
いつもとは違つたところから聞こえてくる
俺のすぐ横にある顔。

「泣いてないよ。」

そう言つと、椎名萌の方から離れていった。

今はもう、別のところから声が聞こえる。

今度はあいつの声がすぐ横に聞こえなことと自分のしていた行動に気づいた。
驚かせたか・・・。

「どうした?」

「『めんね、なんでもないよ。』

涙は止まつたようだ。
やはり驚かせたか。

空いていた椅子に腰をかけた。

「どうした？」

「なんでもない・・・」

座つたまま俯いている。

隣の椅子に座り、横から顔を覗き込むこととした。

「なんで泣いてる？」

「泣いてない。」

「泣いだだろ。」

「泣いてないよ。」

「おまえな

「あ、あのねっ、席替え、席替えしたの。」

急に話を変えた。
急に顔を上げた。

「それでねっ、隣はけいちゃんなんだよー。す」「こでしょー。斜め
前にはにのもいてねー。授業始まる度にけいちゃんがにので黒板が
見えないーってね、」

「それでね
」

急に溢れ出したおしゃべり
急に溢れ出した笑顔

なんなんだこいつは
とも思つたが。

今は見ていいことにした。
今は。

目が合つた。

逸らさなかつた。

逸らされなかつた。

もう大丈夫なんだな。

隣の席に座つた状態で

楽しそうに喋つていた。

うるさいくらいに。

もう大丈夫なんだな。

「ほんと忙しい奴だな。」

そう言つて、隣で笑う笑顔に触れた。

「泣いたり、笑つたり。」

さつきまで流れていた涙。

頬はまだ湿つていた。

俺の手が冷たかつたのか

椎名萌の頬が熱を持つていたのか

わからなかつたが・・・

このままじうしていたかつた。
このまま触れていたかつた。
このまま・・・

「あ、あきちゃん・・・あのね・・・私

」

“キーンゴーンカーンゴーン”

突然鳴り響いたチャイムの音で最後まで聞き取れなかつた。
静かな教室に響き渡るチャイムは最終下校を知らせる合図だつた。

「か、帰らなきやね。」

これ以上残つていっては問題の対象になるだろつ。
受験生の立場上、良くないことぐらい誰だつてわかる。

校門まで駆け足に歩いた。

ここから先は別々の方向になる。

当たり前の事。

帰宅経路が真逆なのだから。

「あきちゃん、あの・・もう少し話せないかな?」

まだだ。

胸に突き刺さるような感情。

さつき最初ここを見た時から感じていた。
なんだこれ?

今度は俯いたままの椎名萌。
だから表情はわからなかつた。

でも確かにことがあつた。

おまえがそんな顔をしていると
おまえがそんな震えた声でいると
俺は無意識に触れたくなつていて。

よくわからない感情が多すぎて

今は自分をコントロールできなこと。

だから・・・

「今日はもう遅いから帰れ。明日の朝早く来ればいいだろ?」

「う、うん。」

「じゃあな。」

そう言つので精一杯だった。

あいつが帰ったか、振り返つて見てやることもしなかった。
あいつのことを見てやりたいって思つていたのに・・・。
出来なかつた。

言いかけて消された言葉。

言おうとして言わせてもらえなかつた言葉。

何を言おうとしていたのか・・・
何を言つつもりだつたのか・・・

俺は何を言おうとしていたのか
俺は何を言つつもりだつたのか

あいつに・・・

言わないつもりだつたのに
言つことはないと思つていたのに

言つてしまいそつだつた。

あいつがあんな風に泣くから
言つてしまいそつだつた。

あいつがあんな風に笑うから

おまえのことが好きだつて。

泣かせたくないのに
見ていてやりたいのに
俺は・・・

今日、なんであいつが泣いていたのかはわからなかつた。

けれど、
俺のところへ来て泣いて

俺のそばで笑いに変わつたのなら
それでいいかとも思う。

ああ。
そうか。

わからなかつた感情。

痛かつた胸。

今ならわかる気がする。

あいつが何で泣いていたのかはわからなかつたけど。
泣いているあいつを見て・・・
触れたかつたんだ。
見てるだけじゃなくて。
抱きしめたかつたんだ。
見てるだけじゃなくて。

そして・・・
伝えたかつたんだ。
ただ、それだけのこと。

翌朝。

朝食を食べてこらねど、まあちやんに話しかけられた。

「今日は早いんねー。」

「美術の先生に受験課題見てもいいから。」

「そりゃい。」

まあちやんは豪く笑顔だつた。

本当にあいつと約束したから早く行くんだけど。

「晃は昔から絵が上手かつてん。合格間違いないことよ。」

「ばーちやん変なフレッシュヤーかけないでよ。」

「そんなことないばー。」

まあちやんが食卓にカレンダーを持ってきた。

「学校は一十五日までじゃね。」

「うふ。」

「じゃあ一十六日から東京や、行つてみるかい?」

「うふ。」

「ならあちらに連絡入れとこーな。」

これまた嬉しそうにカレンダーに印を書いていた。

日付のところに丸印。

それだけのことなのに、まあちやんがはしゃいで見えるのは気のせいだろうか。

居間の壁に掛けられたカレンダー。

やつにえれば、印をつける事なんて滅多に無かつた。

父さんは不規則に勝手に帰宅していたし。

勝兄の帰省の時もカレンダーに印は無かつた。

俺の修学旅行の時以来か？

まあ、来年のカレンダーにはびっしり印が付けられるのだろうが。

俺の試験日に亘兄のセンター試験日。

来年の一月は受験カレンダーと化すだろう。

ふと、カレンダーに目を戻す。

一学期の終業式まであと一週間か。

あいつと過ごす学校生活もあと一週間。

俺は大丈夫だろうか。

一週間。

言わないでいられるだろうか。

あいつに・・・

学校に着いた。

部活動の朝練並に早い時間。

十二月の冷え込む校庭にも数人の後輩達がランニングに励んでいる。

当然、校舎の中は人気が無い。

俺はまた、一人で歩く廊下の響きを味わっていた。

そして開ける教室の扉。

なんだかいつもよりも重たく感じた。

昨日、ここで泣いていたあいつ。

昨日、ここで笑っていたあいつ。

昨日、何かを言いかけたあいつ。

今日、ここにどんな顔で来るのだろうか。

今日、ここで何を言つのだろつか。

そして俺は・・・

何を言つてあげれるのだろうか。

俺には伝えたい気持ちがある。

でも今は言えない。

言わない方がいいの為なんだ。

人気の無い朝の教室は冷え込む。
脱いだコートをまた羽織った。
小説を捲る手が悴んで。
手袋もはめたいくらいだった。

しばらくして

一つ足音が聞こえた。

短い間隔。

小刻みに。

女の小走り。

そして・・・

元気に扉が開かれた。

「あきちゃん、おはよう。」

おいおい。
なんだよそれ。
いつも通りの笑顔
いつも通りの喋り声

「ほんとに早く来てくれたのだね。」

昨日まで泣いていた奴とは思えないほどの回復力。
ほんとに笑ってんのか?
また作り笑いなんじゃ・・・

「ソリ座つていい?」

前の席に腰掛ける。
目が合つ。
やつぱりな。

「寝れなかつたのか?」

「あ・・・えつと・・うへんと・・・」

作り笑いではないようだが、
万全な回復を見せたわけではないのがわかった。
目の下にクマ。

答えづらそうな顔をしていたので話を変えてやることにした。

「話つて?」

「あ、うん。」

表情が変わった。
あ、いいの?みたいな。
やっぱおもしれー奴。
みるみる表情が変わっていく。

「あ、あのね、あの・・・」

「私があきちゃんを好きでいるの、迷惑?」

は？

おいおこ。

何を言つのかと思えれば・・・

「べつに。」

「迷惑じやないの？」

「ああ。」

「おいおい。」

それはそうだらう。

今更・・・

迷惑つて言葉、使い間違えてんぢ。

「ほ、ほんと？」

「ああ。」

「本当？」

「本当。」

そして表情が変わる。

ああ。

ほら、笑顔になる。

「おまえ、この会話になるといつこからな。先に言つても、本当だ。」

「良かつた。」

その表情。

その笑顔。

俺が見たかつた顔。

俺が見たかったのはこいつ。

そして・・・

そんな顔で笑っていると触れたくなつてくる。

その頭に、髪に、頬に。

触れたくて・・・

捕まえたくて・・・

「あとね、あきちゃん昨日あんな遅くまで残つていたのって・・・」

さつきまで晴れていた空に

雲がかかる・・・

そんな表情。

雲の色は不安色・・・つてどこか。

こいつなりに・・・

色々考えたんだろうな。

昨日おまえが何で泣いていたのかわからない分、
わかつてあげられなかつた分、

俺は今日おまえの不安に答えることにするか。

「先生と進路についての話」

「高校のこと?」

「ああ。」

複数の足音が聞こえてきた。

そろそろタイムアップか。

さすがに人前では泣かないだろうし。

だが、不安を消してやることはできなかつたか。

「あきちゃん、と、東京に行くつてほんと?」

教室内に人が入ってきたというのに珍しく粘つてきたな。

いや、始めから知っていたのか。

そういうえば、前にタケが言つていたか。だから・・・

今度は自分の口から聞いて、俺からの答えを聞きたいってところか。

それで一つの不安が消えて笑ってくれるならそれでいい。

「ああ。

「そ、そりゃなんだ。」

やつぱり泣くか？

やはり泣かせてしまつのか？

「あきちゃんの夢、叶つといいね。」

そう言つて教室から出で行つた。

なんだろう。

作り笑いとは違つて

笑顔なんだけど、

笑つてくれていたのだけど、

どこか解り急いでいるというか・・・

絵の勉強に進むと決めた時からわかつていたことじやないか。両方は無理なんだつて。

中学を卒業したら皆別々の高校になって
高校を卒業したら皆別々の進路に向かう・・・
いずれ社会人として、一人の大人として、向き合ひの日の為に。

そうやって来ただじやないか。

そう思つてここまでこれたじやないか。

そしてこれからも・・・

だから無理なんだ。

俺には無理なんだよ。

あいつに伝えられる訳がない。

あいつに告る権利が無い。

ただ、それだけのこと。

4.

帰りのH.Rで一枚のプリントが配られた。
行事の多い一学期最後を飾るもの。
行事という程大袈裟なものではないが。

校外学習。

地域の保育園・幼稚園・高齢者施設・病院を訪問する半日体験学

習。

面倒くさいことに班毎に訪問するらしい。
面倒くさいことに班が編成される訳で。
もつと面倒くさいのはクラスランダム編成ということ。

一組から三組までの前半クラスと
四組から六組までの後半クラスとで
訪問日を分け。

更に、前半クラス後半クラス単位で
四人一つの班を作りそれぞれの訪問先へと向かう。
といった内容が書かれたプリント。

興味は無かつた。

それよりも終業式までに仕上げなければならない受験課題のこと
で頭がいっぱいだった。
あと五日か・・・。

「晃君は明日どこ行くの？オレ老人ホーム班だつたー。」

健太がやつて來た。

いつの間にかHRが終わっていた。

帰る者、お喋りを続いている者、教室中が騒がしかつた。

「よーすつ、あきちゃん、アレ持つてきてくれた？」

騒がしい奴がもう一人。
キタが教室に入つてきた。

「アレつて何？」
「さあ・・・？」

健太に聞かれ、そう答えた。

「終業式までには持つてきてくれないと。冬休みは入つたらやり

たいんだからー。」「

「何だつけ?」

「えーー・ひどい。おれたとは言わせねー。」「

たいんだからー。」「

「何だつけ?」

「えーー・ひどい。おれたとは言わせねー。」「

キタに首をしめられそうになつて思い出した。

ああ。

確か・・・

椎名萌のことを諦めるかうとかなんぢやいらすつた時のことか。

「明日持つてくれる。」「

「明日ね!」「解!」「

「何の話?」「

健太だけが状況が読めていなかつた。

俺も・・・たぶんゲームを貸す話しだらう位にしか覚えていないが。

「あ!でも明日つて・・・」

「校外学習。キタはどこ行くの?オレ老人ホームだつたー。」「

「オレは歩いて10分の幼稚園!近くでいいだるー。」「

「確かに、それいいー。」

「あきちゃんは?どこ行くの?」「

「見てない。」

「えー、なんていうか、あきちゃんて周りに興味なさすぎだし。」「

「オレます、訪問先よりも誰と一緒に班かの方が気になつたし。」「

「だよねー。健太、それ普通だし。まずは班の女の子チェックからだよー。ビ〜ぞのクラスのかわいい子と一緒にかもしれないじゃん!」「

そう言つと、机の上に置いたままだつたプリントを持ち上げた。

健太も一緒に覗いている。

何が楽しいんだか。

誰と一緒にどこへ行こうが同じだろ。
たかが校外学習。

「うつそーーーショーフクーーー」

「確かに。」

俺のプリントを見た二人の言葉。

おいおい。

勝手に人のプリント見ておいてその反応・・・
なんだよ。変な奴とでも一緒に班だったのか？

「や、破きたい。破いてしまいたい！」

「あはは。確かにキタからしたらそうだらうな。」

おいおい。

だから人のプリントを勝手に見といて破くとかありえねーから。
だいたい、名前入りで個別に配られたプリントなんだから誰が誰
と一緒に班とかの一覧は載つてねーだろ。う。

俺のプリントには俺の班員の名前と訪問先しか・・・

「ありえないーーあきちゃんと椎名けやんが一緒に班だなんて！神様
の意地悪！」

「すっげー偶然。一緒になる確率とか低そうなのに。」

おいおい。

今何て言った？

二人とも・・・勝手に・・・
つておいおい。

自分のプリントを見た。

確かに。

そこに書いてある名前は

『四組 穂高 晃』

『五組 椎名 萌』

と、

『六組 知らない奴二名』

「でさ、あきちゃん、椎名ちゃんとさじいまで進んだっ。」

「えつ？ 進むって何？？」

さつきまでのテンションはどういったのか。

キタの意味深な質問に、すっかり健太まで食いついてきた。
面倒くさい。

「告った？ ねえ、言つたの？」

「え、何、マジだったの、晃君、椎名萌のこと……」

面倒くさい。

それどうじゅうじゅーし。

つーか、俺告白なんてする気ねーって言つたよな？

「勿論、約束は守ってくれるんだよね？ あきちゃん。」

「キタ、約束つて？ 何？ 何？」

「オレが椎名ちゃんに告ぐるの辞める代わりに……あきちゃんは椎名ちゃんと付き合つこと。そんで、傷心のオレに、ソフト一本くれるって話。」

「なんじゅそりやー。そんなんでゲームソフト一本？ え？ え？」

そうだったのか。

あの時の話はよく覚えてなかつたし。
貸す位……じゃなくてあげる」とこなつていたとせ。

「ねー、あきちゃん、で、どうなつてんの?」

「べつに。」

「でたーあきちゃんのべつに。発言。」

「あははー。キタ、真似まですることねーから。」

「いやこや、健太、これはマズイ展開なんだぜ。あきちゃんのべつに発言は興味関心がゼロの状態を指す。このままではマズイのだー」

「…」

「おいおい。

なにがマズイんだか知らねーが。

ゲームなら明日持つてくるからもう面倒な事はやめてくれ。

「あきちゃんが言わないなら、オレが言つてしまひやかへつまへやるよー。オレ。」

「とか言つつけつてー、キタがうまくやるとせ思えんが。」

「オレはやる時はやるーつーん! オレはソフトをゲット。あきちゃんは椎名あきちゃんをゲット。じりーここでしょ?」

「おーおー。

勘弁してくれよ。

だいたいあいつは物じやねーし。

一緒にするなつて。

そう思つて念の為、教室内を見渡した。

あいつが居ないか、じゃなくて。

こんな会話、聞かれたら面倒くさい奴がいるだろ。

齊藤恵子に聞かれたら……

「ゲームと一緒にすんな!」って怒るだろ?」しな。

そこまで考えたら思わず笑ってしまったが。

「あ、あきちゃん笑つたし。やっぱ椎名君のことになると笑つんだよな。」

「そうなの?」「

「この間もそー・・・」

椎名萌と同じ班か。

訪問先は保育園。

ただの校外学習だらう。

どこへ行つてもあいつはあいつだらうし。
明日はいつも通りの時間割じゃないだけ。

半日で終われるラッキーな日程。

ただ、それだけのこと。

話に盛り上がっている健太とキタを残し教室を後にした。
受験課題を提出しに美術室へ行つた。

すると、意外な人物と遭遇した。

「晃君。」「

美術室の前に立つていたのは咲良だった。

「これ、晃君の絵だね。」「

「ああ。」「

美術室の前に張り出された俺の絵。

先生に剥がしてもうよう伝えてあったのに。
まだ剥がされていなかつたのか。

「一年の時から晃君の描く絵、上手いとは思つていたけど。」

咲良は絵に目を向けたまま話し始めた。

俺は正直言つてどこに視線を落とせばいいのかわからなかつた。

咲良と会うのも話すのも一年の時以来だつたから。
まだ俺が泉くんの影にいた頃。

泉くんの光のおかげで安全な学校生活を送つていた頃。

「晃君、高校から絵の方に進むんだってね。」

知つてたのか。

泉くんから聞いたのか。

いや、でも確か泉くんと咲良はもう別れてだいぶ経つはず・・・。
まあ、余計なお世話か。

「すごいね。ちゃんと自分の進む道決めていて。なんか置いてかれ
た気分ー。」

そう言つて、初めて笑顔を見せた。
変わらない。

咲良のサバサバした気持ちのよい笑顔。

「晃君つて・・・めぐちゃんと付き合つてるの?
えつ?」

思わず。

思わず言葉に出た。

「あら。珍しい。晃君でもそんな反応するんだ。」

心の聲

さつきまでとは違う笑顔で。

「誰に聞いた？」

思わずつい聞き返してしまった。

「噂よ。噂。そんな噂があるのー。」

またそれか。

尊ね

「でも、否定しないところはもう一つあるのね。」

噂ねー。

咲良の口から聞くことになるとは思つてもいなかつたが。しかも、咲良と椎名萌が知り合ひだつたとは。同じ小学校出身だつたか。

「ふーん。晃君がねー。」

「べつに」とか、「違う」とか、そんな言葉を選べばよかつたのこ。いつも通り・・・。

なんだろう。

咲良の前では適当が出来なかつた。

適当に受け流すこととも、否定することも、肯定することも。

「女子になんて興味なかつたのにねー。そつかあー。」

確かに。

一年の時の俺は人とのかかわりが面倒くさかつたから。

特に女子だなんて。

でも咲良は割りとサバサバしていく、一緒にいても苦ではなかつた。

「まあ、どつちみち、一年の時の晃君に告白してもダメだったってことね。」

「えっ？」

思わず聞き返してしまつた。
思わず。

「あ、三年になつた今もダメかー。残念。」

言葉が出なかつた。
思いつきつ。

「やーね。そんな顔しないでよ、っていうか、晃君もそんな顔するのね。昔は表情一つ変えなかつたのに。」

咲良に表情を読まれる程、
俺動搖してゐるのか？

「私の知っている晃君と違つてことは、違つ風に誰かが変わってしまったのかもね。大事にしてね、その子。じゃあね。」

そう言つと背中を向けた。

校舎の一番奥の美術室から。

咲良の後姿だけが見えていた。

一年の頃は・・・

同じ位の身長だった咲良。

細身の体系は変わらず。

でもいつの間にか俺は咲良の背を軽く追い抜いていた。

告白？

誰が？

誰を？

誰に・・・？

あの時はわからなかつたけど、

氣づかなかつたけれど、

俺、一年の時・・・咲良のこと好きだつたんだ。きっと。

美術感覚が合つタケとの出会い、
初めて出来た友達に、
嬉しそぎて忘れていたけど。

それまでは、咲良のこといいなつて感じていたと思つんだ。

でも・・・

「はーい、そこのキ!!。」

聞き覚えのある声。

美術室から帰ろうと廊下を歩いていたはずなのに・・・
気がついたら保健室の前で呼び止められていた。

「見一ちゃった。」

またこの保健医かよ。

今度は何だよ。

「あなたの好きな子、見つけちゃったー。さつき一緒にいたでしょ
ー？」

また嬉しそうな顔して話しかけてくるし。
何が見一ちゃつただよ。

「違いますよ。あの子じゃないです。」

「あら、ずいぶんとはつきり言つのねー。つまんなーい。」

おいおい。

つまらないって・・・

白衣の裾が保健室に消えるのが見えた。

おいおい。
それだけ？

それだけで充分俺を保健室へ引き寄せたが。
廊下で話されるのが嫌いなことを知つてか。
保健室へ足を入れると満足そうな表情で迎えていた。

「じゃあ、やつきの子は・・・

また嬉しそうに一人で喋り始めた。
この保健医は・・・いつもそうだ。

「わかつたー告白でもされた?」

「ゲホッ。」

思わず咳き込んでしまった。

ほんとなんなんだこの保健医は。

「あつたりー!!そーかそーか。」

「いーねー、放課後の誰もいない廊下に呼び出し。あー懐かしい。」

そう言つてまた一人で勝手に自分の青春時代の思い出話を始めた。
これを聞かされる為に俺はここに来たのかと思つとなんだか情けなくなつたが。

「まー、あんただつて告白されるの初めてじゃないでしょ?そのポーカーフェイスを崩せる女の子も珍しいだろ?うねー。」

ポーカーフェース。

無表情。

無反応。

何考えてるのかわからない。

とか言われたこともあったか。

昔は表情一つ変えなかつたのに。
さつき咲良にそう言われたことを思い出した。

あれが告白だったのかはわからないが……
告白といつものを受けるのは確かに咲良が初めてじゃなかつた。

「で？ 穂高の末っ子は今どうなの？」

「俺、べつに告る気ありませんから。」

「おや。 おやおや、あらあら。」

即答で返したことが意外だつたのか。
自分の意見を言つたのが意外だつたのか。

保健医は自ら仕掛けるゲームの運びが意外な方向へ進んだことに

驚いたような、

それを楽しんでいるかのような表情を見せた。

俺は俺なりに・・・

この保健医といふと調子が狂うし。
適当にとか、考えていると余計に面倒くさいことになると
ここ数回のかかわりでわかつたことだし。

「中学時代なんてね、クラス替え毎に毎年好きな子が変わつたって、
同じ委員会になつたとか、そんなんでもいーんだから。」

急に声のトーンを抑えて喋り始めた。
さつさまでのハイテンションとはまるで違つて。

「恋なんて、実つても実らなくても、告白してもしなくとも、人を
好きになるつていう過程が大事なんだから。 適当でいいのよ。」

そういうと、仕事机に目を向け

椅子に腰をかけた。

これ、帰つていいわよの合図。

黙つて保健室を後にした。

その夜、自室でスケッチブックを開いた。

進路が決まって・・・

受験科目の見直しをして・・・

美術の先生からの課題をこなして・・・

スケッチブックをパラパラめくった。
デッサン力をつける練習。

ここ数週間は人物画ばかりを描いていた。

女性は柔らかいタッチで
優しさが溢れるように。

男性はシャープに

筋肉を表現して力強く。

技法と
想像力の
練習。

模写なら得意だった。

風景でもそこにある物も人物もそう変わらないと思つていた。

やがて訪れる白紙のページ。
めくる手を止めた。

白い紙が好きだった。

何にも書いていない白い紙。

そこに描くのが好きだった。
自分だけの世界を。

“ バサバサッ !! ”

思わず手が滑った。
机の上に積んであつた資料本が音を立てて崩れた。

白昼夢か?!

まさか・・・

今一瞬、白い紙の上に
あいつの顔が浮かんだ。
浮かんだんだ・・・

おいおい。

勘弁してくれよ。

絵を描いている時は
絵を描いている時だけは
誰にも邪魔されないのに
誰にも邪魔されたくないのに・・・

なぜあいつの顔が浮かんだのか。
だいたいわかるけど。
だいたい予想はつくけど。

あれが告白だったのかはわからないが
あいつの好きな奴は俺だった。

気になるという気持ち

好きという感情も

好きになるという想いも

あいつが教えてくれたもの

あの夏からずっと、あいつはそれを伝え続けてくれていた。
秋になって俺の態度が冷たくなつても

でも・・・

ふと思つんだ。

あいつは変わらず好きでいてくれたのだろうかと。

今日咲良と会つて。

一年の時の想いに今頃気づいた。

あいつとかわつていなければ、

あいつを好きにならなければ、

この先もずっと気がつかなかつたかもしれない。

咲良があの時俺を好きだつたとしても、
咲良は泉くんとつき合つたじやないが。

それが事実。

俺を好きだというあいつも

他の奴とつき合つたりするのだろうか

今、告白されたら……
誰かに告白されたら……
誰かが告白したら。
あいつはつま恋つのだらうか。

祐也に……
芳沢に……
キタに……
ヒロアキに……
そしたらあいつはビックリするのだらうか。

翌日。

校外学習の日。

面倒くさいが一学期もあと四日で終わるのだから。
それに今日は授業も無いし。
適当に校外学習の時間を過ぎてして
午前中で帰れるラッシュな日。
のはずなのだが。

「おはよう、あきひやん。」

朝、下駄箱で会った。

今日の校外学習が椎名萌と同じ班だったことを思い出した。

「晴れて良かつたねー。歩いて五分の所だしねー。」

外靴から上履きに履き替えながらいつものように元気に喋っていた。

「お早う。」

と、すぐ後からもう一つの声。

芳沢だった。

「おはよう。」

靴を替え終えて普通に挨拶を返す椎名萌。

ふつつ・・・か？

「今日も寒いね。」

「ねー。風が吹いていないだけいいかも。」

「そうだね。」

おいおい。

なんだよこの時間差。

明らかに、後ろを歩いてましたっていう差だろ？

同じ通学経路なのに。

何で一緒に来なかつたんだ？

なんかあつたのか・・・？

「校外学習、感想文書がされるって知つてた？」

「えー、知らなかつたー。」

「だよね。前半組みの奴に聞いたんだ。」

「ただ行けばいいのかと思つてたのにー。」

三人で教室まで歩くことになった。

すぐ横に椎名萌。

その隣に芳沢。

会話上は普通に見えるが・・・

一人の距離感が微妙に見えた。

「あきちゃんは感想文書くつて知つてた?」

「いや。」

「きっと知らない人の方が多いよねー。」

本当は朝一で美術室へ行こうとしていたのだが。
芳沢とこいつを見ていたらほつとけなかつた。

というよりは。

芳沢と椎名萌を一人にさせたくなかつたのかも知れないな。

四組の前に差し掛かかつたところで、

「じゃあまた後でね。」

そう言って芳沢は五組へと向かつた。

「おはよー。」

「めぐちゃん、おはよん。」

相変わらず椎名萌は朝のおしゃべりに
自分の教室でもない四組に寄るのが日課。

「ちなつちゃん、校外学習の感想文あるって本当？」

「あつたわね。」

「げ！北川、それマジで？！」

待っていたのは北川千夏と河野ヒロアキ。
クラスが離れても仲の良いうるさい三人組。

「どれくらい？」

「四百字詰三枚だつたかな。」

「一千一百字ーー！そんなに書けるかよー。」

「あら、ヒロアキ計算できるじやないー。」

「そこかよつー！」

「あははー。」

椎名萌が笑っている。

いつもの朝の風景。

三年になって、こいつらが朝四組に集まつて。
他愛も無いバカ話をしている。

会話が丸聞こえなのを知つてか知らずか・・・

聞かれてもいい話か。

うるさい三人組の朝のこの時間につきあつのも最近の日課になつ
ていた。

そして、三人組でいる時のあいつの笑顔を見るのも悪くなかった。

HRで今日の校外学習の説明を受けると、各自でそれぞれの訪問
先へ向かつた。

行きは引率の先生を先頭に

新しい訪問先から回りながら、生徒達は次々に送り出された。

訪問先の保育園に着いた。

保育士から今日の説明を受ける。

気がついたら、横に椎名萌がいた。

何の偶然かは知らないが、ランダム編成の班に

こうして椎名萌と一緒になるとは思ってもみなかつたが。

保育士より、二クラスある為一人ずつに分かれて実習を行つて欲しいとの説明がある。

横にいた椎名萌と一緒になつた。

今日は四人で来ているが、六組からの二人とは特別親しいわけではなかつた。

それは椎名萌も一緒だつたのだろうか。

人見知りだなんて無縁そうな、無駄に明るいうるさい女も、さすがに六組の奴とは喋つていなかつた。

そういえば。

一年の時から借り物が多く、無駄に元氣でつるさい女だが、その周りにはいつも誰かがいた。

北川千夏に河野ヒロアキ、

二宮、斎藤恵子、関くんにタケ。

そのおなじみのメンバーと一緒にいないといつのも不思議な感じがするな。

こいつはこいつなんだけど。

なんつーか。

今は俺といるんだなーつていうか。

「ねえねえ、お絵かきしよ。」

「こつちきてレゴやろー。レゴー。」

「ねーおにいちゃん絵本読んでー。」

「でけーにいちゃんだなー。ぐるぐる遊びしー。」

こいつの間にか、園児達に囲まれていた。

おいおい。

面倒くせござ。

「だめだめ。今からまみとお絵かきあるんだもん。」

「レゴーでお城作りしよーぜ。」

「本読んでもいいのー。」

「ぐるぐる遊びー。」

おいおい。

だから俺はそんな真剣に遊ぶつもつは無いから。

「お絵かきーー。」

「レゴーーー。」

「絵本ーー。」

「ぐるぐる遊びーやりたいーー。」

おいおい。

そんなに引つ張つても俺の体は一つしかないんで。

そもそも、ぐるぐる遊びって何だ？

「ほらほら、みんなで色々な事言つたらおにいちゃん困つちゃうでしょ。みんなで相談して何で遊ぶか決めてーじらん。」

「はーーー。」

「じゃんけんで決めよー。」

「やうだんだよ。」

「話し合つて決めるんだよ。」

助かつた。

保育士の一言で、体にくつついていた園児達が離れた。
さすが保育士。
子供の扱いに慣れている。

ふーっと大きく息を吐いた。
ため息というやつだろう。

それを椎名萌が笑つて見ていた。

「うるさい。どうにかしろあれ。」

「あれ、もしかしてあきちゃん子供苦手?」

「嫌い。」

隣に立つと目が合つた。
まだ笑っている椎名萌。

「なんで笑う?」

「だつて。あきちゃんが小さい頃はああやつてはしゃいでいた
と思うよ。」

「俺は静かな子だつた。」

「あはは。自分で言うかな。」

隣で笑っている。

こいつの笑顔。
いつもと同じ。

学校でも訪問先でも、こいつはこいつ。

知らないんだもんな。

俺がどんな子供だったか。

俺に母親がいない事も

俺が兄達に嫌われていたことも

こいつは・・・

知らない。

知らないでいい。

俺の隣で笑つてくれれば

俺の隣にしてくれれば

それでいい。

「じゃあぐるぐる遊びに決まりー！」

「おじこちやん、ぐるぐるちつてー。」

「やつてー。」

「ぐるぐるーー！」

話しあうことやつは終わったよつたで

一番意味不明だつたぐるぐる遊びとやらに決まつていた

おいおー。

だからぐるぐる遊びって何だよ。

「きやーーたのしー。」

「わーーー。」

「田ーまわるー。」

どうやつひ。

ぐるぐる遊びと、園児を抱き上げて回転する遊びだった。
つまり、田が回るのは俺の方。

「ボクもやつてー。」

「あたしもー。」

「次ボクの番だよ。」

「順番ね。」

おいおい。

あとどれだけ回させるつもりだよ。

教室の中央で園児を持ち上げて回しながら・・・
自分も回転していた。

教室中を見渡せて

あいつを見てみると

数人の園児とピアノを囲んで遊んでいた。

そういえばあいつ、ピアノ弾けたんだつたか。
合唱コンクールで伴奏してたか。

毎年クラスの女子の中で数人ピアノが弾ける子がいた。
音楽の授業で、合唱コンクールで、伴奏者に選ばれていた。
きっと子供の頃から習っていたのだろう。

子供の頃の習い事。

勝兄はスイミングスクール。

亘兄は学習塾に書道と英会話教室だったか。
俺は習い事はしなかった。
特に興味が無かつた。
行く必要が無かつた。
絵を描いていたから。

中学に入る前の椎名萌。

今まで考えたことなかつたが。

以前タケの家で蓮田第一小の卒業アルバムを見たことがあった。

小六の椎名萌の顔。

小五の時の転入生だと言つた。

椎名萌がどんな子供だったのか。

ピアノを習つていたのか。

そして・・・

小四の時の絵のコンクールには・・・

「ねーおにいちゃんは好きな人いるの?」

「いるのー?」

「ねー、いるのー?」

ぐるぐる遊びには想像以上の体力を使ったので
休むことになった。

「だあれー?」

「おしえてー。」

「おいおい。

休憩時間くらい静かに休ませてくれよ。

「わかった! あのおねえちゃんだ!」

「おいおい。

どのおねえちゃんだよ。

「えー? ほんと?」

「あのおねえちゃん?」

園児達が指差した方を見ると・・・
教室の隅っこで椎名萌が絵本を読み聞かせていくところだった。

「ほんと?」

「おにいちゃん、おねえちゃんのことが好きなの?」

「すきなおー?」

「おいおい。

マセたガキだな。

面倒くさい。

「じゃあ、まみがおねえちゃんに話してあげるー。」

「ボクも話つー!」

「おねえちゃん、このおにいちゃんねー・・・」

おこおこ。

どうじていつも面倒くさいんだ。

「はい、ストップ。」

小さい子供の足を追いかける位大したことではない。

教室の端から端まで走つても

たかが子供の足。

歩幅が違う。

簡単に追いついて止めることができた。

「えー? 言わないの?」

「どうして?」

両脇に園児一人を抱えて戻った。

簡単に片手で抱えられた。
子供つて小さい。軽い。

「じゃしてー?」

「ねえねえ、何でー?」

でたでた。

やたらと質問したがる子供。
やたらと訳を知りたがる時期。

俺は小さい頃から自分の家が他の子の家とは違うことがわかつて
いた。

ばあちゃんに育てられて「いる」とも知っていた。

子供ながらに色々と悟っていた分、大人しかつただらう。
ここにいる子供達のように、思つたことを素直に口にして
無邪気にはしゃいで、動き回つて・・・
そういう子供ではなかつただけのこと。

「一番大事な」とは、一番大事な人にしか言わない。

「一番?」

「ああ。」

「一番?」

連れ戻した園児達にしゃがんで話しかけた。
同じ目線で。

「一番だつてー。」

「一番。」

子供の好きそうな言葉。

場面の切り替えに使うのが有効的だろ。

子供の世界だけでなく、俺達の世界でもやつだ。

場面の切り替え、雰囲気の切り替えが上手い一回を見てきたからな。

これくらいこは俺にもできる。

「おまえらにも一番あるだろ。」

「一番。」

「あるーー。」

「まみの一番ね、ママー。」

「ボクモー。」

だらうな。

「おじこちやんぐるぐるの続きをやつへー。」

「次、あたしからだよー。」

「その次ボクー。」

「順番ー。」

おこおこ。

まだやるのか？

そりそろ腕筋、攀りそつなんだけど。

帰り道。

「楽しかったね。」

「そつか？」

「可愛かつた。」

「どじが？あんなチヨロチヨロしてひめこののがか？」

「うん。」

そう言つて横で笑う椎名萌。

俺の隣を歩いていく。

「あきちゃんだつて人氣者だつたじゃない。」

「べつに。」

「ぐるぐる遊びだつて？長蛇の列ー。」

「腕痛いし。」

「あははー。」

保育園から学校までの帰り道。

五分とかからない距離。

隣には椎名萌。

「でも子供苦手つて言つていた割には懐かれてたねー。」

「苦手じやなくて嫌い。」

「あははー、またそんなこと言つてー。」

さつきまで同じ保育園にいた。

こいつが俺の横にいた時間。

クラスが同じになつたことはないから、

一緒に授業を受けているという感覚をもつたことがなかつた。

当たり前だけどこいつとは学校では会ひうけど、

互いの教室で会つていはいるけど、

同じ教室にはいなくて。

同じ授業時間は過ぐしていなくて。

でも、毎朝続く仲良し三人組つるむお喋りからはじまって、
移動教室の途中、廊下で遭遇したり、
ふらつと毎休みに顔を出したり、

放課後にも会つたりする。

そうして過ぎじてきた時間が当たり前で。
でも今は・・・

「なんか自分の子供の頃の記憶つてあんまり無いのだけど。私もう
一やつて元気だつたのかなーって。」

「つるさかっただろうな。」

「あ、ひつどーい。」

「本当の事だ。」

「そんなことないもん。」

ひつして一緒にいる。

会話して。

ちょっと怒らせてみたり。

笑わせてみたり。

「おまえの園児姿つて粗鄙つむれやう。畜生」と聞かなそうだし。

「えー、私つてそんなイメージなの?」

学校までの道。

一緒に歩く。

ただそれだけのことなの。」

ああ。

こいつと休日に会つてトーントしたいとかキタが言つてたか。
こんな感じなのか。

これをするために畠山あるひでじうなんだろ。」
これをしたいならべつに畠山しなくても、
つきあわなくともできるんじやないか。
そもそも付き合つてなんだよ。

告白して、付き合つてくださいって定番。

告白しなくても好きな想いはあるし、
好きだって想い合つてる奴らだっているだろ？。
両想いだからって必ずしも付き合わなくとも・・・

前から自転車が来ていた。

そっぽを向いているこいつは『気づいていないのか。

避けようとしているので

「あぶねーぞ。」

そう言つて、腕を引き寄せた。

歩道の隅に避けて自転車をやり過ごす。

「あ、ありがと。」

掴んだ腕を・・・
離したくなかった。

離してはいけない気がしたんだ。

あの夏の日に

この手で離した

こいつのことを・・・

「あきちゃん？」

「手、冷たいな。」

「あ、手袋してこなかつた。」

そのまま歩いた。

手の感覚はひんやりしていた。

「ピアノ。」

「え？」

「留つてたのか？」

「うん、小六の頃までね。」

小さい手。

あの夏の日につないだ手。

外で手をつなぐなら

告白しなくても

付き合わなくともできるんだからつ

つなぎたいときにつなげばいい。

ただそれだけのこと。

校門が見えてきた

この手を離さなければいけない。

わかっているが

離したくなかった

離さないで済む方法なんて・・・

あつた。

告白？

いやいや、俺相当混乱してるじ。

今日、園児達に言われた言葉。

「おねえちゃんに言つてきてあげる」

誰から、俺の気持ちを言わてしまつだなんて
考えたこと無かった。

でも・・・

だから思った。

だから気づいた。

俺がこいつを好きなこと、

知っている誰かが言うかもしない

学校に居る誰かが言うかもしない

今日かもしない

明日かもしない

明後日かもしない

園児達に言われて気づいたこと。
誰かからこいつに言われてしまつこと。

それなら・・・

いつその事・・・

自分の口から・・・

伝える方が・・・

伝わる方が・・・

「クシュン！」

「風が出てきたね。早く教室戻ろ。マフラーも置いておひやつた
し・・・」

そう言って

俺の手から

離れていくのが

やるせなかつた

なんだこの気持ち。

まだ捕まえていたい
まだこいつを離したくない
今度こそ・・・
離したくない

「やつぱおまえのーと好きだ。」

後姿が

足が

ピタッと止まった。

俺の思考も止まつた。

気持ちと感情の整理がつかないまま・・・
頭で考えるより先に勝手に行動した結果。

すぐに後悔する

その表情

俺が見たかったのとは違う
俺が見たかったのと違った

その顔に

マフラーを巻いてやつた。

その顔を

隠してやりたかった。

なんつー顔、

させてんだよ、俺。

その表情。

俺がさせたのか。

ばーか。

なかつたことにしてやるよ

俺の身勝手だよな
おまえを困らせて。
悪かつた。

オレは大丈夫だから
そんな顔するな。

今日は午前で終わりだつた。
校外学習だけで。

終わりのはずだつたのに・・・

美術室に一人残つていた。

受験課題の指導を受ける為に。

三年の授業は午前で終わりだが、
一、二年生の授業は続いている。

校舎の一一番隅っこにある美術室。
締め切つた教室。

一人の教室は嫌いではなかつた。
静けさが、頭の中を軽くしてくれたから。

「穂高君、遅くなつてごめんなさいね。」

扉が開き、美術教師が入ってきた。

「一人で寒くない？ストーブつけようか？」

「いえ。平気です。」

「受験生なんだから体調には気をつけないとね。一学期もあと二日だし。」

あと二日。

そう。

今日を入れてあと四日だった。

四日後には冬休みに入る。

それまでに・・・

「うん、よく仕上げてきたわね。人物画の方も良くなつてきたわ。」

スケッチブックをめぐりながら美術教師は評価を続けた。

「特に女性像のタッチが柔らかくなつたわね。捉え方も変わつてきてるし。うん、うん。調子上がつてきたわね。」

「そうですか。」

「何か変化でもあつた？」

「え？」

美術教師らしくない質問に驚いた。

美大の付属高校の受験が決まってから、選択授業でもお世話になつていたこの美術教師が受験指導を引き受けてくれることになり急な進路変更で短期間だつたこともあり、割と厳しく指導されてきたのだが。

「あ、別にね、生徒のプライベートに立ち入るつもりはないのよ。
気を悪くしたら『ごめんなさいね。』

「いえ。」

「いえ。」

美術教師も慌てて繕っていた。

自分でも意外な質問をしてしまったと思つたのだろうか。

「でもね、美術感覚つて、生まれ持つた才能もあるのだけど、それ以上に美術感覚を磨くことも大事なのよ。普段の生活から、色々なことに触れて、見て、感じて。それは物や風景だけじゃなくて、人とのかかわりだつたりもするのね。だから、これから色々な人とかかわつて、穂高君の美術感覚がどんどん変化していくのも楽しみね。」

人とのかかわり・・・か。

一番俺が面倒くさいと思つてきたことが
一番大事なことだつたなんて。

なんだか皮肉なもんだな。

人とのかかわりが面倒くさくて
人とのかかわりを避けてきた
そんな俺の中に・・・

あいつはいつの間にか入ってきていて
面倒くさかつたけど

避けてもみたけど

それでもあいつは・・・

懲りずに俺のそばにいた。

気がつけば・・・
俺が目で追う大事な存在になつていた。

なのに・・・
それなのに・・・
あいつを困らせた。

見ていようと

見守つていようと

決めていたのに・・・

ほつとけなくて

触れたくて

引き止めていたくて

大事にしてやりたいと思う反面、

離したくないと自分勝手にあいつを巻き込んだ。

あいつの気持ちも考えずに・・・
自分の想いを優先させた結果だ。

どうしてあと四日、

我慢できなかつたのか。
我慢しなかつたのか。

伝えてしまつた今となつては
俺自身はすつきりしている。

でもあいつは・・・?

迷惑だつただろううか。

困らせてしまつただろううか。

泣かせてしまつただろううか。

今頃・・・

泣いているだろううか。

翌朝。

家の玄関を出る際、後ろからぱあけやんの足跡が聞こえた。

「あ、晃、待ちんしゃい。」

「なに?」

「明後日の終業式が終わつたら父をおもてさん迎えに来ると。一緒に母をおもてさんの実家に行きんしゃい。」

「うん。」

「学校気をつけて行つといで。」

「いつてきます。」

一学期もあと三日。

今日と明日と終業式で終わり。

今日、あいつはどんな顔で学校に来るだろううか。

気になつて仕方がなかつた。

あいつに気持ちを伝えてみて知つた感情もある。
自分勝手だとは思ううが。

気になるから好きなんだし

好きなのだから気になる

仕方ないじゃないか。

俺だつて自分がこんなにも椎名萌のことが好きだなんて知らなかつたのだから。

早めに登校してみたが、
さすがに四組の教室には来ない・・・か。

いつもの三人組の朝のお喋り時間。
今日はヒロアキしか来ていなかつた。

一学期最後の期末テストも終わり、
今日と明日の授業が終われば終業式。
そんな時期に授業に集中する方が難しかつた。

横に視線を向けると・・・

授業とは関係のない教科の参考書を開いている奴、
受験対策の文字の書かれた本で勉強している奴。
それでも授業は進んでいた。

時間表通りに。

二時間目が終わり、三時間目は移動教室だつた。

いつもの時間割。

いつもの移動教室。

いつもの移動経路。

すれ違う廊下で・・・

今日初めて椎名萌と会つた。

というか、避けられた。

おいおい。

明らかな態度。

一宮の後ろに隠れるあたり、絶対わかつてやつてるな。

そうきたか。

あいつのことだから・・・

また変なこと考えてるんだろうな。

また変なことで悩んでいるのだろうな。

俺に対してとった行動とか。

そんなの気にしてないのに。

俺が自分勝手に伝えただけなのに。

巻き込んで悪かつたな。

だから大丈夫。

大丈夫だから、顔を見せてよ。

戻つてこいよ。

俺の隣に・・・

昼休みになつた。

いつものように五組へ遊びに行くと

いつものように一宮の周りに人が集まつていた。

いつものように一宮のフンも健在。

タケの隣に行つた。

椎名萌のどこからも、俺は見えているだろ？

話しかけようか・・・

首をくすぐつてやるうか・・・
どうしようかと思つていたら

後ろからキタの声が聞こえた。

「あきちゃん見つけ。持つてくれた?」

「ああ。」

「わーいーじゃあ取り行く!」

キタと一緒に四組に戻ることになった。

振り返つてあいつの方を見たが、一宮の後ろで俯いたままだった。

「あきちゃんサンキュー。これでおいらの冬休みはゲーム三昧かつ
！」

「攻略本も付けるか?」

「おお!なんて良い人!行き詰まつた時には喉から手が出るほど欲
しい攻略本!あきちゃんサンキュー!」

相変わらずテンションの高い奴。

キタはこの後五組に戻るのだろうか。

また椎名萌にちょっかいを出すのか・・・

「そういえば、あきちゃんと椎名萌ちゃんとケンカでもした?」

「は?」

思わず口に出してしまった。

「いや、今日なんか一人とも雰囲気違つていうか。」

「べつー。」

「でた!あきちゃんのべつー。」

おいおい。

今度はなんだよ。

「いやや、J-WAVEも貰つた訳だし、あきらめとつて良い奴だと思ひし、だから椎名ちやんの」とはきつぱり諦めようと思つてたんだけじゃ。」

「なんか一人がうまくこつてないのかなーって思つたら、やつぱオレにける??みたいなー。」

おいおい。

だから面倒くさいって。

「なーんて、冗談だつて。そんな怖い顔しないで。何があつたか知らないけども、早く仲直りしちゃいなよ。きつかけなんてなんでもいいんだから。椎名ちやんは笑顔がかわいいんだから。」

俺の顔が怖いつて?

椎名萌の笑顔がかわいいって?

おいおい。

俺は何にも言つてないぞ。

「じゃーねー。」

そう言つと、キタは教室を左に出て行つた。
方向的には自分の教室へ戻つたのだが、
五組へは戻らないか。

時計を見るともうすぐ休みが終わるとしていた。

きつかけね・・・

確かに。

あいつのことだから色々と悩んでいるのだろう。
俺といづやつて話せばいいかとか。

昨日のことについてどうすればいいのかとか。

そんな風に悩ませているのは俺なの。

困らせているのは俺の方なのに。

うまく言えたらしいのだろうけど。

大丈夫だつて安心させてやれればいいのだけど。

どうやって言つていいのかわからないし。

どうやって接したらいいのかわかつていない。

あいつのこと大事に思えれば思つほど、実はどう接していいのかわからなかつたりもする。

それでも・・・

どうにかしてやりたい。

今回は俺の身勝手さが引き起こしているのだから。

おまえは悪くないって言葉で伝えれば簡単だけど
そんなこと言えるほど器用な人間じやないんで。

せめて想いが伝わるよう・・・

「あ、あきちゃん。」

五組へ向おうと廊下に出た時だった。

「あ、あのね。」

廊下に先に来ていたのは椎名萌だった。

「あの・・・」

俯いたまま・・・

言葉に詰まっている。

「あの、昨日、昨日ね・・・」

その表情。

そんな顔するから・・・

触れたくなる。

ああ。

この感情の答えは抱きしめたいだったのか。
前にも何度も感じたことのある感情。

泣きそうで・・・

でも一生懸命なこいつの顔を見ていると。
抱きしめてやりたくなる。

大丈夫だから。

もう大丈夫だ。

そう、言いながら。

「タケに理科の一分野貸してって言つて。」

「えつ?」

「いいから、借りてきて。」

「う、うん。」

きょとんとした顔をしていた。

それでいい。

すぐに戻ってきた椎名萌。

それでいい。

その表情。

「これタケの？」

「そうだよ。」「

「おまえのかと思つた。」「

「え？」

チャイムが鳴つたので、そこで会話は終わった。
五組へ戻つていく後姿を見送つて。

「あれ？ 晃君借り物？ 珍しー。」「

「いや。」「

「えつ？ あれ？ なんで二一つ・・・？」

席に戻ると健太が机に二つ並んだ教科書を見比べながら不思議そ
うな顔をしていた。

同じ理科の教科書が二つ。

これでいい。

これでいいんだ。

あいつが言おうとしていたこと

聞いてやることもできたかもしない。

でも・・・

言わなきゃいけないと必死になつてゐる表情がわかつたから。
そんなに大変な思いをしなくていいんだと、
そんなに抱え込まなくてもいいんだと、
その緊張感から離してやりたかったんだ。

キタの言つていたきつかけとは違うかもしれない。
それでも・・・

次また会う理由ができる、

今日もう一度会える理由ができる、

そこでも話せばいい。

今度こそ、

大丈夫だからって伝わるよ!。

五時間目が終わつた。

掃除の時間になるのを待つて、五組へ行つた。

「これ、返しといて。」

簾を持った椎名萌の頭の上に乗せてやつた。

「もつすぐタケやん来るよ?」

「いや、返しといて。」

さつきよりも落ち着いた表情をしていた。
きっかけになつただろうか。

「あ、あきひやん、」

「ん?」

「あ、あのね、あの・・・」

片方に幕

片方に教科書

持つ手に力が入っているのがわかった。

「昨日ね、ごめんね、私・・・あの・・・ごめんなさい・・・」

「昨日? ああ、それで寝不足か?」

「え?」

「ここ。」

今日初めて目が合つた。

顔をあげて。

向き合つた。

目の下にクマ。

やつぱりな。

昨日のこと。

寝不足になるくらい考えたのか。

悪かつたな。

俺の自分勝手な感情に巻き込んで・・・

今も俺、自分勝手な感情で

こいつに触れたいって思つた。

こいつを抱きしめてやりたいって思つてゐる。
でも・・・

感情を抑えて。

目の下のくまを指で触つた。

ずっと田中が呟いていた。

今度は逃げずに・・・
正面からこいつと向き合いたい。
そう思った。

好きだという想いを伝えたら
何かが変わるのかと思つていた。

変わることを望んでいたのか。
そうじゃないだろう。

俺達は。

例え好きだとしても

卒業したら別々の道を歩むのだから。

変わりたくて伝えたわけではない。
単に俺が我慢できなかつただけ。
感情を抑え切れなかつただけ。

人とのかかわりを避けてきた俺が
初めて人とちゃんと向き合つたのだから
それくらいの反動は仕方のないことだ。
それくらい処理できなくてどうする。

俺が椎名萌のことが好きなだけ。

それでいいじゃないか。

何も変わらなくとも。

自分の口から伝えたかつただけ。

だから、返事を求めているわけではないんだ。
答えが聞きたいわけではないんだ。

ただ、それだけのこと。

翌日。

終業式まであと一日。

今日で一学期の授業は最後となる。
一時間目から移動教室だった。
五組の前を通りかかった時、
中からタケに声をかけられた。

「おっす、晃。今日放課後な。」

「ああ。」

「おれ週番だから待たせると思つけど。」

「わかった。」

「おはよう、あきちゃん。」

タケの後ろから顔を出した。
目が合つ。

ただ一言。

挨拶を交わすだけ。

それだけで十分だつた。

いつもの椎名萌の顔に戻つていた。

大丈夫だ。

あと二日。

今日と明日。

泣かせないようにな
笑つていられるように
見守つていてやりたい。

給食が終わり
昼休みになった。

タケのところへ行くと教室を出ると、廊下で待つている奴と目が合つた。

ヒロアキであつて欲しかつたが・・・
どうやら俺を待つてはいるようだつた。

笠原祐也。

「昼休み、萌ちゃんのところ行く予定だつた?」

「べつに。」

「そう。ならいいんだけど。邪魔しちやつたかなって。」

おいおい。

既に皮肉たつぷりな話しが伝わつてくるんですけど。

歩きながら向かつてはいる先は・・・

人気の少ない体育館への渡り廊下。

「これ、萌ちゃんから貰つた。」

校舎から離れた場所までやって来ると、振り返つた祐也が手紙のような封筒を手にしていた。

「読む?」

「いや。」

「そう。」

「おいおい。

椎名萌が祐也に宛てた手紙を何故に俺が読まねばならぬ。

「オレ、萌ちゃんに告白したんだが。その返事がこれ。」

同じ小学校の出身だが、元々付き合いがないので笠原祐也の表情を読むのは難しかった。

田の前にいるが、何を考えているのかわからない分、落ち着かなかつた。

「気にならない?」

「べつに。」

「へー。余裕だね。」

一学期も今日と明日で終わることこの時期……
祐也はいったい何をしたいのだろうか。

「でも、萌ちゃんとは付き合っていないんだってね。」

「ああ。」

「何で?」

「おいおい。

それって、答えなきやなうねーのか?

正直に?

いやいや。

適当に。.

「気持ちだけじゃどうもなんないこともあるから。」

「ふーん。大人だねー。オレだったらどんな手使つてでも自分の方に向かせるけど。」

そう言つと、祐也は田線を外へ向けた。

その時、祐也の体格は割りとがつちつとしていることに気がついた。夏に部活を引退して・・・少しぼつちやつしたのだろうか。

椎名萌と同じ部活動の部長か。

「オレ、萌ちゃんのことずっと好きだった。一年の時から。」

「でも、好きな子はこいつも、部活と勉強の両立が難しくてさ。必死で誰よりも上に立とうとしてきたり・・・」

変わらず体と田線を外に向けてくる。
おーおー。長い話しかよ。

「気がついたら萌ちゃんのこと好きな奴が周りにいたってさ。オレ逃げたんだよね。ちょうど那时告白されて。逃げたんだ、自分から。その子と付き合つこと周りの奴らより優位に立つて。」

「それでも萌ちゃんのことは気になつてて。ずっと見てた。そしたらさ、萌ちゃんの好きな奴がオレだったっていう噂を聞いて。それと、聴一と付き合つてるとかいう噂もあつたり。すんげー気になつた。」

「でもさ、どんな噂があつても、萌ちゃんが誰を好きでも、片思ひなら良かつたんだ。誰とも付き合わなければ、それで良かったんだ。」

「ここまで話して、

祐也が体を二つちへ向けた。

「でも今度は違った。晃君も萌ちゃんのこと好きだつてわかつたんだよね。」

俺は肯定も否定もしなかつた。

おそらく、表情もうまくコントロールできていただりづ。

「それなのに晃君は萌ちゃんを泣かせてばかりだつた。許せなかつた。オレだつたら泣かせないのについて思つた。オレが萌ちゃんと付き合いたいって思つた。だから栗原とは別れた。」

「二人が付き合つてゐるのは噂で、まだ付き合つてないつて知つた時、だつたらオレにもチャンスがあると思つた。」

「萌ちゃんが傷ついている時に、萌ちゃんに告白して。奪つてやろうと思つた。いいタイミングで告れたと思つてたんだけど・・・。」

再び、祐也は視線を外した。

おそらく、今日は言いたい事を事前に考えてあつたのだろう。感情に任せて喋つているようには思えなかつた。

「萌ちゃんはオレとは違つたよ。流されなかつた。逃げなかつた。それだけ想いが強かつたのだろうね。だから尚更晃君がムカついた。萌ちゃんにこんなにも想われていて・・・や。」

落ち着いた喋り方。

淡淡と、でも大事なところは感情を込めて話す。こいつ話し方をすると、人に伝わりやすいのだろう。

テニス部の部長をして、

学級委員をして、

生徒会副会長を務め、人前で喋ることなんて慣れているのだろう。

人に何かを伝える。

あいつにも・・・

「晃君高校から県外出るんだって?」

「ああ。」

急に話の方向が変わった。

自分の話は終わつたという意図だらうか。

「だつたらオレは時間をかけよつかと思って。今すぐ萌ちゃんと付き合つだけが結果じゃないし。高校生になつてからでもいいからでもチャンスはあるしね。」

「晃君には冬休みに入る前に伝えときたかっただけだから。それだけ。」

おいおい。

それだけつて・・・

けつこう喋つてたぞ。

もう昼休み終わるし。

俺の昼休みが・・・

祐也の長話で潰れたんですけど。

あいつ、手紙なんて書いていたのか。
喋るの苦手そうだしな。

無難な手段か?

じゃなくて。

やつぱり告白じてたのか祐也。

返事は・・・

祐也の話からじて断つたつてことか。

なんだ。

情けなねーけど。

どつかで安心している俺がいる。

だつせー。

「あれ、晃君タケが探しに来てたぜ。」

「ああ。」

教室に戻ると予鈴、ギリ、ギリの時間だった。

「昼休みどつか行つてた?」

「ちょっとな。」

「椎名萌とデートですか?」

「違うし。」

健太にまでからかわれるとほ。

いつたい噂と/orのはどこからどうやって伝わつてこるのか。
それがわからぬようになつてこるから噂なのだろうナゾ。

椎名萌と松岡聰一、

椎名萌と芳沢、

椎名萌と俺・・・か。

お騒がせな女。

放課後。

今日はタケと買い物に行く約束をしていた。

「あつ！椎名、何食つてる？！」

「いぬんなさーい。生活委員の竹田くさ。」

「おまえ悪いと思つてないだろ。」

「思つてます。思つてます。はい。」

鞄を持つて五組へ向かつと

廊下まで聞こえてきたのはタケとお騒がせ女の会話。

「おこしい？」

「まあまあな。」

「はいこれで共犯。」

「椎名！――」

「あはは、怒らないでって。ひやあああー@ @ @ @

タケに首をくすぐられ、悲鳴を上げていた。

「タケやん、首はやめてつつけぱり！」

「早く口読書けよ。戸締り見てくるから。」

「はこはこ。書きます ひやあああー@ @ @

今は俺。

久しぶりにくすぐつてみたが、
相変わらず首は弱点のようだった。

「ちよ、だ、誰？？」

「タケ、終わるか？」

「おう。もう少し。」

「あきひりやん？？」

タケが生活委員の当番で遅くなるところは聞いていたが。
椎名萌が今日田口直だったとは知らなかつた。

「あきちゃんも食べる?」

「おいつ、椎名!」

一人席に座つて日誌を書いている椎名萌。

どうやら菓子を食べていてタケに見つかつたらしく。

「チヨコか。甘いな。俺のガム食うか?」

「おいつ! 晃!」

戸締りチェックをしているタケ。

三人しか残つていらない教室に響き渡る声。

「つたくおまえらは生活委員の俺の前で堂々と菓子を出すな!」

「あきちゃんありがと!」

「そして食うな!」

「あきちゃんタケやん待つてるの?」

「ああ。」

「おまえら俺の話聞いてないだろ!」

「一緒に帰るの?」

「買い物。」

「おれは何も見てないからな!」

なんだかんだいって、タケも「こいつには甘い。

まだ時間がかかりそなので、椎名萌の前の席に座る」とした。

「買い物つて・・・参考書?」

「いや、ゲームの発売日。」

「買い物つて・・・参考書?」

「いや、ゲームの発売日。」

「えー、ゲーム？受験生なのにゲーム？」

「受験は関係ねーだろ。」

「余裕だね。」

同じクラスになつたことがないから、

こいつの字を見る機会はあまりなかつた。

学級日誌の半分位書き進められていた。

「椎名、早く日誌書けよ。晃とゲームが待つてる。」

「わかつたよー。でも手が冷たくて思うように動かないのよ。」

「今日雪降つたもんな～。」

タケが窓の外を見ながら言つた。

椎名萌は持つていたシャーペンを置き、両手に息を吹きかけて暖

めている。

田の前の、その手を握つてみた。

「冷たいな。」

そういうえば、こいつの手は冷たいことが多い。
この間は手袋を忘れたとか言つてたか。

室内でもこんなに手が冷たいのか。

「隣行つてくるから戻つて来るまでに書いとけよ。」

「は、はい。」

教室を出て行くタケ。

「おまえ手も小さくな。」

まだ冷たさの残る手を、自分の右手を広げ合せて比べてみた。

「第一関節より下だな。」

「そ、そう?」

小さい手が・・・

離れていた。

再びシャーペンを握り、日誌を書き始めた。

今日は二つに結んだ髪。

俯いた体勢からは、前髪が顔にかかっていて表情が見えない。

秋になつて縛り始めた髪。

初めて手をつないだ夏は肩上で短かつた髪。
三年になつて髪をばっさり切った時、
失恋したとか噂になつたか。

でも椎名萌が祐也を好きだつたのつて一年の話しだろう。
べつに、何で髪を切つたのかなんて今更興味は無いのだけれど。
今日、祐也の話の中で思つたこと。
適当に聞いていたつもりだつたが、
一つだけ覚えていることがあつた。

自分の恋がうまくいかない時に
自分が一番自分を嫌いな時に
そんな自分を好きだという奴が現れたら
人は簡単にその人の手をとつてしまふのだろうか

「な、なに?」

視線に気がついたのか
椎名萌が顔を上げた。

「祐也と付き合つのか？」

「えつ・・な・・・」

言葉に詰まつたその後に、
出てきたのは涙だった。

やばいと思ったのは俺。
やばいと思つたのは椎名萌。

「また泣いて・・・」

慌てて拭おうとしていたので
その手を取つた。
落ち着かせてやりたかったから。

「だつて・・あきひやんが変なこと言つから・・・

まさか泣くとは思わなくて。
ここで泣くとは思わなくて。
また俺の言葉で傷つけたことを知る。

「違つのか？」
「違つよ。まゆ。

「こいつの泣き顔はもう何度も見ていた。
泣いた後の顔。

でも、田の前で泣いているのを見ると

俺が泣かせたのだと思う「反面、

俺の前で泣いていることに妙な安堵感を感じている自分がいる。

自分の言葉で傷つけておきながら

自分の田の前で泣いているのがたまらない

」の感情はなんだ？

大事に思つ「反面、かかわり方が曲がつてしまつ。

泣かせたのは俺なのに、

泣いているこいつを可愛いとさえ感じてしまつ歪んだ心。

自分で泣かせておいて、

自分が慰めてやることで償つているつもりなのだろうか。

俺は・・・

「あきちゃん、何で祐也の事知つているの？」

ピタッと泣き止むといつもあるのだろうか。
さつきまで、伝つていた涙を

頬を、

この手で触れていたのに・・・

もう、まっすぐに俺を見つめていた。

「知つてるの？」

「ああ。」

田を逸らさない。
逸らそとしない。

「聞いたの？本人から？」

「ああ。」

まつすぐな目。

相槌を打つだけで一杯だった。

「そつか、知つていたのだね。」

そう言つと、再びシャーペンを持ち口説を書き進める。
今度は口を開ざして。

「こいつの涙はどこから来るのだろう。

この前もそうだった。

急に泣いたかと思えば、
次の展開では笑つてゐる。

以前から表情がくるくる変わる忙しい奴だと思つていたけれど。
感情が不安定といふか。

人を簡単に信じやすいといふか。

無駄に元氣で無駄に笑つて無駄に喋つて・・・
でも無駄だと思っていたことも、それは全部こいつな訳で。

感情が不安定なのは豊かな表現が出来る長所でもあって。
人を簡単に信じるのは向き合つてやることが出来る長所でもあ
つて。

そういうの全部含めて椎名萌の良いところなんだうつて思つ。

シャーペンを片付け始めた。

日誌を書き終えたのだろう。口を閉ざしている間・・・何を考えていたのだろうか。

「なんで泣いた？」

「え？」

「なんで泣いた？」

「えっと、あきちゃんから祐也の事言われたから。」

「辛いのか？」

「う、うん。」

短時間で、表情を立て直していた。

俺からの質問には恐る恐る答えている様子だったが。

「辛いから泣くのか？」

「す、好きな人から言われたらショックだよ。」

「ふーん。」

好きな人・・・か。

あれが告白だったのかはわからないが

気になるという気持ち

好きという感情も

人を好きになるという想いも

こいつが教えてくれたもの

あの夏からずっと、それを伝え続けてくれていた。

秋になって俺の態度が冷たくなっても

それでも・・・

変わらず好きでいてくれたのだろうかと

椎名萌のことが好きだと認めてから気づいたこと。

あの時は好きだったかもしれないが

今は違うかもしれない

昨日までは好きだったかもしれないが

今日からは違うかもしれない

人を好きになることを認めた途端、
人とのかわわりが怖くなつた

あ。

限界だ。

自分の言動と行動と感情が

コントロールできなくなる感覚。

前にもあつたから。

今度はわかる。

今度は抑える。

抑えなければ。

今は・・・

「俺は何でおまえが泣いているのかもわからないし、俺といて何でおまえが笑っているのかもわからない。だから俺より祐也と付き合う方がいいだろ。」

最低だな。

言葉で傷つけるとわかっていたのに。

言わなきや良かつたのに。

言わなくても良かつたのに。

「タケ、俺を殴れ。」

「え、いいの？ じゃあ遠慮なくくつ。」

「やつぱい。」

「おいおい、晃一。頭冷やせー。」

「わかつてる。」

あの後、タケと合流して。

ゲームを買ってタケの家に行つた。
今日発売のゲームをやる為に。
そのはずだったのに・・・

「あいつ、泣いてたか？」

「いや。俺が日誌貰いに行つた時は普通だつたぞ。」
「普通か・・・。」

あいつの普通がそもそも理解できん。

タケから見る普通と俺の普通感覚が同じとも言えないし。

「おいおい晃、どーしたよ？ おまえがゲームの封も開けずにここに居ることが信じられんよ。」

「だよな。」

「そんな、マジになっちゃったのか？」
「は？」

「ゲームに手がつかないほど、椎名のことは。」
「ん・・・距離感が掴めねー。」

「めつ、珍しい！ 雪降るか？ 大丈夫か？」
「タケ・・・。」

今気づいたのだけれど。

この状況を楽しんでいるのはタケ一人だった。

「悪い悪い。つい……な。」

そう言いながらも、十分楽しそうで嬉しそうな表情をされていますけど。

それでも何にも言い返せねー。情けねー。

「まあ、あれだ。椎名は割りとこういうなつて喜んでるかもだな。」

「えつ？」

全く意外な言葉に驚いた。

タケよ、今度は何を言い出すのかと……

「晃にむ、それだけ喋らせたのって、かかわりが深くなってるってことじやん。他人に関心の無かった晃がだぜ。一人の女に、それだけのこと言つんだからだ。」

「晃が何言つてもさ、言葉で傷つくつてよりも、まずはそこまで喋つてくれた、自分に興味を持つてもらえたつてことが伝わってんじやねーの。晃が椎名を見る目、変わったんの周りも気づいてるし。」

「そうか?」

「おうよ。いくら付き合つてなかろうが、おまえらつてけつこうつ周りから見ると両想いですつ一つオーラ出てんや。」

「べつに……」

「おまえらの場合や、付き合つとか付き合わないとそんな問題じやないだろつし。いーんじやん、明日で学校終わりなんだから。変にこじれたまま冬休み入らぬようにだけすれば。」

「んー……」

「さつ、考えても答える出ない面倒くさい問題はやめて、面倒くさ

くない晃の好きなゲームしよーゼ。」

真面目に聞いてくれてるとと思えば
タケの気持ちはやはりゲームに向いていたようだ。
せっかく買つてきたばかりのゲームをやりたくて仕方のないオーラが出てるし。

「こんな調子グダグダの晃、もう一度と無いかもしれないからな。
今のうちにオレが勝つておきたいしー。」

おいおい。
そこかよ。

確かに。

こんなグダグダの俺、もう一度とあって欲しくはないのだけど。

昔から人とのかかわりを避けてきた俺にとって
面倒くさいの一言では片付けられない面倒くさい問題とぶち当た
ると
対処法がわからず
処理する引き出しあり足らず
ここまで落すことのまゝのひとと。

あいつと向き合つと決めたのは俺。
向き合つたら今度は離さないと決めたのも俺。

一人・・・
たつた一人と向き合つのに
これだけの労力が必要だつただなんて。

どうする？俺。

面倒くさい。

あと一日・・・

面倒くさい。

明日は終業式・・・

すんげー面倒くさい。

でも・・・

あいつとのかかわりだけは面倒くさいの一言で片付けられないんだ。

適当に思つていても。

適當が出来ない。

あいつがいつの間にか俺の中に踏み込んでいたよひに・・・

俺も今、あいつの中に踏み込んでいるから。

もう後には引けない。

もう少しであいつを捕まえられるとひまできてるのだから。

あの夏の日・・・

俺の手で離したあいつを

今度は離さないと決めたのだから
向き合うと決めたのだから

ただ、それだけのこと。

翌朝。

一学期終業式。

いつもの朝のお喋り三人組・・・
はさすがに今朝は揃っていなかつた。

終業式だもんな。

登校してすぐに体育館へ移動した。

長い校長先生の話しを聞きながら・・・

隣のクラスの女子列から椎名萌の姿を探した。

身長順に並んでいる列。

小さいと思っていたが、真ん中位にいた。

女子の平均身長ってそんなもんだったのかと。

後姿・・・

終業式中に後ろを振り向くことはないだろう。

あいつ真面目だしな。

そう思つと、ずっと見ていたらしい。

壇上の校長先生を見ていくよつもよつぱりマジだろう。
その校長先生の長い話が終わり、今度は生活指導担当から冬休み
の諸注意が始まった。

今日は一つに結んでこる髪。

耳の上あたりで結んでいる髪は、ちゅうほど肩にかかる。
頭が動くと揺れる髪束。

こんな風に今まで後姿を見ていたことなんてなかつた。

最も、中一の時は前から数える方が早い位背の低かつた俺。

中一になつて伸び始めたが。

中三の今、クラスの男子の中では後ろから一番目。

だから、前を向いてるだけで二年のほとんどの生徒を見渡すこ

とができている。

終業式なんて。

全員が話を聞いているわけがない。

俯いたままの奴も、キヨロキヨロと周りを見渡している奴も、あくびをしている奴も

立つたまま器用に居眠りをしている奴だつていい。こつそり隣の奴と、前後の奴と、小声で話をしていい奴らだつていい。

話を聞いているだけの退屈な時間を皆それぞれに工夫して過ごしているのだらう。

俺があいつを見ているよ！」

今までも

これからも

誰かをこんなにも見ていたことは無いだらう。

ただ、それだけのこと。

「晃君、この後暇？」「バレー部寄つてかない？」

終業式が終わり、教室に戻る廊下で奥井と梶原に話しかけられた。

「今日は用事あるか？」「

「そつかー。残念ー。」「

「たまには後輩君達に顔見せてやつてよ。みつてよ。」「

「ああ。」「

奥井と梶原の間に入り肩を組まる。

最初はこの二人との身長差に驚いていたが。今では三人並んでもそつ変わらなくなつた。

「そういやさー、晃君つて椎名ちゃんと付き合つてゐるんだって？」

「キャー、おっくんたら、本人の前で直球ー。」

おいおい。

二人とも顔近いつてば。

小声で話してくれただけいーけどさ。

「いやー、意外だつたなー、椎名ちゃんとは。」

「晃君つてああいう子がタイプだつたんだなー。」

おいおい。

だから俺まだ何も言つてないんですけど。

「で、冬休みは『ティー』ですかい？」

「その前にクリスマス?! いーねー!」

「いや、冬休みは親戚の家で過ごす。」

「そうなの?」

「早速離れ離れー?！」

おいおい。

廊下でオーバーリアクションだけはやめてくれよ。

「あ、椎名ちゃん!」

「噂をすればなんとかだね。」

「あれ、おっくんかじくん。」

おっこ。

偶然にしてもタイミング悪いし。

教室に戻るといひだつたのだろうか、椎名萌が通りかかった。

「はーい、椎名ちゃん元気してた?」

「あはは、元気だよー。一人とも背が高いから田立つね。」「おひはー、田印?!

「あははー、田印?!

「そうやつ。でもねー、今日みたいな全校生徒並んでる時は、田立ちたくないのに先生から目つけられちゃうんだぜー。」「あ、そうだね、背高いと大変なこともあるんだね。」「うんうん。椎名ちゃんの好きな奴は背高いの?」「えつー?」「えつー?」

「おいおい。
なんぢゅー質問をするんだよ。
「えつと・・・」

そしておまえもそーで言葉で詰まるなよ。

奥井と梶原の思つづぼだろ。

ほら、二人して嬉しそうな顔してるし。

「えつヒー・・・」

だから困った顔するなって。
だいたい真面目に答えなくともいいじ。
適当に流せよ。

困つて固まつている椎名萌に対し

嬉しそうに笑っている奥井と梶原。

ふと思い出した。

確か一学期の終わりにも・・・
終業式の後、じつして奥井と梶原と椎名萌と話したこと。

あれからもう半年か。

バーーの試合を見に来て
引退試合で勝てなくてあっけなく終わつた夏だったのに
なのに・・・

あいつと行つた夏祭りで
あいつのことが気になつて。

好きだと言われて

俺も気になると答えて

気になるという気持ちを知つて
好きだという想いを知つて
好きだということを認めた。

かかわらないと決めた時も
結局向き合うことで解決した
絵と離れると決めた時も
結局向き合うことで解決した。

そう。

椎名萌を好きにならなければ
絵の道に進んでいなかつたかも知れない
椎名萌に好きになつても教えていなかつたら
今も絵と向き合えていなかつたかも知れない

そう考へると不思議だ。

いつの間にか質問が変わっていた。

「椎名ちゃん、志望校は決めた？」

丁巳仲夏

二〇一

「うーん」

「俺のまへ交ざる。

「え？ おつかんかじく

「もち！俺らゴールデンペアだからね！」

一
年
少
年
の
事
業

相馬女江久遠は負けのれ

再び言葉に詰まる椎名萌。

バレバレだぞ、その態度。

「あら、おっくんたら椎名ちゃんいじめると怒られちゃうわね。」「あら、かじくんの言つ通りね。そろそろ邪魔者は退散しましょう

「じゃーまたねー。」

最後まで笑顔で去つていつた一人。

廊下に残されたのは椎名萌と俺。

「志望校、決めたのか？」

「あ、うん。」

前にキタから聞いたことがあったが。

T校というのは本当だったのか。

奥井と梶原も驚いていたが、正直な反応だろう。

実際、椎名萌が成績上位者なのは俺も未だに信じがたいし。隣に目線を移す。

「あ、あきちゃん。」「

「あのね・・・あの・・・」

また言葉に詰まっている。

表情も何かを堪えているような・・・

「えっと・・・その・・・」「

またそんな顔させたのは俺か
この場を変えてやろうか
そのまま話しを聞いてやろうか・・・
どちらがいいかと考えてみると、

「でやー、やっぱ古いじやん?」「
だよなー!」

後ろから数名の男子生徒が大声で喋りながら歩いてくるのが見え
た。

話に盛り上がっているのか、四人で廊下を並走している。
それ違う他の生徒も自らが避けている。

話に夢中で直進し続いている男子生徒達が横を通り過ぎようとし

た時だつた。

リアクションを大きくとつた一人の男子が
弾みで列から飛び出して椎名萌とぶつかりそうになつた

「えつ？」

突然肩を引き寄せられた椎名萌。
驚いた顔をしていた。

「あつ・・・」

大声で通り過ぎた男子がぶつかってきたのを
避ける為だつたことを悟つたようだ。

「あ、ありがとう。」

椎名萌がそう言って。

俺が肩から手を離そうとした時だつた。

「いーねー、ラブラブでえ。」

次に通り過ぎた男子生徒の集団。

その中の誰が言つたのかはわからない。

こいつにも聞こえただろうか。
噂のこと、知っているのだろうか。

「俺とおまえが付き合つてゐるって噂らしいな。
「えつ？！あ・・・えつと・・・」

再び言葉に詰まる椎名萌。

その表情から・・・

困らせたか。

「あ・・・あのね・・・」

尊といえど・・・

三年になつて尊話で誤解されたこともあつたつけ。
また変な尊立てられて・・・困つてゐるか?

俯いたままのその表情を変えたくて・・・
田の前の後頭部を叩いてやつた。

「あきらやこやめしよー。崩さないでつじば。」

軽く髪に触つたつもりだつたが、
じうやう髪をぐしゃぐしゃにされたと思われたらしく。
まあそれでこの場が和むのならないのだけど。

「あのね、私・・・」

あれ。

まだ続けるのか。

また言葉に詰まりながら話し始めよつとしへる。

「わ、私・・・ね・・・

よく見たら・・・

尊のこととか、やつあらやかされたこととかを氣にして言葉に詰

まっているのではない様子。

なんだ？

何か別の・・・

言いたい事があつて言葉に詰まっている・・・のか？

聞き出してやつた方がいいのか

この場を終わらせてたやつた方がいいのか

判断に迷つていると・・・

「あつあらぐーん。」

聞き覚えの・・・

馴染みのある声が後ろから降つてきた。

「あつー！」

と、言つたのは椎名萌。

やつて来たその人物に見覚えがあつた様子。

「あらあら、こいつの・・・」

顔を上げた椎名萌を見て、
彼も思い出したようだ。

「えつと、この間はありがとうございました。」「いーえ。どういたしましてー。えーっと・・・？」

「あ、椎名です。」

「椎名・・・何ちゃん？」

「萌です。」

「萌ちゃんねー。オッケー覚えた。」

スマイル全開の泉くん。

女子と話す時はいつもやうだが、椎名萌にも同じだつた。

「で、泉くんは何か用？」

大階段を挟んで別校舎の一組の泉くんが
わざわざ別方向の四組に来るとは用事があるのだろう。

「いざみくんつていつの？」

名前を聞いていた椎名萌。

おいおい。

また余計なことを・・・

「そう！桐谷泉。泉つて呼んでね、萌ちゃん。」

「あ、はい・・・。」

おいおい。

いきなり名前で呼び合つかよ。

まあ・・・いいけど。

俺には関係の無いこと。

「めぐー、ちよつと来てー。」

五組から呼ばれた。

声の主は勿論斎藤恵子。

「あ、じゃあ・・・また。」

「うん、またねー、萌ちゃん。」

笑顔で手を振り見送る泉くん。

萌ちゃん、萌ちゃんと連呼する泉くん。

おいおい。

俺には関係無いだろ？

「ふーん、晃くんが好きになる女の子ね・・・」

おいおい。

何の用事で来たんだよ、一体・・・。

「ちょっと意外だった。晃くんって、もつといつ・・・大人しそうな感じの子? 好きそうだから。」

「俺も同感。」

「え? そつなの?」

「あいつの第一印象ははつらしくて騒がしい馬鹿女だしな。」

「え? え? そこまで言ひちゃう? ?」

「無駄に笑つて、無駄に喋つて、無駄に元気。」

そう言つ晃の表情に笑みが浮かんでいるのを見た。

椎名萌のことを話す時の雰囲気が柔らかくことにも気づいた。

「まあでも、ただの馬鹿女じゃないつーか。馬鹿は馬鹿なりに氣を配つて、自分も傷ついて・・・。俺も泣かせてばっかだし。」「晃くん、確かに変わった。」

「は?」

「うん、うん。変わった変わった。聞いた通り。」

「何それ?」

「この間、咲良が言つてたのー。」

咲良？

この間の事つて・・・

「まだ付き合ってんの？」

「いやー。お友達。」

「ふーん。」

「あ！泉くんだー。」

「泉くん元気ー？」

「おー！力ナちゃんと清美ちゃん。元気元気ー。」

女子生徒に話しかけられ
再びスマイル全開の泉くん。
別校舎の廊下だというのに、相変わらず女子からの人気。

「じゃあまたねー。」

「冬休み遊ぼうねー。」

そういえば、泉くんがわざわざ別校舎まで訪ねて来た理由をまだ
聞いていなかつた。

「で、用事は？」

「うん。咲良が晃くんにフラれたーっていうから、慰め会しようつと
思つて。晃くんも参加しない？」

おいおい。

何の慰め会だ。

誰の慰め会だ。

何故に俺がそこに行くのか。

言いたいことは山ほどあつたが、冗談にしては変な話だろ？。

「じ、冗談でーす。」

俺の表情を読んでか、場面が違うことに気づいてか、再びスマイルを全開させてみた泉くん。

「でも、誘つてるのは本当。今日、一年時のメンバーでクリスマス会やるからさ、久しぶりに晃くんも誘おうつてことになつて。」「悪い。夜から用事あるんだ。」

「デートですか？」

「違う。」

「なーんだ、つまんないの一。」

またひやかしに入るのかと思つたら
泉くんの表情が急に変わつた。

「慰め会つてのも本當。」

「え？」

「咲良、晃くんにカノジョできたのショックだつたって。」

おいおい。

なんだ、その話。

だつて・・・咲良は・・・

「晃くんは女の子になんて興味無いから、ぼくと付き合つた方が楽しいよーって言つたのー。で、結局フラレちゃつたのはそのぼく。」「中学三年間なんてさ、毎年クラス替えだつてあるし、委員会とかさ、新しい出会いなんていくらでもあるのに。結局好きになつた人は忘れられないみたいよー。」

ずしんと重たいものを感じた。

なんだこれ。

心に突き刺さるこの感情。

いつか祐也が言つていた。

どこかで保健医が言つていた。

キタも・・・

タケも・・・

そして咲良も・・・

椎名萌が教えてくれた

人の想い・・・か。

人の想いの重さだ。

今更気づくなんて。

今更気づいても・・・

俺にはどうすることもできない。

「だから、晃くんには後悔して欲しくないんだってさー。あ、ぼく
も同じ考え方ね。」

今更気づいても・・・
どうすることもできないだろう。

「泉くんは?まだ咲良のこと・・・」

「ぼくはもう進んだー。咲良にフラれた時にね。次に進めたー。だ
から咲良も、もう次に進んでるよー。それでいいのさ。」

そう言つと、泉くんは穏やかな表情を見せながら帰つて行つた。

廊下を歩く先々で、女子生徒達に声をかけられながら。

なんか・・・

豪く疲れた。

終業式さえ終われば今日はまじめ終わったも同然だったのに。

鞄を取りに教室へ入って

自分の席に腰掛けるともう、立つのが面倒くさかった

しばらく机に顔を伏せていると

徐々に教室のざわめきが消えていくを感じた。

帰宅時間のピークには

混雑している廊下も、下駄箱も、玄関口も

きっと今なら空いているだろう

誰にも話しかけられずに

誰とも話さずに

学校を後にしようと思っていたその時だった。

「あきちゃん。」

教室に響く一つの声。

一つだけとこいつことは、残っている生徒は他に誰もいないという
こと。

「あの、少し話してもいいかな。」

「ああ。」

廊下にはまだ数人の生徒の声が木霊している。

近づけ無い、でもそつ遠くもなじ距離この内のだから。

「わ、私ね、あきらめことばかりと話したことから、今……えつ」と……」

「あの、でもお葉に話すこといつまへやるか……お話を……」

「

緊張しているのが、文章が支離滅裂になつてゐる。

そんな田の前で困つてこることつを……

今の俺にどうにかしてかたづけられたんだね。か。

「へ、手紙とか、じやなく……あきらめこといつまへやした」と想つて……

「だか、り・・・れの・・・手紙は辞めたの。うそ。う、ひそと聞い

うことたの。へ、云わるかわからなこだい……」

お葉に話せりながら語りはじめてくるのを、ただ、見てこないでしかできなかつたが、見ていたら、だんだんと、困つてこる表情ではなくこことこく気がついた。

一生懸命に何かを伝えたがつてこる、

手紙？手紙つて何のことか……

「わ、私ね、祐也とは付き合はない。あきらめことじが好きだから。い、今は受験があるからむしり頑張らないことね。お、終わったから……また遊びよ。」

まるで仕切り出すかのように口説を並べたよつた……ぐちやぐちやな文章だったけれど、充分だった。

俺には充分伝わってきた。

「ばーか。」

そう言つて、椎名萌の頭をぐしゃっと撫でてやった。
俺の手の下に見えた椎名萌の表情。
笑っていた。

手紙のこと、
ちゃんと話すこと、
祐也のこと、

祐也に手紙を書いたといつことはこの間本人から見せられて知つ
ていた。
そのことは椎名萌は知らないだろう。
手紙なら、読み返して修正が可能だから
今のように支離滅裂な文章になることもなく伝えることが出来る
だろう。

でも、そうじやなくて、そしぬかつたのは、
俺とはちゃんと話したいから
会つて話したいから今。
だから手紙にしなかつた
逃げなかつた
逃げたくなかつた
そんな気持ちが伝わってきた
またこいつに助けられたな
大事な想いを。

昨日、言葉で傷つけたあいつに
今日、言葉で助けられた
そんなこともあるのだと。

ちゃんと向こうへとびつなるのか
ちゃんと向こうへと先には何があるのか

見慣れたはずの廊下から見える景色。

雪をかぶった山々達。

その雪景色が解けて・・・

緑色の山々に景色が変わる頃・・・

春にはもう別々の路を歩むといふの

今はまだ、解けるはずもない信じてやまない。
解けるはずのない安心感。

まだ知らない

それが守られた中での安心感だとこうじとこ
まだ気づけない

それが当たり前でなくなるところ」とこ

雪解けまでは・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4115m/>

あの青い空のように

2011年10月4日14時23分発行